特集＝

SD Review, 1984

SD Space Design

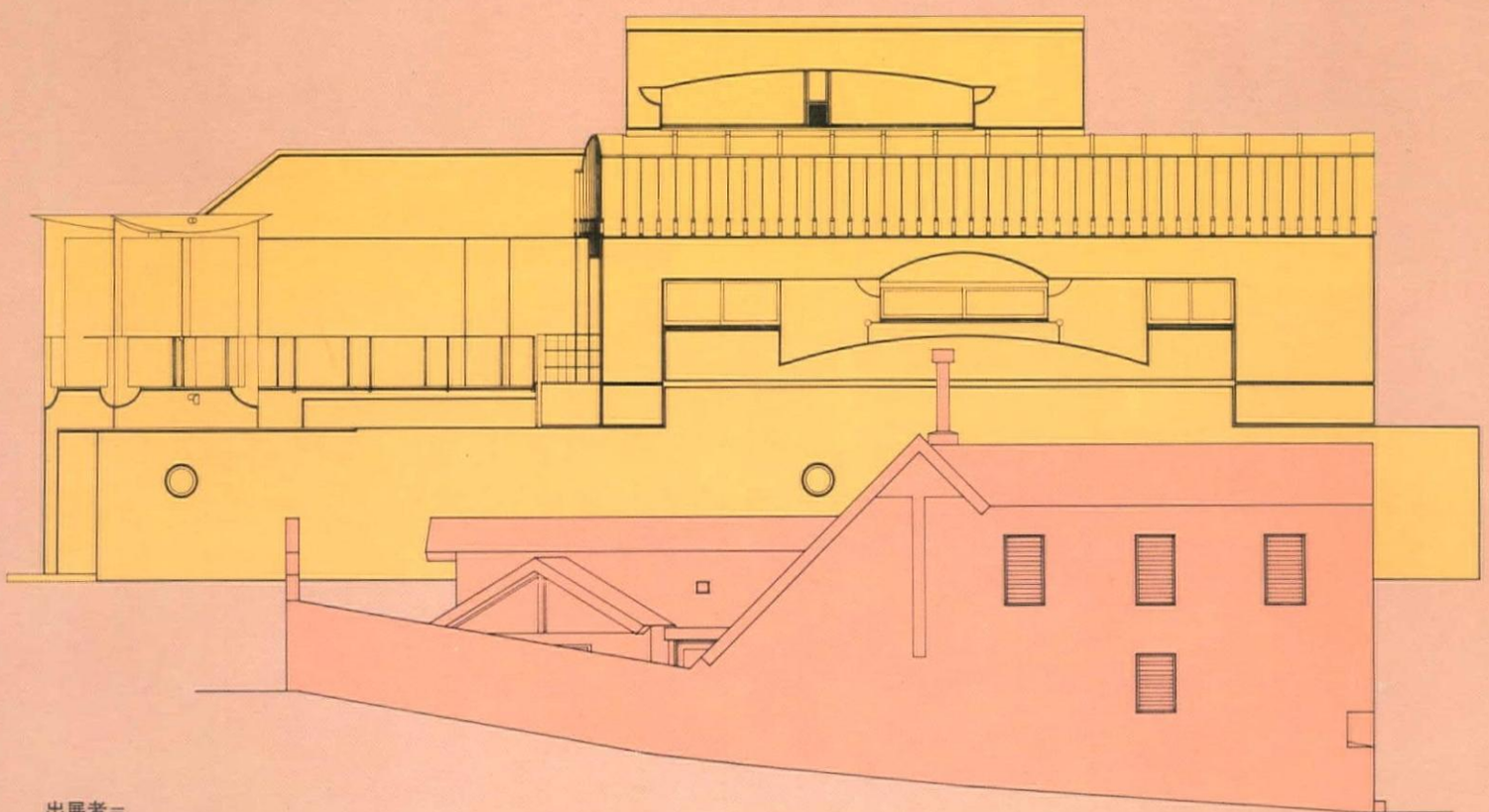
座談会＝《SD Review, 1984》入選作をめぐって

槇文彦＋竹山実＋山本理顕＋八束はじめ

《SD Review, 1984》展覧会を見て

実作と展示作品の関係　吉田研介

スペースデザイン都市・建築・芸術の総合誌
第243号昭和59年12月1日発行毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第3種郵便物認可
昭和59年10月9日国鉄首都特別扱承認雑誌第7825号



出展者＝

石田敏明，井上揺子，海老塚耕一＋菱沼利行，片岡山訓，木村丈夫＋野田俊太郎，黒川哲郎，
小林克彦，小宮山昭，小屋雅義＋大内栄，鈴木了二，高松伸，竹ノ内一雄，中澤王久東，
中野佳子，能勢修治＋永井久美，早川邦彦，若林広幸＋角野充俊，渡辺武信，槇文彦（特別出展）

●

ベルリン国際建築展　1984報告年

〈都市に住む〉：ベルリンの実験

リュツォウ広場の集合住宅　設計：O. M. ウンガース

リッテル通りの集合住宅　設計：R. クリエ

シンポジウム〈発展しつつある都市における歴史的都心〉　足達富士夫

［色］　色彩コンプレックス　中村誠

■連載＝フランク・ロイド・ライトの呪術の空間❺

大霊的建築

NICE SPACE ケルン大聖堂　岩村和夫＋堀内正昭

12

December 1984



トルシャン通り
ユトリロ　20F

galerie taménaga

日仏画壇の接点となる“ためなが グループ”

印象派，エコール・ド・パリの巨匠を中心に
現在活躍中の多数の作家を取扱っております。

契約作家：

アイズピリ Paul AIZPIRI	ビュッフェ Bernard BUFFET	バブレーヌ Eugène BABOULÈNE
コタボ André COTTAVOZ	フサロ Jean FUSARO	ギアマン Paul GUIRMAND
ロッド Michel RODDE	ワイズバッシュ Claude WEISBUCH	オギス Takanori OGUISS

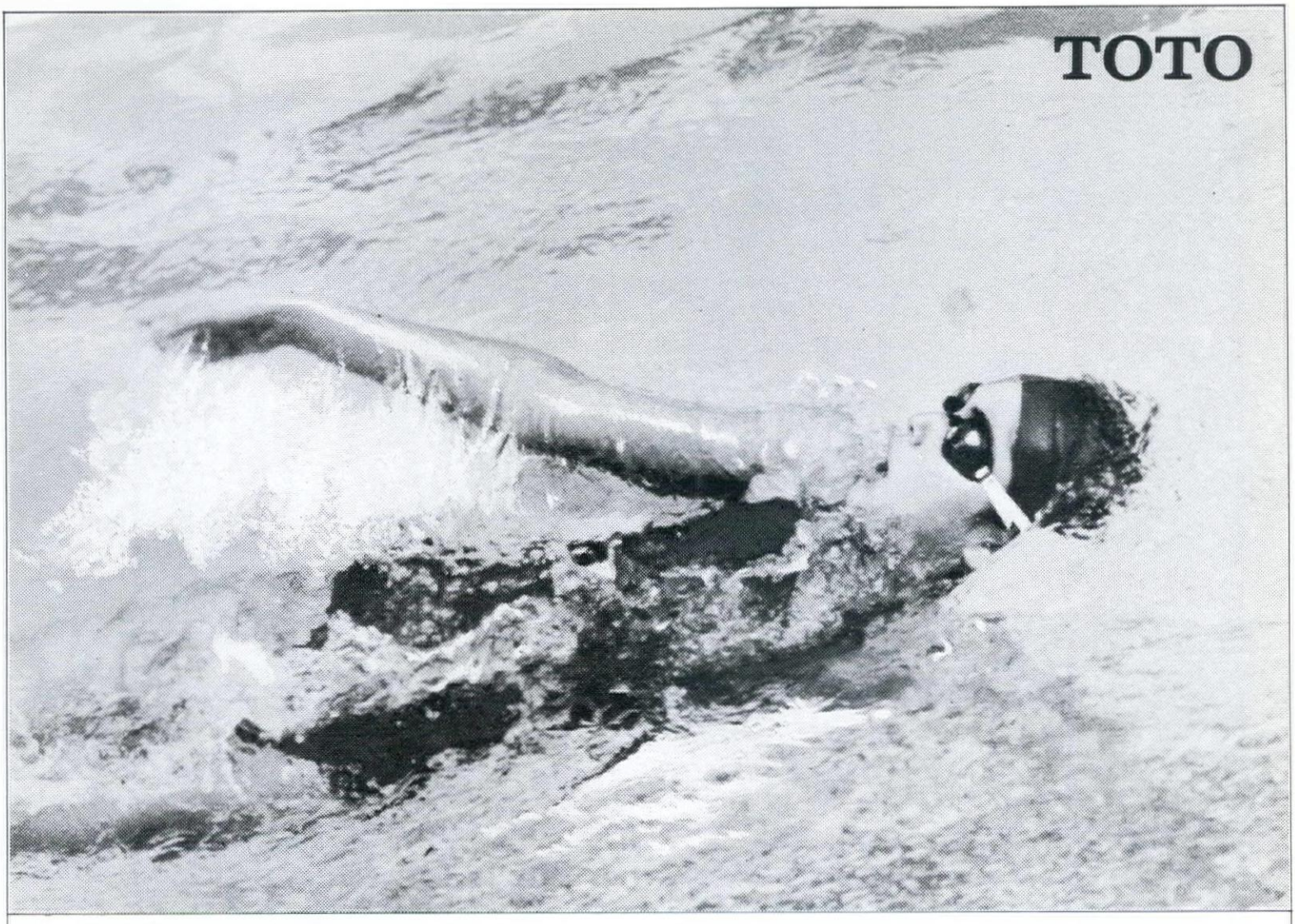
ギャルリー　ためなが

東京　東京都中央区銀座７－５－４　TEL：03-573-5368
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-3434
パリ　18，Av, MATIGNON, 75008　PARIS, FRANCE
TEL：266-61-94

tac 東邦アート株式会社

東京　東京都中央区銀座８－９－13　TEL：03-573-5377
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-0852

パリでのお買上げの作品はご帰国後日本で円払いの便宜もございます。



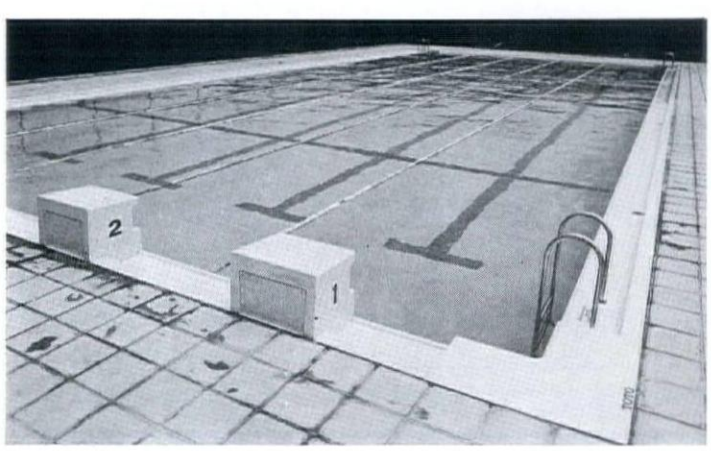
主流、FRP

いま、プールはFRPの時代。

TOTOが、FRPの世界をひろげました。既にご好評を頂いておりますポリバス・Pタンクなどの FRP製品。TOTOがこうした豊富な経験と実績に基づき、先進の技術と斬新なアイディアを駆使して開発したのがFRPプールです。FRP製品には、浴槽・水槽・ボートなどがあり、プールの素材としても理想的なものです。これからはプールもFRPが主流の時代です。

TOTO FRPプールは……

- ●耐食性に優れています。
- ●強度・耐久性も抜群です。
- ●施工期間が短縮できます。
- ●設置方法は幅広く対応できます。
- ●維持管理が容易にできます。
- ●安全性への配慮も十分です。



TOTO FRPプール

東陶機器株式会社 ●本社／〒802 北九州市小倉北区中島2丁目1番1号 ☎(093)951-2293
資料をご希望の方は、ハガキに住所・氏名・職業・電話番号をご明記の上、上記広告宣伝部までご請求ください。



住友の耐候性鋼板—CR2

強いものの代名詞のようにいわれる鋼にも“さび”という泣き所があります。鋼の宿命である、このさびを防ぐ一つの方法は鋼の表面を何らかの物質で被覆し、大気との接触をしっかりと断つこと。各種めっきや塗装はその代表的な例ですが、住友の耐候性鋼板ＣＲ２はこの重要な被覆の役割を鋼自身から出るさびに求めた製品です。つまりＣＲ２は鋼中に含まれる特殊な成分元素の働きにより、大気中で鋼板表面にさびが生じ、これが次第に緻密な安定したさび層に変化、その後の腐食を抑制するしくみ。鋼構造物のデザイン上や標識彩色などの目的で塗装を行なって使用する場合でも、塗装膜下でのさびの広がりが少ないため、塗装膜の寿命が著るしく延長。補修・再塗装など、いわゆるメンテナンス費用を大幅に減少させることができます。

ちなみに、ＣＲ２の中でとくに無塗装使用及びさび安定化処理用として開発されたものに「ＣＲ２Ｍ」、耐食条件の厳しい中での薄板用に開発されたものに「ＣＲ２Ｒ」があり、CR2シリーズ製品として用途に応じて選択いただけるようになっています。
建築部門、橋梁部門、水門、ダム設備、港湾設備、土木工事部門など耐候性鋼板が必要とされる所で広くご利用ください。

住友金属

住友金属工業株式会社

大　阪＝大阪市東区北浜５－15（住　友　ビ　ル）〒541　☎(220) 5111
東　京＝東京都千代田区大手町1-1-3（大手センタービル）〒100　☎(282) 6111
営業所＝九州・広島・岡山・高松・名古屋・富山・静岡・新潟・水戸・東北・札幌

技術の日立



知能は鋭敏
動きは柔軟

先進16ビットマイコン搭載。
知能群管理エレベーター
(CIP-52000)新登場。

待ち時間の少ない経済性・信頼性にすぐれた効率のよいエレベーター……このテーマにチャレンジしつづける日立が自信をもっておすすめする知能群管理エレベーター(CIP-52000)。この知能群管理エレベーターは、従来の群管理制御系に加えて、新たに「学習機能系」と「知能系」として、それぞれ16ビットマイコンを搭載。群管理プログラムの自動修正を可能としたものです。すなわち、ビルの個性(用途・立地条件など)、季節、曜日などによって変わるあらゆる利用状況の変化に、自ら適応していく能力を持っています。いわば、自ら「考え、そして成長する」能力を備えたオフィス、ホテルの機能をグンとアップします。

知能群管理(CIP-52000)の特長

- 変化する利用状況に的確に対応します。
- 混雑も未然に防止できます。
- 特別行事に対してもあらかじめ行事予約ができます。
- 知らず知らずのうちに効率的に節電できます。
- 予約精度を99%以上に高めました。
- 戸の開閉時間を状況に合せ自動調整し無駄をなくします。
- 稼動状況のモニターも可能です。

日立知能群管理エレベーター(CIP-52000)

株式會社 日立製作所

お問い合わせは機電事業本部・交通ビルシステム技術本部/営業本部 〒101 東京都千代田区神田駿河台4-6 電話 東京(03)258-1111〈大代〉または最寄りの支店へ
大阪(06)203-5781・福岡(092)741-5831・名古屋(052)251-3111・札幌(011)261-3131・仙台(0222)23-0121・富山(0764)33-8511・広島(082)223-4111・高松(0878)31-2111



DS20

deSede
of Switzerland

最高級革張りソファの名声をほしいままにするスイスのデセデ社は、1961年、馬具製造業を基盤としてスタートしました。以来、今日にいたるまで、世界85ヶ国以上の国々にその名を知られるブランドに成長したわけですが、その当初からのモットー、すなわち〝最高級であること〟という思想は、デセデ社のあらゆる製品の中に連綿といきづいております。快適でゆったりとした座り心地、味わい深いデザイン、落着いた上品なカラー、そのいずれもが〝最高級〟の名に恥じない豊かな風格を生み出しております。

mobilia

モビリア株式会社 東京都港区麻布台2-3-5 〒106 ☎03-582-3341
大阪市東区安土町2-30 大阪国際ビル 〒541 ☎06-261-9951
名古屋市中区丸ノ内2-20-19 名古屋東京海上ビル 〒460 ☎052-221-6393

National

エネルギーの効率利用と設備工事の合理化には、ビル空調も個別方式をおすすめします

ナショナルのビル個別空調システム

イニシアルコスト13%減 ※
ランニングコスト22%減 ※
ともに有利な個別方式

省エネルギー関係法令の公布にとどまるまでもなく、建築物にとっての省エネ対策——特に空調エネルギーの効率化は、ビル建築計画にとって重要テーマです。

住宅と異なり、ビル空調に個別方式が主流となりえなかったのは、設備費と機能の対比（コスト・パーフォーマンス）や、工事・メインテナンスに問題があったようです。

これらの問題を解決したのがナショナル・ビル個別空調機——大幅なコストダウンを可能にした省エネタイプの個別空調システムです。

※弊社計算による

多機能で、しかも簡単な操作
工事の合理化と省スペースにも

冷房・暖房・換気・除塵・外気冷房・熱回収など、ビルの空調に必要なほとんどの機能をコンパクトにまとめていますが、負荷に応じた冷暖切替を自動化していますので、操作はまったく簡単で特殊な技術を必要としません。また個別方式ですから、冷凍機・ボイラーなどの大型機器や、複雑なダクト工事が省略できますので、工事の省力化、ビル本体の省スペース化にも役立ちます。

あらゆる面で有利なナショナル・ビル個別空調システムを、皆様の設備計画・設計に、ぜひご採用ください。



エアーバランサー

室内の汚れた空気の強制排気が可能な、全電気ヒートポンプ方式。

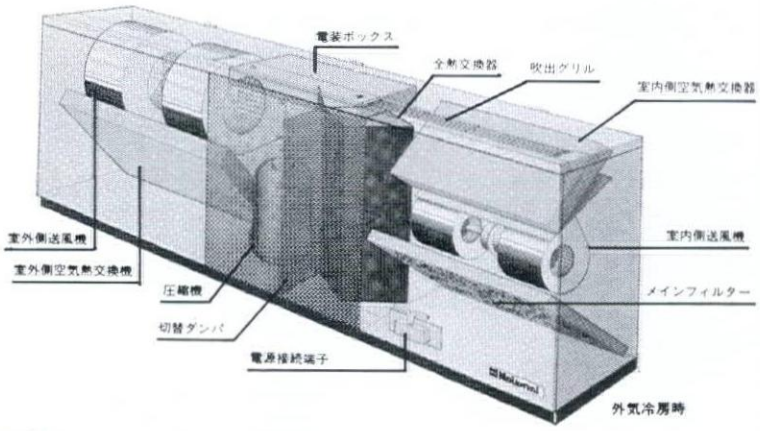
- 大口径シロッコファンにより高静圧を得ています。外風の影響を受けず安定運転が可能。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 半導体ヒータを補助として採用、暖房の立上り特性がよく、吹出温度を自動的に一定化。
- 2段サーモスタットによる節電運転。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



パコスメイク

熱交換により排気熱を回収、エネルギーを有効に利用する全電気ヒートポンプ方式。建築モジュールに合わせた施工により、内・外観ともにシンプルに納まるスルー・ザ・ウォールタイプ。

- 全熱交換器による冷・暖房の排気熱を回収。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 3段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 高性能カートリッジ形フィルター内蔵による高い空気清浄力。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



松下電器産業株式会社
松下精工㈱冷暖送風事業部
〒251 藤沢市辻堂元町6丁目4番2号 TEL(0466)34-2111(代)

鹿島建設の総合技術力による高品質拡底場所打ちコンクリート杭

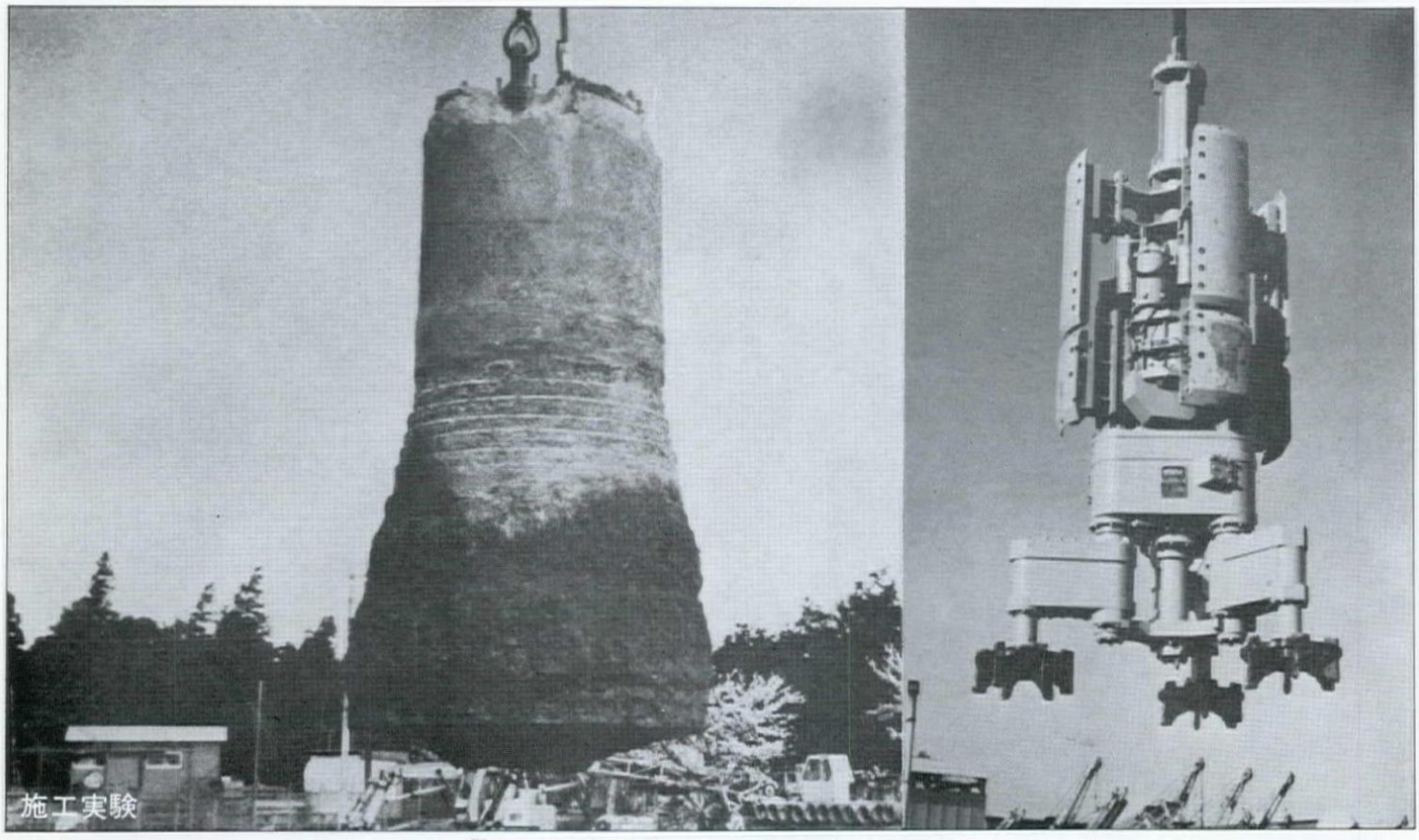
クナップ工法

KNAP工法

KAJIMA NIHONKISO ADVANCED PILE

KNAP工法の特徴は高品質の杭を能率的、経済的、かつ、確実に施工できるところにあります。例えば大型構造物のあらゆる荷重条件に対し、合理的な基礎の設計が可能であり、施工は高性能掘削機と計器管理により精度の高い掘削と硬質(砂礫、軟岩等)支持層への確実な根入れが行え、どのような構造物にも対応できる工法です。

■(財)日本建築センター新工法性能評定取得済(BCJ-F274・BCJ-PF274追1)



施工実験

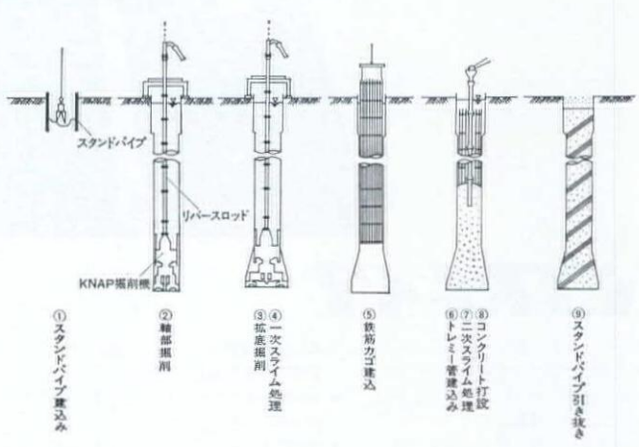
■KNAP工法のメリット ——●経済的●工期短縮●高品質●低公害

〈1〉杭の支持力が大きい。
〈2〉同じ支持力の場所打ち杭に比較して掘削土量、コンクリート量が少い。
〈3〉廃棄物処理が少ない。
〈4〉岩盤、砂礫でもスピーディーに掘ることができる。
〈5〉掘削ズリを能率よく集めて排出できる。
〈6〉任意の深さで拡径できる。
〈7〉掘削精度が高い。(垂直精度1/300～1/1000)

■豊富な実績

- 東芝日野工場
- 川崎駅前地下街
- 新国技館
- 新潟県住宅供給公社集合住宅
- 西濃運輸新東京ターミナル
- その他

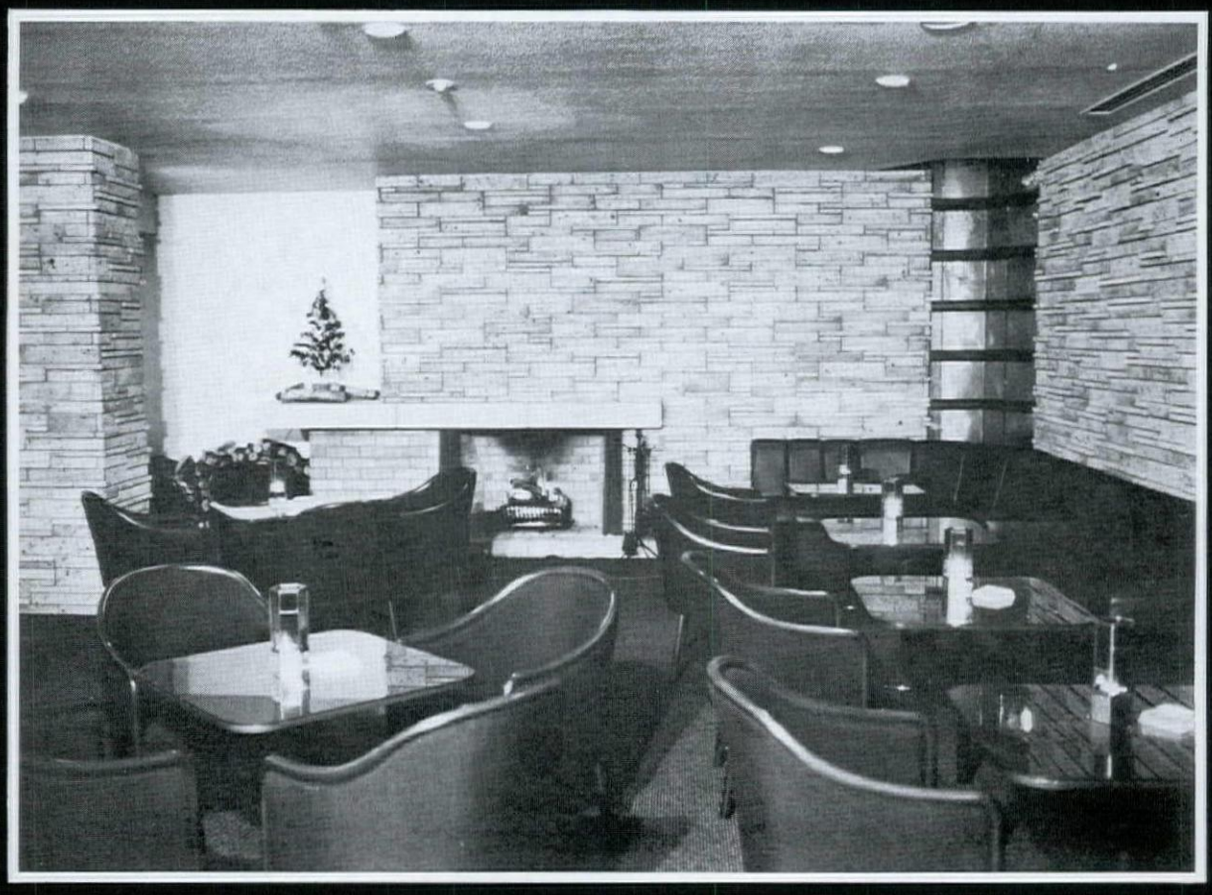
施工プロセス



鹿島建設

本社:〒107 東京都港区元赤坂1-2-7　お問合せ先　建築技術部(03)404-3311

HOTEL KAJIMA NO MORI



〈〈つろぎのメープルラウンジ〉

軽井沢

クリスマスに…
お正月に…
楽しいひとときをお過しください

セミナーとスキー　スケートの基地にご利用ください

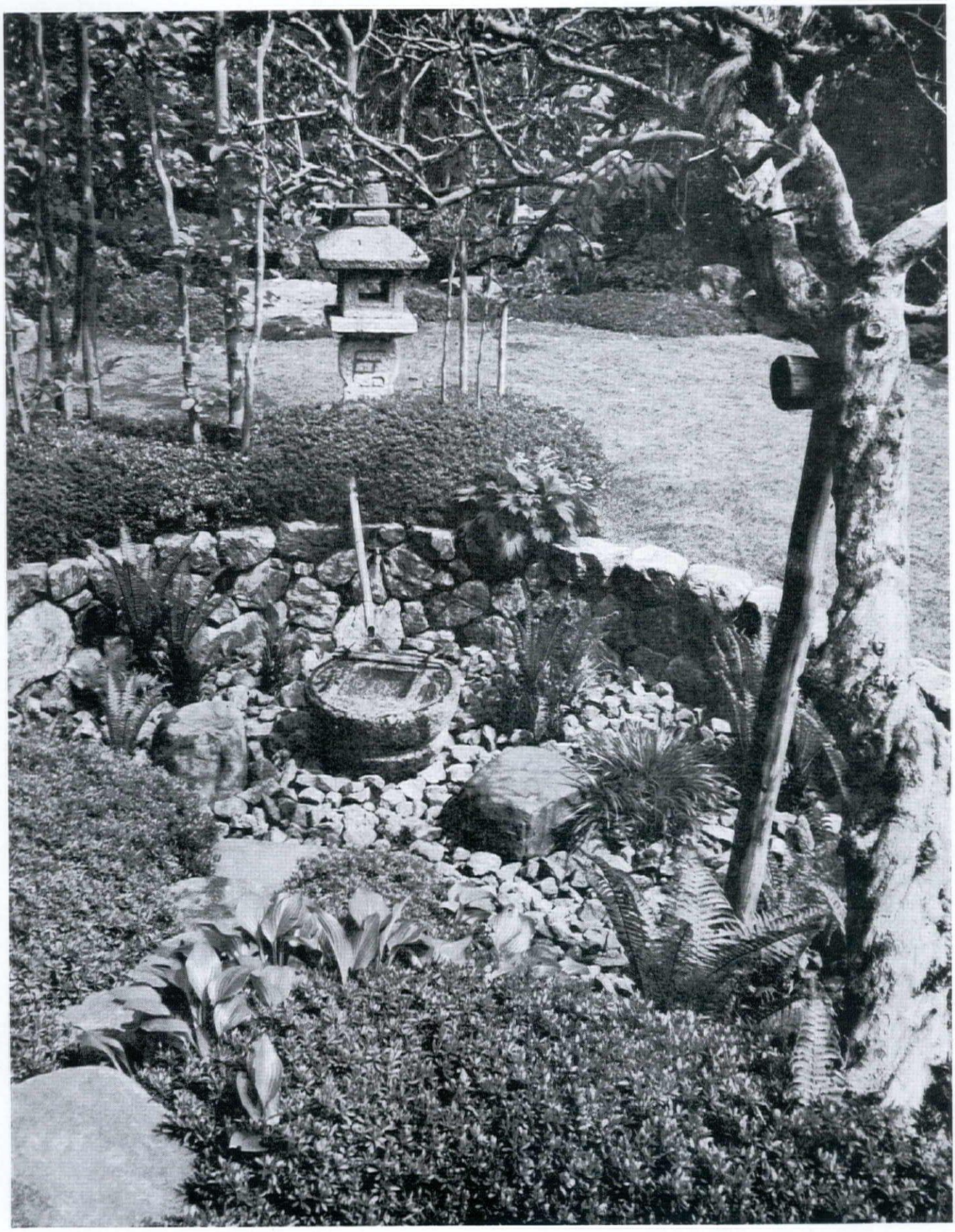
《鹿島ノ森ホール》

■セミナー：108人、16㎜映画映写装置、2ヶ国語同時通訳
■結婚式：教会・神式、ご披露宴
■展示会場　■パーティー会場

《鹿島建設グループ》

株式会社　ホテル 鹿島ノ森
ホテル　オークラ チェーン

●ご予約・お問い合せ：ホテル鹿島ノ森予約係　☎03-478-6220　現地 ☎02674-2-3535㈹ TELEX 3328676



石の心と樹々の精に，

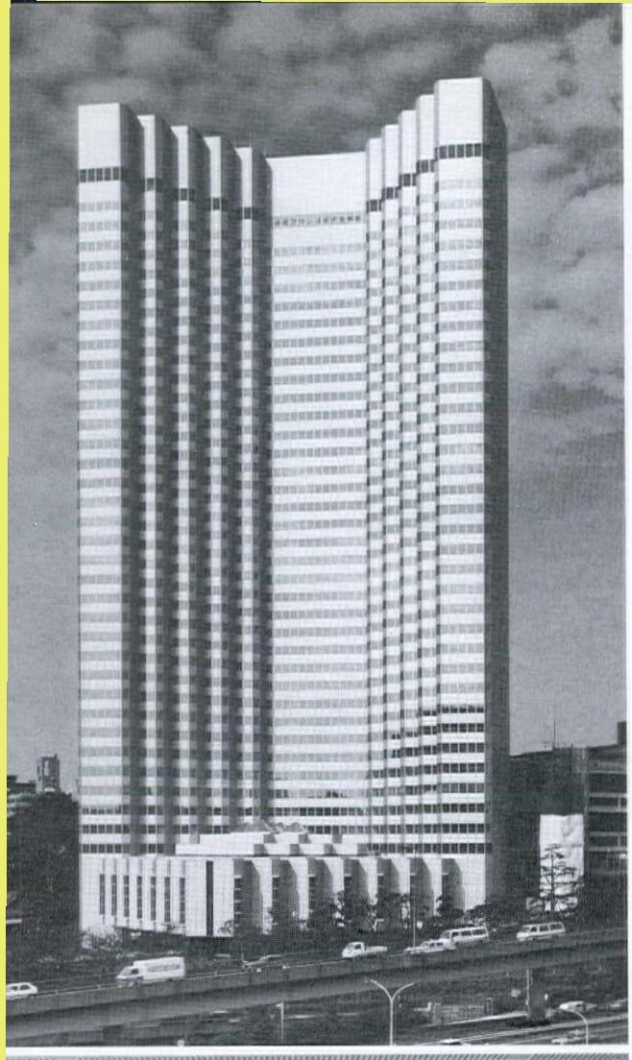
新たなる生命を語らう，自然の造形

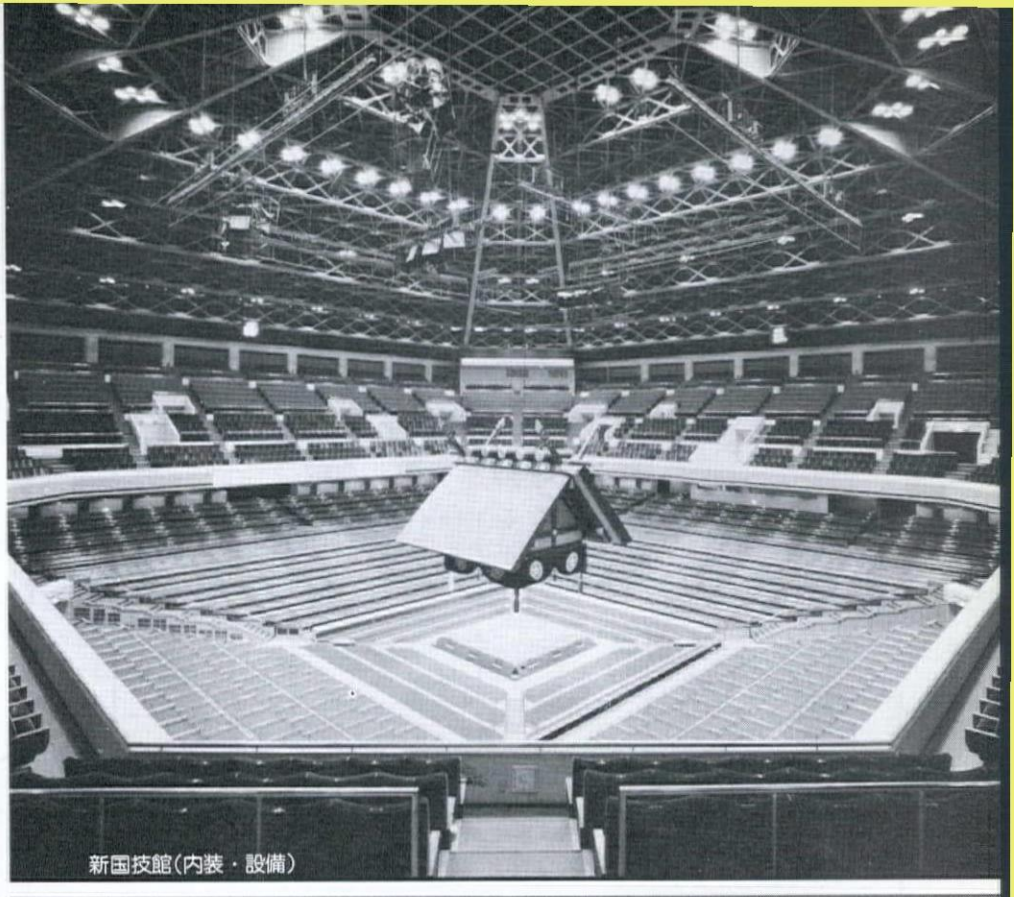
岩城造園株式会社

取締役会長　岩城亘太郎

取締役社長　岩城庄次郎

東京都世田谷区深沢8丁目9番12号 TEL(03)703-1311





新国技館(内装・設備)



赤坂プリンスホテル レストランブルーガーデニア(内装)

営業種目

○建設資材

鉄鋼及び加工製品・鉄鋼仮設材・一般仮設材・セメント・生コン・コンクリート二次製品・防水養生剤・内外装材etcの販売及び賃貸

○建設工事

鋼管杭・H形鋼・シートパイル・PCパイル各種打込工事・現場造成杭工事・ウェルポイント薬液注入工事・内外装仕上工事・サッシ・シャッター工事・パーティション工事・耐火被覆工事・断熱吸音工事・ALC材工事・スパンクリート工事・インターロッキングブロック工事・外壁調査及び改修工事etcの施工

○建設機械・工具

測量機器・ブルドーザー・掘削機械・積込機器・基礎工事用機械・クレーン・リフト・せん孔機械及びトンネル掘進機・締固め機械・骨材生産機械・コンクリート機械・空気圧縮機・送風機・ポンプ・原動機・完成部品及び特殊機械器具etcの販売及び賃貸
スリップ・トルクコンバヤ及びスインガー(米国シャトルワース社提携)の販売

○設備機器・工事

空調設備機器・給排設備機器・電気設備機器・昇降機エスカレーター工事・駐車設備工事・ゴンドラ設備工事・厨房設備工事・ユニットバス、キッチンユニット、洗面化粧台工事・防災設備工事・水処理設備工事etcの販売及び施工

○輸出入業務

大理石・御影石・磁器タイル・合板型枠・機械工具類その他各種建設資機材の輸出入業務の取扱い及び施工

○インテリア

家具・応接セット・スチール棚・保管庫・移動書庫・ロッカー・各種施設用品etc

○一級建築士事務所

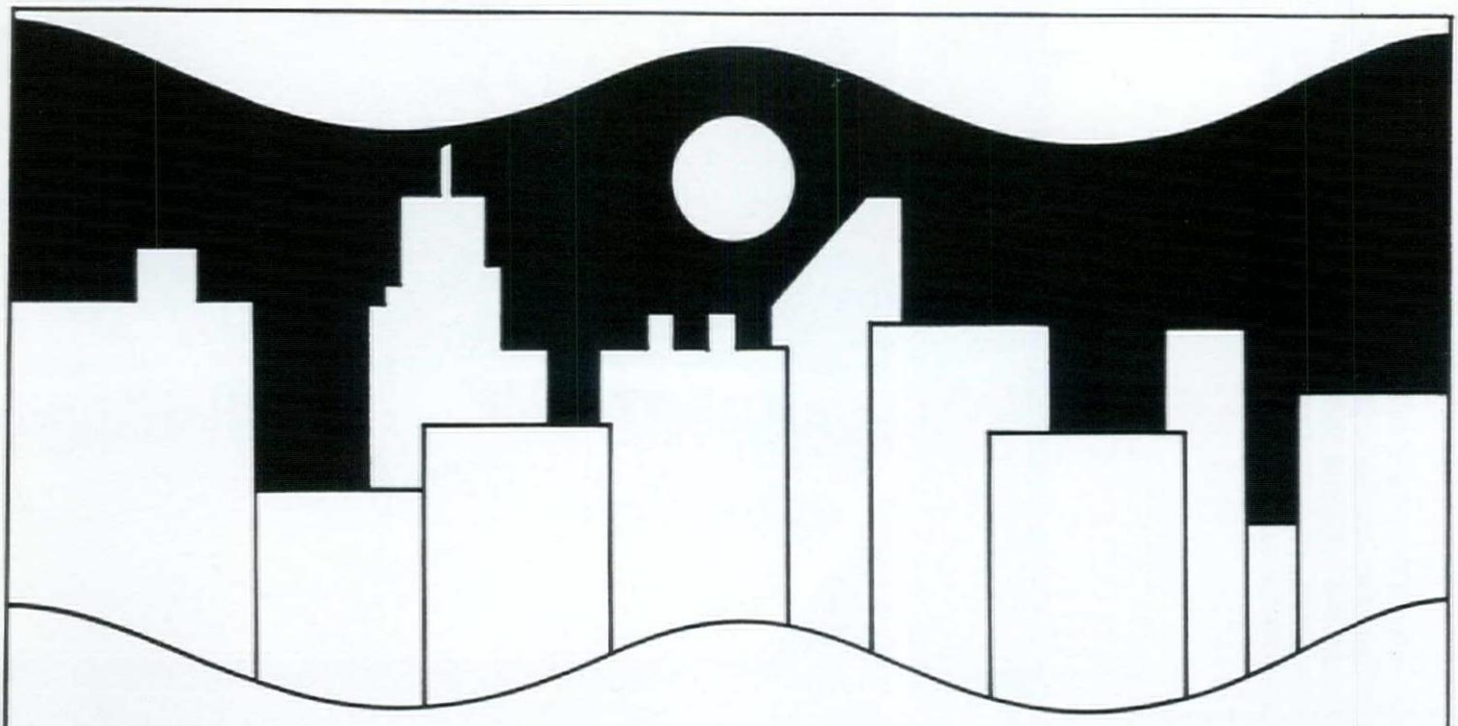
計画・基本設計・実施設計・工事管理・構造物のチェックと対策etc

あらゆるニーズにお応えできる建設の総合商社

大興物産株式会社

会長　渥美健夫　　社長　柴田銀造

本　社　〒107 東京都港区元赤坂1―6―4 安全ビル7・8F ☎(03) 423―2511
札　幌　〒060 札幌市中央区北三条西3-1-4 北三条三井ビル ☎(011)231-6481～2
仙　台　〒980 仙台市二日町1―27 鹿島建設ビル ☎(0222)61-4141～4
東　京　〒107 東京都港区元赤坂1―6―4 安全ビル7F ☎(03) 423―2511
横　浜　〒231 横浜市中区弁天通り6―79 ハリマヤビル ☎(045) 212―3925
北　陸　〒950 新潟市万代1―3―4 鹿島建設ビル ☎(0252)47-2286～7
名古屋　〒450 名古屋市中村区名駅南1-24-21 名古屋三井ビル別館 ☎(052) 551―2131
大　阪　〒540 大阪市東区谷町5―27上町ビル ☎(06) 762―5661
広　島　〒730 広島市中区中町6―13鹿島建設ビル ☎(082)249―9221
高　松　〒760 高松市亀井町1―3鹿島建設ビル ☎(0878) 39―3191
福　岡　〒812 福岡市博多区博多駅前3-12-10 鹿島建設ビル ☎(092)441-2624～5



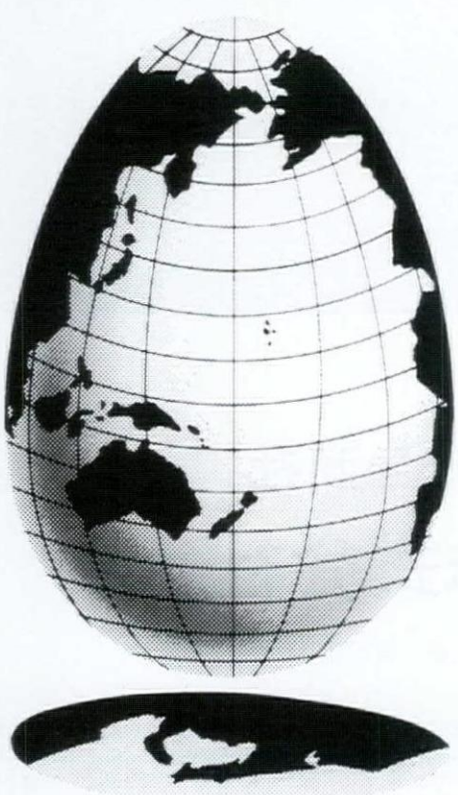
HEATING
REFRIGERATING
VENTILATING &
AIR CONDITIONING

未来をひらく技と心

五建工業

東京都千代田区内神田一丁目16－3
電話　東京03(292)3201(代表)
東京・札幌・大阪・仙台・茨城・埼玉・四国・釧路・旭川・帯広・広島・福岡

明日を生み出す東海電工。

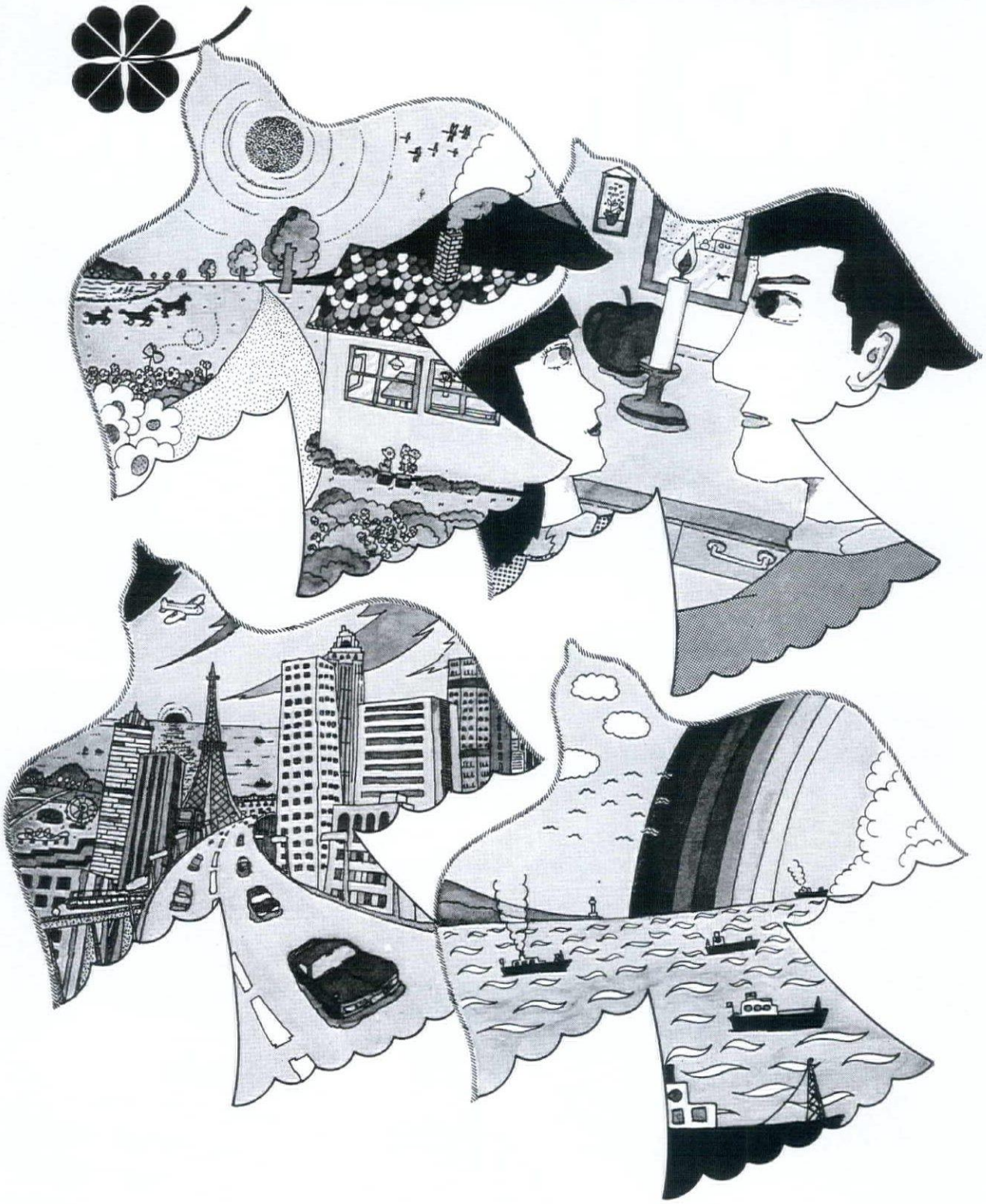


東海電気工事は「安全と責任ある工事」を信条として豊富な経験と高度な技術をもって電気設備工事全般から冷暖房工事、計装防災工事に至るまで総合設備工事業者として社会発展のため貢献いたしております。

東海電気工事株式会社
取締役社長　井上丈太郎

本社／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎<052>221-1111
支社／名古屋・岡崎・静岡・津・岐阜・長野・飯田・東京・大阪

豊かな人間生活と
明かるい光の創造に



中立電気株式会社

取締役社長　斎藤　勲

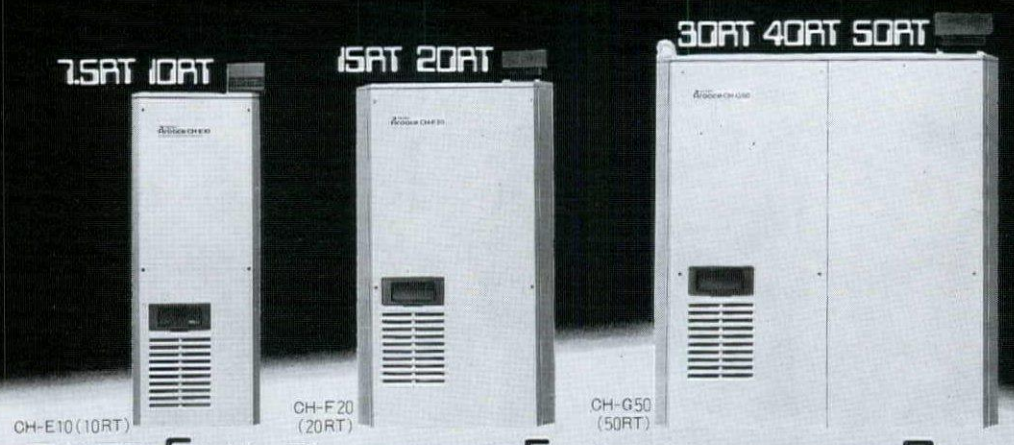
本　　社　〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号　☎東京(356)2511(代)
山梨支店　〒403 富士吉田市下吉田町2005番地　☎吉田(0555)(2)3258(代)
大月出張所　〒401 大月市大月町2丁目10番地14号　☎大月(05542)(2)1013
笛吹川事務所　〒405 山梨市小原西1118番　☎山梨(05532)(2)6651

広告についてのお問合せの際は≪SD を見て≫と御明記願います

創エネルギー
YAZAKI

No.1の革新。

設置実績No.1のアロエースが、ニュー・ラインアップで一段と充実。



二重効用形Eシリーズ
●冷凍成績係数0.92 ●重量で15%、設置面積で48%減少
(10RT-当社従来比)

二重効用形Fシリーズ
●冷凍成績係数0.95 ●重量で35%、設置面積で45%減少
(20RT-当社従来比)

二重効用形Gシリーズ
●冷凍成績係数0.95 ●重量で20%、設置面積で25%減少(30RT-当社従来比)

二重効用形吸収冷温水機

NEW アロエース

一挙に3シリーズ
7機種に充実

●世界最小・最軽量
●世界初のマイコン内蔵(F・Gシリーズ)
●自動冷媒比例制御方式を採用(F・Gシリーズ)
●全機種「加熱能力増加形」登場

矢崎総業株式会社
本社：〒108東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F ☎03(455)8812
エネルギー機器事業部企画部：〒435静岡県浜松市子安町1370☎0534(61)5111

「NEWアロエース」のお問合わせは——
札幌支社☎011(852)2914 名古屋支社☎052(833)8415 中国支社☎0829(23)2115
仙台支社☎0222(84)9115 大阪支社☎ 06(458)4825 四国支社☎0878(33)3336
東京支社☎ 03(767)4782 北越支社☎0764(41)6516 九州支社☎092(411)4835

SD
スペースデザイン
第243号
8412
昭和59年12月号

■特集＝《SD Review, 1984》 3–50

座談会＝《SD Review, 1984》入選作をめぐって　槇 文彦＋竹山 実＋山本理顯＋八束はじめ 6–12

《SD Review, 1984》をふり返って　槇 文彦＋竹山 実＋山本理顯＋八束はじめ 12–13

《SD Review, 1984》展覧会を見て
実作と展示作品の関係　吉田研介 48

《SD Review, 1984》経過（応募案審査・展覧会・SD賞） 4–5

《SD Review, 1983》出展作品のその後 49

出展作品＝
浦崎の家／石田敏明，二世帯の家／井上揺子， 14–17
(株)コサカ本社社屋／木村丈夫＋野田俊太郎，東八幡平帰蝶山荘／海老塚耕一＋菱沼利行， 18–20
かねす蒲鉾本舗社屋／片岡山訓，MAISON FORMURA 1984／黒川哲郎， 21–23
杉並の住宅—物質試行13／鈴木了二，FEV HOUSE／小宮山 昭， 24–27
小笠原社宅／小林克彦，石幡邸（径と広場のある家）／竹ノ内一雄， 28–31
KOYA APARTMENT HOUSE／小屋雅義＋大内 栄，修学院の家II／高松 伸， 32–36
ATLANTA'83／中澤王久東，東北タマヨシ／能勢修治＋永井久美， 37–39
SHIRASAGI COMPLEX／早川邦彦，ライフイン京都／若林広幸＋角野充俊， 40–43
衣笠の画廊喫茶／中野佳子，池田病院／渡辺武信 44–45
特別出展＝M山荘／槇 文彦 46–47

Serial Essay——色12　色彩コンプレックス　中村 誠 51–52

NICE SPACE　ケルン大聖堂　岩村和夫＋堀内正昭 53–56

ベルリン国際建築展　1984報告年　〈都市に住む〉：ベルリンの実験 57–64
シンポジウム：発展しつつある都市における歴史的都心　足達富士夫 64
リュツォウ広場の集合住宅：設計＝O. M. ウンガース 58–60
リッテル通りの集合住宅：設計＝ロブ・クリエ 61–63

連載＝フランク・ロイド・ライトの呪術の空間⑤ 65–72
有機建築の魔法(4)　大霊的建築　草森紳一＋大倉舜二

マイケル・グレイヴスのナパ・ヴァレーの美術館計画 75–78

現代日本建築家展＋デザイン・セミナー報告　ロッテルダム　JAPAN AIR　堀川幹夫 80–81

展覧会レポート　カルロ・スカルパ回顧展　野口昌夫 82–85

トピックス　〈永遠の建築〉への憧憬　上口泰位＋山下秀之 86–87

記事・書評 88–96

海外建築情報　時には賞を楽しむ余裕——P／A賞この10年　DUCTSPACE編 99–104

国内建築ノート　グルッポ・スペッキオを叱る　グルッポ・スペッキオ 編 最終回 107–111
伊藤ていじ＋伊東豊雄＋植田 実＋鈴木博之
＋富永 譲＋林 昌二＋彦坂 裕＋宮脇 檀

総目次　1984年1月号—12月号 113–116

《SD Review, 1984》出展作品のドローイング（高松 伸，竹ノ内一雄） 表紙

●
発行人：
河相金次郎
編集人：
長谷川愛子
発行所：
鹿島出版会
〒107
東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話（03）582-2251（代）
振替　東京6-180883番

●
編集長：
伊藤公文
編集スタッフ：
有賀秀典
吉田雅彦
相川幸二
浜地三千世

●
アート・ディレクター
工藤強勝
ロゴタイプ・デザイン
羽原肅郎

●
印刷・製本
凸版印刷株式会社
〒174
東京都板橋区志村1-11-1
電話（03）968-5111（案内）

取次店：
東販・日販・大阪屋・栗田出版販売・誠光堂
鈴木書店・西村書店・中央社

定価＝1,500円
年間直接購読料＝20,000円（送料込み）

SD
Space Design
No. 243
8412
December 1984

● **A Monthly Journal of Art and Architecture**

Publisher:
Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

●
Editor:
Kobun Ito
Associate Editors:
Hidenori Aruga
Masahiko Yoshida
Koji Aikawa
Michiyo Hamaji

●
Art Director:
Tsuyokatsu Kudo
Logotype Design:
Shukuro Habara

●
Published by
Kajima Institute Publishing, Co. Ltd. ©
5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 Japan
Telephone: (03) 582–2251
Printed in Japan

Overseas:
This copy: ¥2,500
(including seamail postage)
Subscription price
¥30,000 a year
¥50,000 two years
(including seamail postage)
Order form: pp. 117–118

■SPECIAL FEATURE
"SD Review, 1984" 3–50

Round Table Discussion: Comments on Entries 6–12
by Fumihiko Maki, Minoru Takeyama, Riken Yamamoto, Hajime Yatsuka

Looking Back at "SD Review, 1984" 12–13
by Fumihiko Maki, Minoru Takeyama, Riken Yamamoto, Hajime Yatsuka

A Closer Look at "SD Review, 1984" 48
by Kensuke Yoshida

The Process that led to "SD Review, 1984" 4–5

Report on the Works Shown in the "SD Review, 1983" Exhibition 49

Regular Entries=
A Residence in Urasaki / *Toshiaki Ishida* 14–15
A Residence for Two Families / *Yoko Inoue* 16–17
Kosaka Co. Ltd. Headquarters Building / *Takeo Kimura+Shuntaro Noda* 18–19
Kichou-Sanso Villa in Higashi-Hachimantai / *Koichi Ebizuka+Toshiyuki Hishinuma* 20
Kanesu-Kamaboko-Honpo Headquarters Building / *Sankun Kataoka* 21
Maison Formula 1984 / *Tetsuro Kurokawa* 22–23
A Residence in Suginami / *Ryoji Suzuki* 24–25
FEV House / *Akira Komiyama* 26–27
Company Residences in Ogasawara / *Katsuhiko Kobayashi* 28
Ishiwata Residence / *Kazuo Takenouchi* 29–31
Koya Apartment House / *Masayoshi Koya+Sakae Ouchi* 32–33
A Residence in Shugakuin II / *Shin Takamatsu* 34–36
Atlanta '83 / *Okuto Nakazawa* 37
Tohoku-Tamayoshi Building / *Shuji Nose+Kumi Nagai* 38–39
Shirasagi Complex / *Kunihiko Hayakawa* 40–41
Life-in-Kyoto / *Hiroyuki Wakabayashi+Mitsutoshi Kadono* 42–43
A Coffee Shop-Gallery in Kinugasa / *Yoshiko Nakano* 44
Ikeda Hospital / *Takenobu Watanabe* 45
Special Entry=
M Cottage / *Fumihiko Maki* 46–47

SERIAL ESSAY—Color 12 51–52
A Complex against Color
by Makoto Nakamura

NICE SPACE 53–56
Dom Cathedral, Köln, West Germany
Kazuo Iwamura+Masaaki Horiuchi

"International Building Exhibition, Berlin 1987" Report Year 1984 57–64
Inhabiting in City: Experiments in Berlin
Lutzowplatz housing by O.M. Ungers 58–60
Ritterstrasse housing by Rob Krier 61–63
Symposium: 6 Cities Analysis for Urban Renewal, *by Fujio Adachi* 64

SERIAL PRESENTATION 〈Frank Lloyd Wright's Enchanted Spaces〉 ❺ 65–72
An Organic Magic (4): Architecture of Over Soul
by Shinichi Kusamori+Shunji Okura

Domaine Clos Pegase Design Competition 75–78

"JAPAN AIR" in Rotterdam, *by Mikio Horikawa* 80–81

"Carlo Scarpa 1906–1978", *by Masao Noguchi* 82–85

TOPICS
Ticinese Architect Livio Vacchini 86–87

BOOK REVIEW 88–96

EMINENT WORKS ABROAD
A Time to Enjoy Prize-Winning Works: The P / A Award Works of Ten Years 99–104
——compiled from foreign architectural magazines, *by DUCTSPACE*

DOMESTIC ARCHITECTURAL NOTES 107–111
Critiques of Gruppo Specchio's Essays
by Teiji Ito, Toyoo Ito, Makoto Ueda, Hiroyuki Suzuki, Yuzuru Tominaga, Shoji Hayashi, Yutaka Hikosaka, Mayumi Miyawaki

Annual Index: January-December 1984 113–116

Drawings *by Shin Takamatsu, Kazuo Takenouchi* Cover

▼

SD Review, 1984

●

October 16.——29, 1984

■

《SD Review, 1984》経過



〈SD Review, 1984〉第1会場

■応募要領の発表

●

SD 1984年4月号誌上にて発表した応募要領は下記の通り(一部省略)。　昨年までと同様に応募の対象となる作品については，実現を前提としたものであることとし，またさらに応募者の負担をできるだけ軽減するとともに，あくまでも選択基準は作品の内容に重点がおかれることから，プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は主要な評価の対象とはされないことを特別に明記した。　また本年度より入選作品の中からコミッティ・メンバーの合意により数点を選出し，SD賞として記念品を贈呈することを明記した。

《SD Review, 1984》コミッティ・メンバー

槇文彦（東京大学教授）

竹山実（武蔵野美術大学教授）

山本理顕（山本理顕設計工場）

八束はじめ（多摩美術大学講師）

〈SD Review, 1984〉の応募要領は下記の通りですが，応募の際にはプレゼンテーションそれ自体の技術や密度は選択にあたっての主要な評価の対象とされないことに十分ご留意下さい。

応募者の資格

特になし。　組織の場合は代表者を明記のこと。

応募対象建物

応募者が，実施を前提とし，応募の時点において設計中ないし施工中の建物。　発表の時点で完成していても構わない。　海外に建つものも含める。　但し，実施の見込みが全くないものや，公開，指名を問わずコンペの応募作品は入選落選のいかんにかかわらず対象外とする。　応募作品点数は原則として一人一点に限る。

提出図面

配置図，平面図，断面図，パース，簡単なエスキス模型の写真など，設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択する。　縮尺は自由。　以上をA3判用紙4枚内におさめる。　図面，写真を貼りつけることは自由だが，パネル化しないこと。　模型は受け付けない。

添付書類

①建物名，施主名(事業主体名)，工事予定期間，主体構造，主要仕上げ材料，敷地面積，建築面積，延床面積，応募者名，年令，職業，勤務先と自宅の住所と電話番号，協同者の氏名。

②400字以内の設計趣旨。　以上それぞれA4判程度の用紙1枚に記入のこと。　②は必要と思われる場合のみ添付のこと。

応募の受付・締切

1984年6月25日より7月31日（同日消印有効）。

結果の発表と展示用図面・模型の製作

前記のコミッティ・メンバーによる選択終了後，ただちに入選者に直接連絡する。　入選者はその後指定日までに展覧会用(SD誌上発表用）の図面と模型を製作し，後日指定の場所に搬入する。　なお本年度より展覧会用提出物については，一般図面ファイル提出を義務づけ，ドローイングと模型に関してはどちらかを提出すれば可（もちろん両方も可）とした。　入選者には費用として一律5万円が支払われる。

■応募案審査

●

応募案の審査は，8月22日（水曜日）に行なわれた。　応募総数は94点。　その内容は，住宅，オフィスビル，商業ビル，病院，キャンパス，集合住宅，動物舎，資料館等々多岐にわたる作品が全国の広範囲におよぶ地域から寄せられた。　これらの中より，コミッティ・メンバーによる入念な審査と討議の結果，18点が選ばれた。



〈SD Review, 1984〉応募作品審査風景



〈SD Review, 1984〉第2会場

■展覧会

●

入選作の選定後，各入選者に図面ファイル，模型，ドローイングの製作を依頼し，10月16日（火曜日）より29日（月曜日）までの2週間，渋谷区代官山ヒルサイドテラス内において展覧会が開催された．　第1会場（ヒルサイドギャラリー）と第2会場（E棟ロビー）の2ヶ所に分け展示され，数多くの来場者を迎えた．　なお，両会場のディスプレイは，元倉真琴＋建築計画の協力を得たものである．期間中の10月27日（土曜日）には，コミッティ・メンバー，出展者をはじめとし数多くの参加者のもとに，パーティーが開かれた．



〈SD Review, 1984〉展覧会ポスター

■SD賞

●

今年度より新設されたSD賞は，コミッティ・メンバー全員による展覧会場での討議の結果，以下の通り決定された．

一席（鹿島賞）＝高松伸（修学院の家II）
二席（朝倉賞）＝竹ノ内一雄（石幡邸）
入賞＝小宮山昭（フェブハウス）
　　鈴木了二（杉並の住宅）

上記の各氏には10月27日，展覧会場で行なわれたパーティーにおいて，それぞれリノ・サバティーニ銀製ポット，同銀製トレイ，エクスクルーシブ・サングラス（リーベルマン・ウエルシュリー）＋壁掛時計（ブラウン　ジャパン）が贈呈された．



〈SD Review, 1984〉入賞作品審査風景



〈SD Review, 1984〉パーティー会場風景

■座談会

《SD Review, 1984》入選作をめぐって

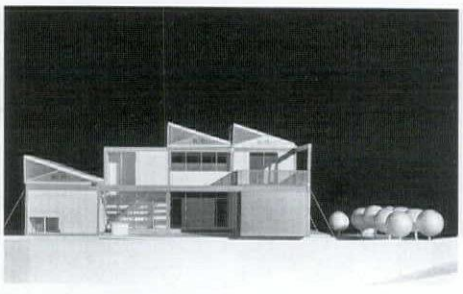
●

■出席者＝《SD Review, 1984》コミッティ・メンバー

槇 文彦●東京大学教授＋**竹山 実**●武蔵野美術大学教授＋
山本理顕●山本理顕設計工場＋**八束はじめ**●多摩美術大学講師

SD　〈SDレビュー〉も今年で第3回を迎えました。　1回，2回は勢いで続きますが3回目となるとそうもいかず，今年はこの催しにとってある種の正念場であったと思います。幸いにも，多数の応募案や，その中から選択され展示された18点の作品は，過去2回にもましてレヴェルが高く，展覧会の入場者も増えてきて，この催しが次第に定着しつつあるようで，心強く思いました。　さて本日はコミッティ・メンバーの方々にお集まりいただき，ここに展示された18の作品のそれぞれについて，この中から数点の入賞作品を選定することを念頭におきながら，ご意見を述べていただきたいと思います。

■石田敏明（浦崎の家，p.14—15）

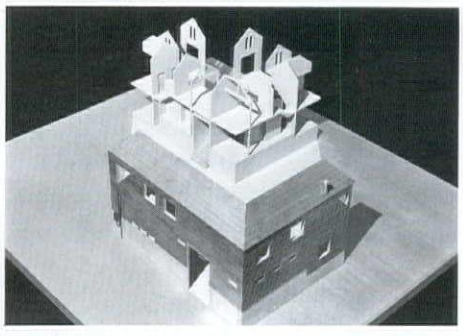


八束　石田さんは伊東豊雄さんの事務所に以前いらしたということですが，プレゼンテーションはもちろん，この作品に見られる中庭の作り方やエレベーションに伊東さん譲りのところを，多少なりとも感じますね。　疑問点もあるけれども，玄関・居間・寝室等単位空間ごとに操作を試みるなど，与えられた条件の中で質の高い建築になっていると思います。

竹山　グリッド・システムとテンションということがこの作品の特徴と言えるわけですが，テンションについてはそれが現実的なものか表現的なものなのかちょっと不明快さを感じるのですが。

槇　僕も応募の時点から今も，この作品の持っているのびのびした空間，開放性といった点に魅力を感じているのですが，テンションの意図がもっと明確に現われればという気がします。

■井上揺子（二世帯の家，p.16—17）



八束　特別に変ったデザインではないけれども，エレベーションにしてもプランにしても，総てがきちんとしていてまとまりがある。坂本一成さんの教え子であると伺いましたが，坂本さんよりも，もっとリアリティに密着している。　その辺が僕は悪いことじゃないという気がして，好感を持ちました。　模型が銀色であったけれど，実際にもしも銀色にするのだとしたらどうなのかな。

槇　この案の場合，中庭の雰囲気が割合に大事だと思いますが，模型では中庭側のエレベーションが表現されていなくて分かりにくい。この中庭はかなり狭いから，外側の壁面の開口と同じような具合いであってはならないと思うんですね。

八束　庭というより路地という考え方に近いんじゃないでしょうか。　レベル差のついた路地。

山本　好意的に見れば路地ということだろうけど，切妻の連続というのがテーマになっているんだと思うんですが，その時の平側のデザインて，ちょっと難しいと思うんです。囲んでいって庭側に面する壁と，外に面する壁と，切妻の両側面という見方をする限り，本当は同質だと思うんです。　でも槇さんのおっしゃるように機能的には当然同じデザインにする訳にはいかない。　そのあたりの難しさがちょっと出ちゃったという感じなんだと思うんです。

竹山　スケールも適当で，切妻屋根をコの字にまわして，道路側からみると切妻が見えずに大きなマスとして見えるという点も面白い。敷地の東南隅の空地が，東南の採光を確保するという理由だけにしてはやや不可解な気がします。　さらに道路側と中庭側を同じにしたい気持ちも分かるが，むしろ差をつけたら，内部空間の狭さを救えたかもしれない。

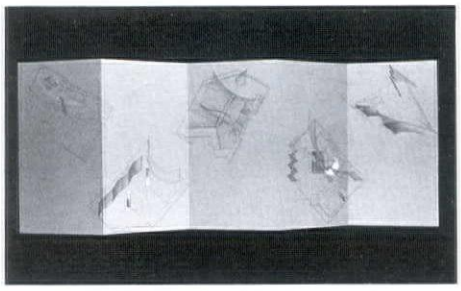
八束　レベル差の使い方が巧みだと思う。　パブリックな部分とプライベートな部分の分離の手段として，あるいはプロポーションを調整する手立てとして用いているようにも見えました。

槇　その点は同感です。　ただ僕はやはり中庭の扱いが気になりますけれどね。　空間というのはいつの場合でも痩せていくより膨らんでいく方がいいと思っていますけど，この場合，中庭はまわりの比較的に薄っぺらな空間に膨みをもたらす絶好のシチュエーションにあると思うのに，それを生かしきっていな

いように思える.

■木村丈夫＋野田俊太郎

(株式会社コサカ本社社屋, p.18—19)



竹山　単体の建築言語を極立たせるためにアーバン・コンテクストそのものをそこへ凝縮させた感じですね.　いろんな形態や材料が, メチャクチャにとり入れられ, 断片化され, まるでヘトロジニアスな街並みそのものというわけです.　応募案のときは図面のせいもあって, そのあたりの狙いがよく伝わったんですが, 今度の模型では, 何かそれが減退した感じです.　というのは, 解読を押しつけてしまったからでしょう.　いってみれば, 手品の種を明かされて, しらけてしまった感じがしてしまうんです.

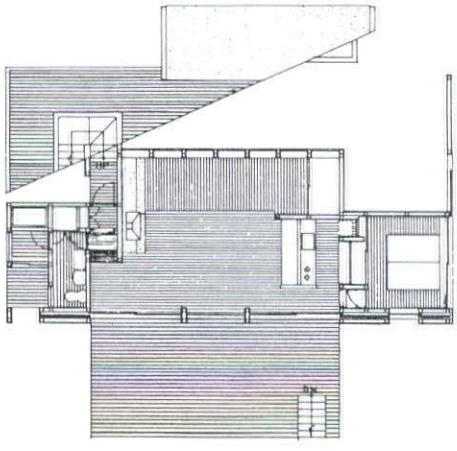
八束　非常に異色で目立ちましたね.　それだけでどうしても最初の選択には入ってしまわざるを得ない.　フランク・ゲーリーに近いようなところもあるけれど, ゲーリーでは乱暴なことをやっているようでいて, ベーシックにはコンベンショナルなところがあるのがかえっておもしろいと思うのですが, この案の方はそういったものは感じられない.
造形的な奇想というレヴェルに留まりすぎて, ひっかかるものがむしろなくなっているというのか…….

山本　応募作品の中に, これと同じくらいのスケールの商業ビルがあと3つ程あって, そのどれもが, エクレクティシズムというんですか, 様式が組合わされて, それで表層をデザインしていこうというような意図を持ったものだったと思います.　その中では, 圧倒的にこれが特異だった.　その特異さは, 買っていいんじゃないかと.　ただ〈曖昧な断片〉の集積と木村さんたちは言っているんだけど, それと転倒した模型とどんな関係があるんだろうかって, かえって分かりにくくしちゃったんじゃないでしょうか.

槇　確かにラジカルという点では, 今回の作品群の中では極立っている.　もっとも, ラジカルという形で納得しない限り, よく分からない作品であるとも言える.　たまたまグラーツから帰ってきた原広司さんが, グラーツ・スクールの事を話してましたが, 何かそうしたものに近いのかもしれない.　極めてオプティミスティックな破壊主義という意味で.

■海老塚耕一＋菱沼利行

(東八幡平帰蝶山荘, p.20)



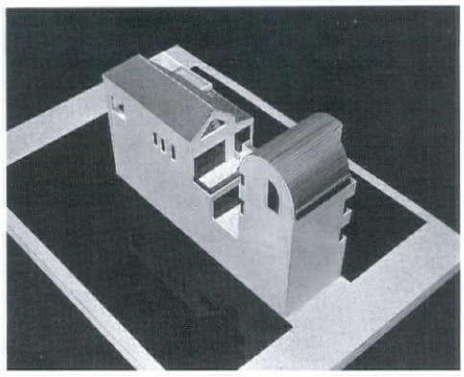
八束　敷地の条件に恵まれていて, それを素直に生かしたということに尽きるんじゃないんですか.　エレベーションにもう少し緊張感があったらという感が強くしますが.　変ったことをやる必要は必ずしもないと思うのですけれども, それとデザインの甘さということは別だと思います.

竹山　応募の時点では斜面に建つ, 総てが木造の基壇建築ということで, 設計者は〈舞台〉という言葉でそれを表現していましたし, そうしたホモジニアスな全体に力強さと素直さとが同居していた.　でも, 今回の展示模型を見ると, 鉄筋製の地形に建物本体がすっかり押されてしまっている.　力強さが地形に吸い取られてしまっている気がします.

槇　僕は, この建物がいわゆる基壇建築でもなく普通の建築でもなく, そういうふたつのシチュエーションの中間で, 何か特殊なものがあるのではないかと期待したのです.　そういう兆しはあった.　今回の展示を見る限りは今ひとつその辺りでアピールするものに欠けるように思う.

■片岡山訓（かねす蒲鉾本舗本社屋, p.21）

八束　応募時の図面と模型写真では, 破れかぶれというのか, 破綻の淵でとどまっているような雰囲気があって危惧と同時に期待を持たせたのですが, 今回のプレゼンテーション



を見るとひどく小じんまりしちゃってつまらなくなってしまった.　何とも強引なプランニングをプラスの方向で出したならと惜しまれます.

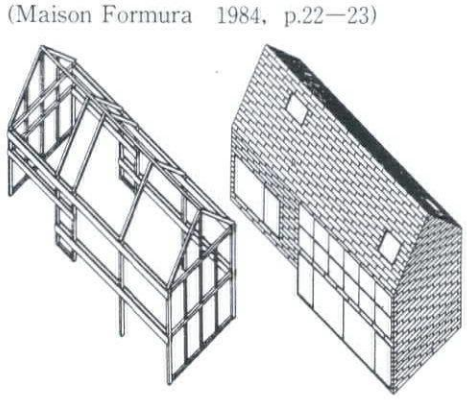
山本　僕は最初からその滅茶苦茶さが気にはなっていましたけれど.

槇　僕も賛成に回った方なんですけれど, 応募案の段階での蒲鉾風屋根を始めとしてもっと押し出した方が良い部分が, 今回のプレゼンテーションでは控え目になってしまい, 逆にクリシェに陥ってしまっているファサードの方がひどく目立ってしまっている.　残念な気がしましたね.

竹山　一口にソフィスティケーションの問題です.　これはそれを過度にやりすぎたために, かえって形が浮いちゃって力を失ったわけです.　それにくらべて, 順番が前後しますが, こちらの竹ノ内さんのは, いわばアンダー・ソフィスティケーションのもたらしたある種の野性味を残しています.

■黒川哲郎

(Maison Formura　1984, p.22—23)



槇　〈銀紙でできたケーキ箱〉というイメージだということだけど, 実際の仕上げはどうなんですか.　銀のイメージは保たれるのかしら.

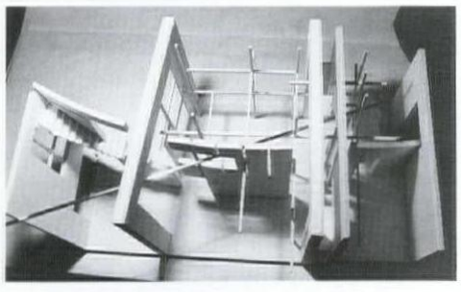
竹山　ガルバニウム鋼板葺ということで, かなりメタリックな感じにはなるだろうと思いますけれど.　彼はもともと建築の材料には

詳しい人ですね。　それ以上に，シンタックスにスキがないというか，キッチリ決っている感じですね。　模型のプレゼンテーションも無駄がなくて，決っている。

槇　スキップフロアの扱いとか，内部と外部との一体的なつながりなど，かなり巧みなデザインだと思います。　金属の外被とガラス面のディテールが成功すれば，実作品も単純なフォルムの美しいものになるだろうと想像します。

八束　単純なパッケージの中にいろんなレベルを持った空間を納めたいという意図が素直に出ているし，それはプレゼンテーションからも伺える。　表現的ではないけれども，質としては高いデザインだと思いました。　ただ外装の感じは，パッケージ的に扱いたいという気持ちは分かりますが，できてみるとどうか，という気もないではない。

■鈴木了二（杉並の住宅，p.24—25）



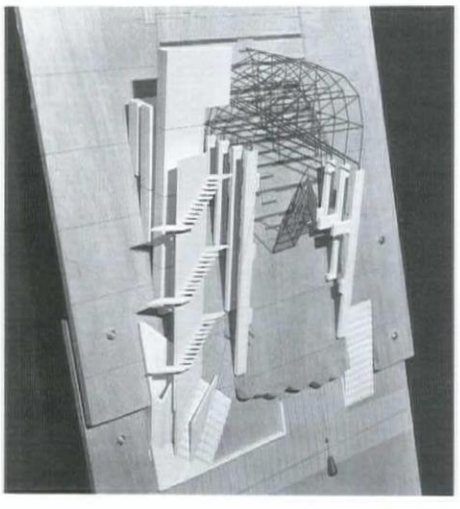
山本　鈴木さん，小宮山さん，木村＋野田案の3つには，どこか共通した志向があるように思うんです。　結果は全然違うんですけど。建築というのがひとつの表現様式として自立しているなんてことを許容しないというんですか，そういう固まったものとして建築があるんじゃないという，そのへんを痛烈に突いているような気がします。　特に鈴木さんの場合は全く一貫していると思うんです。　慣習化された建築の出来上り方みたいなものに対しては徹底的に批判的なんじゃないでしょうか。　ですからＳＤレビューがひとつの展覧会だとして，そのためのプレゼンテーションとして作品を見ようとした場合にも，彼のものだけがそれに耐え得ているという感じもするんです。

八束　プレゼンテーションされたものは抜群に美しいと思いました。　ただ鈴木さんの今までの仕事で概念模型的な秩序が，現実の建物に置きかわっていくプロセスを見ると，素材感が直かに出過ぎているように思うんです。それが，模型には表現されているような非建築的な秩序の美しさをしばしば裏切っている。落差が大き過ぎるというのか。　建築それ自体にも徹底してクリシェでない部分を持ちこんだ方がいいと思うんだけれども。　今度の作品もそうした危惧が拭いきれません。　最初に設定されたある種の秩序が，現実のものに置きかえられていく時に，弱められずに，より強力なものになるような回路が見出せれば，本当に素晴らしいものになるだろうと予測されます。

槇　僕にとっては，模型にしても，彼の言っていることと実物との関係にしても，分かりづらく，難解なものに思われました。　「建築であろうと模型であろうと，さしあたりどちらでもかまわない」ということですが，いずれにしても，彼が言語化していることが，物ができていくプロセスにおいても，主要な導き手になっているのかどうかが，はっきり了解されるものでない限り，難解という以外にありません。

竹山　慣習化されたものを避けるという志向性は分からなくもない。　そのせいか模型のプレゼンテーションもすごみにあふれています。　ただメッセージに，ある種の社会性をもちこまないと，自閉化されて，そのすごみはいわば家庭内暴力に似たものになるかもしれません。

■小宮山昭（Fev House，p.26—27）



槇　プログラムが一風変っていて，とりあえず容積を確保して，その中に必要なフロアーを増設していくという方式。　その方式の真偽は定かではないけれど，ともかくもその方式にのっとって，軽快な構築体が得られていると思う。

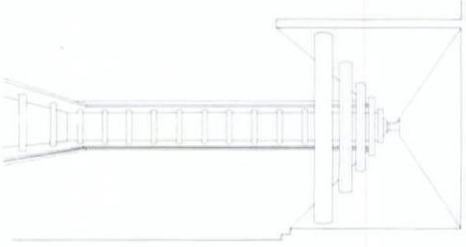
山本　私も同じ意見です。　プログラムに合わせた固いＲＣの部分とその上に鉄骨の架構が軽々と乗っているような構成が明快なんじゃないかと思います。　実現するであろうものと現在の表現との落差が極めて少ないと言うんですか，ちょっと安心させるところがある。　多分その明快さ故なんだと思うんですが。

竹山　アンディ・ウォーホルの引用があったりするところを見ると，彼の予期しないアドホックなイベントの生起が予想され，そうした時間的な継起までものみこんでしまおうとする意欲のようなものを感じます。

八束　空間というものに思い入れを込めない，軽いおさえ方というのかな，そのへんはさすがにうまいという感じがしますね。　実際に出来上がって，いろんな付帯物がベタベタとくっついてきて，そうしたものの内に建築が埋没してしまうかもしれない事態も予想されますが，これだけヴォリュームがとってあると何とかなるのかもしれません。　ウォーホルではないけれども，２週間ごとに変っていくというのか……。　ただ軽い作品ではありますね。

槇　模型についてだけれど，あそこまで分かりにくくデフォルメする必要はないんじゃないでしょうか。　去年や一昨年の彼の入選時の模型ほどではないにしても。

■小林克彦（小笠原社宅，p.28）



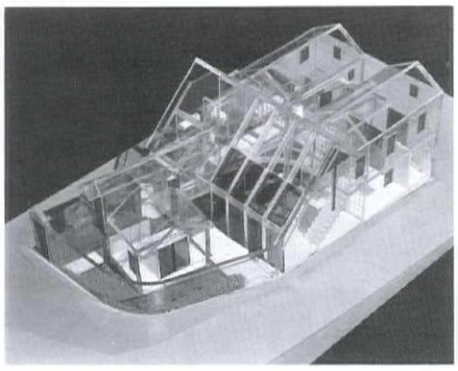
八束　小笠原という気候を考えて，コロネードを回したり，住戸についても二重屋根としたり，床下換気を積極的に考えたりしている。きっとかなり心地良い空間に，住み易い住戸になると思います。

槇　回廊については，一寸うなずき難いところがありますね。　どうして片方の住戸だけにしかついていないのかとか，デザインの点でも。　ただ住戸のプランニングはリニアーなアイディアをとても素直につくり出していて良かった。　しかも通風や遮光には十分に

配慮を示していて好ましいと思いました．
自然の風土，地形が優勢な中で，それらに押されないで，むしろ自然を押し返す形を選んでいる点を評価したいと思います．

竹山　応募時点で僕は確かあまり押さなかった．　明けっぴろげで，単純すぎるサイトプランに新鮮味を全然感じなかったからでした．今回のプレゼンテーションで，幾分救われたのは，小笠原の自然と素直に対応した屋根の形態処理です．　でも，まだサイトプランにはなじみが得られません．

■竹ノ内一雄（石幡邸，p.29—31）



山本　個人的な体験だけでものを言うのはうまくないとは思いますが，物ができていく過程で，最初の思い入れの強さや，なまなましさみたいなものが消えていくと言いますか，どこかで消してゆこうとするような意識が，どうしても働くような気があるんですけれども．　この作品の場合には，そのあたりが実に率直だという気がします．　この人の意気込みや，なまなましさが，そのまま作品になっている．　良く分かりませんが，時代とか様式とか，なにかそうしたものへの迎合が全くないからなのかなあという風にも見えると思うんですが．

槇　モダン・リビングというような住まい方ではなくて，この家庭にはこうした住まい方という何かが，この作品には計画的なのか偶然なのかは分かりませんが，ともかくも明白に表現されている．

竹山　この住宅のクライアントは運動選手だった人なんですね．　そこには彼等に特有な陽気な家庭の雰囲気というのがありますね．ウワーッと他人が身内と同じになっちゃう．そういう感じが良く出ている．　道や広場を家の中にもってくるとか，暖房をやめてまきストーブだけだとか，明るい家庭にいつも訪問客が絶えないとか，そういう土着的な生活パターンをほうふつとさせる．　ただそういう空間を提案する手法として，透明な模型を使うというのは，プレゼンテーションの技術の問題ですけれども，適当だったでしょうか．

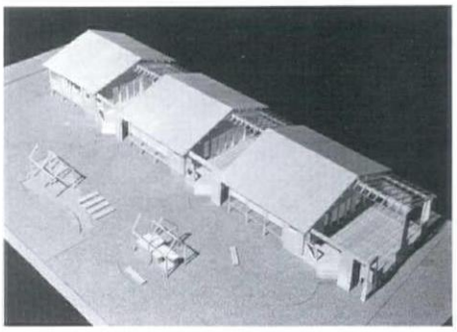
八束　地方のそれも結構年輩の方がこういう形でがんばっていらっしゃるというのは，感じさせるものがあって，僕も票を投じました．表現的なレヴェルではややソフィスティケートされていないように思いますが．

山本　一般論みたいなことになっちゃうんですけれど，今度のＳＤレビューで，特徴的だったと思うんですが，住宅がすごくだめに見えたという感じがするんです．　この人の意気込みの反対側に住宅のだめさが見えている．だめさというのは，いま竹山さんがおっしゃったような，生活の仕方とか住まい方といったようなものから離れて，ひとつの建築そのものとして住宅を見るようになってきているということだと思うんです．　生活様式とか，住まい方の提案というのは，もはやそれ自体が陳腐に見えるぐらいに新しさがなくなっているように思うんですけど．　その時にどういう眼で住宅を見るかというのが，ひとつの問題としてあるような気がする訳です．　今までみたいに住宅を〈特別な建築〉として見るような眼は既にほとんどないといっていいんだと思います．　ちょっとみんな苦労しているところでもあると思うんです．　竹ノ内さんの場合には，きわどいんだけど，そのあたりの衒いが全くなくて屈託ががないくらいになまなましいあたりが，逆に目についたということなんじゃないでしょうか．

槇　造形的に言っても，エレベーションなどもわりに緊張感があって良いんじゃないかと僕は思いましたが．　片側では棟がふたつになって二頭立ての馬みたいになっているのがもう片側ではひとつになって核みたいなものを表現している．　全体にはごくオーソドックスであっても，シルエットには新鮮さが確かにある．　住宅が少し饒舌になりすぎていることに対する歯止めとしてもこの表現は好ましいと思うし，一方では言葉自体には問題があるとしても，広場とか径とかをとりこむやり方も巧みだと思う．

■小屋雅義＋大内栄
(Koya Apartment House，p.32—33)

槇　この計画は，町工場に囲まれた敷地で，



恐らくは大変なローコストでといった具合いに，非常に不利な条件下で，三軒連続の住戸形式に挑んだものだと思います．　ことに住戸と同等の広さを持った外部テラスが，表現としてだけでなく，実際にどのように使われるのか，興味もあり期待もしたんです．

山本　そういった厳しい条件によりかかりすぎているんじゃないかとちょっと危惧もしていたんですが，実際に今回展示されたものを見ると，厳しいだけを売りものにしている訳じゃなくて．　その意味では好感を持ちました．

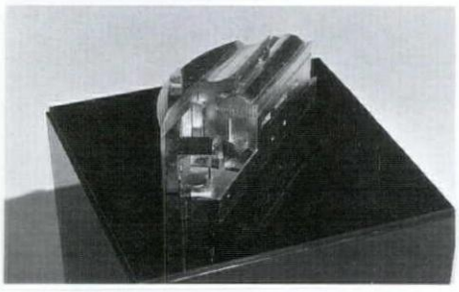
槇　これだけの大きな外部テラスがうまくしつらえられたならば，ただの棟割長屋以上の新しさが生まれるのではと思います．　つまり，付帯的なテラスとしてのしつらえがなされれば，面白い表情が得られるのではないかと．　そういう期待には応えてくれていると思いました．　プロポーションがきれいなので，ローコストとは言え，貧相なものとはなっていない．　また出展されたものも非常に素直なプレゼンテーションですね．

竹山　確か応募案では外部テラスはそれをはさむ２軒が共有するというプランニングでした．　つまりテラスに面して２軒の住戸が開放されていた訳で，このテラスは一種の共有空間でしたね．　そのことが私には興味もあり，新たな提案とも受けとれたし，また一方で不安でもあったわけですが，今回の提案では，テラスの共有性がまったく失われてしまったプランニングに変更されてしまいました．不安は解消されましたが，また一方ではがっかりしました．　設計者としては，より明快な機能化を図ったということなんでしょうね．

八束　建物以外に通り抜けの通路がデザインされており，最初の段階ではそれがいささかダルな感じになりそうな危惧をもっていたのですが，最終プレゼンテーションでは改善されてきて安心しました．　住宅のデザインに

関してはちょっと小ぎれいになりすぎるのかもしれないという気はしています.

■高松伸（修学院の家II，p.34—36）



槇　高松さんの去年の入選作はテッセナウを想わせるもので，彼の新しい面を見たように思いましたが，今度の作品にも驚かされました.　たとえて言うと，これまでの彼の作品が機械とか部品を連想させたのに対して，よりはるかに建築的になってきている.　それは，随分大きな変化だと見受けました.

八束　彼はもともとウィーンふうのところがある人で，従来はその中でも重たい方向に傾斜していたのが，今回のものでは，かなりエレガントな方向に変化してきていているような感じもします.　模型に表現されているような金属的な鋭さと軽いエレガンスとの釣り合いがうまく出されれば，実作も相当良い作品になるだろうと思います.　あまりモニュメンタルにならない方がよいのではないかな.

山本　形に対する執着は，いつもなまなましいんだけど，その執着心に見合っていると思います.　住宅という視点を仮りに全くはずしてしまったとしても，それでもまだ建築として充分に自立的だというのは，今度のSDレビューの住宅作品の中でも唯一の作品なんじゃないかと思います.　高く評価していいと思うんですが，ただ特に私が気にするほうだからなのかも知れないのですが，プランニングにしても，物と物との出会い方にしても，今までと違って，ちょっと窮屈だという感じもします.　高松さんの魅力というのは，最初のイマジネーションのレヴェルから最終的な物のレヴェルまで一直線に連続していて，その差が極めて小さいところにもあったと思うんですが.　今度の場合は，その間をつなげるのにちょっと作業が必要なんじゃないかといった感じです.　勿論，そのあたり，有無を言わせない力量を認めての上ですけど.

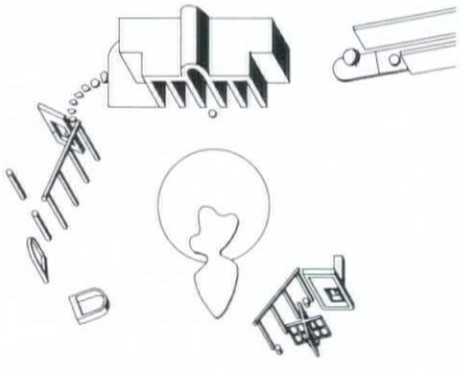
八束　今までは力点がシンボリックな部分だけ集中されていた感があったのが，今回のは，あちこちに巧妙に配置され，コンポジティヴになってきている.　敷地の条件によるところも大きいでしょうけれども.

槇　彼の年令からしてこう言うのは変かも知れませんが，円熟してきたんじゃないですか.建築的ヴォキャブラリーが次第にふえて，建築が持っている独自な法則のようなものが取り入れられている.

竹山　解読しにくい点が多々ありますが，それも全体からみれば気にならず，むしろ魅力のひとつに転じてしまうから不思議です.確かに今までのものと傾向の違いを感じます.メカニカルなものの明示性を色濃く押しつけていたのが，これでみる限りいわば味付けを薄くして，慣習化されたものを断片化したり，様式をふりかけたり，その結果，判じ性が拡大したといいますか，より一層，レトリカルな豊かさを増したようです.　それからもうひとつ，彼のレトリックを理解するために，僕にとって重要な解き口のひとつは〈京都〉ということなんですが，それについては今後の作品をもう少し見つづけたいと思います.

槇　プランは込み入っていて解読しにくかったんですが，大階段の下に押し込まれているような居間は居心地良さそうではないですね.ここが唯一気がかりな点です.

■中澤王久東（Atranta'83，p.37）



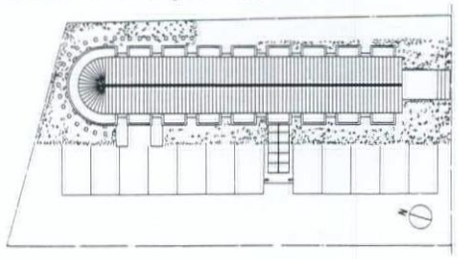
八束　なんとなくパスティッシュというか，ディズニーランドに通ずる雰囲気を持っているプロジェクトだと思う.　桂離宮を下敷きにして，それを変形していくというのは，類例も多い訳ですが，アトランタでやるということで何がしか得をしたのではないでしょうか.　松琴亭等々を模した各々のエレメントが実際に面白いかどうかはプレゼンテーションを見た限りでは，今ひとつ定かでないですね.

山本　庭，お茶(ティーハウス)，桂って三題話みたいになっている.　決まっているとも言えるし，なにかちょっと安易だなあって感じがします.　昨年のSDレビューのときにも話題になったと思うんですが，与条件とかそうしたものを含めた意味での素材，特徴のあるものはやはり得をすると思います.　この場合も広い庭に一定の秩序を与えるための装置を配置してゆくというそれだけでもう期待しちゃいたいという感じになる.

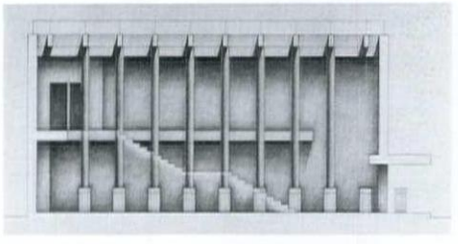
竹山　既存の建物と調和するのか対決するのかという姿勢があいまいです.　いずれにしてもそれがもっとクリアーになされればずっと興味深いものになった可能性が高いと思いますが，このままではどうも…….

■能勢修治＋永井久美

（東北タマヨシ，p.38—39）



■中野佳子（衣笠の画廊喫茶，p.44）



山本　能勢さんたちの案を見て思ったのは，多分中野さんの作品なんかに言えると思うんですが，以前に，いろんな人達が小さい住宅という，ちょっと苛酷な条件の中で，四苦八苦しながら獲得した手法を，実にぬけぬけと，それも上手に使いこなしているということです.　例えば小さなスケールの中でいかに長い距離を獲得できるか，あるいは高さとか，光とかシンメトリカルな方法の導入とか，なんでもいいのですが，それはそれで結構大変なことだったと思うんです.　先程，住宅がだめに見えてきたという話をしましたけれども，それはこうした極小のスケールの中でようやく実現していた思い入れみたいなものがどこか色褪せて見えてきたということでもあるように思います.　それをスケールを上げて横すべりさせている.　隙間をぬうと言うんですか住宅がだめに見えてきた分だけ，そ

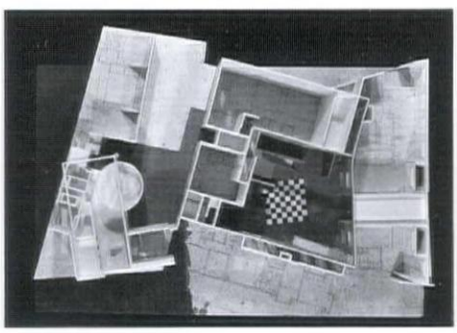
してスケールが上った分だけこうした作品が得をしたということは言えるんじゃないかと思うんですが.

槇　抵抗を越えて到達したんじゃなくて，そこで獲得したものを移行させたというか，全く無抵抗に行なってしまっているところに山本さんの抵抗がある．(笑)　それが巧みであればある程，抵抗感も高まるという具合いね.

八束　できたものは結構面白いだろうと思うけど，こういうやり方はすぐにクリシェになっちゃうだろうという気もする．　山本さんの言葉を受けるなら，住宅の場合に同様なことをやろうとした時に生ずるだろう抵抗感みたいなものが，ここではなさ過ぎるというのかな．　それと，この細長いプランを持つ建物への入り方として真横から入るというのは，余り効果的でないと思いますけれども．　中野さんたちの作品も同様に細長いプランですが，京都という特殊な地割りの条件からきているので，それなりに説得力はある訳ですけれども．　もっとも中野さんの案も，住宅ではなくてこうしたショールームやコーヒー・ショップだったらこのような格好のものでも割に抵抗なくできちゃうなという感じがして，肉薄してくるものに欠けることも事実です．それとこちらは師匠とはいってもあまりにも高松風.

竹山　中野さんの案では，軸を少しずらしているところとか，夜はここのスリットがミラーみたいになって効果をあげるというような点に魅力を感じます．　やや形式主義に陥りかけているふうにも思えますが.

■早川邦彦 (Shirasagi Complex，p.40—41)



槇　アトリウムを囲む2層の賃貸住宅と，それらの奥におそらくオーナーであるだろう人の2世帯の住宅があるという計画ですね.

非常に厳しい条件下での仕事であることは容易に推測されます．　敷地の条件，防災上の様々な制約，要求される採算ベースなど，そうした制約の中で何ができるのかという試みであると思います．　そうした試み自体，大変に意義のあることだと思うんです.

八束　賃貸住宅が中庭を囲むように配置されていて，この中庭をインテリア空間として巧く演出するというのが設計者の意図であったと思う．　しかし，その割には形態のコンポジティヴな面が強調されすぎていて，結果としてどっちつかずになってしまっているように感じられます．　コンポジションとしては今ひとつソフィスティケートされていないのではないでしょうか.

山本　以前に集合住宅をつくる時に有効だと思えた言語（ヴォキャブラリー）が，今では殆ど死語になってしまっているような気がするんです．　集合住宅を設計するというのは今ではちょっと辛い作業だと思います．　そういう辛さを背負っているという感じがある.

槇　確かに集合住宅の設計上のヴォキャブラリーの新しさがなくなった時にどうするかという問題がある訳ですが，ここではひとつのかなり巧妙な解が出されていると思いました.

竹山　応募時の図面の中にあった影を描いたドローイング(p.41参照)．　あれはドローイングとしての新鮮さとともに，かなり魅力的な造形を示していたと思います．　特に不規則な角度を持った壁面が重層していくようなところとか……．　今回の模型を見たところでは，その新鮮さが少し薄らいでしまったという印象です.

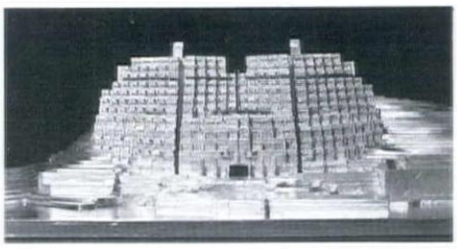
槇　壁面の配置がその高さなどを含めて，視線の通り具合いを慎重に考慮してなされていることは，図面の上でも読み取れますが，例えば象徴的に扱われているロトンダのような円形の出っ張り部分は，決してコミュナルなものではなく，オーナーの居間であったりして，領域性という点でも幾らかは疑問な点がある.

山本　集合住宅におけるコミュナルな場所というものの存在を信じているのか，それとも表面的なコンポジションの方が問題なのかということであるとすれば，早川さんにとっては圧倒的にコンポジションの方が重要なんだということは分かるような気もしますが.

■若林広幸＋角野充俊

(ライフイン京都，p.42—43)

山本　応募の時点の図面の中に，中央の吹き抜け部分のすさまじくも，おどろおどろしい絵があり，それは確かにインパクトがあった.



八束　ジャッジの際の共通の意見として，モニュメンタルな造形力は異色だし注目に値するが，果たして老人ホームとして適当なものだろうかという危惧があったと記憶していますが，今回の模型と図面を見てもその危惧は依然として解消されていないと思う．　造形上の迫力という点でも，エレベーションなどを見ると思っていたよりもありきたりな感じを強く受けました．　この造形は，パオロ・ソレリを思わせるところがある．　ソレリの実物は意外にモニュメンタルというよりも，乾いた風土に密着していてこれなら老人のコミュニティなんかにも適するんじゃないかという気がするから，これにしてもそういう方向にいけば成立しうるものとは思いますがどうでしょうか.

竹山　設計者は多分，老人ということを余り意識しないで，斜面上の集合住宅を作るということで設計を進めたんじゃないかな．　その是非はともかく，これだけの多くの老人を，集団化させて同時に住まわせるということに抵抗を感じます．　また表現ですが，ことに美観にうるさい京都という土地柄を考えた時，ここに示されたデザインに役所は文句をつけないのかな……．(笑)

山本　老人ホームだからといって老人に媚びたようなデザインをする必要はないとは思うんです．　老人ホームだからそれ風にヒューマニスティックにしなければならないという理由はないと思います．　若林さんのようなこういう方向があってもいいと．　ただ既成のいわゆる老人ホームらしさに向かう方法とは違った方法を取ろうとしている点では認めた上で，幾つか疑問の点もあります．　ただの集合住宅じゃないんだと思うんです．　これだけの人たちが，やはりどこかで共同体的に住まざるを得ない訳なんだから．　そのあたりもうちょっとこだわり方があっても良かったんじゃないかと思うんですけど.

槇　そうですね．　特別に老人用ということでなくても，集合住宅として，ある種のデモクラティックな在り方が要請されるのではないかと思います．　だから僕はモニュメンタルな造形は否定しませんが，ここでのシンメトリー，あるいは強い軸性を感じさせる住まい方にはこだわりを感じます．　この位大きなスケールだとシンメトリーはパワーの表出につながると思いますが，パワーの意味は何なのか，この場合よく分からない．

■渡辺武信（池田病院，p.45）

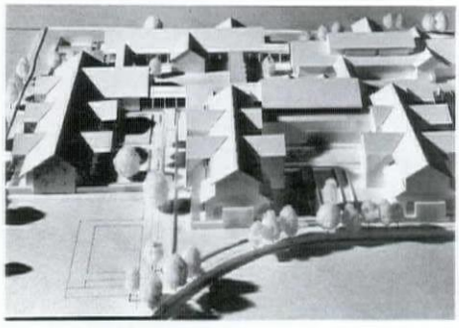


Photo: K. Torihata

八束　美しい村とか，そういうイメージかしらね．　出来上がると，シチュエーションとしては非常に気持ちの良い病院になるだろうという気はしますね．　ただそれを超えたものというのは感じられなかった．　全体模型よりも立面の細かいプレゼンテーションなどを見せたほうが効果的だったのでは……．

槇　最近はこれだけ大規模な病院・病棟を平屋でやるという機会は少なくなってきていますが，ここでは目新しい提案はないとしても棟間の外部空間をヒューマニスティックな中庭として仕立てて，低層の病院としてのアイディアルな姿を追求し成功しているように思いました．

竹山　病院というのは，環境もさることながら，それ以前の医療にまつわる諸問題が複雑ですよね．　医の倫理とそれにまつわる制度の問題とか――．　この病院でも計画以前に色々あっただろうと思いますが，そうしたものを悠然とのりこえたような堂々とした姿勢が伺われて好感が持てます．

SD　これで今年の18作品総てについてご意見をいただきました．　今年からは賞の選定を考えていただいたことも手伝って，非常に活発で充実したものであったと思います．
今日はお忙しいところをお集まりいただき本当にありがとうございました．

（1984年10月15日，SDレビュー展覧会場にて）

■《SD Review, 1984》展覧会をふり返って

●

ＳＤレビューも今年で３回目を迎えた．　小さいながらも建築界の中でひとつのannual eventとして少しづつその存在が認識し始められている事は展覧会の出足をみてもわかる様に，仕掛人の一人として大変嬉しい事である．私が興味を持った事のひとつに，作品のひとつひとつもさる事ながら全体を様々な切り口で切った時にあらわれる断面である．　そのひとつに建築界の社会地図social geographyとも称すべきものがある．　今年も圧倒的に住宅が多かった．　このＳＤレビューが多くの若い人達の関心の対象であり，若い人達にとって今日の建築界では容易に住宅以上の規模の仕事に関与し得る機会が少ないとすればこれは当然なのだが，エントリー全体で見れば結構他のジャンルの作品も少なくない．
にも拘わらず住宅に目につくもの，ひかれるものが多いという事実は明瞭であろう．　しかも敷地条件，コスト・プログラムも他のジャンルよりも遙かに厳しい場合が少なくない．にも拘わらず常に新鮮な提案が住宅（集合住宅も含めて）というアブソーベントそのものからひきだされてくる．　ひとつに，住宅では柱１本，梁１本，壁１枚のあり方が，何か決定的に暗示的であり，支配的であり得るというそうした秘密めいたものが常に存在し，その秘密的な何ものかを発見するというゲームが無限に展開し続け得るからであろうか．だが逆にＳＤレビューが住宅レビューになってしまわないためにも，他のジャンルにおける提案のレヴェルアップが望まれるところであろう．
当初ＳＤレビューに期待したひとつに，地方の新人登場があった．　周知のように東京，大阪を中心とする大都市に多数の建築家が集まっている．　当然のように第１回，第２回ではその反映があまりにも明らかであった．しかし今回，群馬県の小屋案による３軒長屋，宇都宮の竹ノ内案の住宅等に代表されるように漸く，胎動といっては大袈裟だが，耳をおしつけていると何かが聞こえてくる感じがしだしたのではないか．　地方における問題は建築家の意識というよりも，建築を依頼する施主の建築に対する意識にあることは既に指摘されている事だが，そうした中でarchitectural climate，つまり建築気候風土の醸成が決定的な役割を果たしていくことは想像に難くない．そしてそうした風土はどんなに外から，たとえば東京から多くの建築家がやってきても，何か素晴らしいものを建てても，あまり関係のない事なのである．　四国の高松がそのよい例だろう．
そうした角度からみると今回のＳＤレビューでもう一度〈京都〉という都市が何か大きくクローズ・アップされてきた様な気がしてならない．　高松，中野，若林案の３点からあぶり出されてくる〈京都〉という風土に私は興味をひかれた．　勿論，毎回出品し入選している高松伸の存在がなかったらこうした感慨をもつ事はなかったと思うが，長い歴史と伝統を持つ京都が建築家の思考に決定的な場を与えている，その存在の大きさを確認出来るのである．　先にも述べたように東京はインフォメーション，機会の量という点では圧倒的に優位にある．　しかしそこには思考を託すような風土はない．　強いて言えばインターナショナルにまで拡散してしまったかすみのようなものである．　一寸作品評でも触れたように最近グラーツから帰ってきた原広司が，グラーツ・スクールの活動について話をしていたが，嘗てのヴェネチア，ウィーンの様に，何か強烈な architectural climate がそこには醸成されつつあるようだ．　若い建築家達が京都に住み，事をおこす，そうした可能性が京都にはありそうだというのは何かオプティミスティックな他者の眼だろうか．
私個人の意見としてはＳＤレビューにこうしたsocial geography的な観点があってもいいように思う．　別な言葉でいうならばひとつのイデオロジカルな――勿論今日そうした言葉を使う事すら適当ではないかもしれないが――観点からのみ切らない事ではなかろうか．PA Award ProgramがＰＡ誌によって主催されてから25年以上はたっている．　この数年所謂Post Modernismの強力な推進役を果たしてきたが，私の見る限り，その皮相的な流行のさきがけになった点で功罪は半ばというよりも，むしろ罪の方が大きかったのではないかと思う．
もうひとつ，出来うるならば来年以後，ＳＤレビューは東京だけでなく，例えば京都でも

やってよいのではないか。　それを実現するためにも長谷川編集人，或いは伊藤編集長の手腕が大いにまたれるのである。　●槇文彦

＊

僕は今年から参加したので，従来の傾向は知らないが，今回は色とりどりの応募案にあふれ，大変面白い経験だった。

多くの応募案よりしぼり込みが行なわれ，入選作が決まったのだが，同じ作者の最終案との距離に色々とバラつきがあるように伺えた。いずれも実現を前提とし，なかにはすでに工事を行なっているのもあったから，基本構想は同じはずなのに，表現によって，こうも違うものかと驚かされた。　大きく分けて3つのタイプがあった。　応募案も最終案も全く同じに自分のペースを守り抜いた人，応募案よりさらに発展して作品価値を高めた人，それから逆に，凝りすぎたか，ひねくりすぎて魅力を失ってしまった人。　こうしたバラつきはいずれも表現力の問題である。　それも，応募案では主として図面，最終案では模型というメディアによるものだ。

ところで今日，こうしたメディアが自立したものとして浮び上ってきていることは事実だ。プロジェクトだけを図面でつくりつづけ，実現した作品を未だひとつも持たない建築家がいるくらいだ。　さらにこんどフランクフルトにできたような建築ミュージアムがどんどん出現してくると，図面や模型に〈商品価値〉さえついて，売買されることにならないとも限らない。　こうした傾向の是非を即断することはむずかしいが，一方で建築を社会に開く作用は果たすものの，他方で実現されるものへの執着心を落しめるような気がしないでもない。　つまり僕のいいたいことは，応募案・最終案でこれだけの距離ができるのなら，是非，実現案のレビューを将来本誌でやってもらいたいものだということだ。

今年から賞を出すということで，それをめぐって熱の入ったディスカッションがはずんだ。結果に僕は異存がない。　高松案と竹ノ内案のふたつの授賞（鹿島賞，朝倉賞）作の間の傾向の差違に僕も賛成である。　実現を前提にしたプロジェクトの生々しさ，あるいは建築の意味の多義性を，この差違が代弁してくれるように思えるからである。　むしろ入賞案となった，鈴木案，小宮山案の傾向が幾分類似しているのが気にかかった。　僕個人としては，それに黒川案のような〈まじめな作品〉を交えて中和しておきたかった。　〈鹿島賞〉を決めるのに全員ほぼ一致して，高松案に落ちついた。　つまりそれに並ぶ作品が少なかったことが心のこりに感じられた。

●竹山実

＊

建築をその完成以前に評価するという意義はどこにあるか，という疑問は当然あるような気がする。　それじゃあ完成とは，いったいどの時点のどんな表現のされ方に対してそう呼ぶのかという反論もある。　写真を撮って雑誌に載せるときなのか。　写真の方が完成品？，それとも実際の建物？，あるいはその建築が使われはじめるときなのか。　少なくとも5年ぐらいは経過しないと，その建築の評価なんてとてもできないという人もいる。時間軸上の，どこのどんな時点で切断しても評価は可能だと思うのである。　ただ，その時点での評価の仕方が，その時点での評価の固有性を逸脱しないこと，多分それだけが重要なのだ。

でも，私の個人的な興味だけで言えば，完成以前に評価するといったことよりも，インテリアから動物舎，超高層から住宅にいたるまで，完成以前というそれだけの理由で，全く羅列的に呼び集められるというそのちょっと乱暴さの方にひかれるところがある。　みんな同じ，建築じゃないか，とは簡単には言えないように思う。　つまり，このSDレビューというのは，建築であることを保証するような〈なにかあるもの〉を巡る評価であることが暗黙裏に前提されていると思うのである。住宅に生彩がないなどと他人事みたいにしゃべっているけれども，それも，すべてが並列的に羅列されることによって，はじめて露骨に見えてくると言えるのではないだろうか。住宅ではなく，住宅という建築がここでは問題になる。　その羅列に耐え得ないとき，多分，住宅は生彩なく見えるとも言えるような気がするのである。

高松伸さんと鈴木了二さんの住宅だけがそれに充分に耐えていたように思う。　一方は住宅であることを消去することで，そして一方は〈なにかあるもの〉をとことん膨張させることで。　●山本理顕

＊

全体的なレヴェルは例年に比べてやや高かったような印象がありますが，その一方では表現的，概念的な傾向がやや全般に低調で，生活空間に工夫をこらすとか，質の高い気持ちのよい空間をつくるといった傾向の方に押れぎみであったようにも思います。　後者の場合，かつての都市住宅派の作家たちのようなぎりぎり追いこまれた所での提案というよりも，むしろ無理なくスマートに，という向きが多かったのは時代の傾向というべきでしょうか？その点で朝倉賞を受賞した竹ノ内氏の提案が他よりも目立ったように思います。

デザインというよりも，ひとつ提案の頑(かたく)なさのようなものがアピールしたわけで，落選組を含めて，これなら自案の方がデザイン的には上だと考えられる向きも少なくはないかもしれませんが，その場合は竹ノ内作品に比べてというのではなく，表現として今ひとつ迫力に欠けたという意味であると受けとって頂きたい。　その点では，確かに竹ノ内案は朝倉賞というよりは入賞というに留めるべきだったかもしれませんが，他に代わるものがなかったという他はないのです。　デザインとして，賞としてという点では，高松氏の作品がほぼ独走した感があり，私見では受賞に値いするものはこれのみであったと思います。

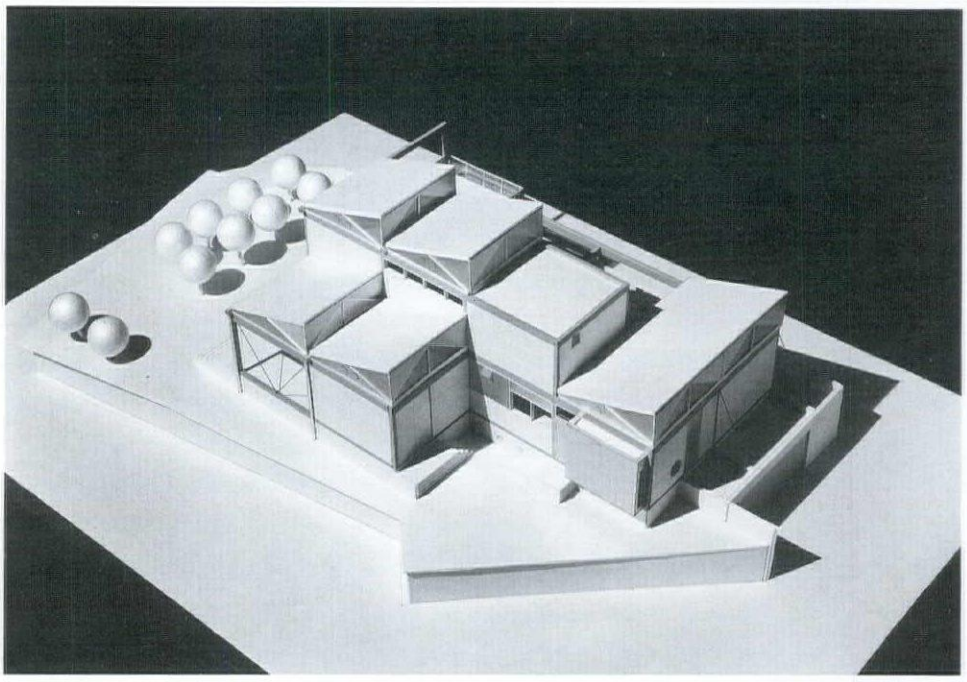
氏の作品にも強引な所や当然好き嫌いの議論も分かれる所と思いますが，今回の場合，その議論のレヴェル以前に勝負ありという所で，彼にむざむざと独走を許した他の人々の奮起を期待しないわけにはいきませんでした。

残念なことではあったと思います。　他に約20に及ぶ作品を入れると多少目立つ，特徴のあるものは一応選考には入れざるを得ないという事情があり，入ったからといって必ずしも選者の賛意をかち得たわけではないということは付け加えておきたいと思います。

入賞両作については，鈴木さんは選評に触れたような問題はあるにせよ，SDレビュー展の提出作品としてプレゼンテーションの抜群の美しさで入り，小宮山さんの場合は，基本的な力量からいって入るのは当然とは思いますが，今回の場合は幾分軽い作品でありすぎ，彼ならいつでもこの位には，と思わす所が，その上に届かなかった所以のようにも感じました。　●八束はじめ

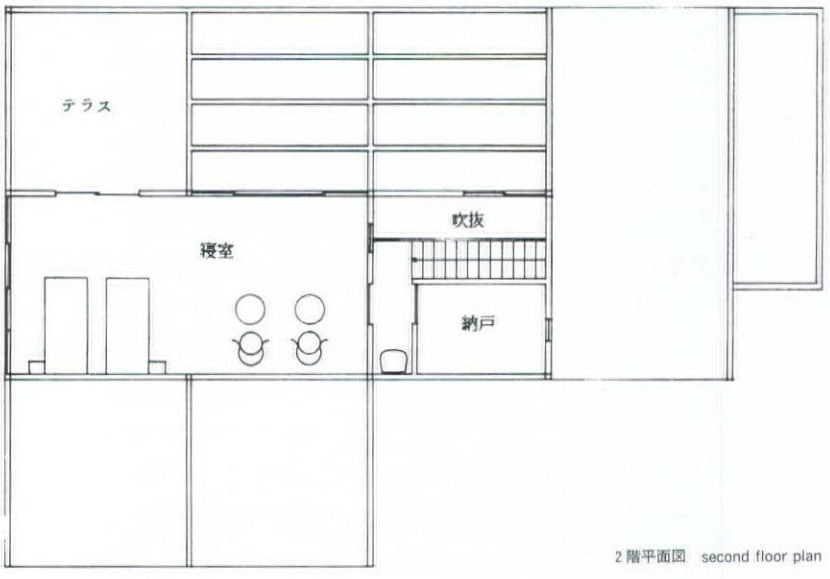
石田敏明

Toshiaki Ishida

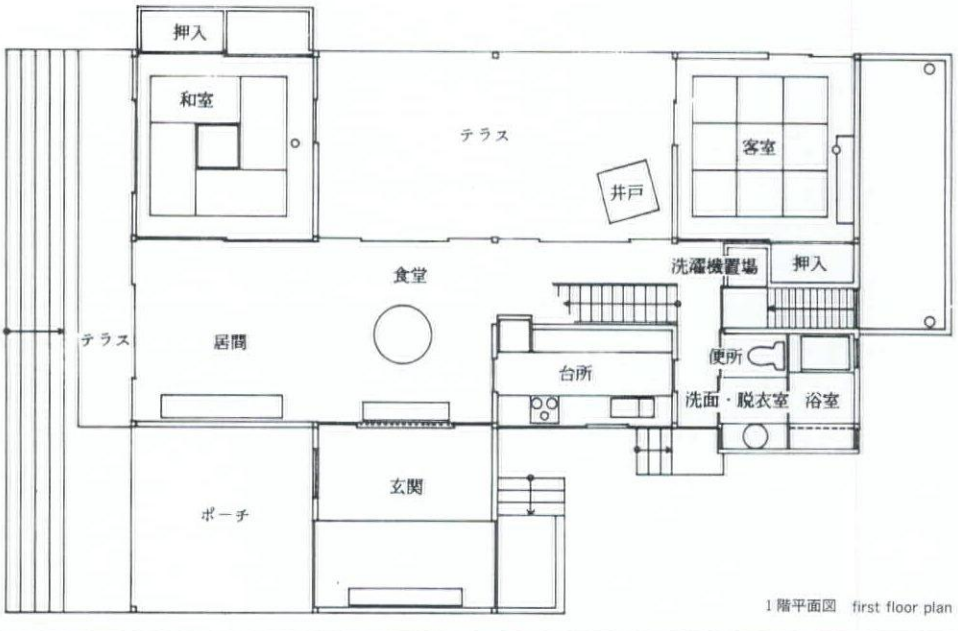


浦崎の家

前面道路より2～3m高い敷地の上に，3.8m×3.8mのグリッドにのった柱—梁で構成されフレームがのっている．フレームに屋根をのせ，フレームの間を数種類の材料で埋め，内部機能に従ってユニットを突出させることにより全体が成立している．フレームに囲まれた各々の面は，それぞれが脈絡なく出来る限りグラフィカルに仕上げられており，ある距離において全体を成立させていたフレームを序々に消し始める．このことはインテリアにおいても同様である．フレームで囲まれたひとつひとつの単位空間は，玄間，居間，和室，寝室，テラス等が割りあてられ，無限に連続するかのようなフレームを規定する．各々は，その部屋にふさわしい材料で6面を仕上げられ(床，壁，天井)敷地の上に同質であった場から独立してくる．更に，部屋間の境界はフレキシブルな引き戸で計画されており，特徴的な完結したシーンは，引き戸を開けて通過することによりオーバーラップし始めるだろう．



2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan

設計者	石田敏明建築設計事務所　石田敏明
建物所在地	広島県尾道市浦崎町
工事予定期間	1984年7月～10月末
主体構造	木造3階建(地下1階，地上2階)
主要仕上材料	屋根：樹脂シート防水　外壁：フレキシブルボードt＝6撥水剤塗布，アルミエンボスシート張り　床：ラミンフローリングt=15O.S. 壁：石膏ボードt＝12VP 天井：化粧根太露出O.S.
敷地面積	430m²
建築面積	116.5m²
延床面積	181.8m²

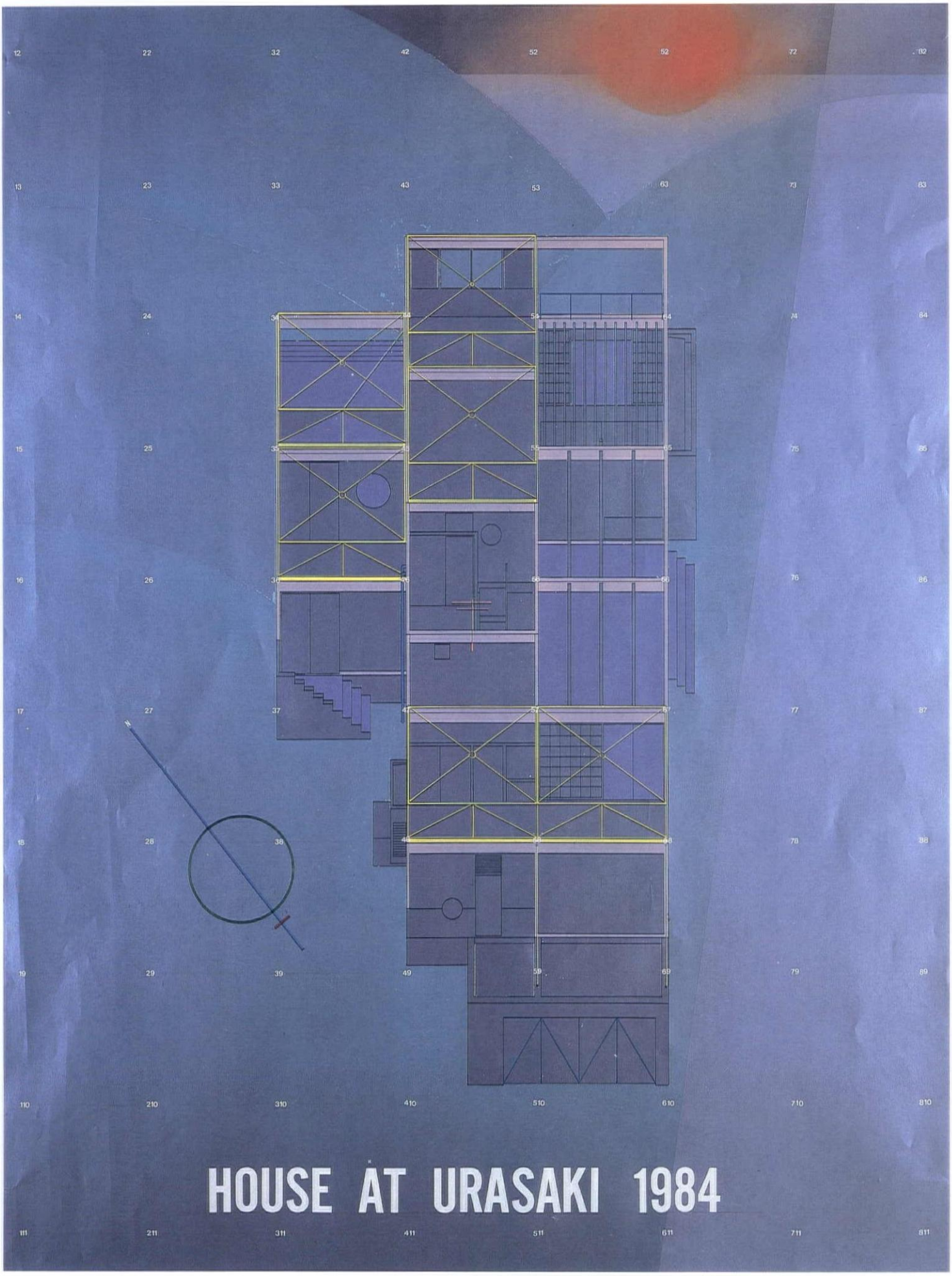
石田敏明

1950年広島県福山市生まれ．

1973年広島工業大学工学部建築学科卒業後，株式会社アーバンロボット(URBOT)入社(現株式会社伊東豊雄建築設計事務所)．この間，建築の設計および設計監理に従事．

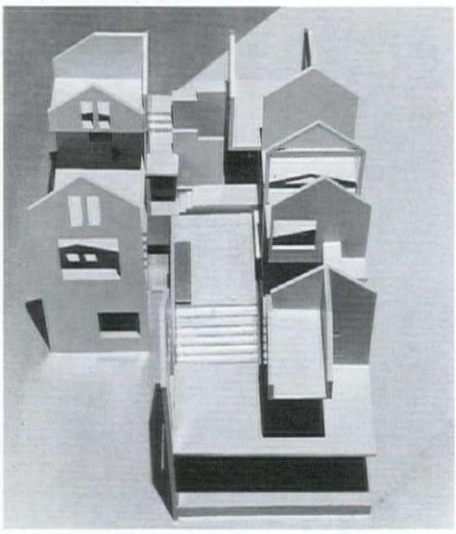
1981年株式会社伊東豊雄建築設計事務所退所．

1982年一級建築士事務所石田敏明建築設計事務所を設立し現在に至る．


HOUSE AT URASAKI 1984

井上揺子

Yoko Inoue



二世帯の家

親子である住み手の要望により，２つの課題が設定される．

独立性を保つある距離．

また，全く反対のところで，彼らの生活を円満に運ぶであろう，対外的共同意識．

50坪の敷地は北側に5.5ｍの前面道路がある以外，周囲に２階建の隣家が敷地境界線間際まで迫っている．　東南のコーナー以外は採光は望めず，プライバシーを守るべく防御的態勢をとらざるを得ない．　これらの敷地条件の中での回答として，コートをコアとするプランと，切妻の連続(による統合)という外形が浮び上がった．

コート――外廊下的空間――２つの家庭の隔りと結合の融合．

切妻の連続――同種と距離．

設計者	井上揺子
協同者	構造：建築構造ＧＡ工房
	設備：スペースエンジニアリング 伝田剛
建物所在地	東京都杉並区
工事予定期間	1984年６月～12月
主体構造	地下１階：ＲＣ造　地上２階：木造
主要仕上材料	屋根：亜鉛基合金板横葺　外壁：石綿セメントサイディング下見張り，一部コンクリート打放し　天井：２階シナベニヤ，１階プラスターボード下地クロス張り 内壁：プラスターボード下地クロス張り 床：ナラ縁甲板，タタミ，コルクタイル
敷地面積	165.54㎡
建築面積	81.58㎡
延床面積	186.98㎡

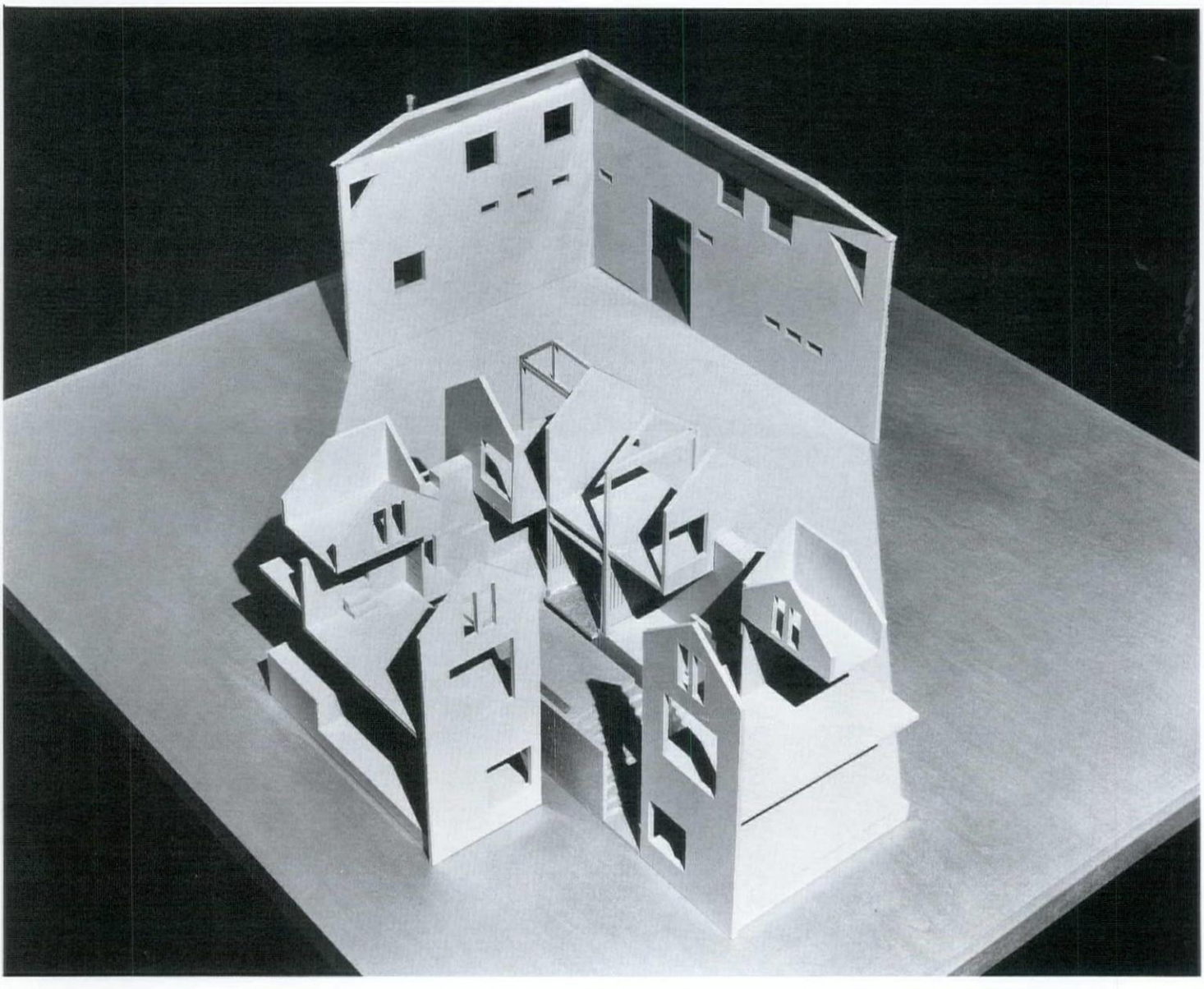
井上揺子

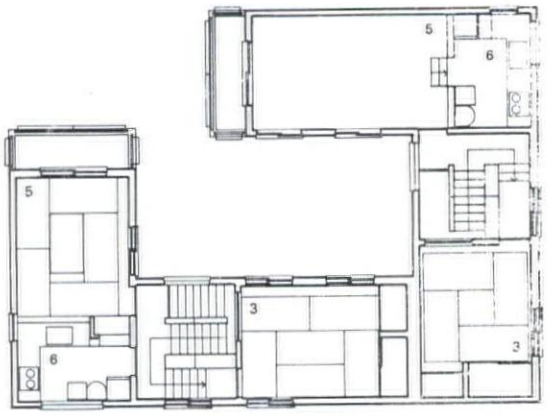
1955年生まれ．

1978年武蔵野美術大学卒業．

1978～82年村口計画設計事務所．

現在，井上揺子設計アトリエを主宰(1984年２月～)．





2階平面図 second floor plan



断面図 section



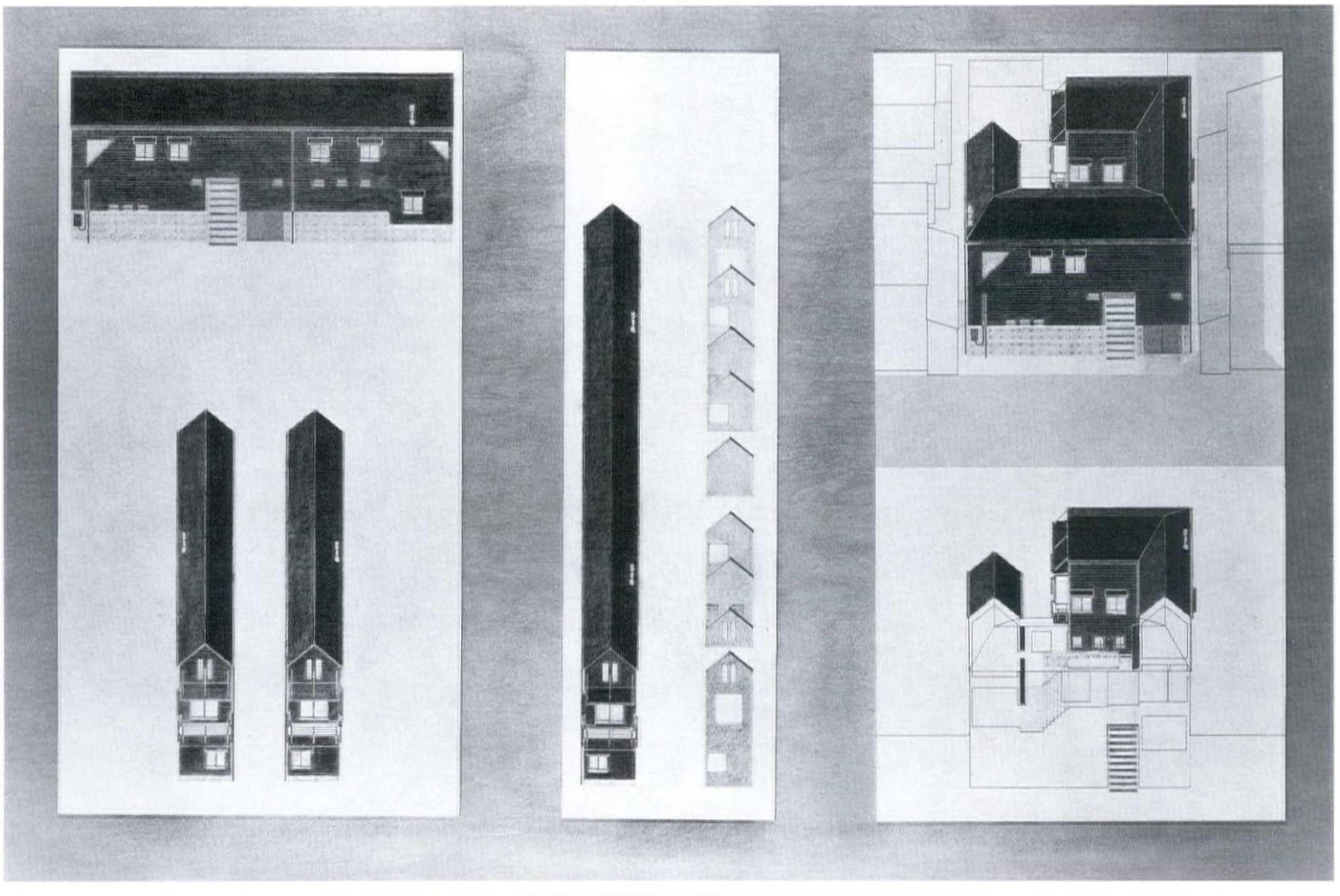
1階平面図 first floor plan

1 Entrance
2 Closet
3 Japanese room
4 Bed room
5 Living & Dining room
6 Kitchen & Utility room
7 Court

1m



断面図 section



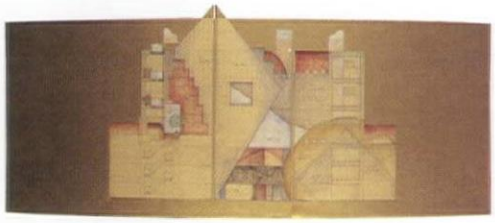
木村丈夫＋野田俊太郎

Takeo Kimura＋Shuntaro Noda

株式会社コサカ本社社屋

インクを充分に付着させた手頃な大きさの球体が，平板の上を転がりながらその痕跡を記す．　転がりは私の手によって生み出されてはいるが，記されたLineには私の意志は無い．赤，緑，青，紫，黒……．　インクの乾ききった球体は，自分達の働きを誇るかの様に，平板の上に停まりその存在を主張する．

三角形の半透膜の影から立ち上る白いスプレーペイントのけむり，捲れたガラスの皮，さらに背後にはコンクリートの地肌，足元に消えて行くメタリックタイルの円弧．　すべての断片が未完成状態の完成品．　この偶然と規範の織りなす層状の出来事においては，一つの断片がいつでも他の断片の背景になり得る．　言葉になるには余りにも曖昧な断片群には，そこにあることの不確かさと不安が付き纏う．　人間の遠い記憶に通じる様な象徴性を生み出せないだろうか．



設計者	建築環境計画ＴＡＯ 木村丈夫＋野田俊太郎
協同者	千葉雅昭，久保田享
建物所在地	東京都練馬区
工事予定期間	1984年11月～1985年８月
主体構造	ＳＲＣ地下１階，地上７階
主要仕上材料	外壁：ステンレスパンチングＰＬ2t，ＲＣ打放し，ブロンズガラス＋アルミカーテンウォール，ボンタイル吹付，メタリックタイル貼り　ヴォールト屋根：ＲＣ下地，塗膜防水，ＦＲＰ製半球キャップ300φ取付(ピッチ600)　一般屋根：露出シート防水＋玉砂利敷
敷地面積	247㎡
建築面積	185㎡
延床面積	875㎡

木村丈夫

1949年東京生まれ．

1975年東京芸術大学美術学部建築科卒業．

1977年同大学大学院修士課程修了．

1980年米国ライス大学大学院修士課程修了．

1980年アプルトン・フェルプス建築設計事務所勤務．

1981年建築環境計画共同主宰，現在に至る．

野田俊太郎

1951年東京生まれ．

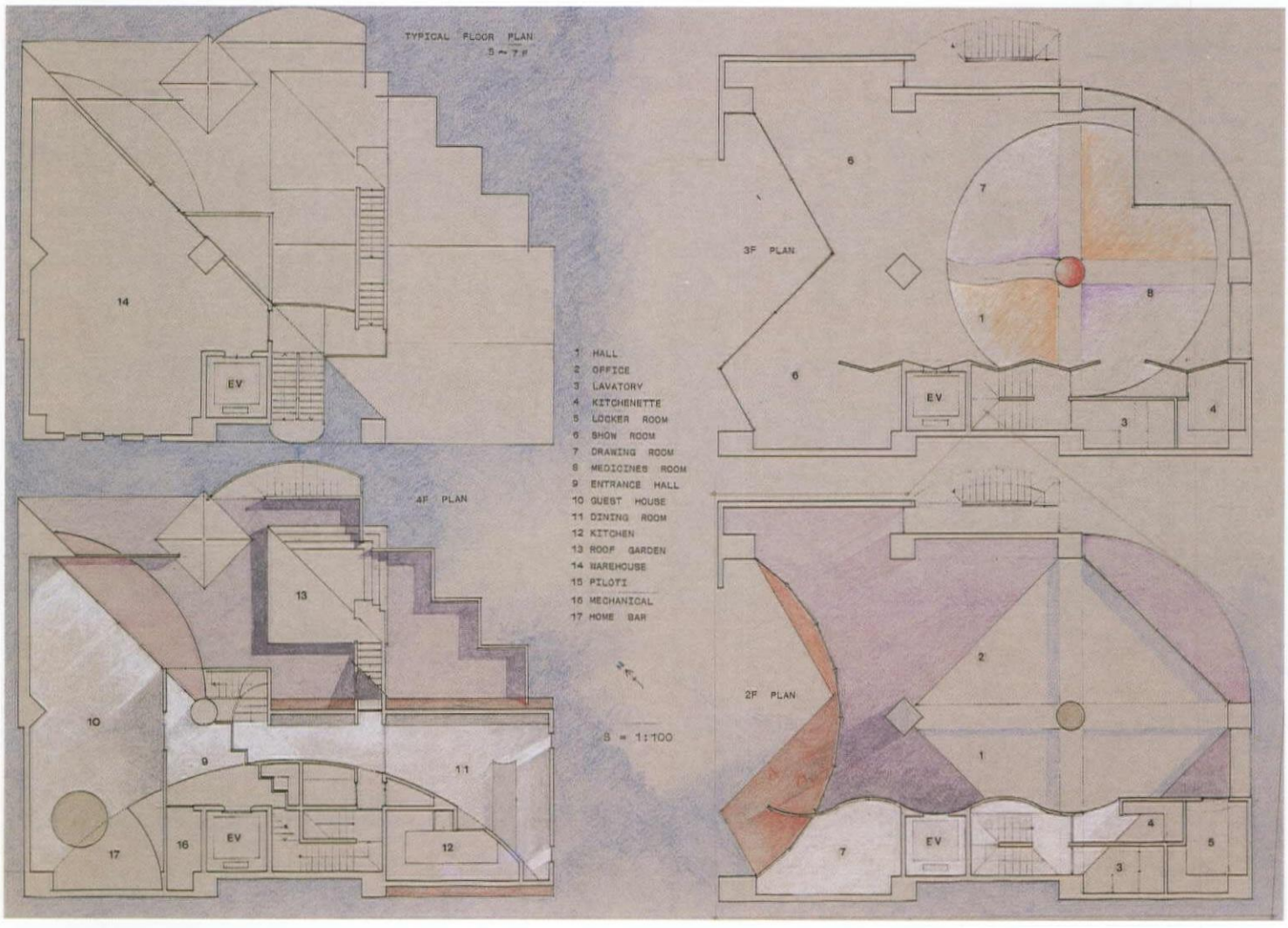
1974年東京芸術大学美術学部建築科卒業．

1978年石丸雅久建築設計事務所，野沢正光建築工房を経て，一級建築士事務所建築環境計画設立主宰．

1981年木村丈夫との共同主宰に改組し，現在に至る．

1982年日本建築家協会第一回新人賞受賞．

1983年～東京電機大学工学部建築学科講師．



海老塚耕一＋菱沼利行

Koichi Ebizuka＋Toshiyuki Hishinuma

工事予定期間　1984年4月～8月(竣工)
主体構造　木造
主要仕上材料　室内床を除くすべての部分：ソ連カラ松
室内床：青森ヒバ
敷地面積　1,608.29㎡
建築面積　182.26㎡
延床面積　70.61㎡

東八幡平帰蝶山荘

閉鎖系として都市に散在する〈住い〉の失速に対する余白への憧景。　雑多な〈今〉からの解放の独自な契機となるべく演劇的な構造を持つ〈変換器〉。

〈私〉と〈私〉の爽やかな混沌のなかより生み出される提案。　そんな無意識の確信は〈変換器〉の支持体となり透明な〈舞台〉が，視界のなかに展開することを企てる。

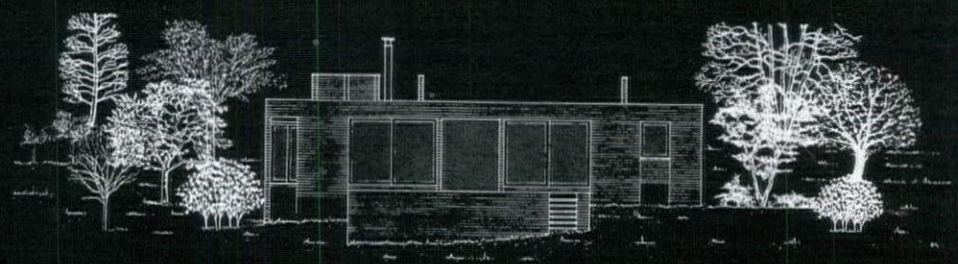
自然との宿命的なほころびを知る瞬間に，装置としてふたつの異なった〈舞台〉は，互いに意識しつつ，風景と共感し共生する。　断えることなく作業を続ける季節に織り込まれた視線は，急斜面を滑り，あたかも符牒があるかのごとくふたつの〈舞台〉の位置を確認する。　ふたつの位置はここで静かに地形と調和していく。

起源を持たない機械は事物的な完結性を知ることなく，そこにただ秘めやかに，しかも健康に在り続ける。

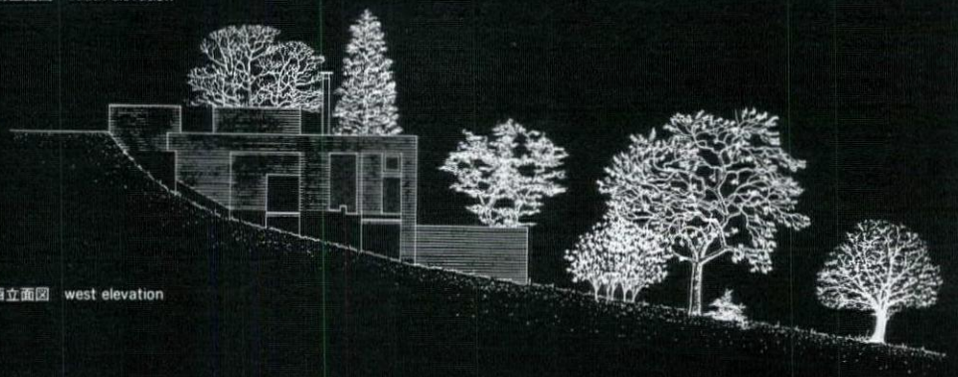
これは風景の新しい記憶の形態であるとともに，日常と非日常の交差する時を持つことを思考する。

設計者　海老塚耕一＋菱沼利行
協同者　菱沼遵子
模型製作：岩木敏久
施工：藤原工務店(秋田県)
建物所在地　岩手県岩手郡松尾村

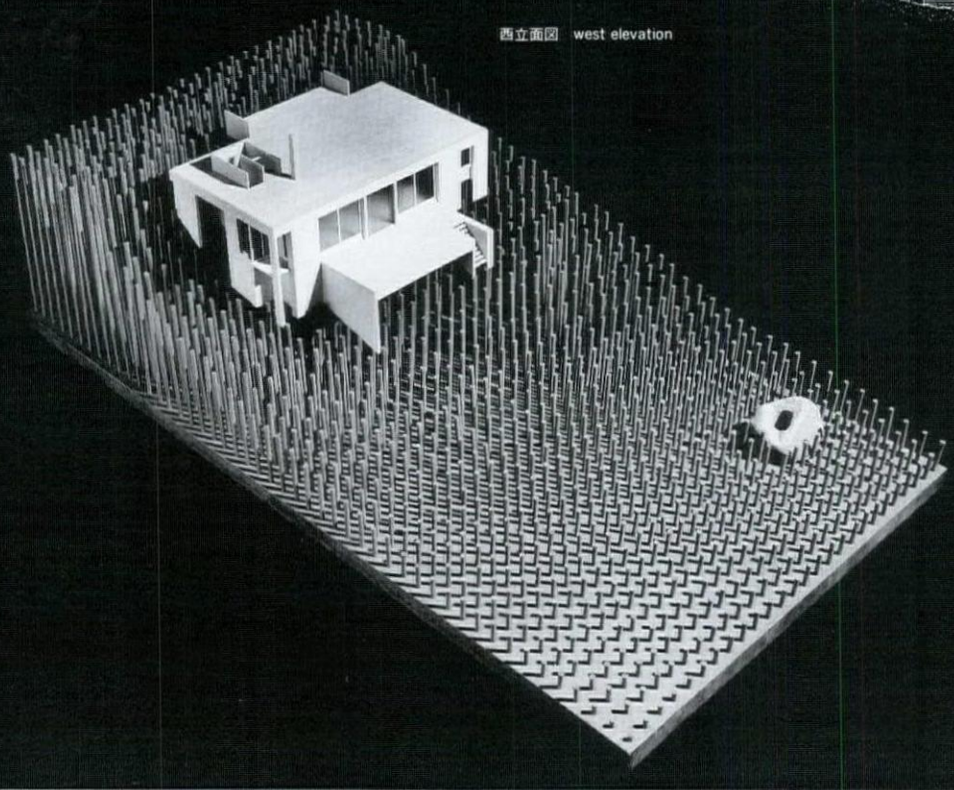
海老塚耕一
1951年7月28日横浜生まれ。
1976年多摩美術大学美術学部卒業。
1979年多摩美術大学大学院修了。
1979～1981年多摩美術大学学科研究室副手。
現在，多摩美術大学芸術学科研究室助手（1981年～），
菱沼利行
1951年7月16日生まれ，33才。
1976年横浜国立大学大学院修士課程修了。
現在，菱沼建築設計室を主宰（1976年～）。

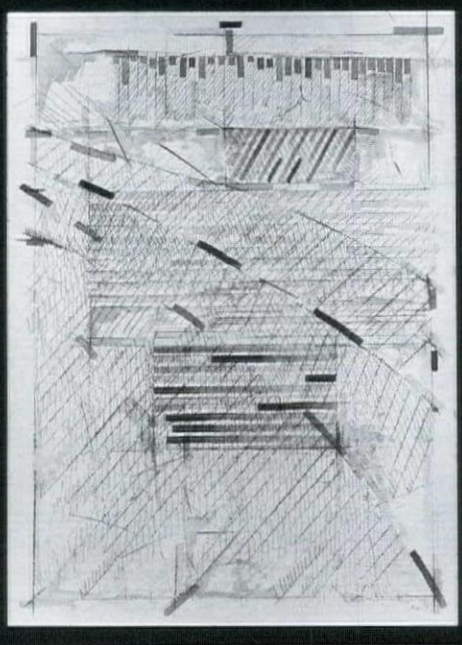


南立面図　south elevation



西立面図　west elevation

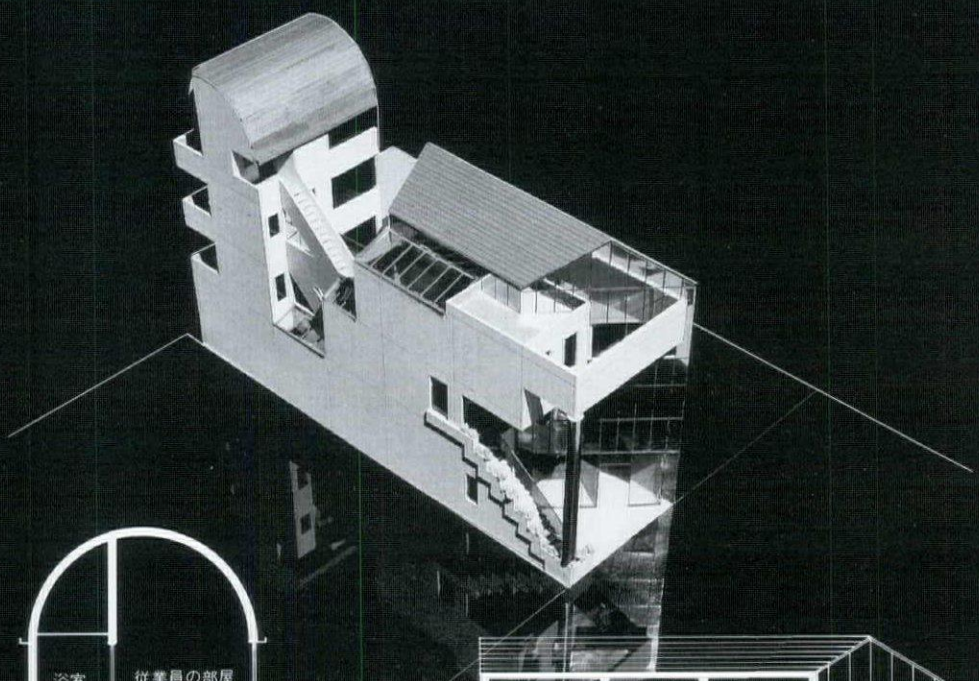




この写真は出展者の要望により展示模型と違い、天地が逆になっています。

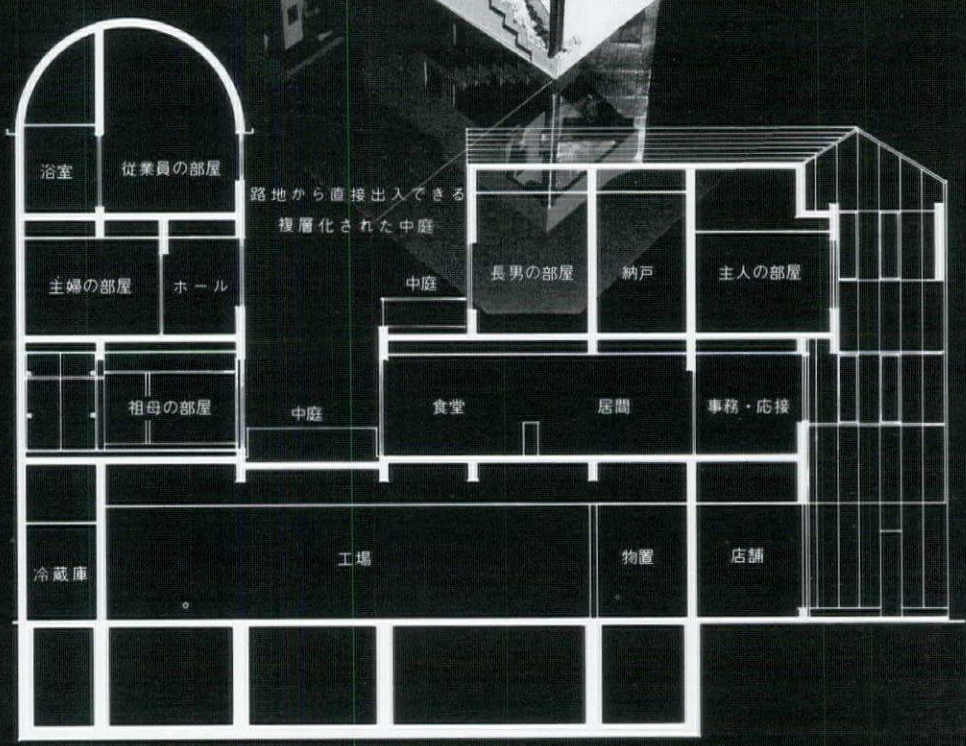
片岡山訓

Sankun Kataoka

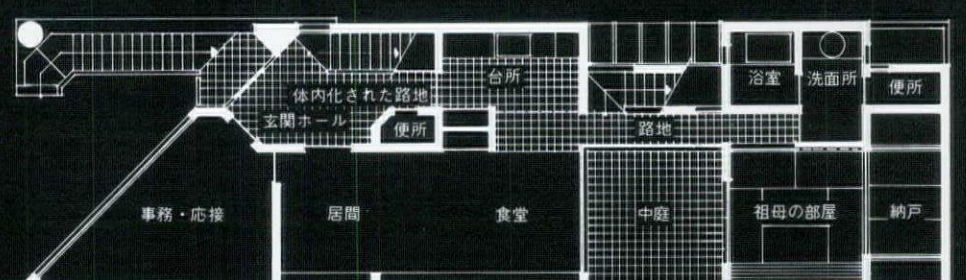


かねす蒲鉾本舗本社屋

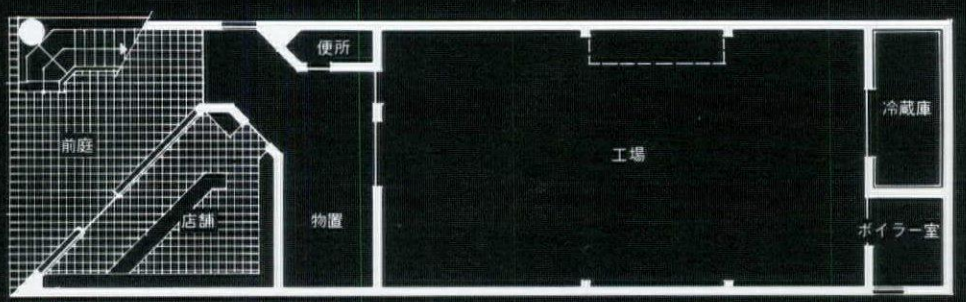
南北方向に細長い敷地に計画された建物は，創業から約80年という歴史を持つ《かねす蒲鉾本舗社屋》として，1階に工場，店舗，2－3階にクライアントの住宅，4階に従業員のアパートを持っている。　建物は正面道路に面した前庭と建物中央部にセットされた中庭を階段状路地で結び，これを軸として，工場，店舗，家族の居間，食堂，各人の個室，従業員の宿舎が展開される。　また以前は内庭として明かり取りを主とした庭を半開放の路地の一環として利用し狭い路地空間に息抜きの場を造り出している。　この地域の町家の地割は京都の町家に似て間口が狭く奥行が深いものが多く，博多の歴史的一面をのぞかせているが，かつての出合いの場としての路地，井戸端的な存在はなくなりつつある。　この計画では，〈前庭―路地―中庭〉を装置として建物内に導入し，共同生活の中での各人のプライベートな空間の確保と同時に，出合いの場としての路地の復活を意図している。



断面図　section



2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan

設計者	片岡山訓
建物所在地	福岡市中呉服町7の21
工事予定期間	1984年12月～1985年7月
主体構造	鉄筋コンクリート造，一部4階建
主要仕上材料	床：前庭，路地はタイル貼り　壁：コンクリート打放し　開口部：アルミサッシ，硝子(一部ハーフミラー)　屋根：耐候性鋼板
敷地面積	166.4㎡
建築面積	133.0㎡
延床面積	430.0㎡

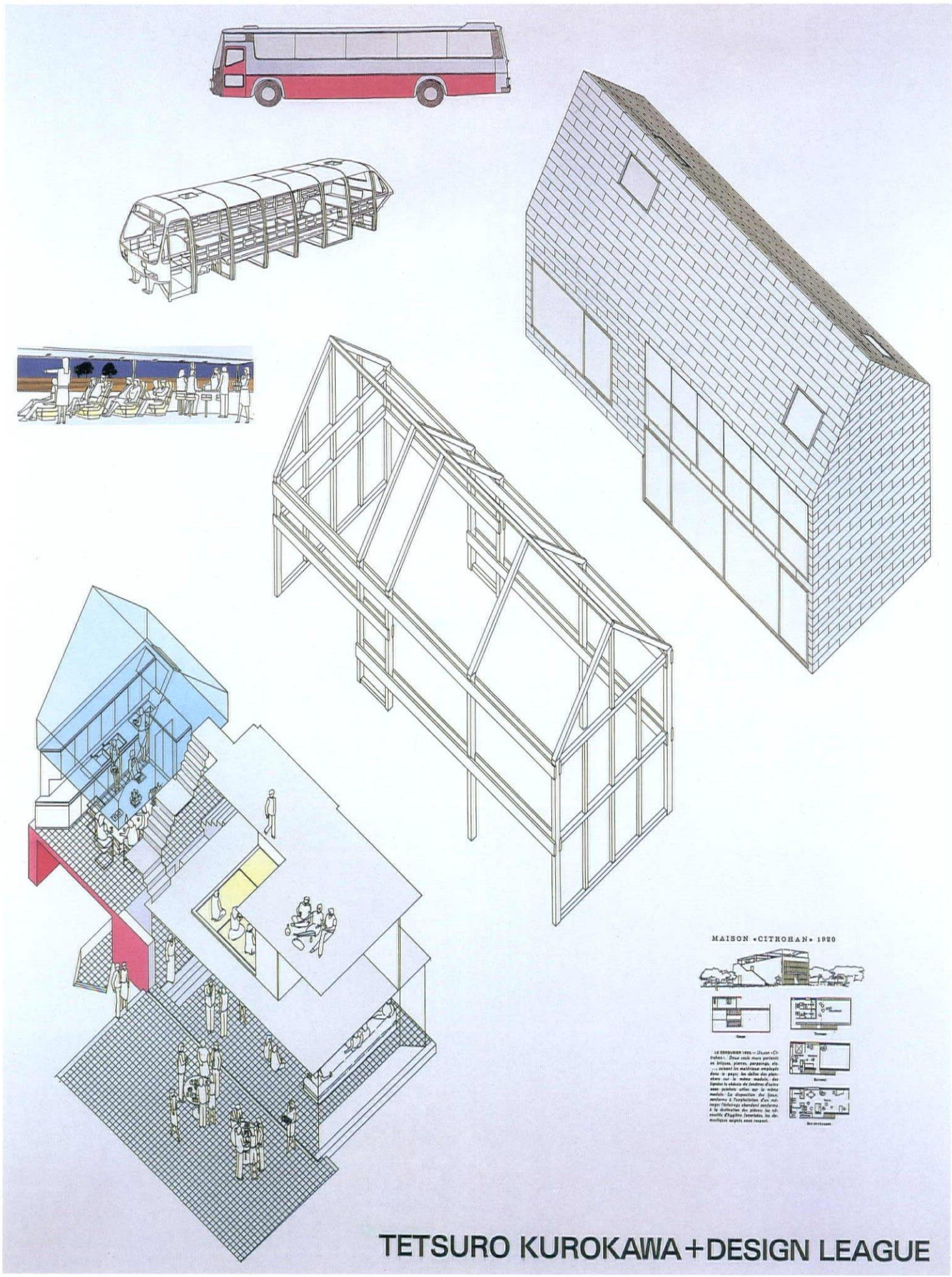
片岡山訓

1946年現中華人民共和国，鎮江生まれ，38歳。

1970年東海大学建築学科卒業。

1970年日本建築学会大学卒業設計展出展。

1982年アトリエK一級建築士事務所開設，現在に至る。


MAISON «CITROHAN» 1920
TETSURO KUROKAWA+DESIGN LEAGUE

黒川哲郎

Tetsuro Kurokawa

MAISON FORMULA 1984

銀紙でできたケーキ箱のような単純なフォルムの中に，6つの異なるレベルの床が一連らなりに連らなっている．　ワンフロア・ワンファンクションではあるが，主寝室だけがボリュームとしての姿をみせ，一方，母の部屋はドアを閉じることによって，夜のみ表出する．　さらにスキップフロアと垂壁が，この住まいを重層性をもった空間に分節し，連続する生活を機能の重畳したものにしている．庭やテラスといった外部空間は，内部空間と同じ価値をもつ戸外の部屋であり，また相互に重層，重畳したものという認識は，内部での空間と生活の把握に共通している．　内外に連続する床高や仕上げは，日本の伝統とは対照的に，つまり庇というグレーゾーンなしに，ガラス一枚で分節される．　そのガラスは，一枚の透明な膜として意識されるよう，金属の外被とほぼ同一面に収められている．従って外部と内部は対峙的な空間でありながら，かえって合一して，敷地の広がりの中で一つの住まいというユニティをつくっている．

設計者	黒川哲郎＋デザインリーグ（堀啓二，井口佳子，黒川洋子）
協同者	構造：浜宇津構造設計室，浜宇津正 設備：吉田設計室，吉田有邑
建物所在地	東京都調布市佐須町
工事予定期間	1984年6月21日～10月15日
主体構造	木造2階建（半地下，小屋裏収納付），集成材による壁＋ラーメン構造の試み
主要仕上材料	屋根・外壁：ガルバニウム鋼板葺，石綿板ACCL　床：150磁器タイル，ジュータン　天井・壁：プラスターボードVP
敷地面積	152.63m²
建築面積	57.6m²
延床面積	121.95m²

黒川哲郎

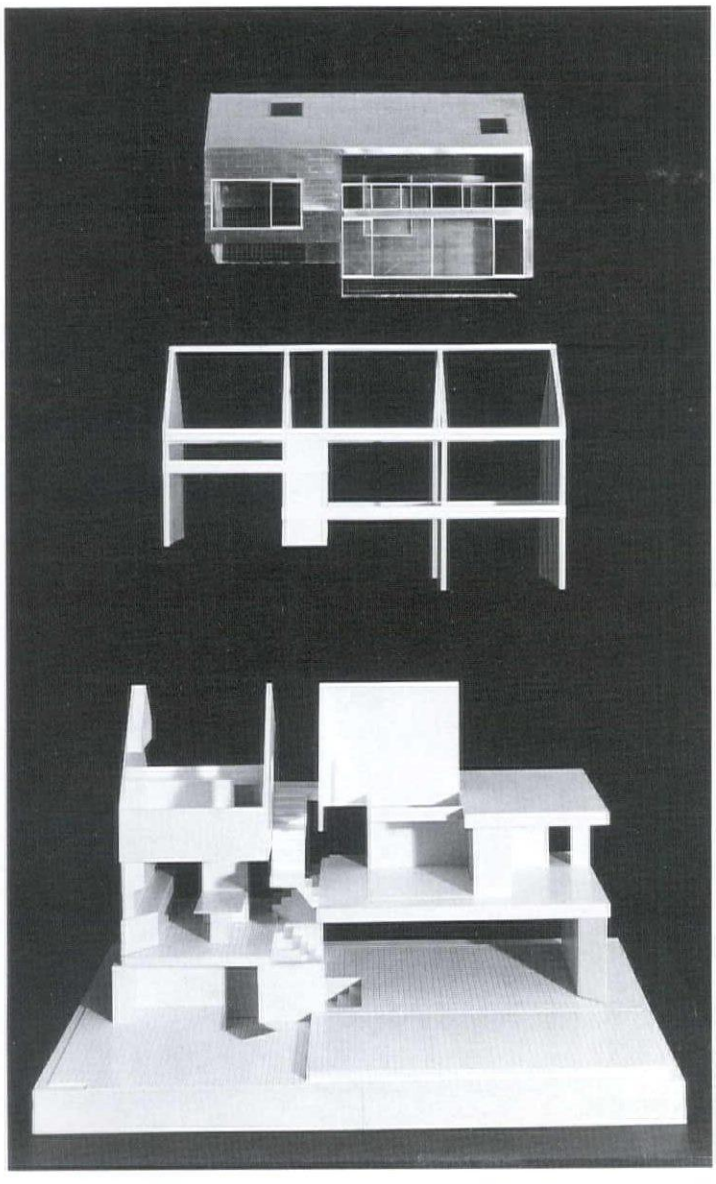
1943年北京生まれ．

1966年東京芸術大学美術学部建築科卒業．

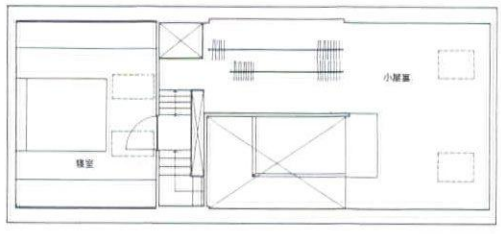
1968年東京芸術大学大学院修士課程修了．

東京芸術大学美術学部建築科助手（1971年～）．

千葉大学工学部建築学科非常勤講師（1980年～）．



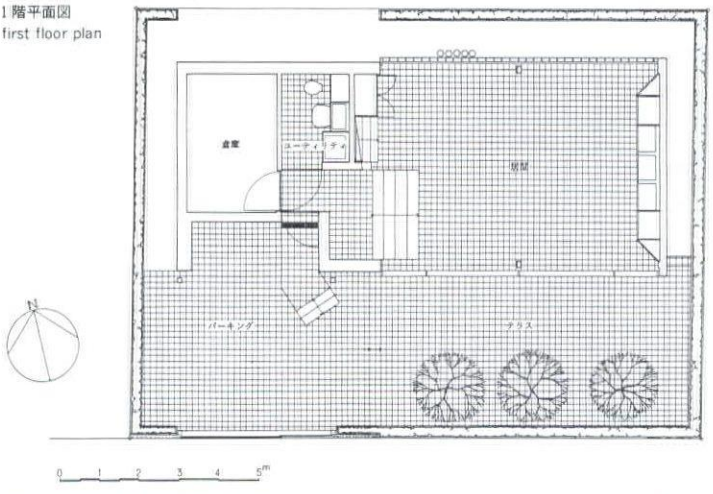
小屋裏平面図
attic plan



2階平面図
second floor plan



1階平面図
first floor plan



鈴木了二

Ryoji Suzuki

SD賞入賞

杉並の住宅

物質試行 13

半径17mのRが，偶然，この住宅の敷地の内部を通過した，とする．

何故そんなことが起ったのかあれこれ考えている余裕はない．もっぱら打つ手を次々と考えてこれに対処するだけである．向こうから勝手にやって来たにすぎないR，しかし来てしまえば厳格な作業を強制するいっぱしのルールなのであり，同時に侵犯と逸脱とを刺激する枠組でもある，というわけだ．もっともゲームとは，いつもそんな始まり方をするものらしい．そして始まってしまえば，あとはもうRの強度と物質の強度とのデスマッチあるのみである．コンクリート・木・金属・石……が，Rの特性——回転，運動，速度，求心力，切断力，表面張力……と出会った時に生み出されるそれぞれの特異点において，そのつど個別的に，場当り的に結果した断片の総体が，建築であろうと模型であろうと，われわれにとってはさしあたりどちらでもかまわない．

Rが行ってしまった後には，一体何が残るのか．自分の痕跡のことなどRですら知ってはいないのだ．

設計者	鈴木了二，岡北良三，笹崎直弘，桜田滋，坂野正明
建物所在地	東京都杉並区
工事予定期間	1984年4月～11月
主体構造	RC造
主要仕上材料	コンクリート打放し
敷地面積	180.47m²
建築面積	89.64m²
延床面積	154.07m²

鈴木了二

1944年8月1日生まれ，40歳．

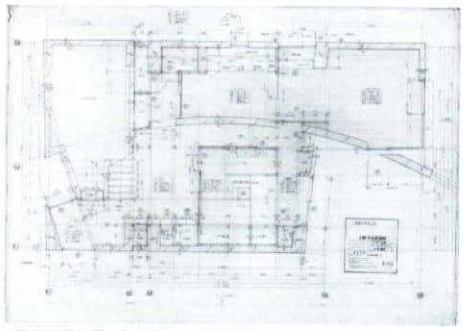
1968年早稲田大学理工学部建築学科卒業．

1968～73年竹中工務店設計部．

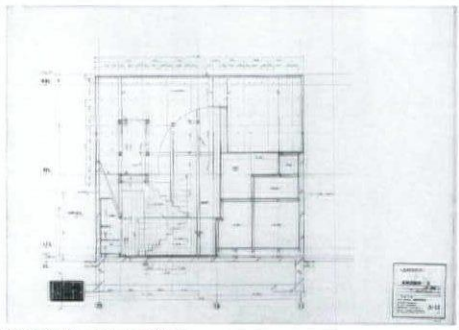
1974～77年早稲田大学大学院修士課程修了．

1977年fromnow建築計画事務所開設．

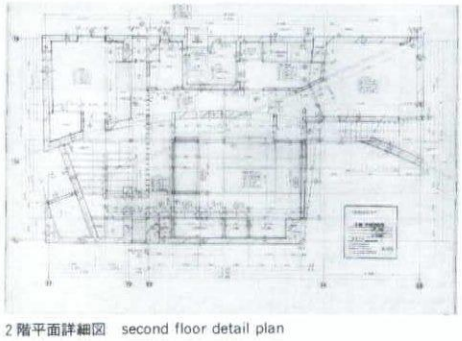
1983年鈴木了二建築計画事務所に改称，現在に至る．



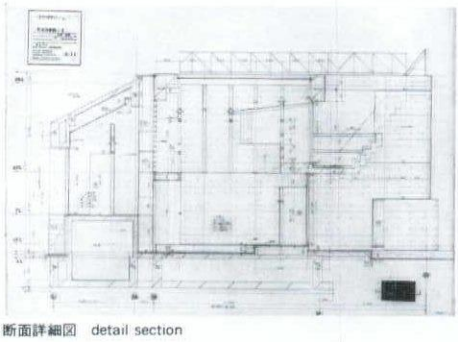
1階平面詳細図　first floor detail plan



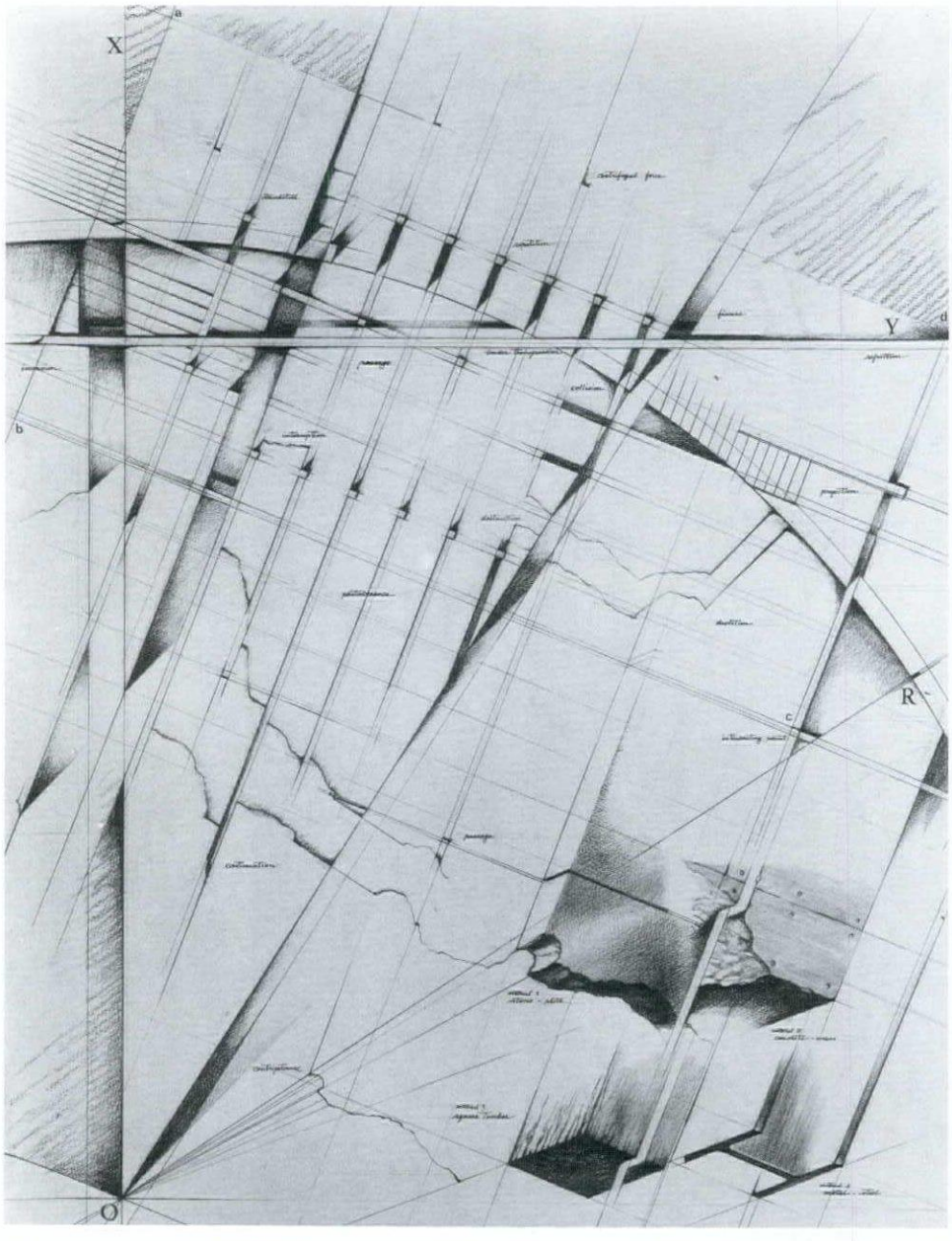
断面詳細図　detail section

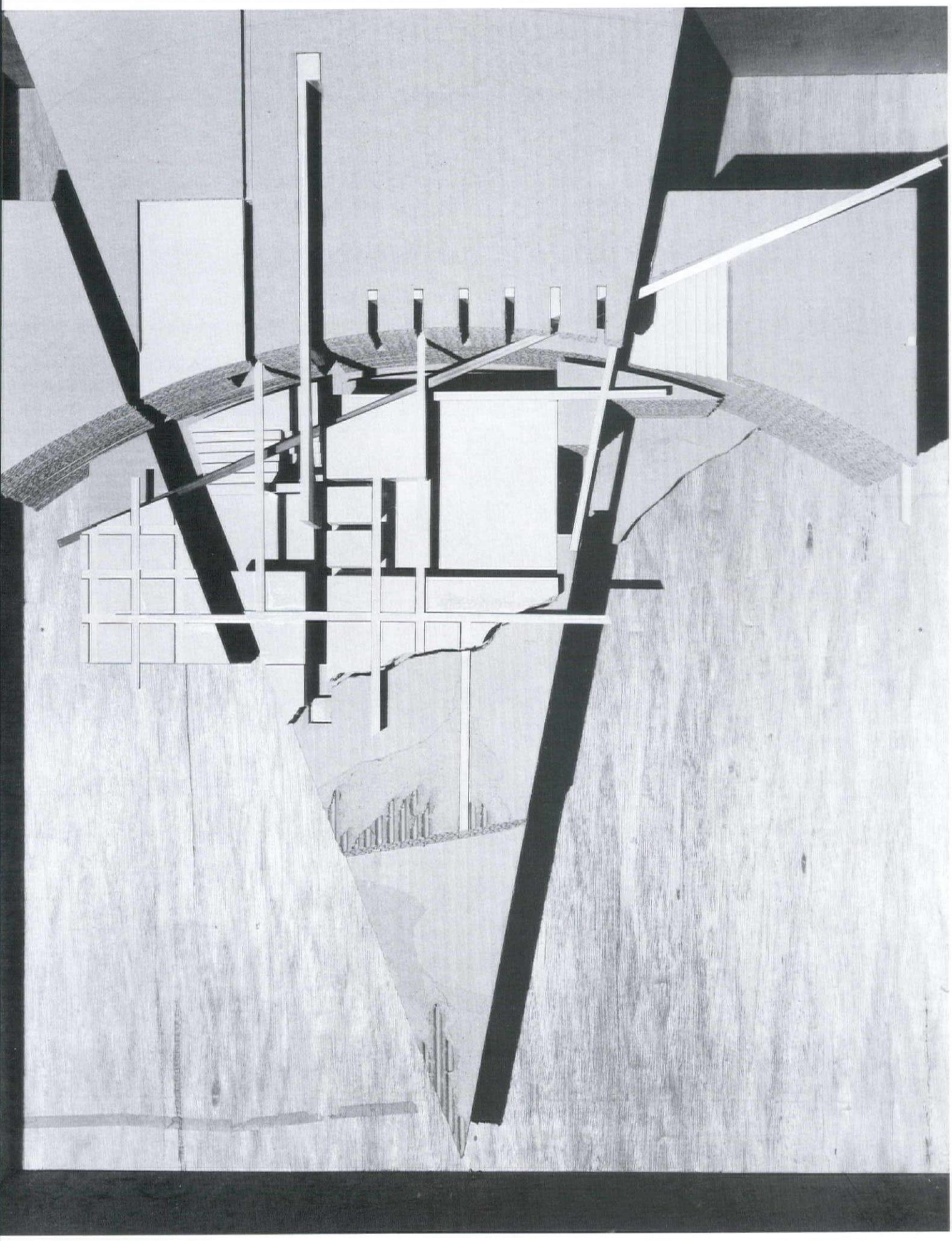


2階平面詳細図　second floor detail plan



断面詳細図　detail section





小宮山 昭

Akira Komiyama

SD賞入賞

FEV HOUSE(フェブ・ハウス)

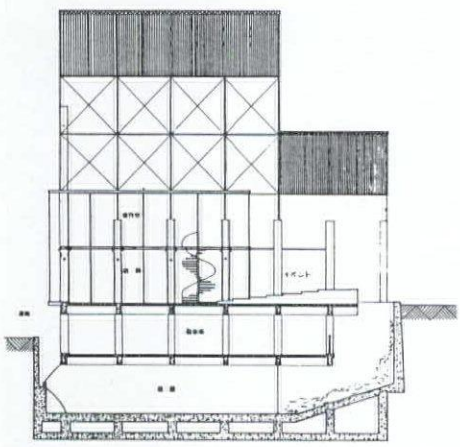
我々の手元に一つのプロジェクトがある．
施主は，将来的には，容積率いっぱいの土地の活用を考えておられる．　しかし，当面必要なのは，その一部である．

私達は，従前より，建築をオブジェとも形態とも或いは固着した空間とも考えていない．状況の連続……，場面のオーバーラップ……，街角に生まれる際立った現在進行形……，

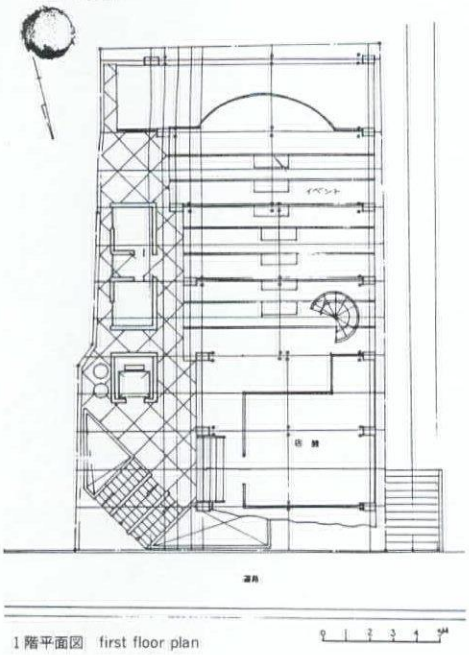
「タイムズ・スクエアの映画の広告板が好きだ．なぜかというと，それは二週間ごとに変わるし，手描きだからである．」(アンディ・ウォーホル)

設計者	㈱ユニテ設計・計画　小宮山 昭
協同者	後藤敬太，冨岡今日子
建物所在地	東京都渋谷区神宮前
工事予定期間	1985年4月～10月
主体構造	ＲＣ造，鉄骨造
主要仕上材料	コンクリート特殊打放し，鉄骨型鋼，各種ガラス
敷地面積	267.5㎡
建築面積	187㎡
延床面積	962㎡

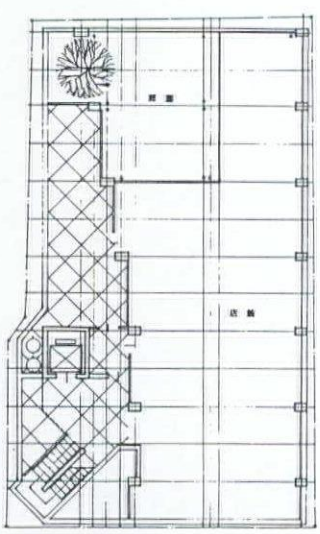
小宮山 昭
1943年6月24日生まれ，41歳．
1967年早稲田大学理工学部建築学科卒業．
1967～72年日建設計．
1972年フランス政府給費留学生として渡仏．
1973～75年ピアノ・アンド・ロジャース事務所．
1975年パリ大学都市計画学科修士課程修了，エコール・デ・ボザール修了．
現在，小宮山昭＋㈱ユニテ設計・計画を主宰(1979年～)，早稲田大学および神奈川大学講師．



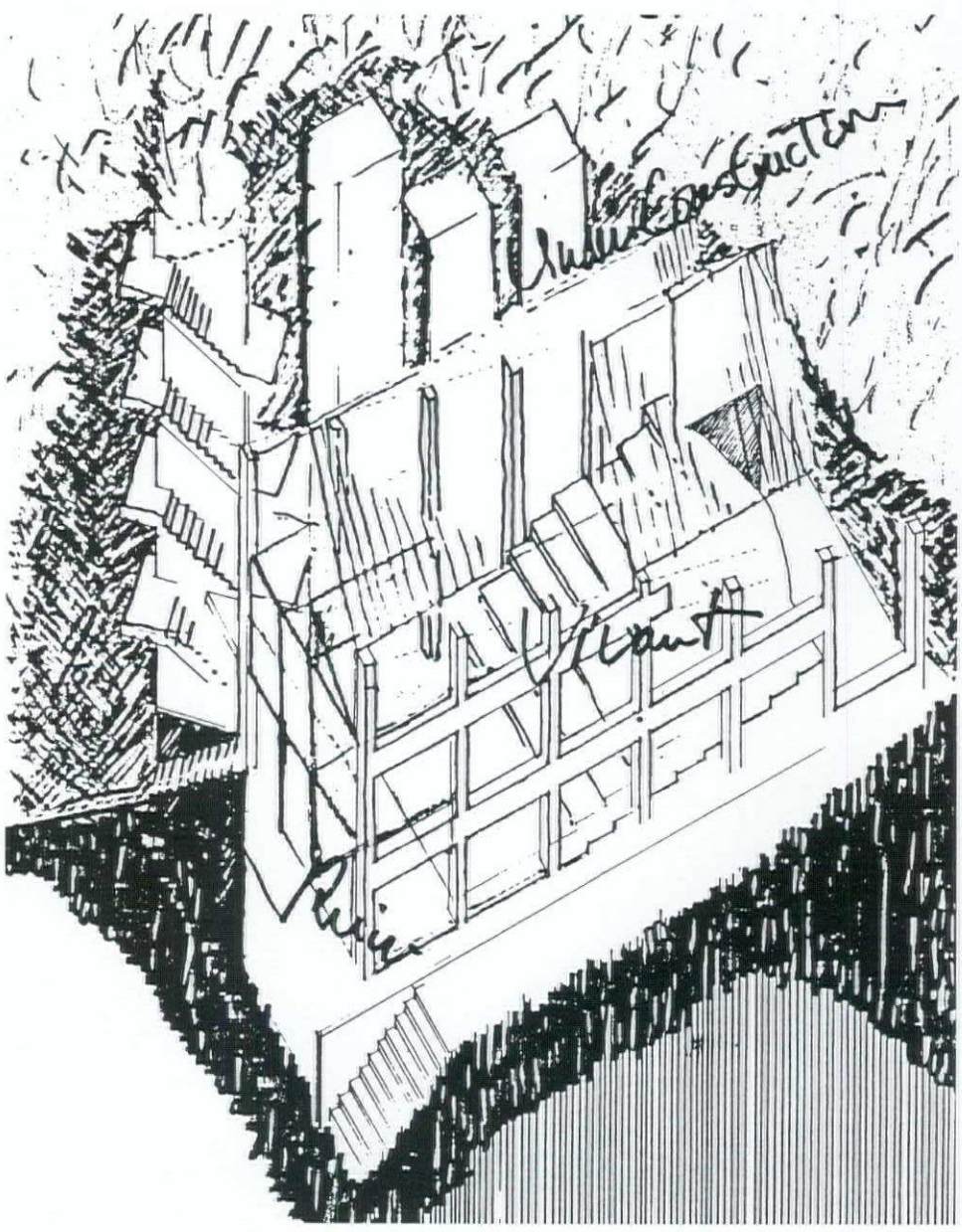
断面図　section

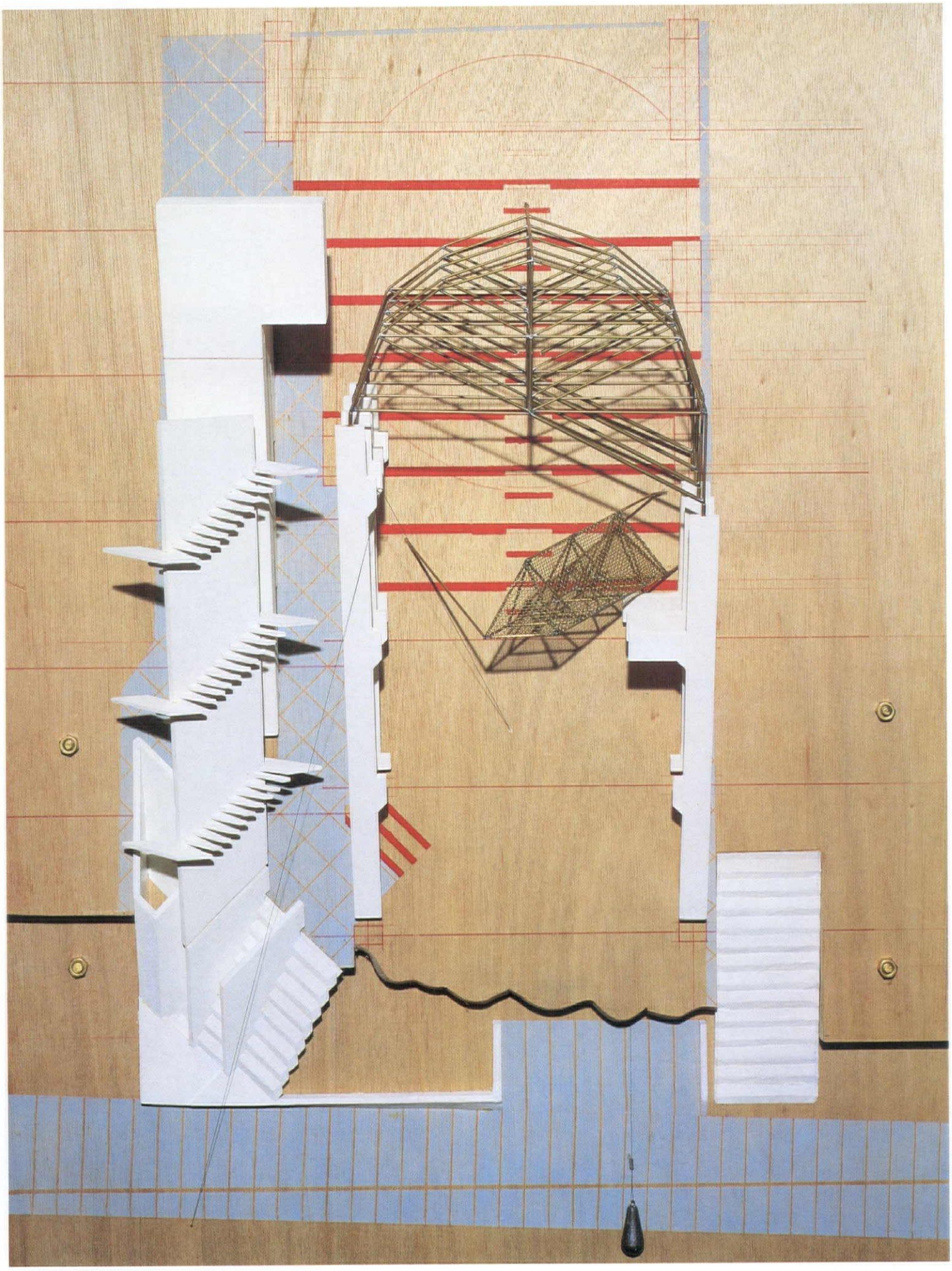


1階平面図　first floor plan



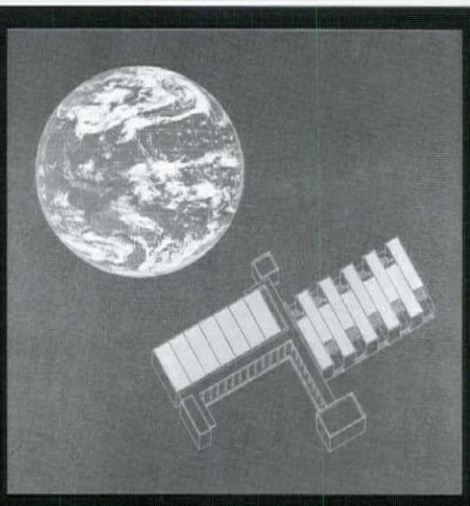
B 2階平面図　B2 floor plan

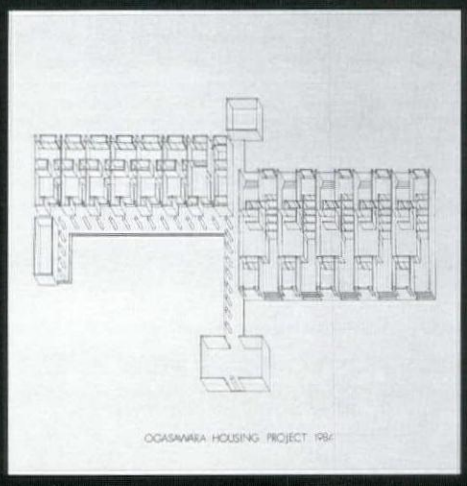




小林克彦

Katsuhiko Kobayashi



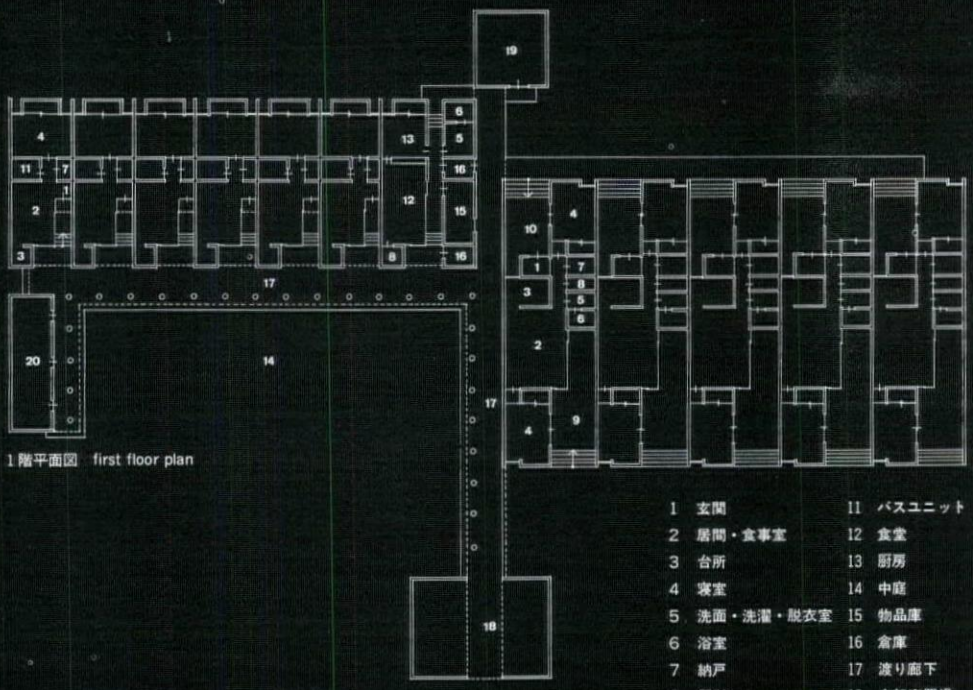


小笠原社宅

このプロジェクトは，紺碧の空と刻々と変わるエメラルド色の海に囲まれた太平洋上に散在する小笠原諸島最大の島，父島の美しい大自然を背景にして計画された集合住宅である．敷地は，ギンネム林に囲まれた谷間にあり，建物は，回廊のある中庭を中心として，ゆったりと配置されている．

コンクリート打放しの壁と柱は単純な構成とし，大自然の厳しさに対峙し，存在感のあるものとした．また，壁の開口部は，タテスリット状とし，彫りの深い陰影のある立面構成をとっている．

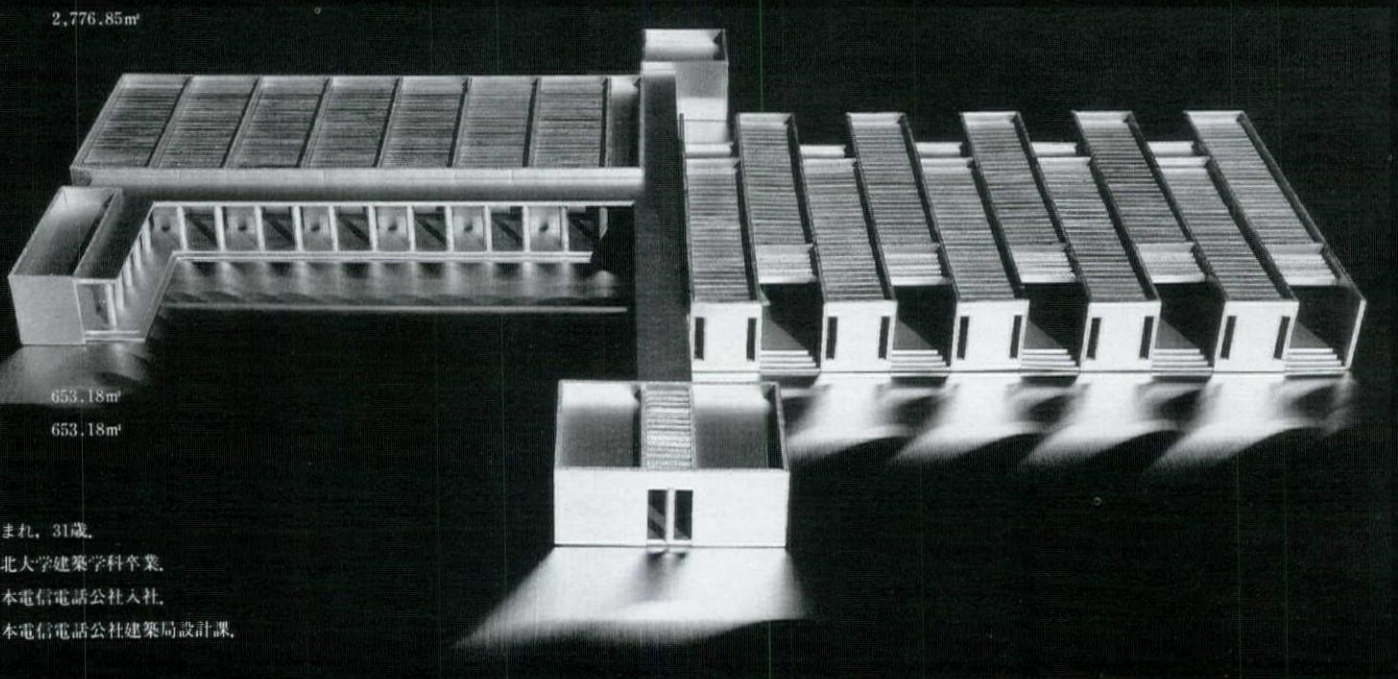
このようにして，離島としての地理的条件，厳しい自然条件等の特殊性を考慮し，かつ自然景観に調和した快適な集合住宅を提案することが，ここでのテーマである．



1階平面図　first floor plan

1 玄関
2 居間・食事室
3 台所
4 寝室
5 洗面・洗濯・脱衣室
6 浴室
7 納戸
8 便所
9 テラス
10 ポーチ
11 バスユニット
12 食堂
13 厨房
14 中庭
15 物品庫
16 倉庫
17 渡り廊下
18 自転車置場
19 プロパン庫
20 物置

設計者　小林克彦
協同者　遠藤恵一
建物所在地　東京都小笠原村父島奥村
工事予定期間　1983年12月～1984年8月
主体構造　鉄筋コンクリート造
主要仕上材料　コンクリート打放しの上，浸透性防水剤塗布
敷地面積　2,776.85m²



建築面積　653.18m²
延床面積　653.18m²

小林克彦
1952年生まれ，31歳．
1975年東北大学建築学科卒業．
1975年日本電信電話公社入社．
現在，日本電信電話公社建築局設計課．

竹ノ内一雄

Kazuo Takenouchi

SD賞二席(朝倉賞)

石幡邸
(径と広場のある家)

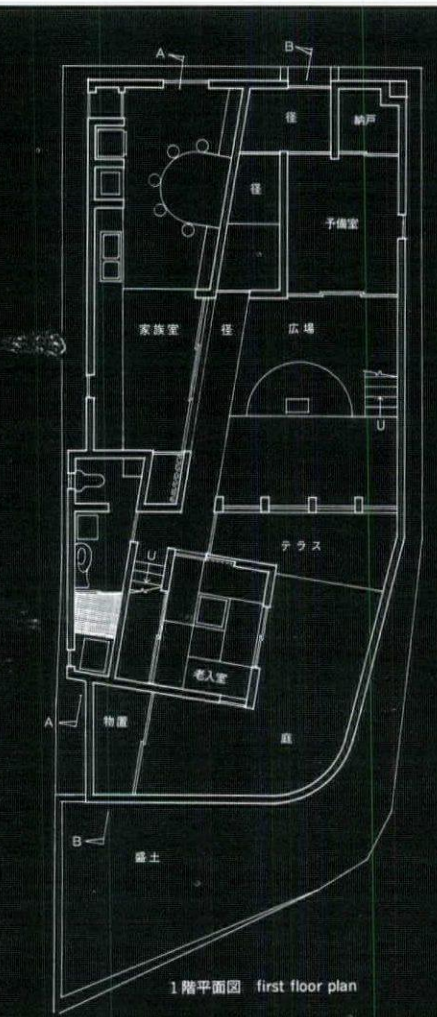
この住宅の敷地は日光市の大通りから一本南に入った狭い平らな道とカーブした急な坂道の交差点にある。　施主の石幡さんは全日本スケート強化コーチで，かつて選手だった奥さんは神橋の近くで喫茶店を経営しておられる。　中学生を頭に二人のお子さんと若々しいお母さんとの五人家族であるが，開放的な明るいご一家には気さくな訪問客の絶え間がない。

日光の冬は厳しい。　遅い春が訪れるまで外部〈庭〉は殆んどその用をなさない。　そこで外を内に取り入れ，精神的外部空間である〈径と広場〉を設けた。　広場には意図的に過保護な暖房設備をやめて，薪ストーブだけを置いた。　薪を裏山から集めるのは専ら子供達の役目である。

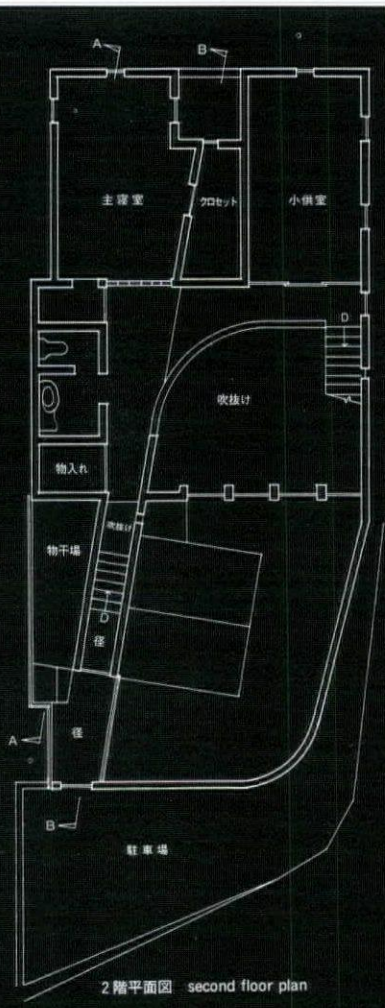
住室から明かりがこぼれる広場では，今夜も焚き火を囲んで仲間達の談笑が夜の更けるまでつづく。

設計者	竹ノ内一雄
協同者	構造：昂工房　ドローイング：遠藤剛
建物所在地	栃木県日光市
工事予定期間	1985年5月1日～10月30日
主体構造	RC造2階建
主要仕上材料	ベニヤ型枠，コンクリート打放し（第二期工事として，外断熱の上，コロニアル仕上げ）
敷地面積	198.84㎡
建築面積	113.72㎡
延床面積	186.14㎡

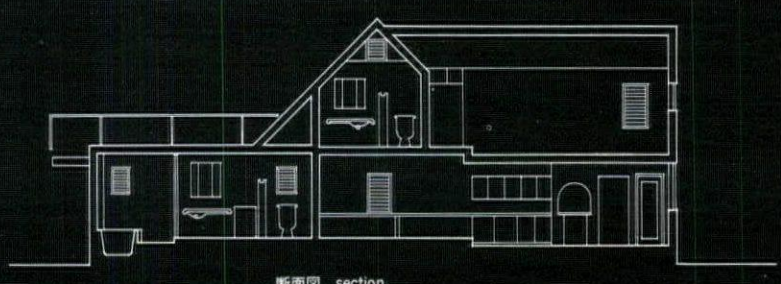
竹ノ内一雄
1921年京都府生まれ。
独学で建築を学ぶ。　戦時中は舞鶴海軍施設部勤務。
1946年鉄筋コンクリート㈱勤務。
1964年同社退社。　設計事務所開設。
現在，㈱竹ノ内一雄設計事務所・代表取締役。
日本建築家協会会員，日本建築学会会員。

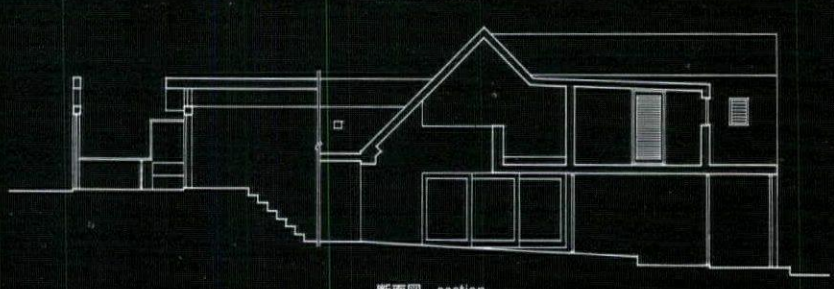


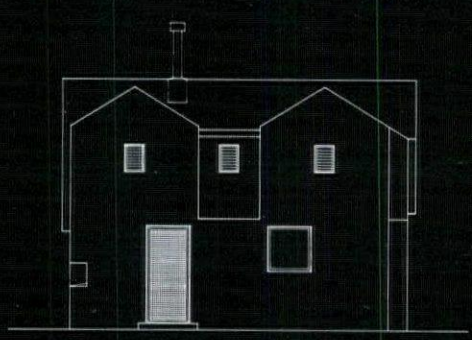
1階平面図　first floor plan

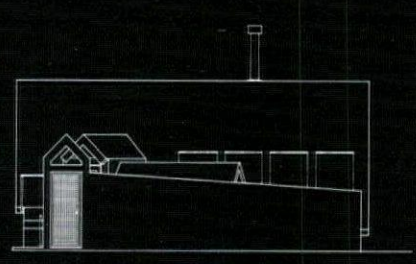


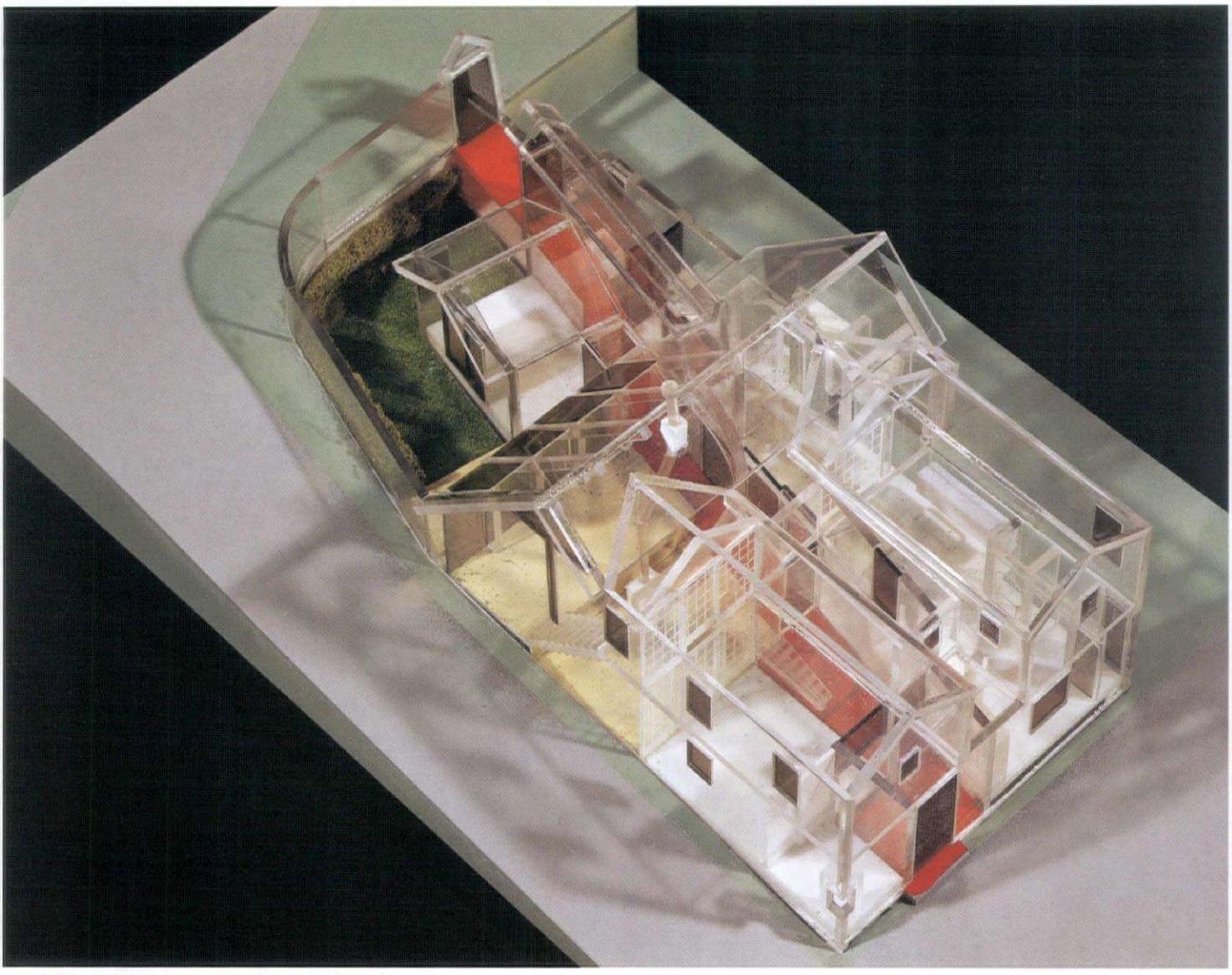
2階平面図　second floor plan

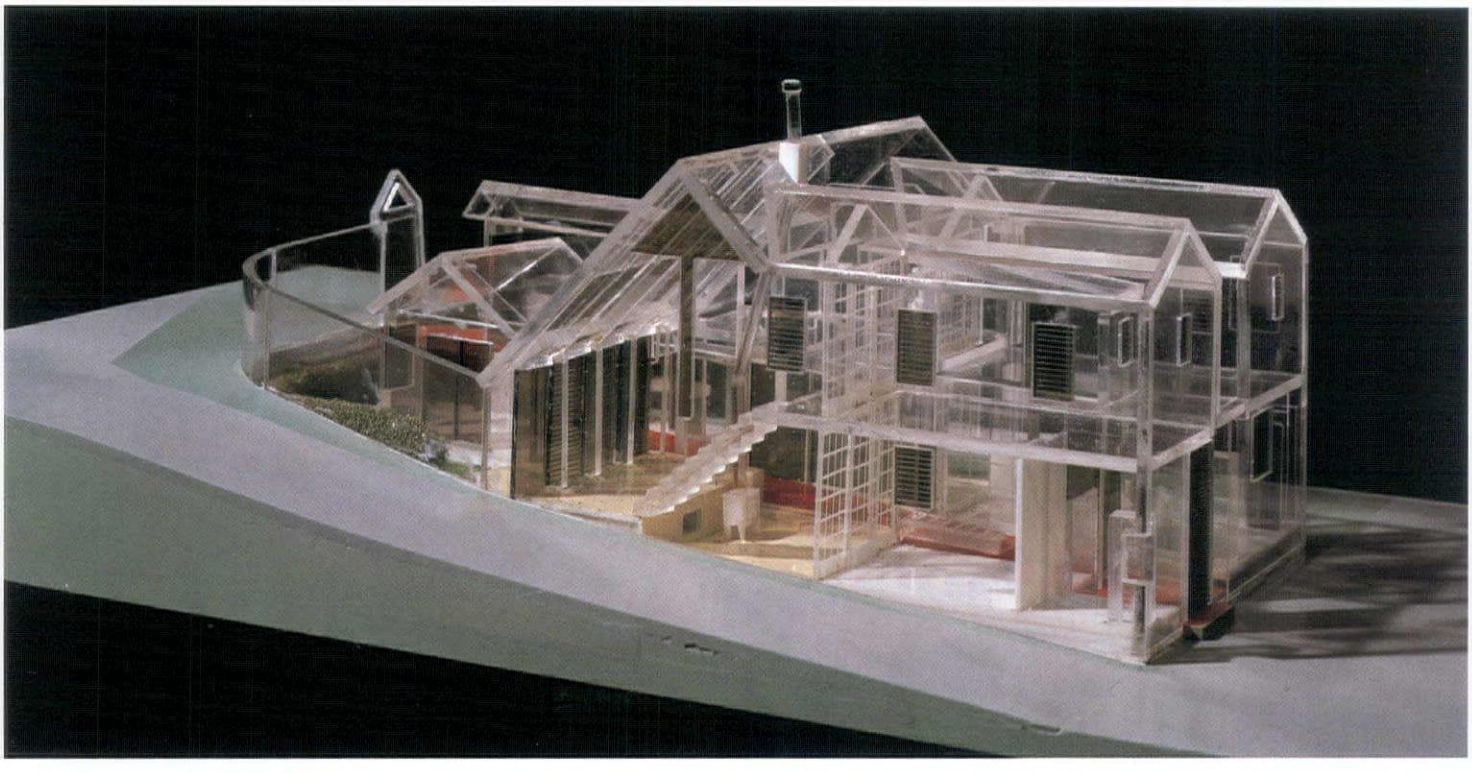

断面図　section

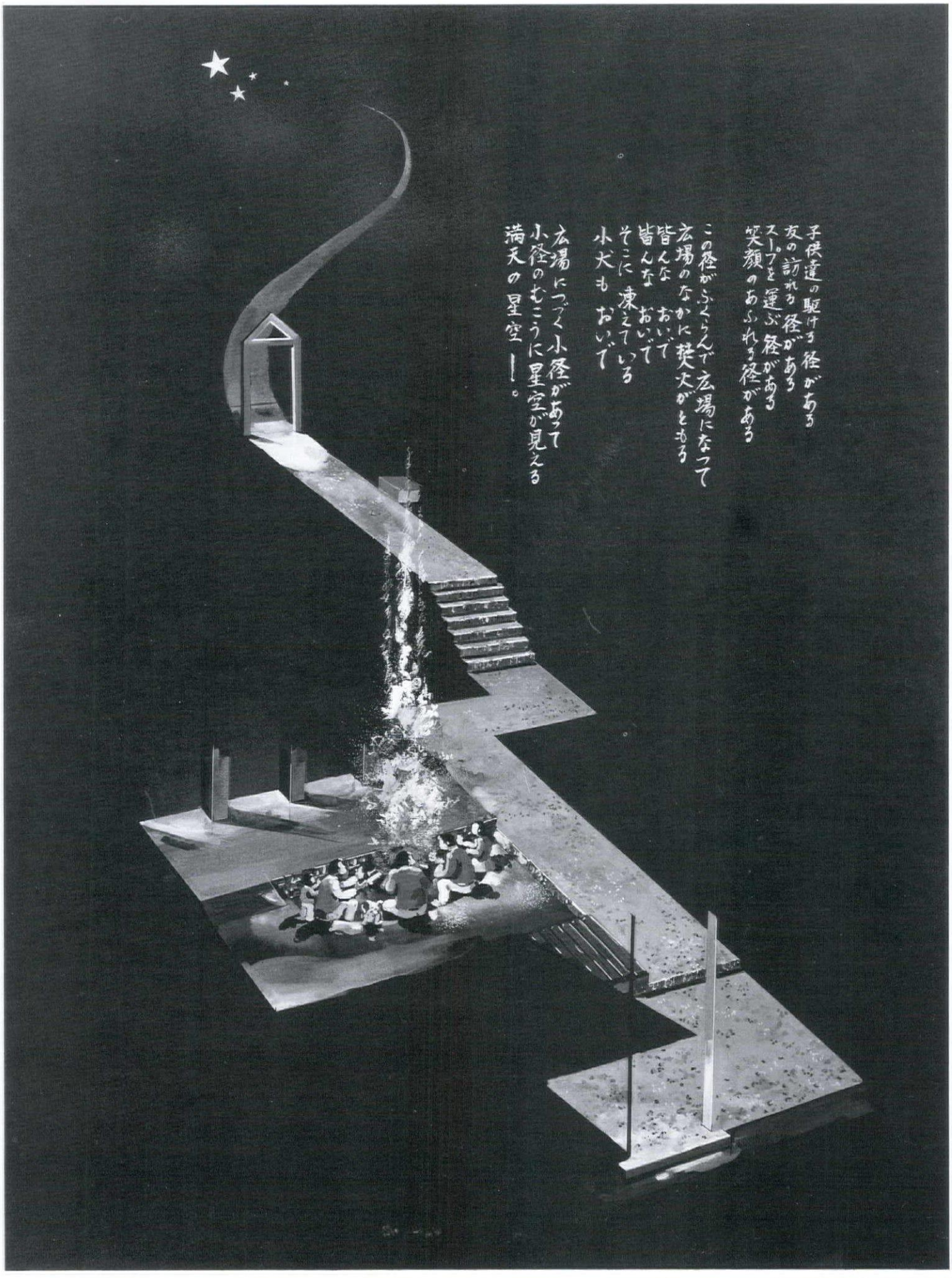

断面図　section


北立面図　north elevation


南立面図　south elevation






子供達の駆ける径がある
友の訪れる径がある
スープを運ぶ径がある
笑顔のあふれる径がある
この径がふくらんで広場になって
広場のなかに焚火がともる
皆んな おいで おいで
そこに 凍えている
小犬も おいで
広場につづく小径があって
小径のむこうに星空が見える
満天の星空！。

小屋雅義＋大内 栄

Masayoshi Koya＋Sakae Ouchi

工事予定期間　1984年10月1日～1985年1月31日
主体構造　木造平家建
主要仕上材料　屋根：フッ素樹脂鋼板　外壁：ラワン羽目板張りキシラデコール塗り　内壁：樞ベニヤOP，OS　天井：プラスターボードVP，樞ベニヤOS　床：フローリング，タタミ
敷地面積　835㎡
建築面積　289.1㎡
延床面積　269.2㎡

KOYA APARTMENT HOUSE

この計画は，既存の住戸や北と東を工場に囲まれた袋小路状敷地の活性化を考え進められた．そこで，建物は北側の工場に隣接させ，各戸は主室より東側に主室の延長として多目的に使われる外室をもつ．

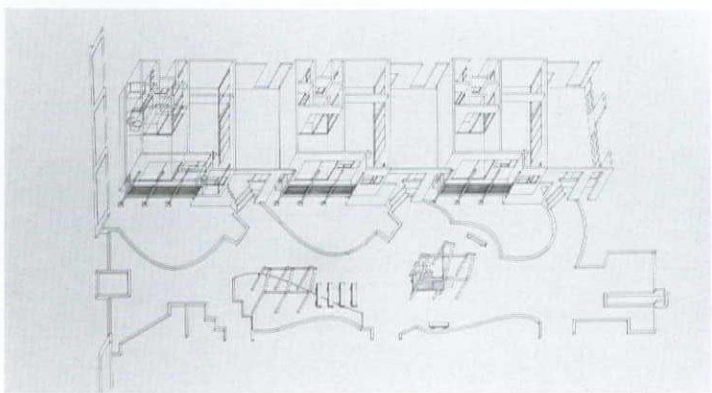
建物の南側に〈道空間〉を通すことで，各戸から空間的・視覚的・聴覚的アクセスをもたせる．家族はそれを通して〈道〉と個人庭や住戸がひと続きとなる空間的連続性を感じる．また〈広い〉道空間を得ることによって，道から外れたくぼみやたまり場が生まれ，ゆっくりと歩いたり，斜めに歩いたり，座ったり，道に絵を描いたりと子供達の想像によって多用な使われ方がされ，時として公園で遠さない〈道〉での遊びの場として存在する．

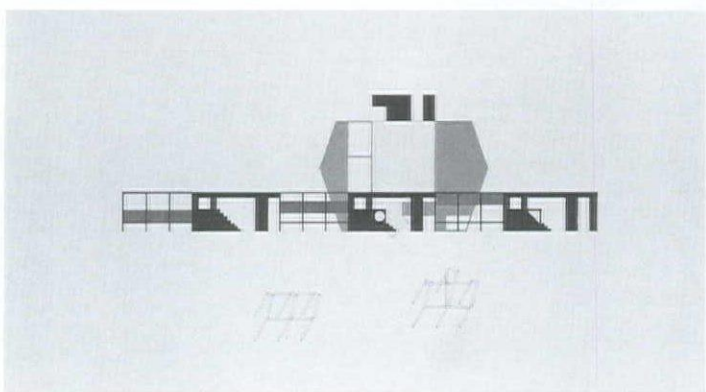
建物が道に対して従来のような目隠し塀を排除してオープンな形で造れるのは，近隣の住民とのコミュニケーションが〈昔の人間関係〉に近いものが得られる地域性による．

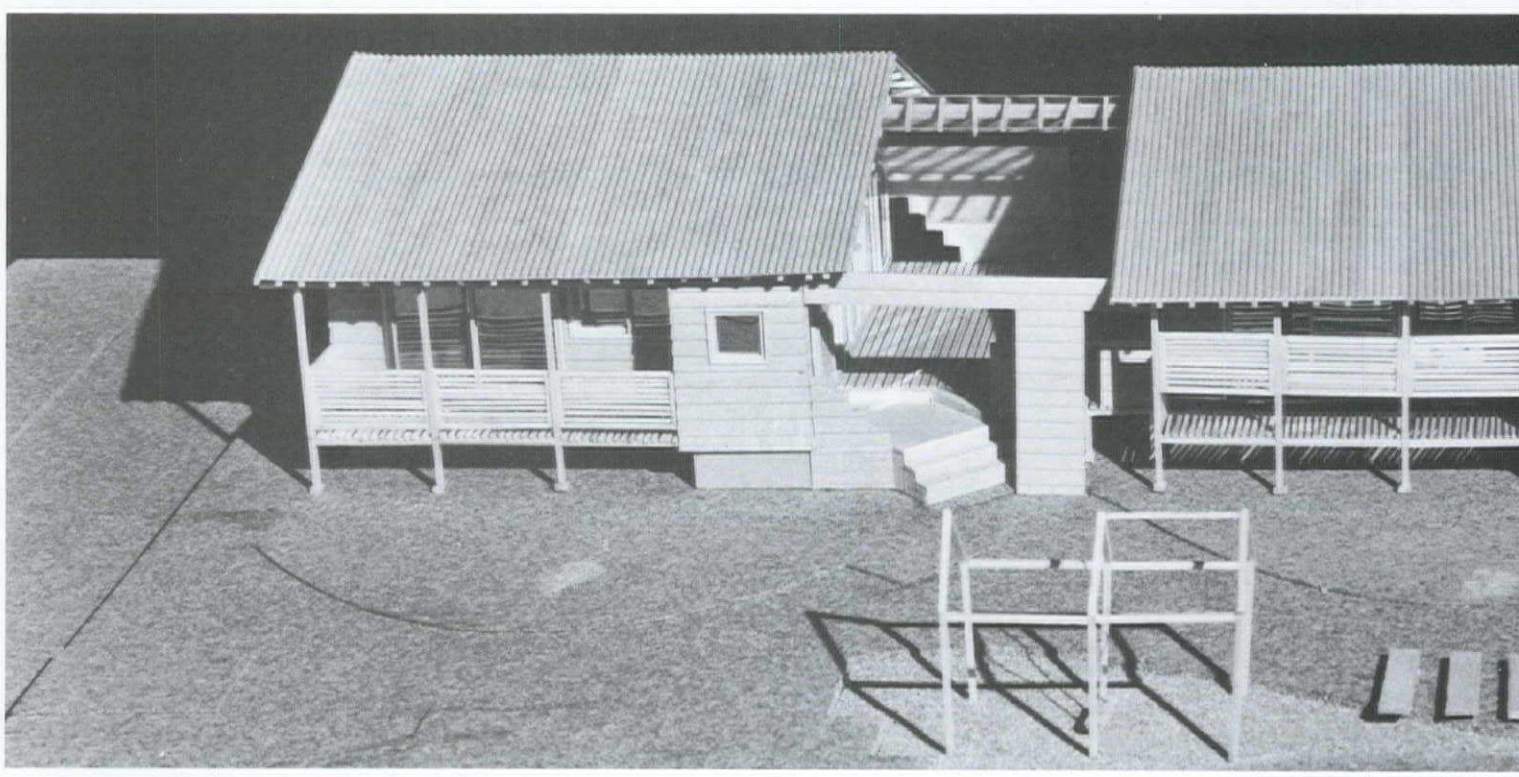
設計者　小屋雅義＋大内 栄
協同者　戸叶博幸，前原 匡
建物所在地　群馬県山田郡大間々町大字大間々2306

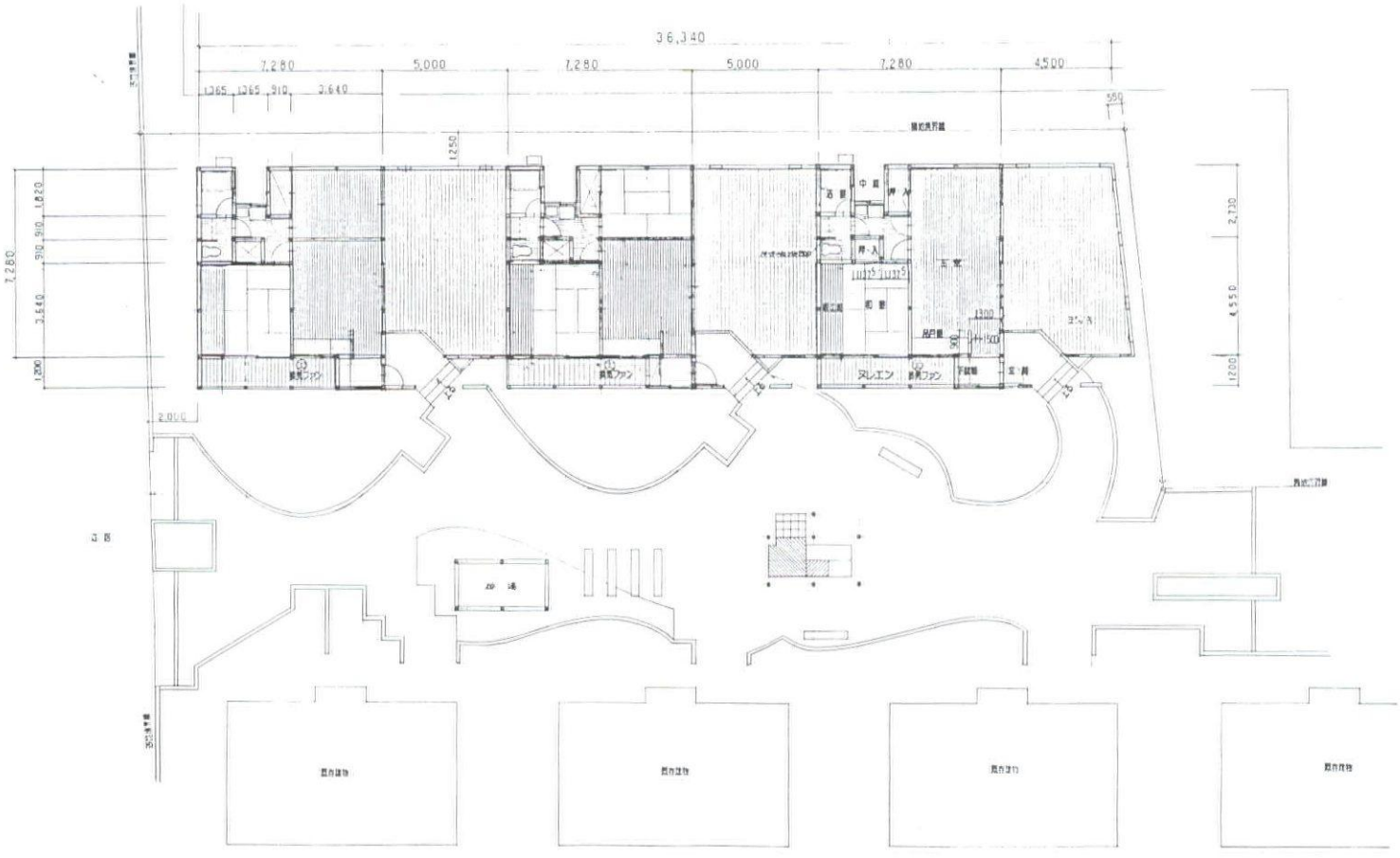
小屋雅義
1954年3月9日生まれ，30歳．
1976年武蔵工業大学建築学科卒業．
1976―80年㈱浅利建設産業．
1981年小屋建築設計事務所を主宰．

大内 栄
1957年1月26日生まれ，27歳．
1980年前橋市立工業短期大学卒業．
1977―80年家住設計室．
1980―82年福島建築設計事務所．
1983年大内栄建築計画設計工房を主宰．

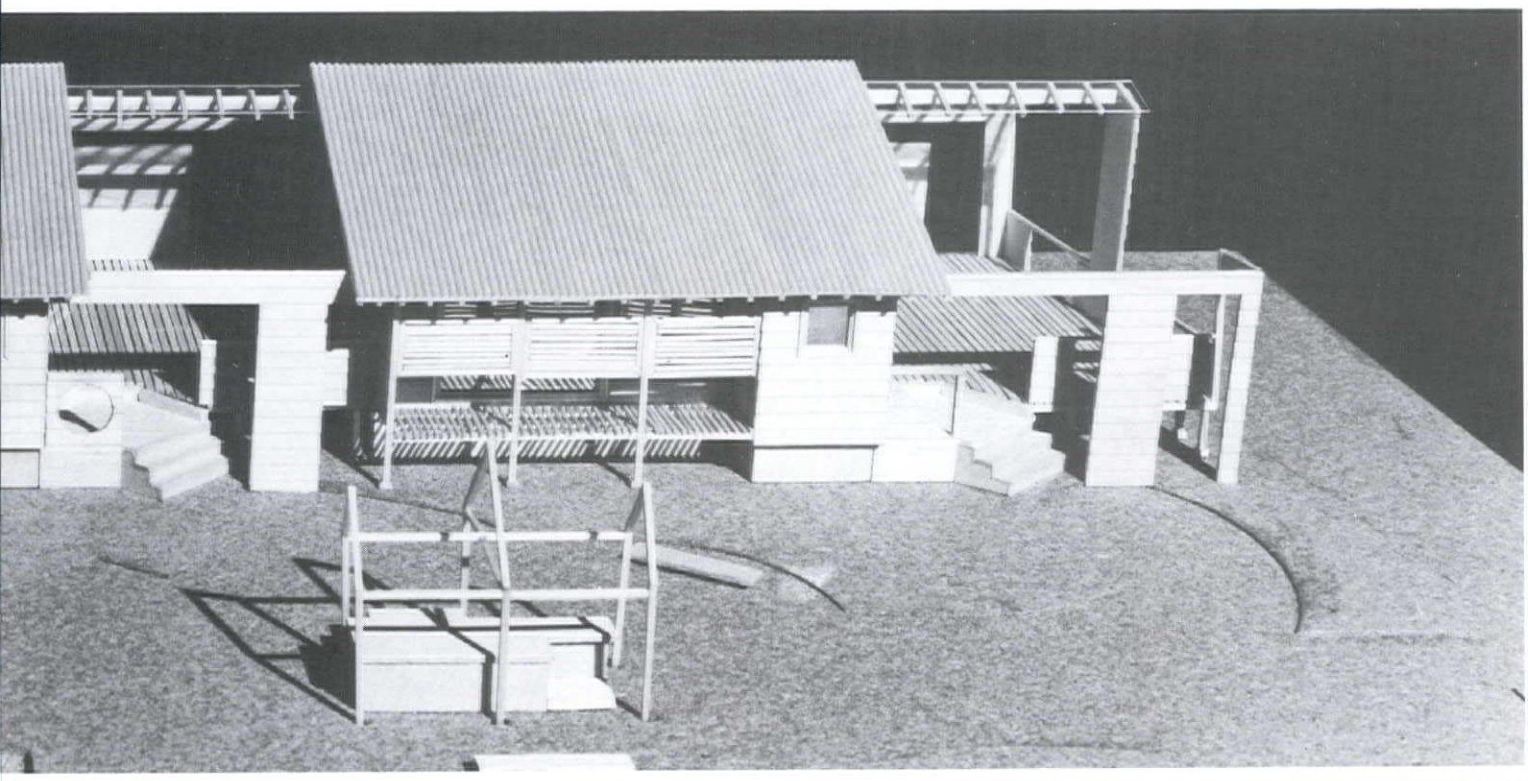








1階平面図　first floor plan



高松伸

Shin Takamatsu

SD賞一席(鹿島賞)

修学院の家II

(欠けた刃)

打ち損ねた刃物の様に北に向かって歪に反り返ってゆく土地のほぼ重心にあたる位置に，自信たっぷりの庭師によって執拗に剪定されたに違いない樟がある．　その朱儒の様な木を理由も無く残すことに決めた時，この建築は一種の欠損をのっけから受け入れてしまったと言える．　希薄なグラフの海を運ばれてきたかの様に，切れ切れの形態が萎縮した重心の近傍に漂着する．　抗い難い求心力と斥力の間でおもわせぶりな距離が測定され，弛緩した弦月状の軌跡が記録される．　その軌跡に切り欠かれた空隙は曖昧に他を侵蝕しながら遠く苛立たしい円環を形成する．　非積極的な循環運動……非煽情的な相貫もしくは相姦．　砂上の言語の様に乾いた欲動と解剖室の生理の様に適度な湿度を持った痛覚が不意に精錬されないものだろうか．　この建築もまた打ち損ねた刃である．

設計者	高松 伸
協同者	高松伸建築設計事務所
建物所在地	京都市左京区修学院烏丸町５－２
工事予定期間	1984年９月～1985年３月
主体構造	鉄筋コンクリート
主要仕上材料	壁：ＰＢ㋐12mmジョイント工法ＶＰ 天井：ＰＢ㋐９mmジョイント工法ＶＰ 床：ナラフローリング㋐15mmワックス磨き
敷地面積	266.67m²
建築面積	131.94m²
延床面積	207.11m²

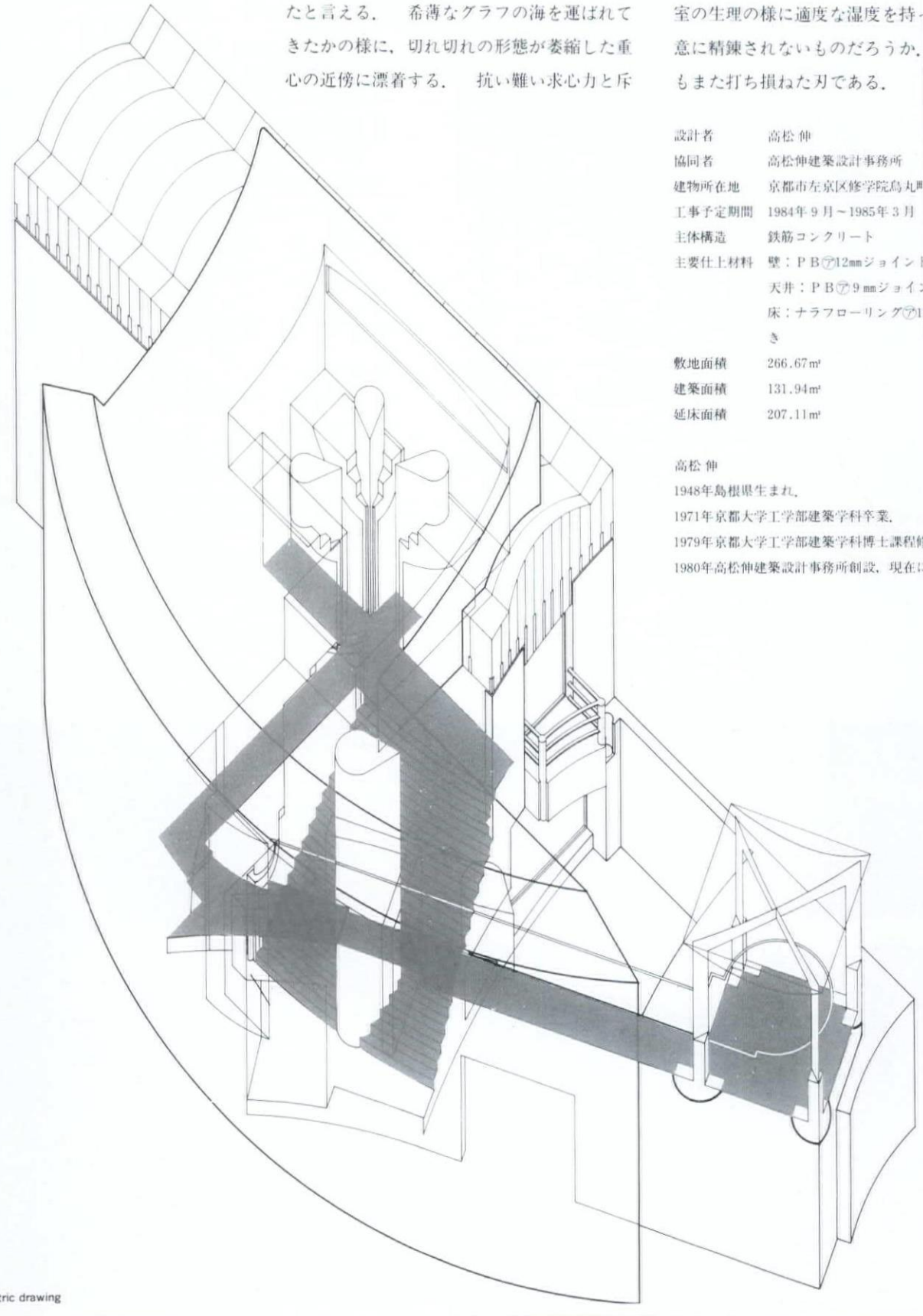
高松 伸

1948年島根県生まれ．

1971年京都大学工学部建築学科卒業．

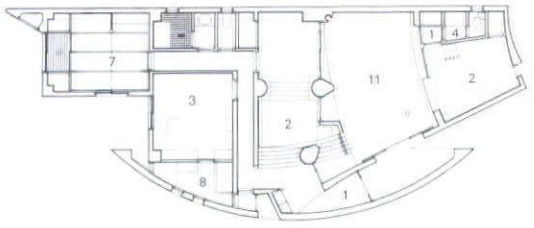
1979年京都大学工学部建築学科博士課程修了．

1980年高松伸建築設計事務所創設，現在に至る．

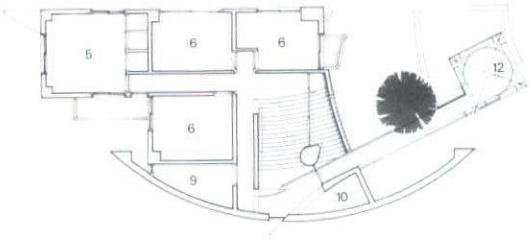


アイソメ図　isometric drawing

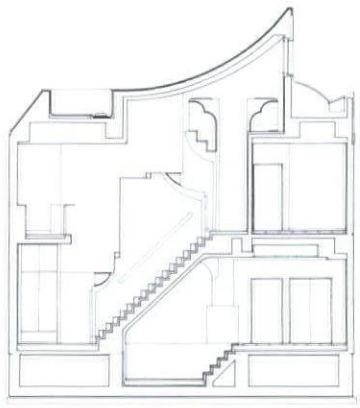
1：玄関　2：居間　3：ダイニングキッチン　4：台所　5：寝室　6：子供室　7：和室　8：家事室　9：納戸　10：吹抜　11：中庭　12：テラス



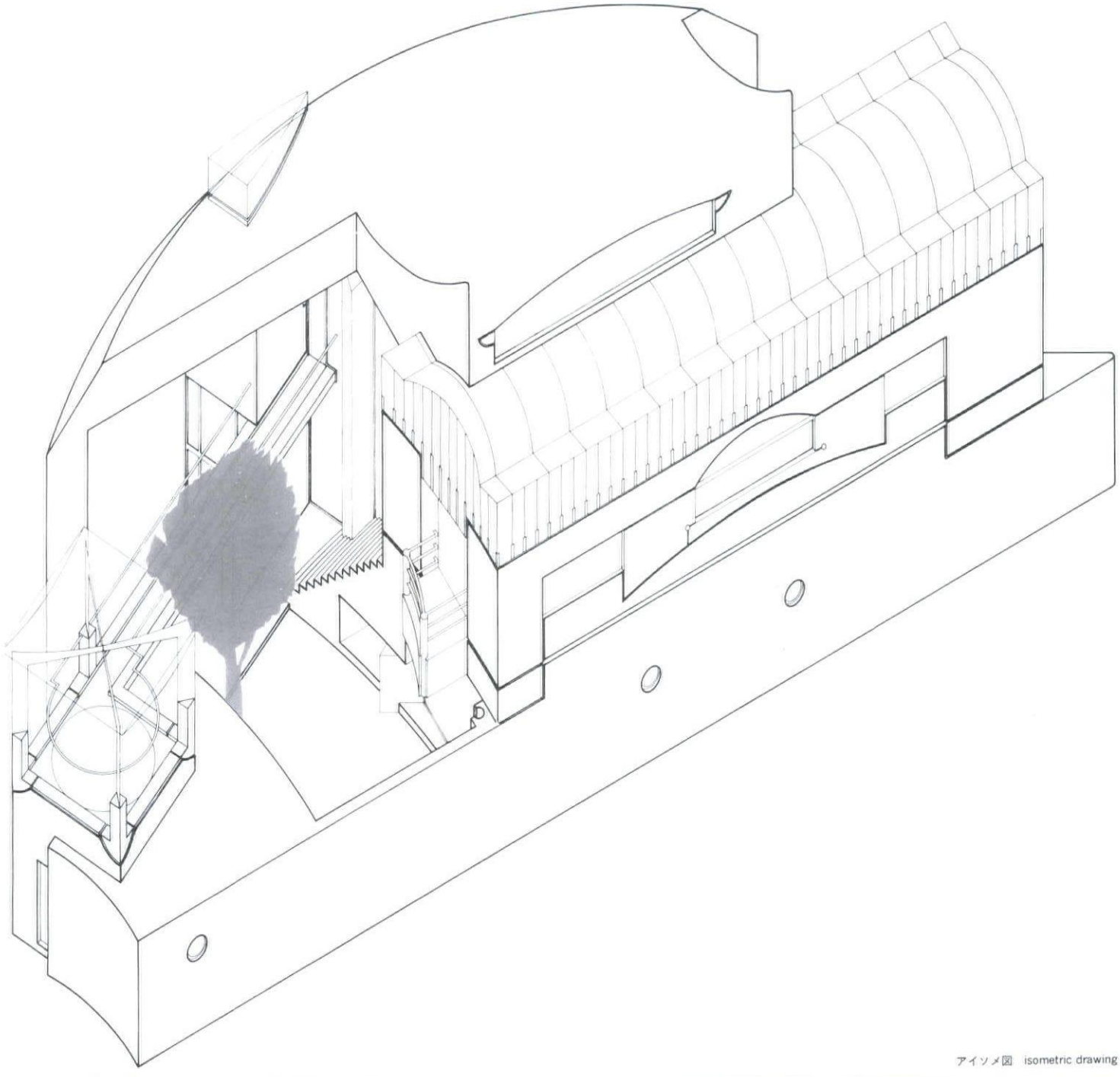
1階平面図　first floor plan



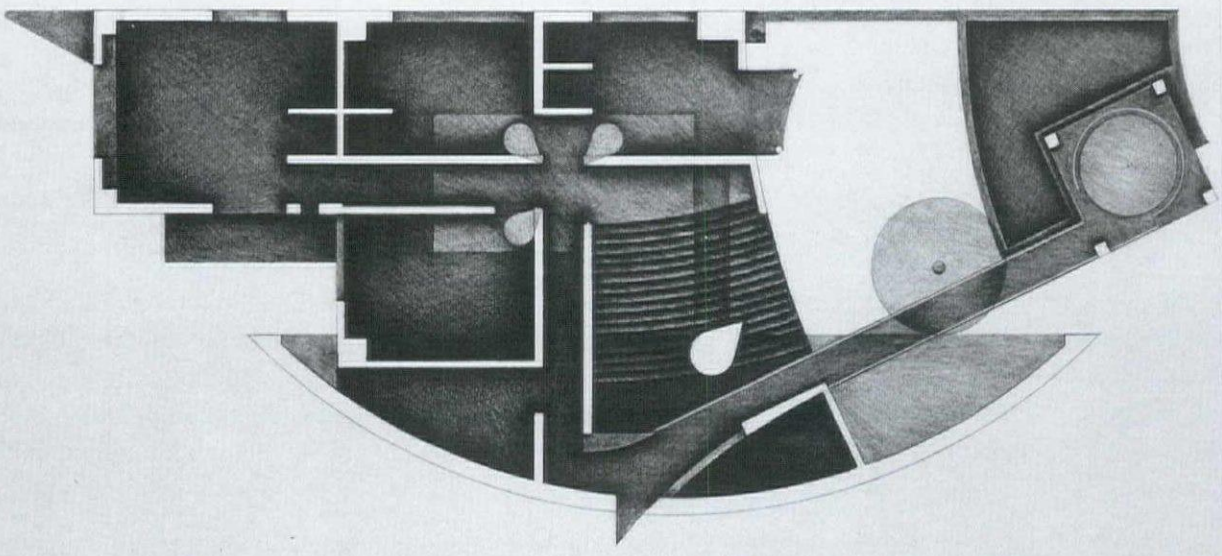
2階平面図　second floor plan

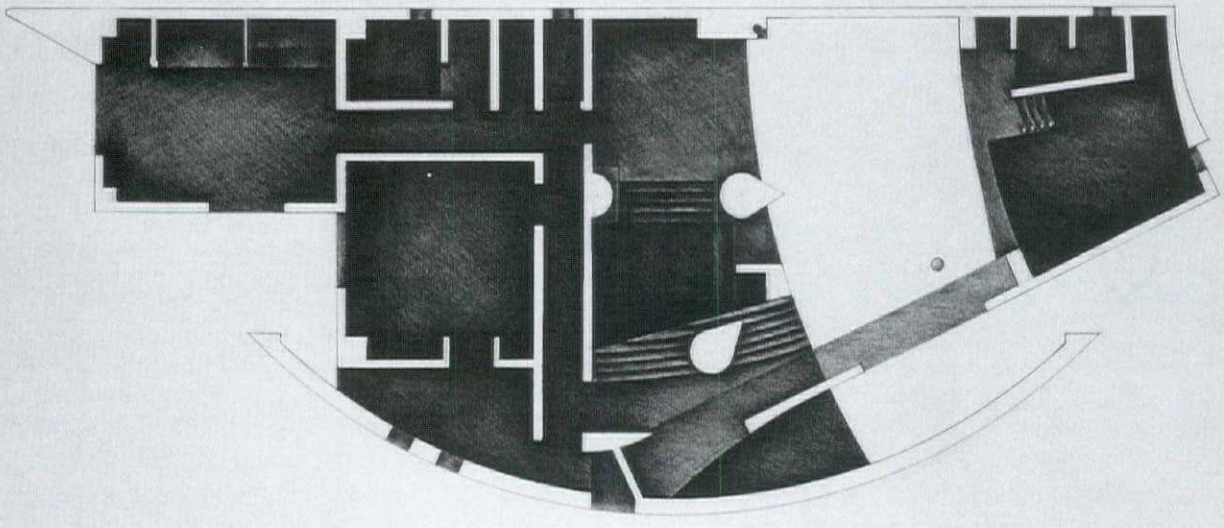


断面図　section



アイソメ図　isometric drawing





中澤王久東

Okuto Nakazawa

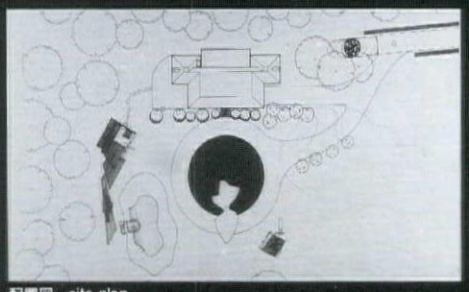
ATLANTA '83

KATSURA・PART I

米国アトランタ市郊外の閑静な住宅地である．樹木が茂る傾斜した広大な敷地の一部が平坦にされ，そこに主屋とプールがすでにつくられていた．　既存建物はジョージアン風のレンガ造であり，プールはそれとは無関係かのように配置されていた．

これは，屋外パーティー用のティーハウスを中心とした庭園全体計画である．　ゆえに，既存物と共存(対応)し，庭園全体が秩序をもちながらも，部分であるそれぞれが強い個性をもつようにすることが課題となる．

桂離宮は，部分にアイデンティティーをもちながらも，全体としてユニティーに優れた庭園である．　この計画に桂を内在させることを本計画の手法としたが，しかし，私はこのATLANTA '83を桂の再構築への一過程として位置づけたい．



配置図　site plan

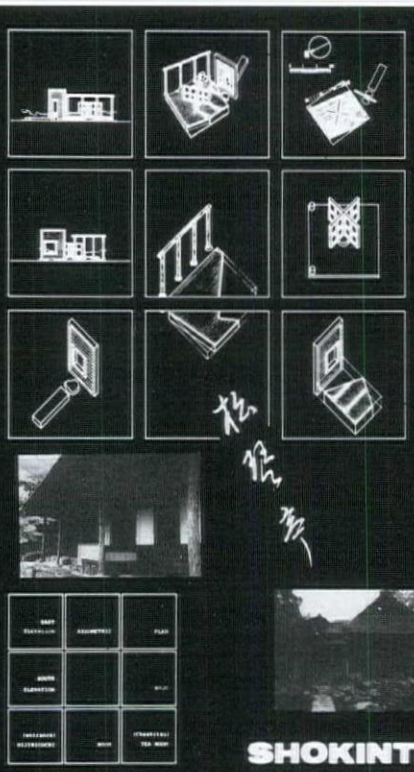
設計者	中澤王久東
協同者	清水郁子
建物所在地	4035 STOVALL TER, N.E., ATLANTA GA 30342 U.S.A.
工事予定期間	1985年
主体構造	木造，一部RC造
主要仕上材料	SUMIYOSHI：特殊レンガ　円柱(照明)：ステンレス　FORCUS：玉石　SHOIKEN, SHOKATEI, SHOKINTEI：木　CENTER：黒みかげ本磨き
敷地面積	5,526m²
計画庭園面積	2,550m²

中澤王久東

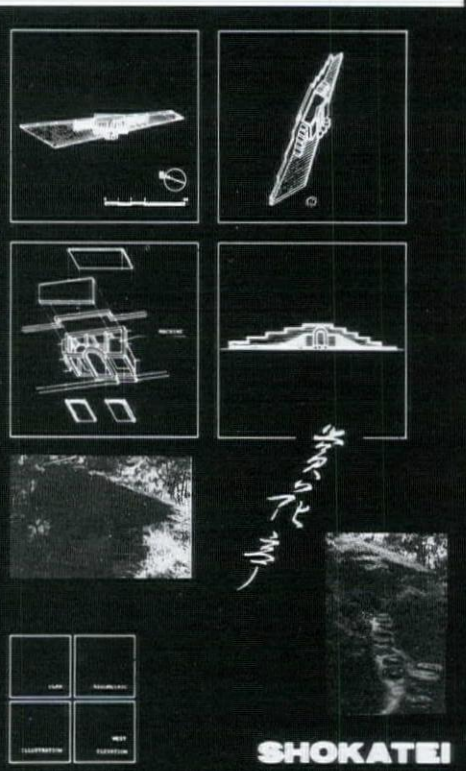
1954年10月28日生まれ，29歳．

1982年東京理科大学大学院修士課程修了．

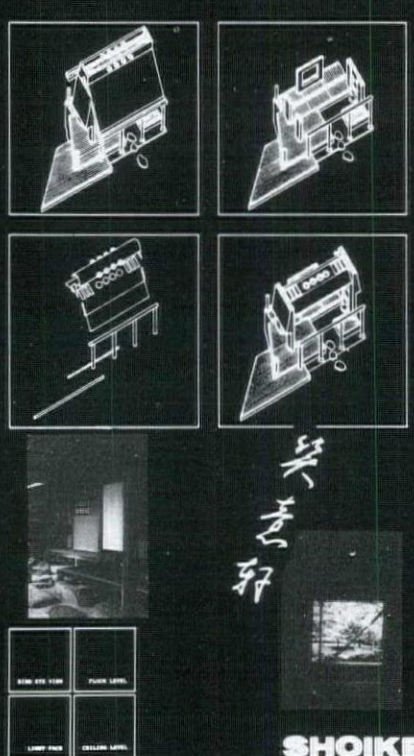
現在，東京理科大学建築学科助手．



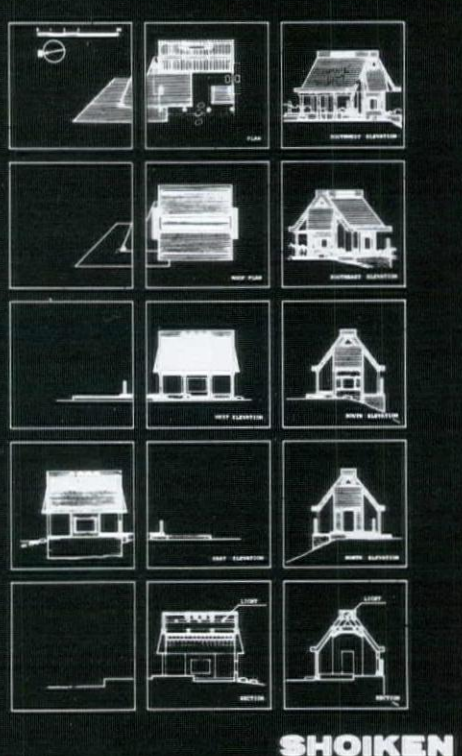
SHOKINTEI



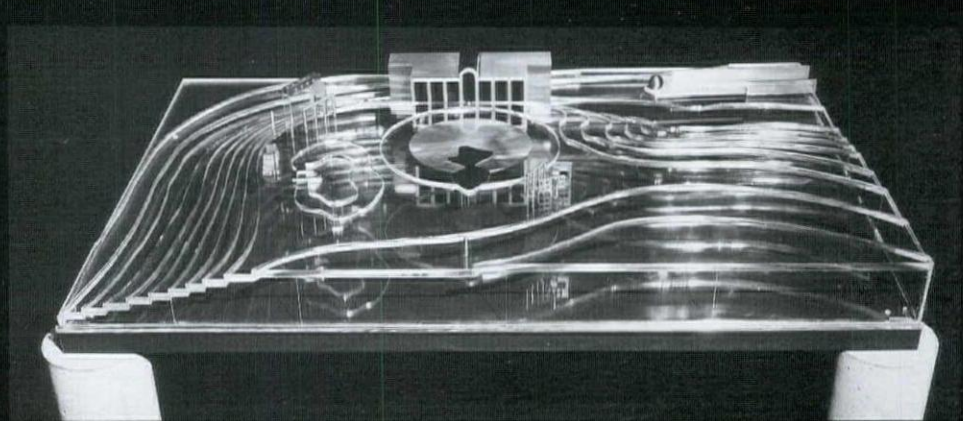
SHOKATEI



SHOIKEN



SHOIKEN



能勢修治＋永井久美

Shuji Nose＋Kumi Nagai

四角柱列の建築化の過程において，四角柱列自身の幾何学的原理へのフィードバックを繰り返し設計を進行させた．

設計者	能勢修治＋永井久美
協同者	構造計画：中村誠吾
	設備計画：G・PAL研　永井設計
建物所在地	山形県山形市松波町
工事予定期間	1984年10月～1985年4月
主体構造	RC造3階建
主要仕上材料	ベニヤ型枠コンクリート打放し
敷地面積	1,079㎡
建築面積	230.3㎡
延床面積	342㎡

能勢修治

1960年生まれ，

1982年早稲田大学理工学部建築学科卒業，

1982年～早稲田大学大学院池原研究室在籍，

永井久美

1961年生まれ，

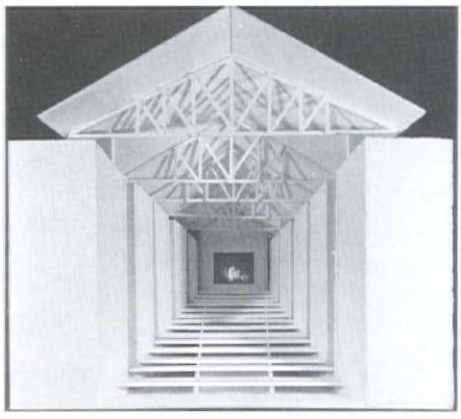
1982年名古屋大学工学部建築学科卒業，

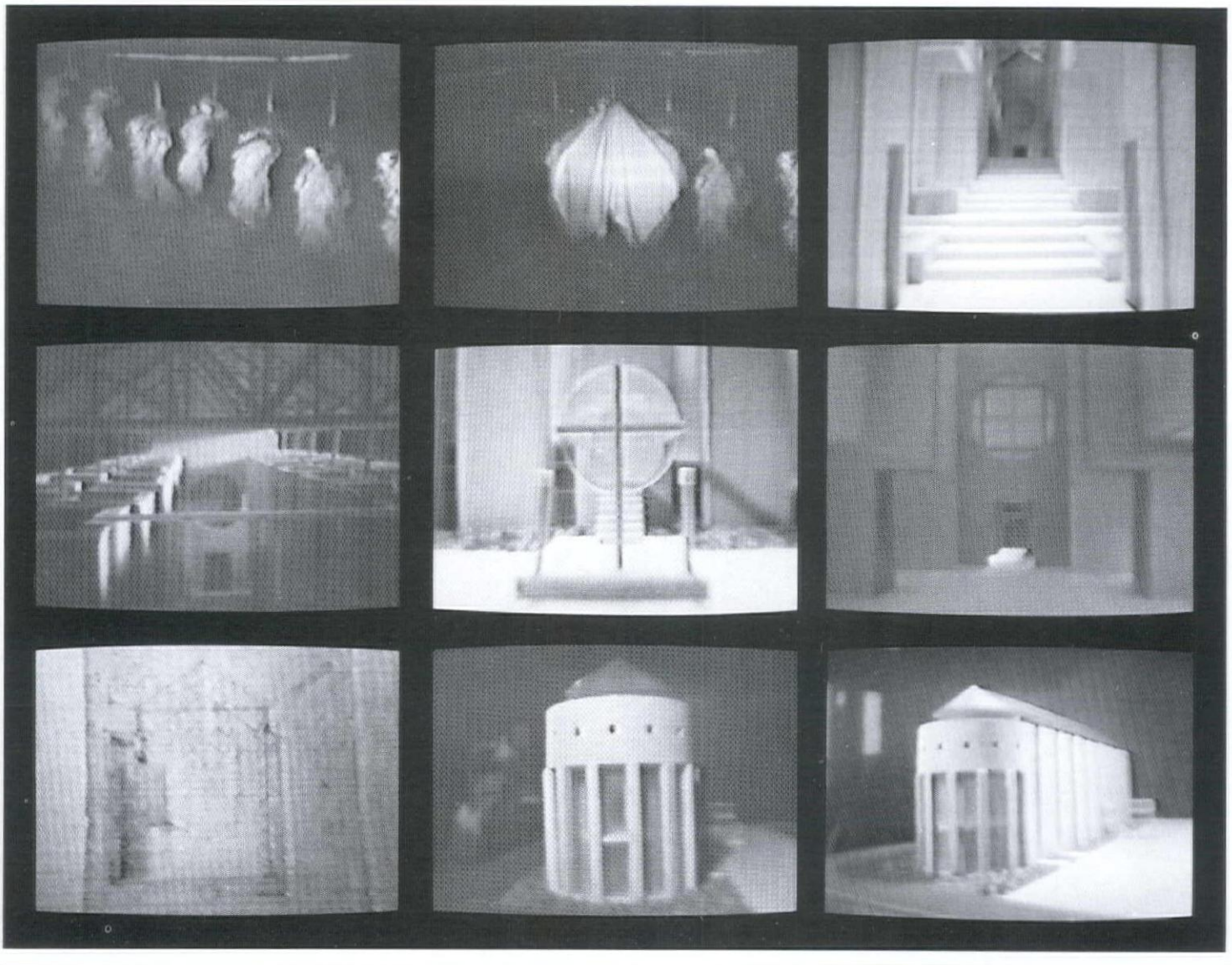
1982年～東京大学大学院原研究室在籍，

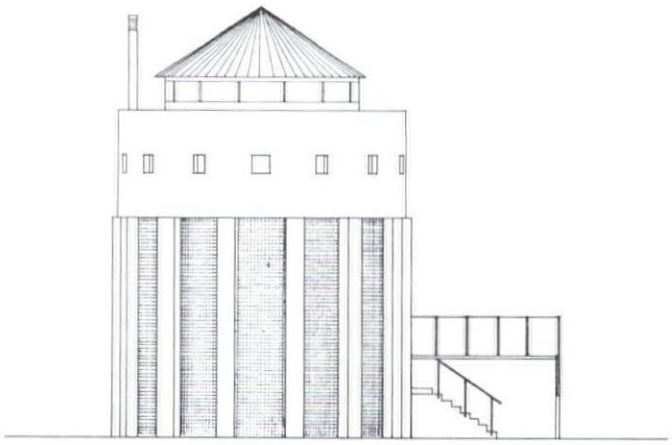
東北タマヨシ

真珠のためのショールームとカフェの計画．

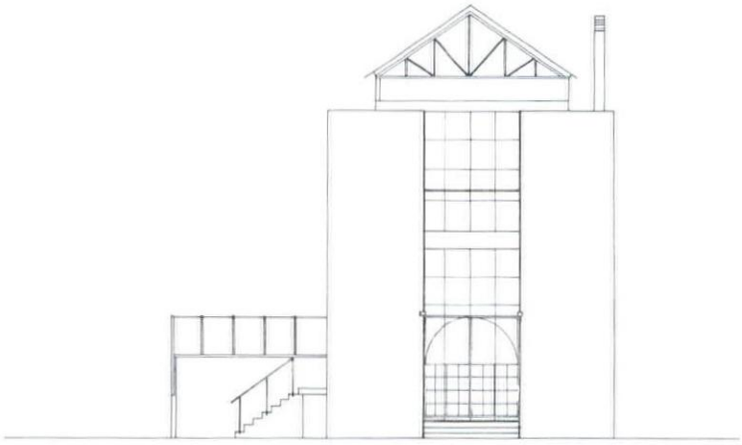
山形市郊外の千歳山の麓に選ばれた敷地は峠へ向かう自動車道路に面している．　施主の要求から，展示販売を旨としたショップではなく，郊外のゲスト・ハウスがイメージされた．基本的には，一辺2.4m，高さ9mの正四角柱が2列に並び33mの長堂を構成している．パールや客席等は総てこの四角柱の中へ収められ，中央の身廊部はゆるやかなステップを踏みながら最深部のゲスト・ルームへ向かう．この身廊部は，スライド会，パーティー等の企画へ対応する他，趣味豊かなオーナーのために，小規模なコンサートも配慮されている．ゲスト・ルームからは，四角柱列に挟まれて，軸上の千歳山の松林が眺められる．



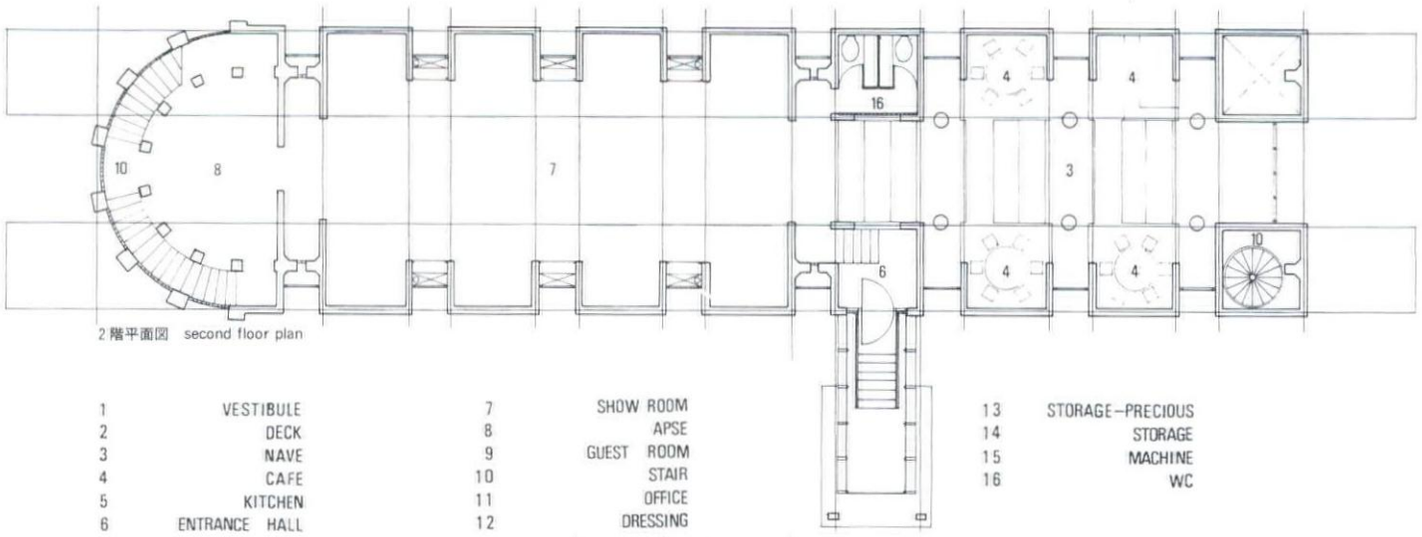




北立面図　north elevation

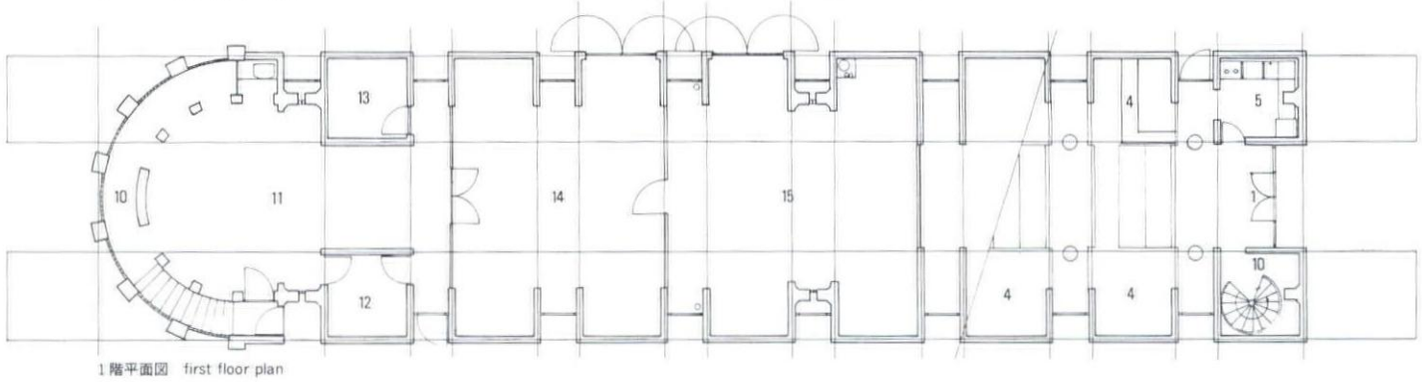


南立面図　south elevation

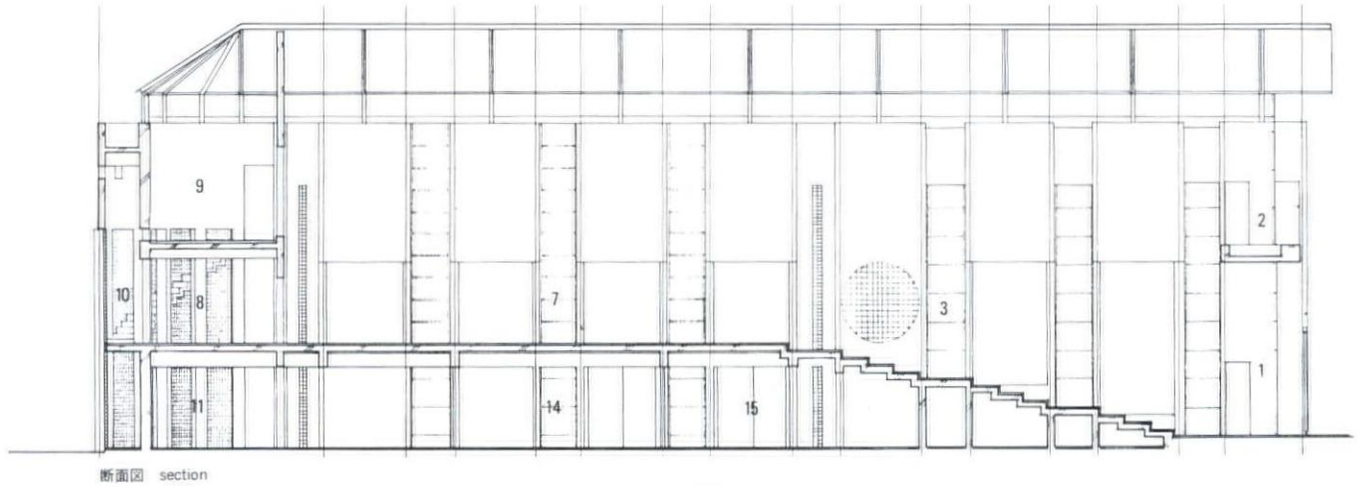


2階平面図　second floor plan

1	VESTIBULE	7	SHOW ROOM	13	STORAGE–PRECIOUS
2	DECK	8	APSE	14	STORAGE
3	NAVE	9	GUEST ROOM	15	MACHINE
4	CAFE	10	STAIR	16	WC
5	KITCHEN	11	OFFICE		
6	ENTRANCE HALL	12	DRESSING		



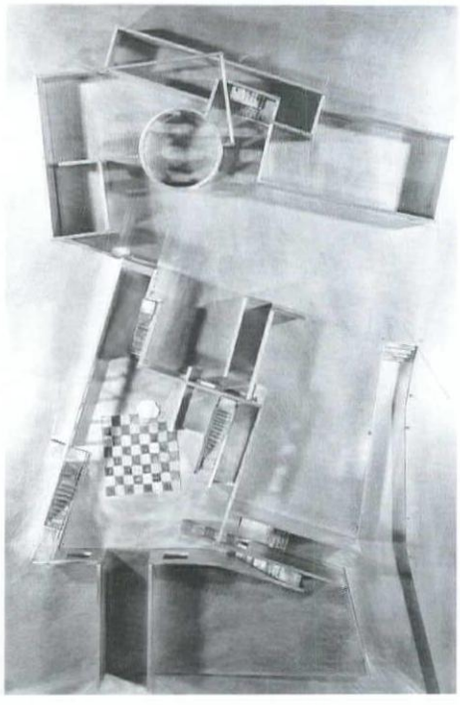
1階平面図　first floor plan

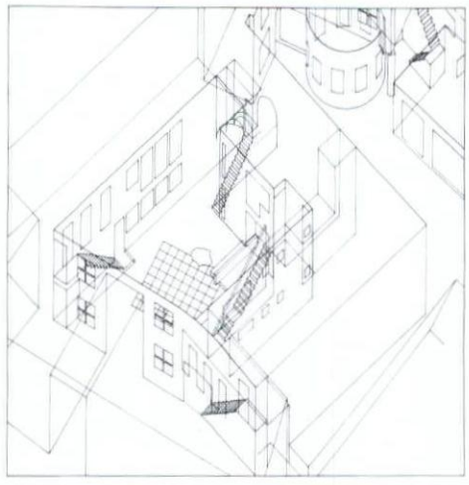


断面図　section

早川邦彦

Kunihiko Hayakawa







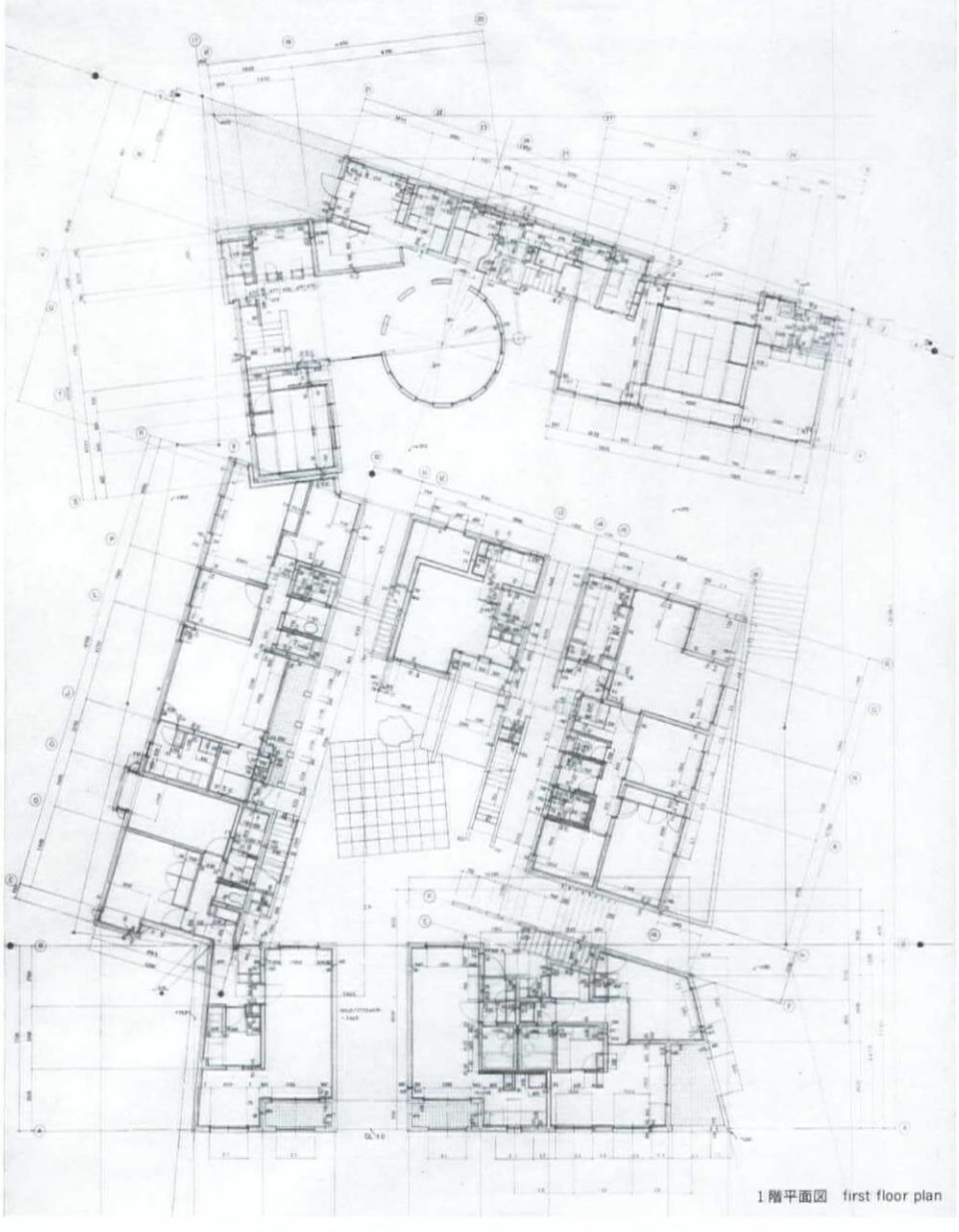


SHIRASAGI COMPLEX

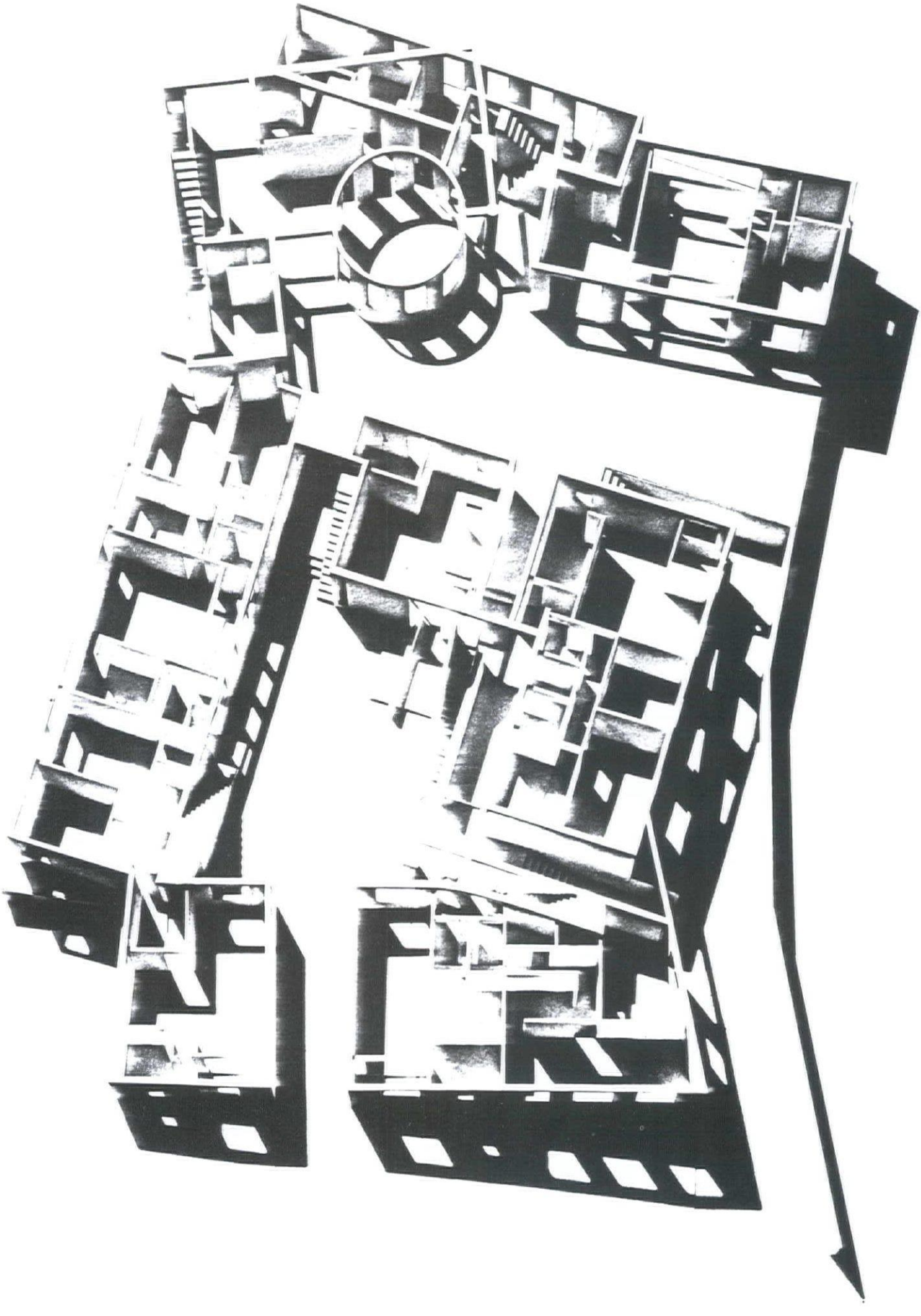
敷地周辺は住宅地であり，前面道路をはさんで敷地の反対側には20m近い中野区の保護樹林群が生い繁っている．コンプレックスは，アトリウムをかこむ2層のレンタル・アパート群と，その奥に位置する2世帯の住宅より構成される．露天のアトリウムは，共同住宅のコモン・スペースでありインテリア空間として意図されている．外壁は総て打放しコンクリートであるが，このアトリウムに面する壁だけが彩色されるのは，このような意図によるものである．アトリウムのインテリア・ランドスケープを構成するものとして，それぞれファサードが異なる4つの住棟の壁面，床面の仕上げの変化，明快な幾何学形態，彫刻（山本衛士）などが要素として使用されている．道路より2層分の高さをもつ開口を通して垣間見られるインテリア・ランドスケープと，アトリウムより同じ開口を通した緑豊かな風景とは，全く対照的なものとなるだろう．アーバン・ファブリックにおける〈図と地〉も，このプロジェクトのもうひとつのテーマとなっている．

設計者	早川邦彦(早川邦彦建築研究室)
協同者	笹原賢一郎，鴨下勉，佐藤文
建物所在地	中野区白鷺1丁目741－1
工事予定期間	1984年10月15日～1985年6月15日
主体構造	RC壁構造
主要仕上材料	外壁：RC打放し，アトリウムに面する外壁のみアクリルリシン吹付
敷地面積	1,267.73m²
建築面積	624.51m²
延床面積	997.67m²

早川邦彦
1941年東京生まれ．
1965年早稲田大学理工学部建築学科卒業．
1971年イェール大学建築芸術学部大学院修了．
1983年ワシントン大学客員教授．
現在，早川邦彦建築研究室主宰(1978年～)．

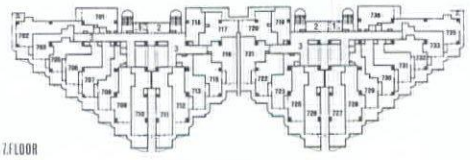


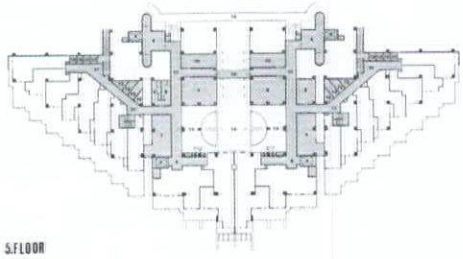
1階平面図　first floor plan

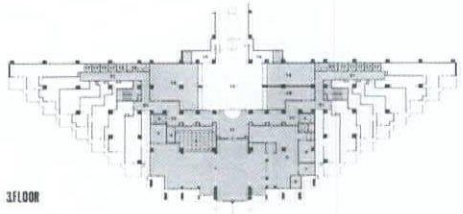


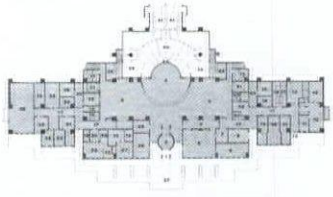
若林広幸＋角野充俊

Hiroyuki Wakabayashi＋Mitsutoshi Kadono









ライフイン京都

（有料老人ホーム）

段状塊．　対峙するメタル．　二条の裂開（スリット）．

広いテラス．　南面する広い窓．

斜面地に建つ特殊性の生み出すプラン．

多くの部屋は外気，採光を直接得るための坪庭も所有する．

テラスの隔壁はコミュニケーションのために低く．

最少限，短くした共用廊下．

プランは施設のコミュニティゾーンの豊富さに還元される．

コンクリート化粧打放し．　ハイテクな付属物．　半有機的な滝．

空間は中庭を軸にハイブリッドな体験を呈示（メッセージ）する．

このゾーンをアクティブに活用してゆく積極的な高齢者像．

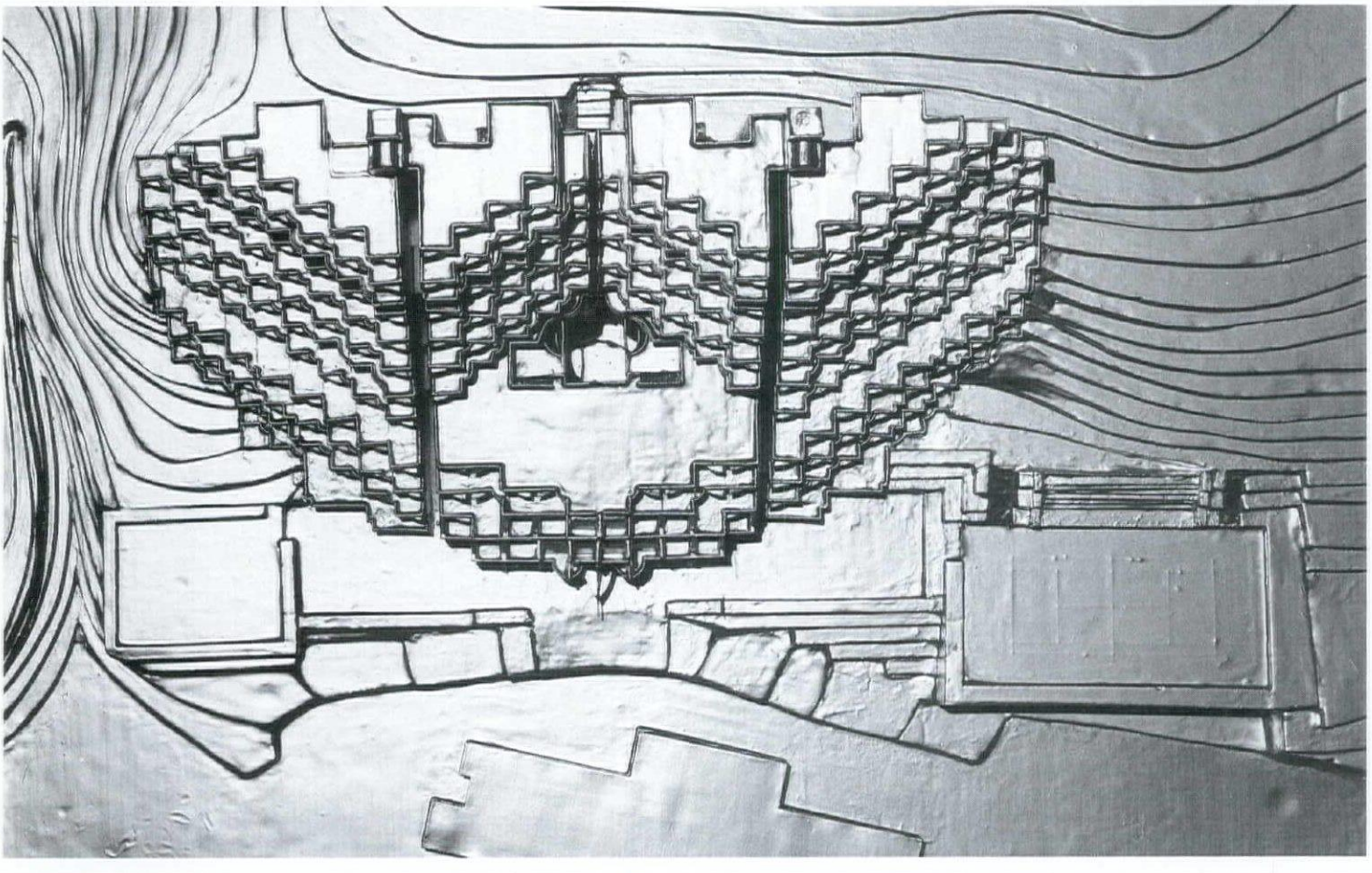
彼等が住い手である．

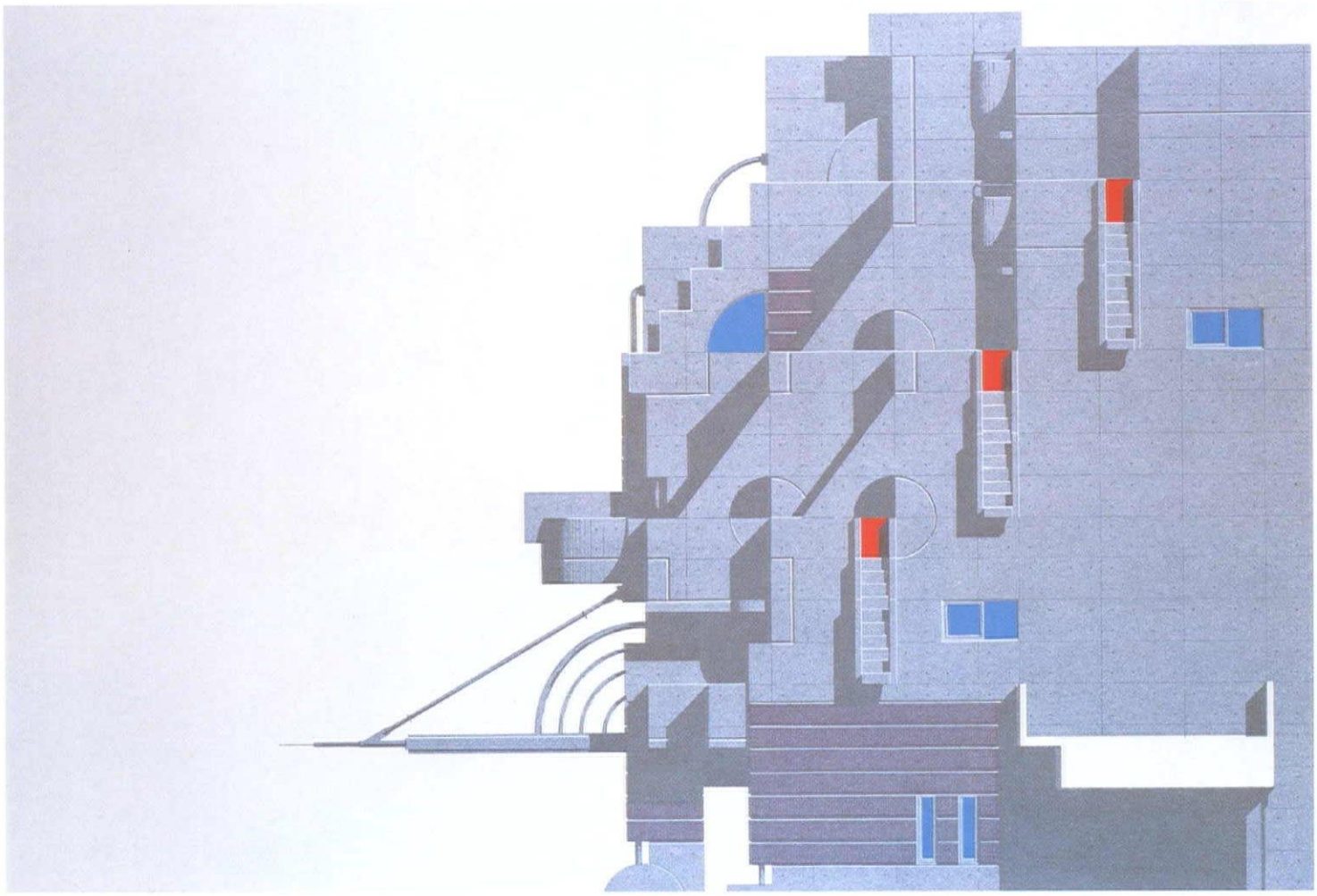
設計者	若林広幸建築研究所　若林広幸
協同者	角野充俊
建物所在地	京都市西京区山田平尾町46-50
工事予定期間	1984年８月～1986年５月
主体構造	鉄骨鉄筋コンクリート造（地下３階地上７階12層）
主要仕上材料	外部　床：45角モザイクタイル張り　壁：コンクリート化粧打放し，45角メタリックモザイクタイル張り，メタラック吹付，ステンレスパネル 内部　床：人造石研出し，カーペット敷，ゴムタイル張り　壁：コンクリート化粧打放し，ゾラコート吹付 天井：ミネラートンキューブVP，ゾラコート吹付
敷地面積	11,666.03㎡
建築面積	3,728.51㎡
延床面積	16,013.77㎡

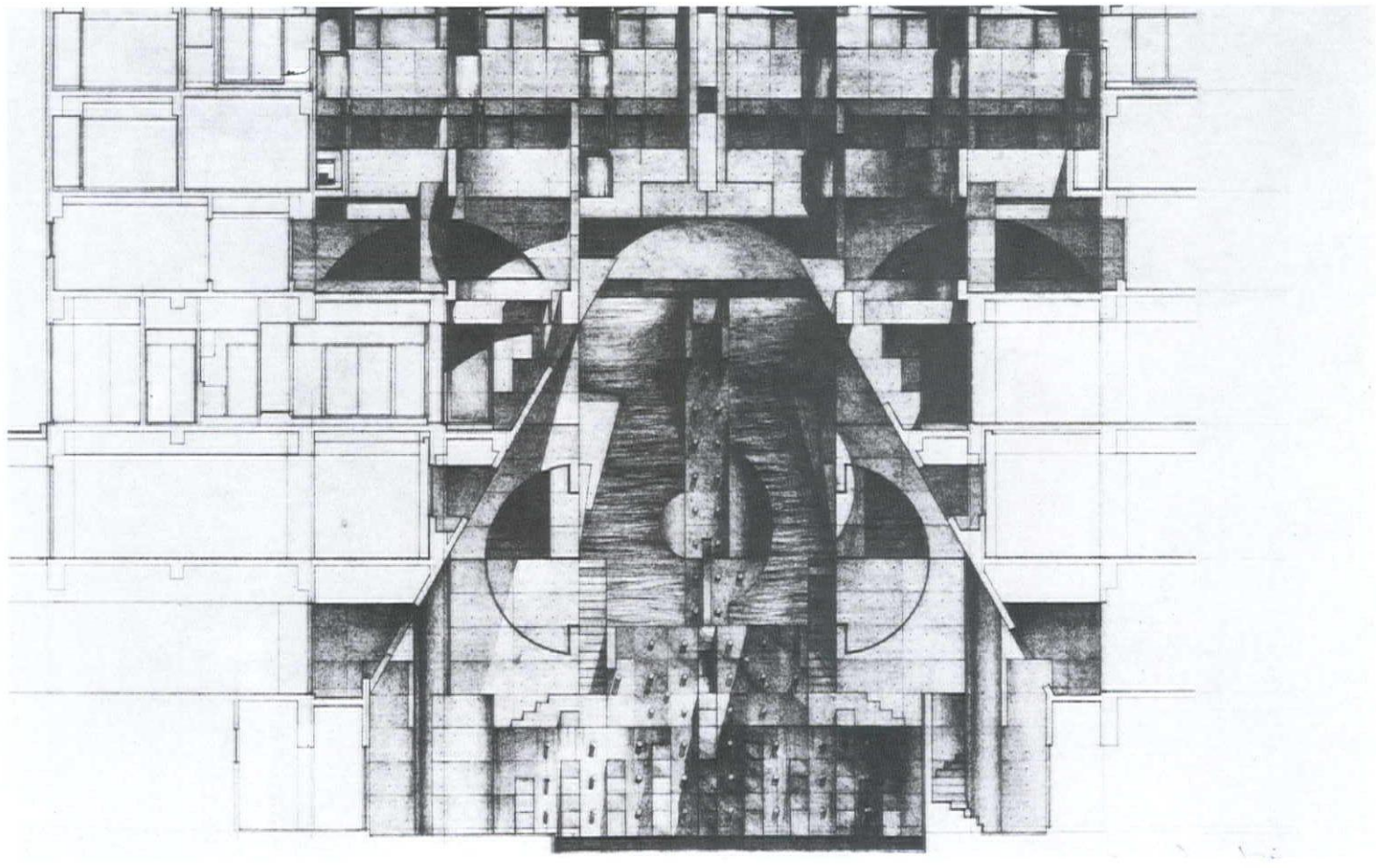
若林広幸

1949年生まれ，35歳．

現在，若林広幸建築研究所主宰（1982年～　）．







中野佳子

Yoshiko Nakano

衣笠の画廊喫茶

TEA & GALLERY AT KINUGASA

間口４ｍ，奥行15ｍ，高さ８ｍの小さくて細長いコンクリート・ボックス．

１：２の比率で縦真二つに切断された箱．

楕の刃状の柱列８本が，穿たれた亀裂の，まさにその部分に挿入される．

亀裂からもれふりそそぐ天空光は，垂直に上昇する柱一本一本の存在を顕らかにする．

すでにそこにあることを予測されていたかのごとく存在する柱列の，リニヤーな関係性は，単調だがしかし力強く空間の場を張る．

あたかも凝縮されたがゆえに密度の倍増したゴシック聖堂のごとく，緊張をはらんで空間は響きわたる……．

〈閉塞した結界〉の町京都の，町並にもまして，目立たず，静かにひっそりと佇みつつも，ひとたびその中に足をふみ入れるやいなや，日常性に楔するがごとき場を励起せざるをえない市中の隠，願わくはこの箱がそんな空間を演出する装置であってほしい．

設計者	studio EXCES：中野佳子(プロデュース)，中野誠一(設計)
協同者	宍道弘志(ドローイング製作協力)
建物所在地	京都市北区衣笠
工事予定期間	1985年２月～1985年６月
主体構造	ＲＣ壁式構造，地上２階建
主要仕上材料	内外壁および天井：コンクリート打放し仕上げ，一部モルタル金コテ押えＶＰ 床：大理石つや出し磨き
敷地面積	347.7㎡
建築面積	60.0㎡
延床面積	97.5㎡

中野佳子

現在，スタジオ・エクセを主宰．

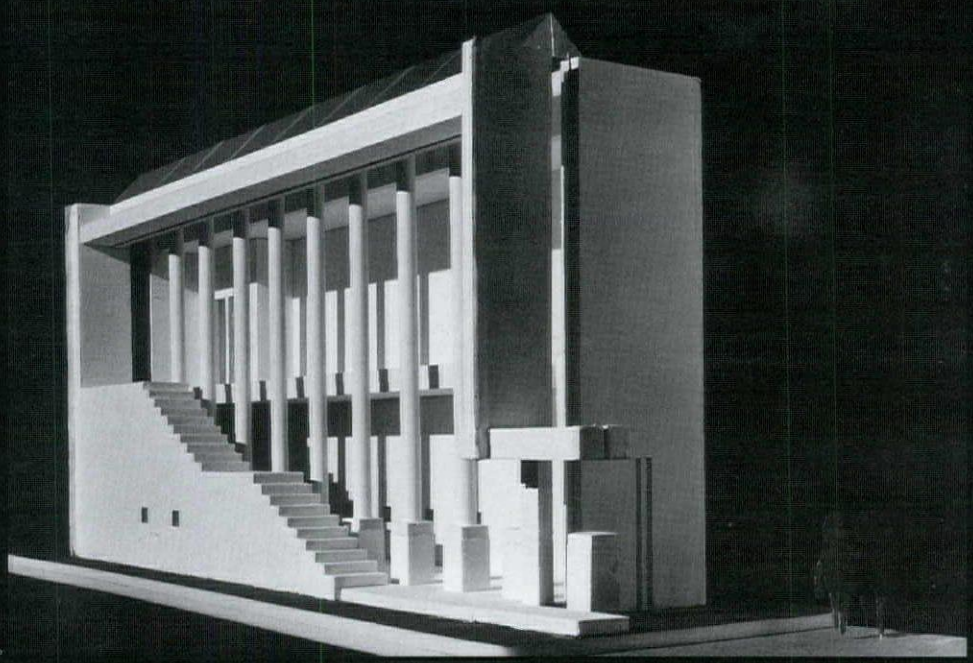
中野誠一

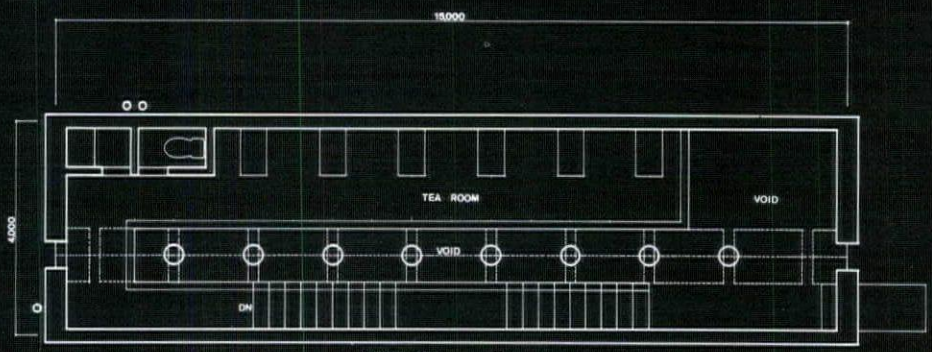
1953年生まれ，30才．

1977年京都大学工学部建築学教室卒業．

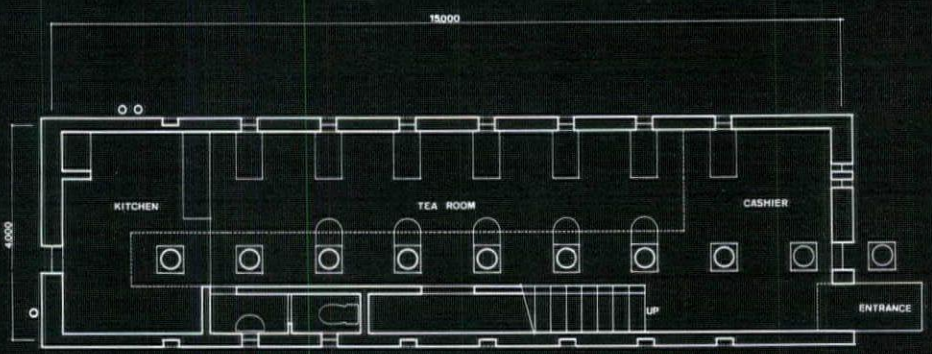
1979年京都大学大学院修士課程修了．

1984年大阪大学大学院博士課程修了．

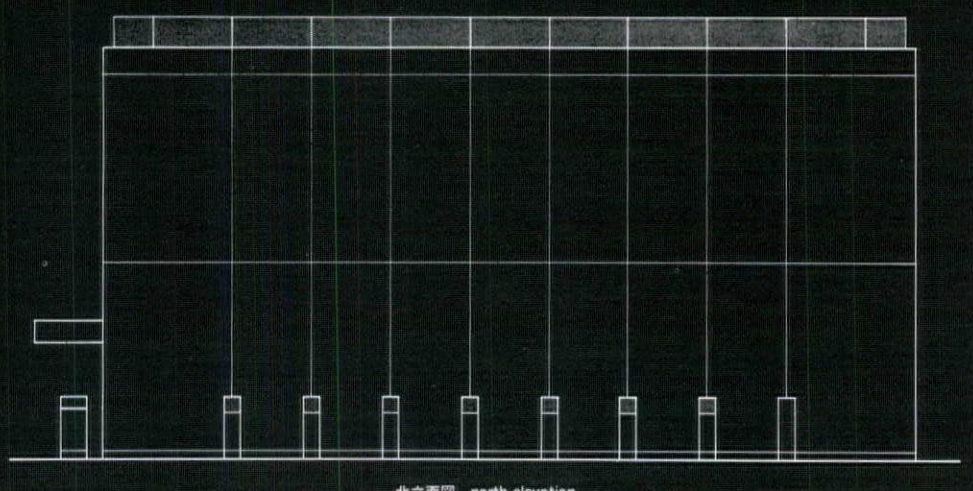




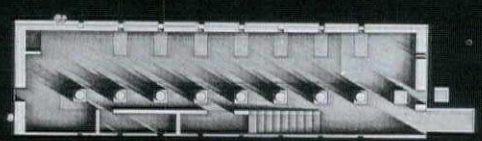
2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan



北立面図　north elevation

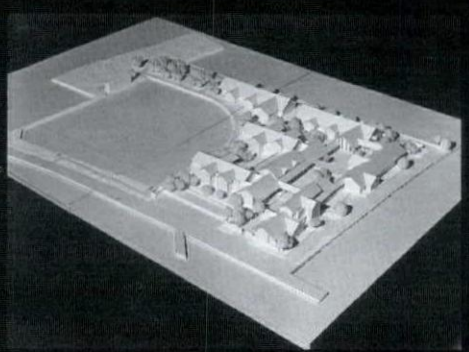


渡辺武信

Takenobu Watanabe

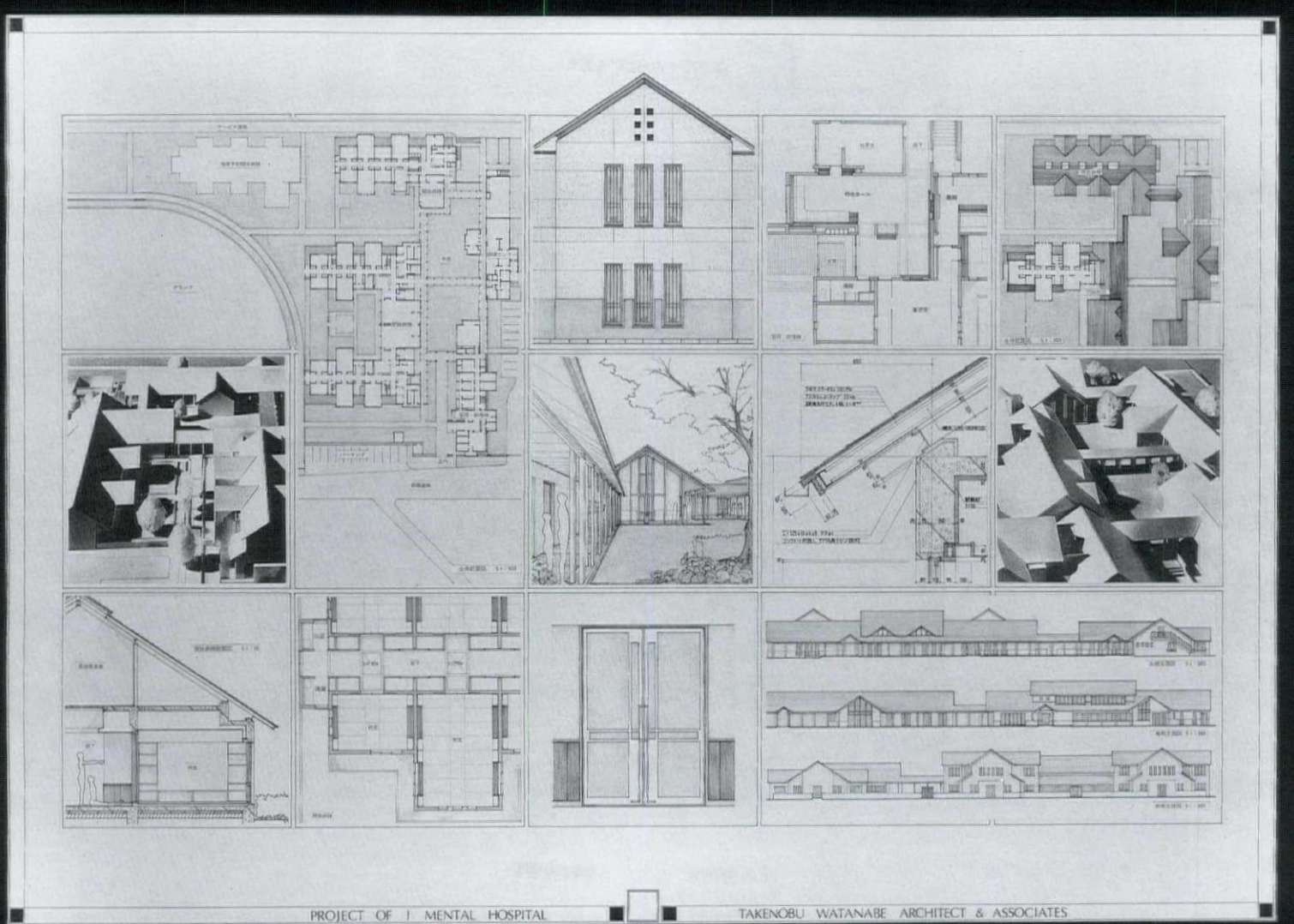
池田病院

この建築計画は，私立病院の宿命として工費および建築規模に厳しい制約があるが，幸いにして敷地の広さには恵まれているので，全体を低層棟で構成し，空間を住宅のスケールでとらえることによって，ローコストの中でも患者にとって親しみやすい環境をつくりだすことに狙いを定めた。　配置計画においては，棟間の外部空間をポジティブな中庭のつらなりとしてとらえ，内外の空間が一体化して患者の生活圏となるように志した。　内部においては，各病室の広さを医療法による規制の下隅におさえるかわりに，各階ごとにラウンジ的なディールームを確保し，各棟ごとの食堂とあわせて，昼間の患者の生活圏にヴァラエティを与えた。　病室構成は，空間の効率的利用のため，四人室と八人室の中廊下型配列に帰着したが，三面採光となる八人室の突出部は，外部空間に陰影と分節化をもたらすと共に，ディールームよりさらに小じんまりとした〈たまり場〉となることを期待している。



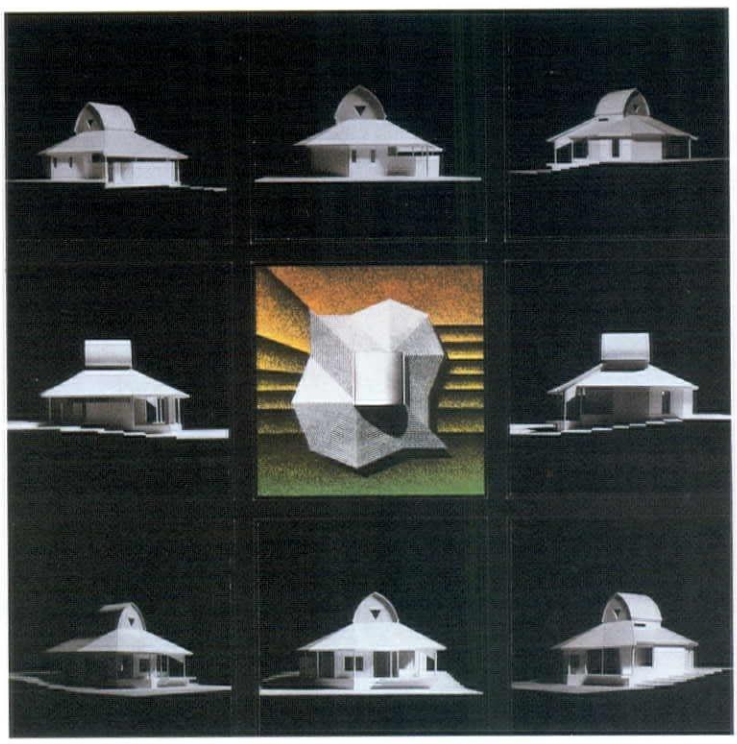
設計者	渡辺武信設計室(渡辺武信・伊藤昭男・田代裕子・山口明夫)
協同者	安斎建築設計事務所・安斎正弘(構造) 創玄設備研究室・富井達治(給排水・空調) 中村電気設計事務所・中村明博(電気)
建物所在地	茨城県竜ヶ崎市
工事予定期間	1984年12月～1985年10月
主体構造	鉄筋コンクリート造・壁式構造，一部鉄骨造(厨房および車庫)
主要仕上材料	屋根：コロニアル葺，外壁：アクリルリシン吹付　天井：不燃ビーリング　内壁：プラスター，VP　床(一般)：長尺ビニールシート，(病室)：タタミ敷
敷地面積	20,530㎡
建築面積	2,947㎡
延床面積	3,682㎡（第一期工事分，閉鎖病棟：男子64床，女子64床　開放病棟：男子40床，計168床）　なお第二期工事として720㎡(開放病棟：女子40床)が予定されている。

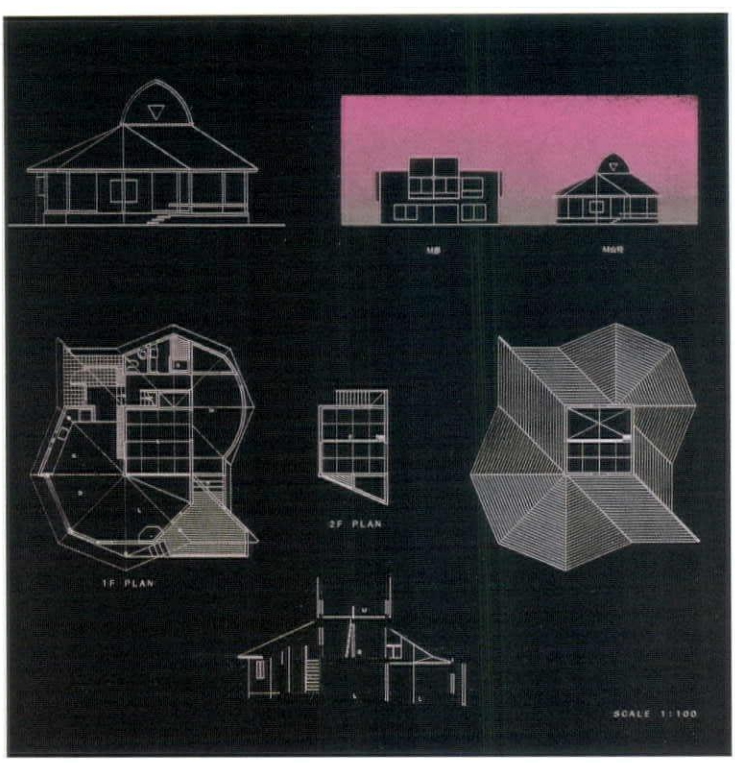
渡辺武信
1938年1月生まれ。
1962年東京大学工学部建築学科卒業。
1964年同大学大学院修士課程修了，論文《空間の成立》によって工学修士号取得。
1969年同大学大学院博士課程修了。
1969年個人アトリエとして渡辺武信設計室を開設，1974年，法人組織に変更して，現在に至る。
1974年日本建築家協会会員。



槇 文彦［特別出展］

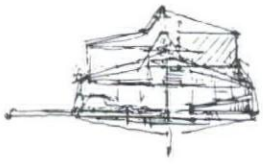
Fumihiko Maki

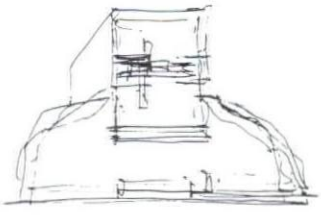




藤沢市立体育館











IMAGE

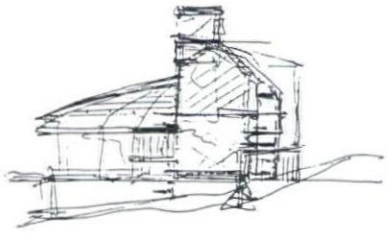
この山荘を考えていた頃（1980）は丁度藤沢市立体育館の基本設計が進行していた時期でもあり、其にふくらみをもった空間を模索するスケッチがみられる。また、M邸とは対比的に、多焦点・多軸の回転性のある空間をつくっている。

PROGRAM

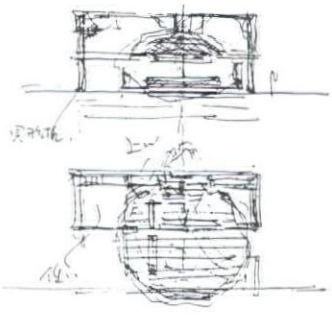
場所は軽井沢。南に向かって緩い傾斜のある木立の中。3つの小さな個室とそれを囲む開放的な居間・食堂がある。

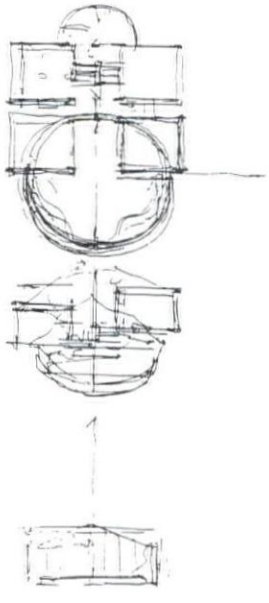


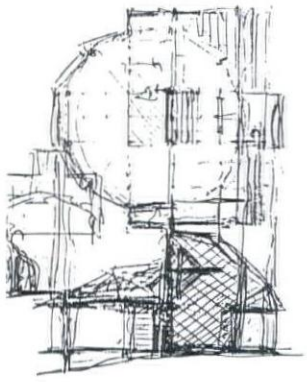


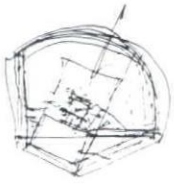


Karuizawa











M山荘

■《SD Review, 1984》展覧会を見て

実作と展示作品の関係

●

吉田研介

会場は下手な現代美術展を見るより力のこもった作品が揃っている様に思われ，いつもながらの熱意に感心すると同時に，本物の建築の方の力が落ちなければいいが，などと心配してしまった．　ただでさえ割りの合わない設計料で頑張っているのに，それにまた賞金の5万円をはるかに越えたであろう作品には，そののめり込み様に敬服し，これは業だなと我が身を振り返って苦笑する．

会場で出合ったY氏とI氏と三人で立話しをしながら，実はこの展覧会の感想を意地悪な編集者の御厚意によって（応募してふられた）この私に書かせてもらうことになっていたので，その主旨を二人に披露してみた．それは概略次の様な内容であった．

まず，私がこのドローイング展に興味を持ったのは，実現することが条件になっていることである．　この点が最大の特徴であり，単なるプロジェクトのドローイング展と区別しなければならない点でもある．　しかし，気になるのは，過去二回を含めて会場の力作を見廻すと，コンセプトやイデーが，ひとつの完結した〈作品〉となってひとり歩きしている様に見えることである．　コンセプトやイデーが自立すること自体を否定するものではないが，この展覧会の様に〈実現〉を前提とすることとどう関係があるのか．　せっかく実現する建築と取り組んでいながら，何故その建築自身に込めることができないのか．実体というにはあまりにも壮大な〈作品〉をつくるチャンスを得ながら，何故あの様に不自由なパネルの中に，自分のコンセプトやイデーを書き直そうとするのか．　これが私の素直な感想であった．

ところがこれに対してY氏は，出来たものだけが建築ではない．　建築にするのは単に技術の問題で，今日，その技術的問題を云々するあまり，コンセプトを認めようとしない風潮があって，それに対しても，リアリティの裏付けあるコンセプトをこういう場で訴えていく必要がある，と反論するのである．
私は，まったく逆のことを考えていた．　自らの建築を，建築という実体以外で説明したり表現しようとする風潮があって，雑誌などでも，コンセプトやイデーが作品に添えられて，それが明快であり，インパクトを与えるものであると，実体は二の次にして，評価されているということがないだろうか．　この種のことが助長されていくと，建築の建築性が軽んじられて，分かり易く説明の付き易い建築のみが建築として評価されはしないか，ということが気掛かりなのだ．　重ねて断わっておくが，コンセプトやイデーの価値を否定しているのではない．　だから，実体をつくるチャンスのない者，あるいはそれを放棄した者は別なのである．　彼らが，自分のコンセプトやイデーを表現する最も有効な手段をドローイングや模型に求めたというのなら話は別なのである．　しかし〈実現〉を前提と考えるなら，作品以外に，添加物によって自分のコンセプトやイデーを補塡するということが，建築以外の分野にいったいあるだろうか．　モノをつくり出す分野にしても，行為によって表現する分野にしても，〈作品〉をつくる分野では，そこにすべてが込められるのではないだろうか．　〈結果〉は単に技術の問題などというのは，建築の分野にだけ許された論（言い訳）とでも言うのだろうか．

Y氏の意見を裏付けるように，この展覧会では，審査を完成前に行なっている．　Y氏曰く――完成したものだけが〈建築〉ではない，と．　しかし私の意見にも裏付けがある．　漏れ聞くところによると，今回の審査で，よく作風の知られた建築家の応募案（落選した）が，最後になって，えっ，あの人のだったの，ということがあったらしい（落ちたこと自体を云々するのではない）．　この落選案は竣工したらおそらく雑誌に発表されるだろう．　その後，写真だけ見て，学生でも，あっ，誰々のだ，と言い当てられるのではないだろうか……．　図面の段階で見ようとするなら，図面では分からない実体からのみ滲み出る様なもの――これも建築性のひとつだが――が，見落とされはしないか．

一方，I氏の意見はこうであった．　作家の発想の本源を見て，その実現への変化（プロセス）を見たい，と．　これはY氏と似て非なるものである．　これなら実現を前提とした意味がある．　これは，カラヤンや小澤征爾の練習風景を垣間見たり，文学などにおける作家のノートをのぞく興味と類似したものであろう．しかしその練習風景やノートは，決してこの会場に並んでいるほとんどの，用意された，コンセプトやイデーを結晶させて〈作品〉としたものとは異なるのではないだろうか．

私もI氏と同じような興味は持っている．しかし，それをこの展覧会の意義とするなら，この催しのテクニック論として，今のままでいいとは思えない．　審査や展覧会の開催時期にも問題があろう．　出す方も，これ見よがしに，実物から自立した〈作品〉と思われる様なものを出すのではなく，正直にそのプロセスを見せてくれる方がいいのではないか．

今回は審査員の槇氏の〈模範回答〉が飾ってあった．　氏は何を見せてくれようとしたのだろうか．　氏の建築は優れたものに違いない．　それを見せてくれようとしたのなら，やがて発表されるであろう雑誌を拝見すれば，その方が分かり易いに違いない．　あの美しい〈オブジェ〉としての図面パネルと白い模型でもあるまい．　失礼ながら，あれなら私にもつくれる．　私が一番うれしかったのは，モヤモヤとしたスケッチが添えられていたことであった．　先の，小澤征爾やカラヤンの練習風景を垣間見る，あの面白さがあった．

ちなみに私の応募案は（意地悪な編集者の厚意に甘えて書かせてもらうなら），今，かくし絵建築に凝っているので，そのかくし絵の〈秘密〉をこういうメディアを通じて，展覧会に来た人にのみ明かす，ということをやってみようとしたものである．　モンドリアンのコンポジションによる軸組（壁の下地）と，施主の星座による電気配線を模型で見せたかった．　でき上がったら隠れてしまう〈秘密〉を施主と私と，展覧会を見に来た人のみが共有する……．　まさにぴったりの機会だと考えたのであるが，残念ながら永久に壁の中に隠されてしまった．

●よしだ・けんすけ／建築家

《SD Review, 1984》
出展作品のその後

●1984年10月現在

■橋本バプテスト教会

設計：東孝光
竣工：1984年3月
《新建築8409》
《建築文化8409》

■古河の歯科医院

設計：設計組織アモルフ
竣工：1983年8月

■ゴールドウィン富山工場

設計：荒知幾
竣工：計画進行中，未定

■茂木邸

設計：安藤忠雄
竣工：1983年12月
《新建築8404》

■釜山海高徳寺山門

設計：大浦洪二
竣工：1984年11月予定

■西村邸（HOKN）

設計：小川富之
竣工：1983年11月

■N邸

設計：小宮山昭
竣工：1983年8月
《新建築8404》
《週刊読売住宅》

■28家族のための小広場

設計：斉藤年明
竣工：1984年5月

■サンテラス・ユニー

設計：鈴木エドワード
竣工：計画進行中，未定

■C.P.M.スタジオ

設計：セクションR
竣工：1983年12月
《新建築8409》

■六地蔵の家

設計：高松伸
竣工：計画進行中，未定

■I氏のアトリエ

設計：巽順
竣工：1984年8月

■宮城カトリック学園・石巻カトリック幼稚園

設計：田村宏治
竣工：1983年10月

■都立埋蔵文化財調査普及施設

設計：戸尾任宏
竣工：1984年11月，1985年4月オープン

■新ゆりグリーンタウン高層集合住宅

設計：富永譲
竣工：1984年8月

■四天王寺学園第2期計画

設計：中島龍彦
竣工：第1期A1984年7月
　　第1期B1985年7月予定

■苦楽園の家

設計：中野誠一
竣工：1983年10月

■洗足学園大学・前田ホール

設計：三上祐三
竣工：1984年5月，1984年10月落成



〈SD Review, 1984〉第1会場夜景

撮影＝堀内広治・泉弘子・有川幸雄(新写真工房)　会場ディスプレイ協力＝元倉真琴＋建築計画　会場照明計画協力＝ヤマギワ株式会社

〔色〕

中村誠 グラフィック・デザイナー

いろ

8401——栗津潔
8402——金澤根
8403——村上静男
8404——宇佐美圭司
8405——早川邦彦
8406——川本恵子
8407——栗辻博
8408——村井修
8409——武井邦彦
8410——黒木靖夫
8411——三輪正弘
8412——中村誠

色彩コンプレックス

私が生まれ育ったのは，岩手の小都市盛岡である．　幼い頃の冬，よく母の背中に背負われ，「かくまき」という毛布のような防寒具で，頭からすっぽり覆われて，街中に出たものである．　母の体温を，小さな体全体に感じながら，背中ごしに三角形に見える外の世界は，一言でいうと灰色の風物であったように思う．

私の記憶の中には，小雪まじりに見える朝市であったり，人影の少ない雪の街中を，どこまでも遠く歩いて行ったような印象が，強烈によみがえってくるのである．　それは定かなものではないのだが，もし「故里を一口でいうと……」と質問されたら，私は「グレー」といってしまうだろうと思う．

よくよく考えて見ると，私の生まれ育った時期は，もう半世紀も前のことであって，事実ほんとうに色彩の少ない時代であったように思う．　それは昭和の初期であって，東北の片隅の街中には色彩らしい色彩は，あまり無かったようである．　たしかに四季おりおりの自然の変化の中に，鮮烈な色彩のハーモニーも目にしながら育っているし，故里の山野の色の素晴らしさも記憶には消えてはいない．　それなのに私には，幼ない頃の印象は，どうしても母の背中から見ていた「グレー」の世界になってしまうのである．　よく考えて見るとそれは，半年近くは寒い冬と，真白な雪の景色にとじ込められていたからだということになるのかも知れない．　ただ盛岡周辺の積雪量は，そんなに多くはなく，だいたい30センチ前後ではなかったかと思う．

中学生になった頃，私は絵と写真に夢中になった．　ことに冬は，写生をするのが困難であったので，よく安いカメラを手に，冬の街や，農家の周辺を撮りに出かけた．　モノクロームの時代であり，フィルムの感度も品質も充分でないことに加え，自分で現像や，引き伸ばしまでやってしまう興味にひかれていたため，とても今日この頃の雑誌で見られるようなきれいな画質等は得られべくもなかった．　ことに冬場は零下10度前後は日常のことであって，現像液の温度を一定に保つのがとても困難であったし，引き伸ばしをするときのバットの液を，火鉢の上で温めながら印画紙を入れたりすると，伸ばしムラが出てしまうなど，とても素人の手に負える時代ではなかった．

それでも雪景色は良く写った．　感光度の低いフィルムは，よほど条件が良くないと満足に映像を結ばない時代であったのに，雪の白い反射は，ネガのフィルムに充分にコントラストをつけてくれた．　岩手の農家の曲屋や，濃い茶褐色の杉木立につもる雪は，手頃なデフォルマションになって，白と黒の画像を計算以上に再現してくれた．　今思うと，リコピーで何回か複写したような粗雑な画像であったのだろうと思うのだが，私はしばしば，その偶然的なビジュアルの世界の出合いに狂喜したりした．

＊　　＊　　＊

母の背から見た幼児体験的な視覚と，中学時代に夢中になった，雪の写真の世界をプラスしたものが，今でも私の，大きな色彩経験であるような気がしてならないのである．　そのことを思うと私は，ときどき「色彩コンプレックス」におちいってしまうのである．

私は大先輩の故山名文夫氏の描く，資生堂の広告に憧れてデザイナーになった．　山名氏のイラストレーションは，あのビアズレイの描く，妖艶な白黒の線の乱舞から影響を受けて完成された，独自の境地のものである．　この無彩色の世界は，私の幼児体験と無縁ではないようである．　しかし資生堂の宣伝部に入社した後の私にとって，このイラストレーションの完成度は到底私の手の及ぶ世界ではなかった．　私はその才能不足にすぐ気が付くと，もともと好きな素材であった写真を駆使して，資生堂の美人像をつくりはじめた．

昭和35年頃までは，そのほとんどの広告はモノトーンで表現されることが多かったし，たとえ4色カラーの原稿でも，私はできるだけ白と黒との写真画像を，中間ディテールを，わざと消して——あの雪景色を顔に置きかえるような作画を意識的に行なった．　そしてブランド名や，商品だけに色彩を使うように心がけて，私のもつ「色彩コンプレックス」を逆に利点に置きかえるような仕事を続けていた．　——しかし，しかしである．　あの東京オリンピックを境にして，カラーテレビの隆盛や，印刷媒体のカラー化現象の隆盛は，私の「色彩コンプレックス」などにはおかまいなく，広告の世界に浸透して，広告はますますカラフルな時代になっていった．

しかも，その頃からグラフィック・デザインの世界では，関西系の作家の素晴らしい活躍がはじまっていた．　早川良雄，山城隆一，田中一光，永井一正，横尾忠則氏等々，驚くほどの色彩の華麗さと無限の可能性の世界を次々と繰り広げて，とどまるところがなかった．

私は即座に，これは幼児体験の差だと思った．　あの何百年かの日本の文化と歴史に囲まれた中で，自然に伸び伸びと目にして来た風物の色彩が，彼等の才能の中に，無意識の中に浸透して，次々に花火のように開花しているのだと——．　しかし，それらの人達の色彩を自分のものにするということは，どう取り入れたつもりであっても，とても無理なことであった．　私は深い「色彩コンプレックス」におちいる感じだった．　そして，ただひたすらに自分の世界をウロウロし，戸惑いを続けながら，とうとう今日に到ってしまった．

＊　　＊　　＊

話が文字通り飛んでしまい恐縮だが，先日急用ができて，パリーに飛んだ．

ひとつは，日本のポスターの招待展が，パリーの二カ所で開かれているので，それらの見学のためであった（日本の12人のグラフィック・デザイナー展とAPA展）．　そのひとつの会場で，フランス側の主催者の一人に，「日本の色彩は不思議ですね．やはりパリーには無い魅力が見えますね．」と言われて，私は心中びっくりしてしまった．　たまたま私のポスターも，その批評の中に含まれていたので——自分では意識していないのに，やはり「俺にも日本人のカラーが少しはニジンでいるのかな？」と，「色彩コンプレックス」の頭を少しはなでられたような気がした．

そのふたつ目の用件は，パリー在住のデザイナー，セルジュ・ルタンス氏に，資生堂の海外での広告表現依頼をするための打合せであった．　ルタンス氏はまた私にとっては，すばらしい色彩の先生である．　ポスターの中のメイク・アップの色彩の完成度や，アクセサリーを自ら制作して撮影用のオブジェとするなど，フランスの文化と風俗の土壌を，ふんだんに自分の感性にミックスさせて，見事な色彩キャラクターを作りあげている作家である．最近は海外の広告表現のみではなく，メイク・アップ製品の色彩計画にも参加し，売上げを急速に伸ばす役割りに大きく貢献したりしている……色彩の天才の一人なのかも知れない．

ルタンス氏と杯をかわしながら話を聞いている内に，終り頃には，その情熱とカラーに対する識見に圧倒されて，ちょっぴりポスター展でなでられた頭の中に，またまた「色彩コンプレックス」を大きく育て，帰国する破目になってしまった．

＊　　＊　　＊

パリーからの帰りは，北極廻りの飛行機であった．　窓から見る雪原と遠く果てしない白い世界が，「そこからまた色がはじまるさ」と語ってくれているような気がして，静かな励ましに思えたのは幸せであった．　心は「灰色」ではなく「純白」の気分になっていた．

●なかむら・まこと

NICE SPACE

ケルン大聖堂　Dom Cathedral, Köln

ケルン，西ドイツ　1248年起工，1842―80年竣工　Köln, West Germany

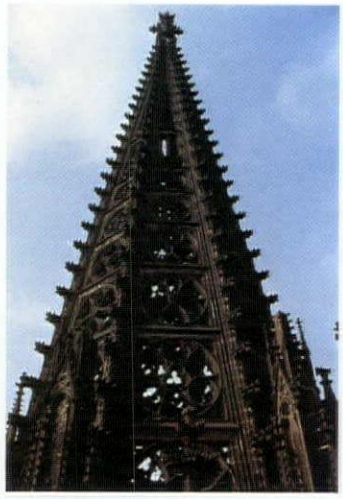


①

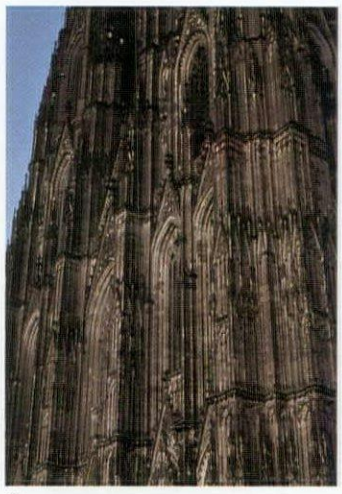
駅前大聖堂：ケルナー・ドーム　　岩村和夫

たとえば月並に，ハイデルベルグからデュッセルドルフへと汽車の旅をするとしよう。　マインツを通り，観光幹線のライン川に沿って北上，ボンを含めたいくつかの小都をやりすごし，見慣れたカタログの風景を反芻した後，川向うに凹凸の激しい都市のスカイラインを認めれば，それがケルンである。工業地帯の右岸から都心の左岸へゆっくり移動する左手の車窓に迫りくるケルナー・ドームの黒い偉容。　欧州の大都市にあって，駅前に大聖堂が聳える街を私は他に知らない。　ラインに影を落し，駅前広場を圧する157mの2基の鐘楼は，いやでも旅人の目を射ることになる。　北ドイツへ，オランダへ，あるいはベルギーへと旅程のトランスファー。　こうして行き交う何千何万という人々の記憶に刻印されてきたゴシックである。　13世紀半ば以来，600年を超える建設期間が象徴する歴史的な執念は，戦後40年を迎えんとする現在，《4711》のオーデコロンの香りにオブラートされ，足下にめぐらされたコンクリートのパレットによってその生々しさを凝結されながらも，ドイツ最大といわれたケルンの旧市街地を制している。

ところで，バウハウス創立のモデルとなった大聖堂の現場に置かれたバウヒュッテは，時代思潮を具現化する総合的な建築芸術・技術の現場であると同時に，建築教育機関としての存在理由があった。　すなわち，建築の芸術としての統合性を求めた人々のひとつの理想的なプロセスのあり様が，中世来引き継がれてきたゴシック大聖堂の完成という，宗教・政治的事業の達成を機に精神の昂りと共に具体的な姿を見せたのである。　そしてドイツ，特に



③



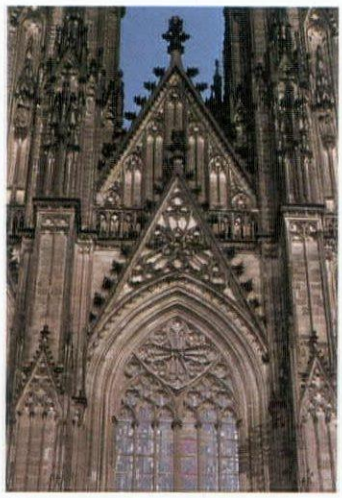
④



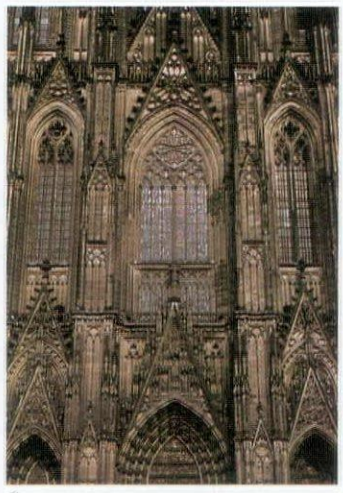
⑤



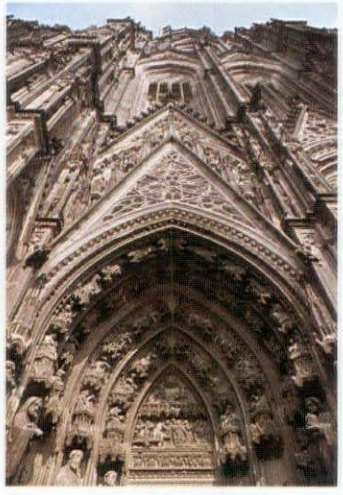
②



⑥



⑦

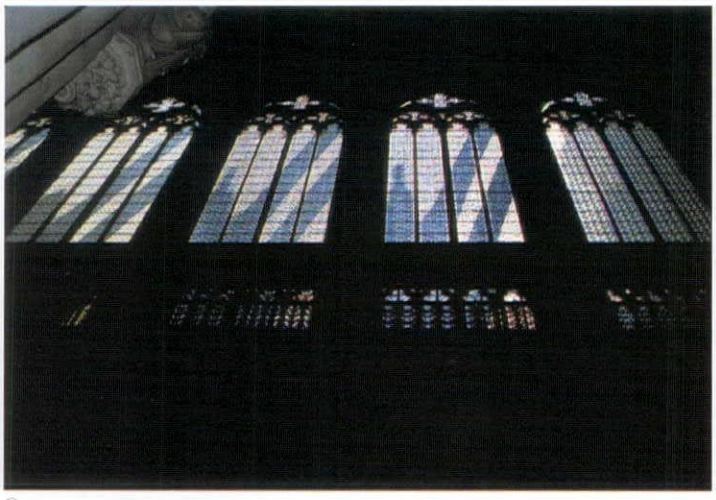


⑧

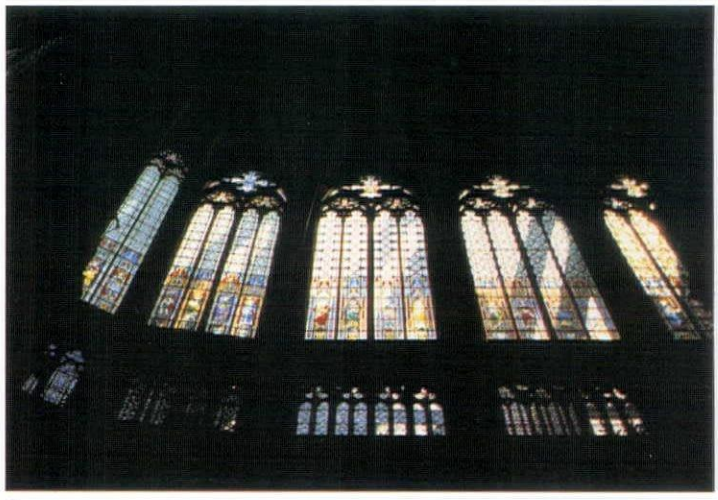
近代ドイツのフレームを形作ったとされる19世紀のプロイセンにあって，13世紀に着手されていた大聖堂を完成させることで，ドイツという民族と国家としての意志表示を内外に試みたのであった．　バウヒュッテによるケルナー・ドームがその象徴としてパリ，アミアン，ランスなどフランスゴシックの影響を受けた当初のプランを忠実に守りつつ，完成を見たのはようやく1880年のことである．

ところで，フランスゴシックを見慣れた者にとって，ケルンのゴシックはどこか異質に映ることだろう．　シャルトルの合理性，明快さ，ノートルダムの優れたプロポーションと内部空間の暖かさ，ルーアンの繊細さ，厳しさ，ランスの華麗さ等々，それぞれ異なる印象のスペクトラムから，様式のオリジナルとしての迫力が，新たな技術の展開に遭遇した困難を乗り超えて到達した喜びの高みとして伝わってくる．　ケルンの場合，ミラノの大会堂に似て，ブローアップされた伝播様式の巨大なスケールに，かつての宗教的，政治的な宿命を負った時代の昂りを思うことはあっても，それ故の冷やかさが先に立つように私には思われてならない．　ともあれ，9割方を戦災によって破壊されたケルン旧市街地の復興は，大河ラインに臨み，天上に近づく大聖堂を拠り所として果たされたのであった．　そして，灰色のコンクリートの人工地盤から立上る無数の装飾を戴く黒い巨大なマッスは，現代の駅前の風景として十分にシュールなのだ．

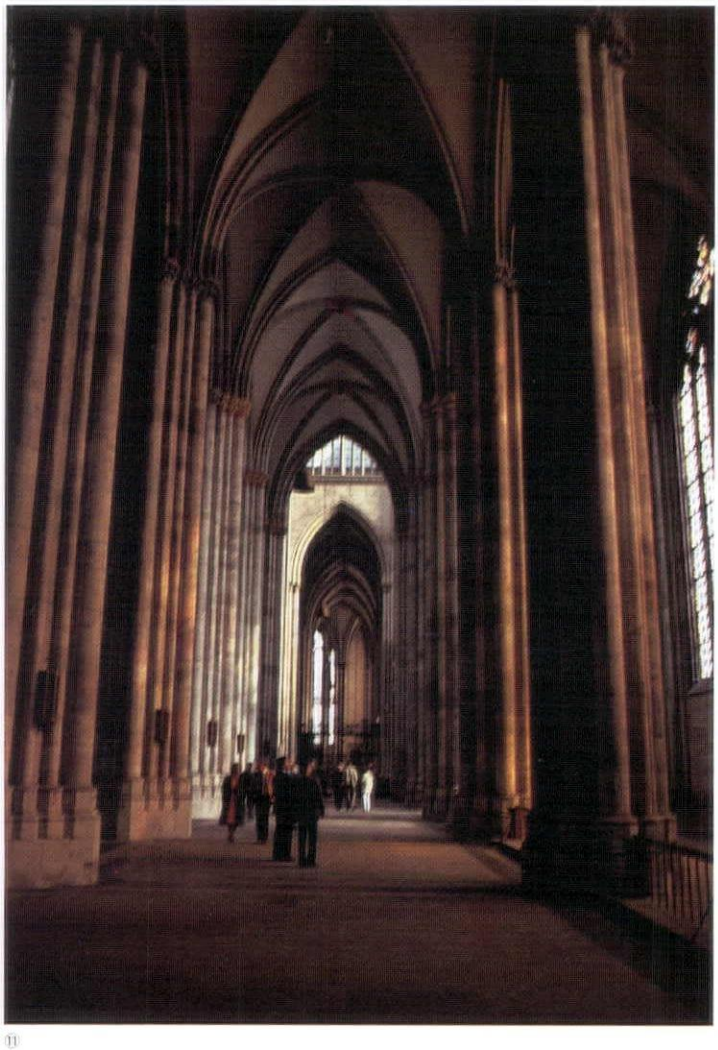
●いわむら・かずお／建築家



⑨



⑩



⑪



⑫

19世紀の象徴として　　堀内正昭

ドイツのゴシック聖堂のなかで，フライブルクの大聖堂とマールブルクのエリザベート教会が個人的に印象深い．　前者はドイツ独特の単塔式の，後者は身廊・側廊とも同じ天井高をもつハレンキルヒェの，それぞれ見事な教会としてである．　ケルン大聖堂は前二者と違い，双塔式でフランスのアミアン大聖堂を範例にしている．　しかしながら，その巨大さがケルンに足を向けさせ，建立された時代が私の興味を引かせる．

ケルン大聖堂の前広場は奥行にゆとりがないので，いやが上にも教会のファサードは我々に迫ってくる．　そして広角レンズで撮った写真は，先すぼまりのデフォルメされたものとなる．　しかし，その変形されたがゆえの威圧感と地上157mの双塔の上昇感こそが，この大聖堂の真の姿かと思う．　私には，まずこのファサードの印象が絶大であった．

一方，堂内はアミアンと違い，リブを受ける付柱が何物にも妨げられずに一直線に伸び，簡潔で力強い上昇感を生み出している．　この内外の上昇感に魅せられた者は，今度はその大聖堂の上に立ち，ケルンの街を眺めたいとい



⑬



⑭



⑮

①大聖堂側面全景　②大聖堂正面　③④⑥⑦⑧正面ディテール　⑤大聖堂アプス側を見る　⑨⑩大聖堂内部　⑪大聖堂側廊　⑫アプスより見る　⑬祭壇　⑭夜景　⑮ライン河を隔てた遠景　写真：堀内広治，堀内正昭，山田美智子，ドイツ観光局

う欲求にかられることになる．

大戦中の徹底的な破壊で，ケルン市街にドイツの他の中世都市のような見事なパノラマは望めないが，それでもライン川を左手にして見たときの幾つかの尖塔が建ち上がる光景は，遠い昔をしのばせてくれる．

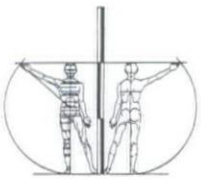
しかしながら，ケルン大聖堂はそう遠い昔のものではない．　その起工は1248年であるが，双塔の上半分と身廊部を未完のまま中断され，1842年に再開，1880年にしてようやく完成された半ば19世紀の建築である．

その再起工を取り行なったのは，プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世である．　この自らも好んで建築スケッチをした国王は，ベルリンにあるシンケルのヴェルダー教会の古典様式に基づく原案をゴシックに変更させたほどのロマンチストであった．　ドイツのゴシック熱は，ゲーテのシュトラースブルク大聖堂の讃辞，シンケルの1810年代の建築プロジェクト，ハンブルクのニコライ教会，ケルン大聖堂と並行して全国に建てられたネオ・ゴシックの教会等，その熱気を十分に感じることができる．　つまりドイツのゴシック熱，あるいはロマン主義の熱狂が，ケルン大聖堂を未完のままにしておかなかったのである．　様式史の流れとしてではなく，時代の象徴として建築を抽出していくならば，ケルン大聖堂は，ドイツにおける19世紀建築の重大なモニュメントとしてあげることができよう．

元来，双塔部分が教会本体に比べて大きすぎ，プロポーションがよくないとされるが，19世紀のゴシック熱の帰結としてもう一度振り返るならば，また別のケルン大聖堂が見えてくるようだ．

●ほりうち・まさあき／建築史，東京都立大学大学院

〈都市に住む〉：ベルリンの実験



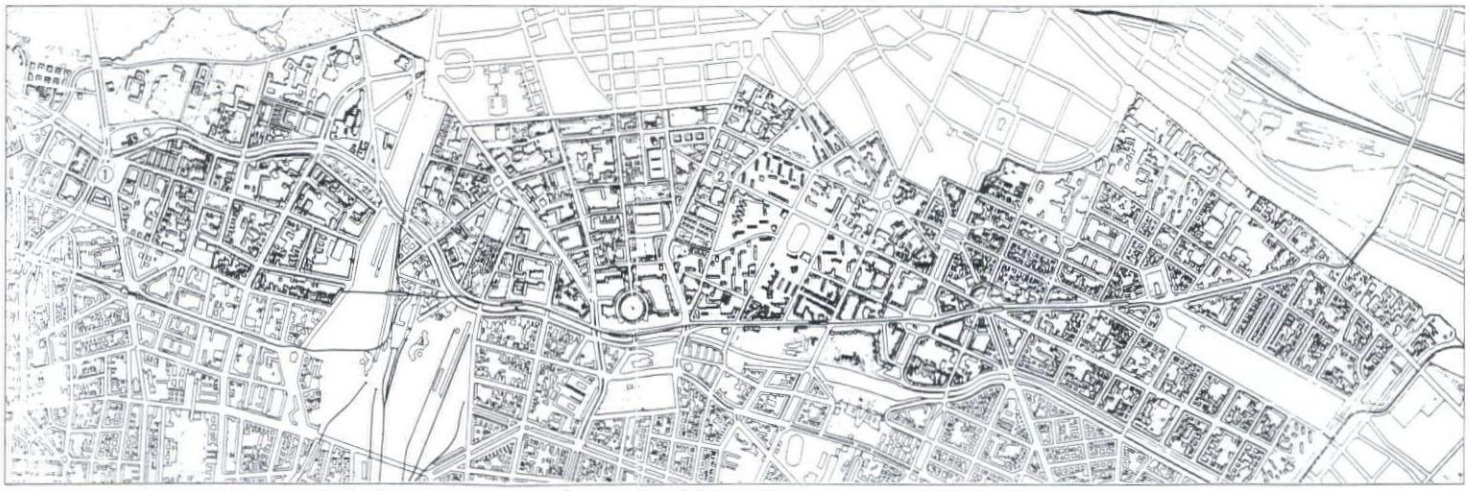
西ベルリンは3年後の1987年に市制750周年を迎える。　同年には様々な大規模な催しが予定されているが，その中心的なイヴェントがIBA (Internationale Bauausstellung Berlin) と略称される，ベルリン国際建築展である。それはベルリンにとっては1910年，1931年，1957年に次いで4回目の国際建築展となるのだが，規模においても内容においても前3回とはだいぶ異にしている。

ベルリンは都市全域が戦災のために殆ど瓦礫と化した状態から，1945年以来，絶えざる復興を進めてきているものの，いまだにその爪跡を残す地区も散在する。　その一方では，都心の一部の地区が居住地としての適切な環境条件を失いつつあるという事態も見られ，ベルリンからの人口流出さえ起きるに至っている。　こうした事態はなにも西ベルリンに限った話ではなく，世界中の大都市の多くが大なり小なり抱えている問題であるが，西ベルリンの場合はさらに複雑な条件が加わる。　即ち，1961年以来ベルリンを二分する〈壁〉が存在すること，そして西ベルリン全体が言わば陸の孤島であり，逃げ道もなければ発展の余地もないという事実である。

今回のＩＢＡは〈都心に住む〉というテーマが掲げられていて，一方ではクロイツブルク地区を中心とした既存の街並みの保存・修復そして再活性化が進められ，その一方では4つの地区，計61ヶ所の敷地に世界各国の著名な建築家を招いて集合住宅などを設計，建設するという二本立てのプログラムとなっている。　こうした大々的な〈都心に住む〉という試みは，前記の事情から西ベルリン市にとっては，都市の存続の成否をかけたものと言っても過言ではなく，限られた容器（フラスコ）の中での実験という性格を必然的に帯びるだけに，黒白のはっきりとした結果が短時間の内に得られると予想され，各国の大都市の関係者が強い関心を寄せる由縁である。

今年度はIBA　Report　Year　1984と称して，9月から12月にかけて，1987年の完成を目ざして進行中の全プロジェクトの現在の段階での全容を紹介する数々の展覧会や会議やシンポジウムが，それらを補完する展覧会などの催しとともに開かれて，今年後半期のベルリンはさながらIBA一色に塗りつぶされた感を呈した。　その中心となるのが〈IBA――理念，実践，成果〉展で，具体的に進行している，もしくは完成済の計画が，豊富な図面と模型とで一同に展覧されており，政治がらみで紆余曲折を経ながら今や3年後に向けて怒濤のごとくに突き進んでいるIBAの全貌が示されるものとなっている。　その他には，〈アフリカ，南米，アジア都市居住区〉展，〈建築・住宅地における代替技術〉展，〈中世以降のベルリン・ロンドン都市内居住〉展，〈コーポラティヴ・ハウス〉展など，〈都市に住む〉という全体テーマに沿った展覧会が大勢を占めた。その中で異彩を放っていたのは国立近代美術館で行なわれた〈理念の冒険：産業革命以降の建築と思想〉展であった。　それは，多数の建築家のドローイングや絵画を分類することにより，社会現象（思想）と具体的な現われ（建築）との関係を明らかにしようという試みだった。

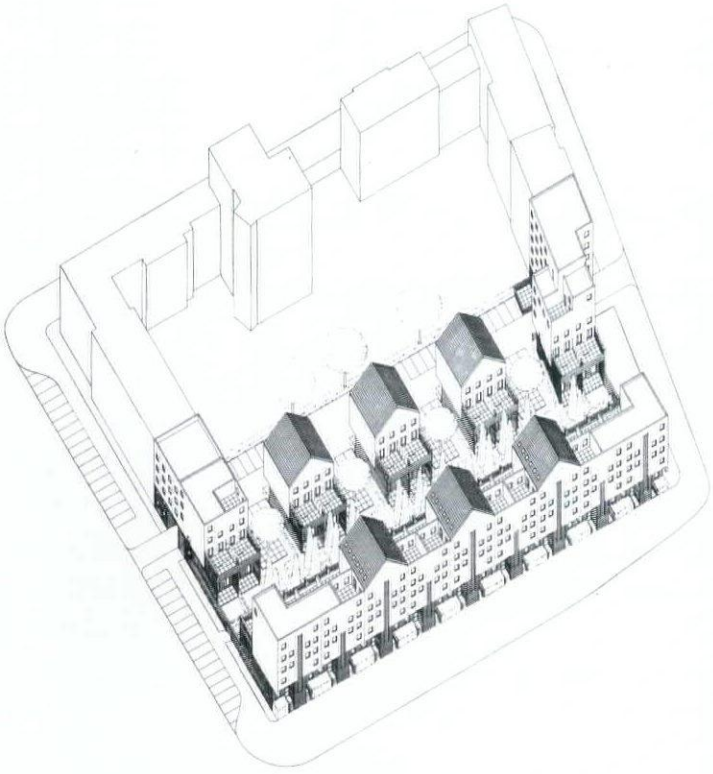
本誌上では以下で，IBAの新築プログラムの中で，既に完成したふたつの集合住宅の紹介と，〈発展しつつある都市における歴史的都心〉をテーマとしたシンポジウムの報告を行なう。　O.M.ウンガースとロブ・クリエ等の設計したふたつの集合住宅は，前者が敷地内に異なるふたつの住棟型式を採用しつつも同一のデザイン言語を適用しようとしているのに対し，後者はひとつながりの住棟を区分けして7グループが共同設計し多彩なデザイン言語を創出しようとしている点で，まったく対比的であり興味深い。

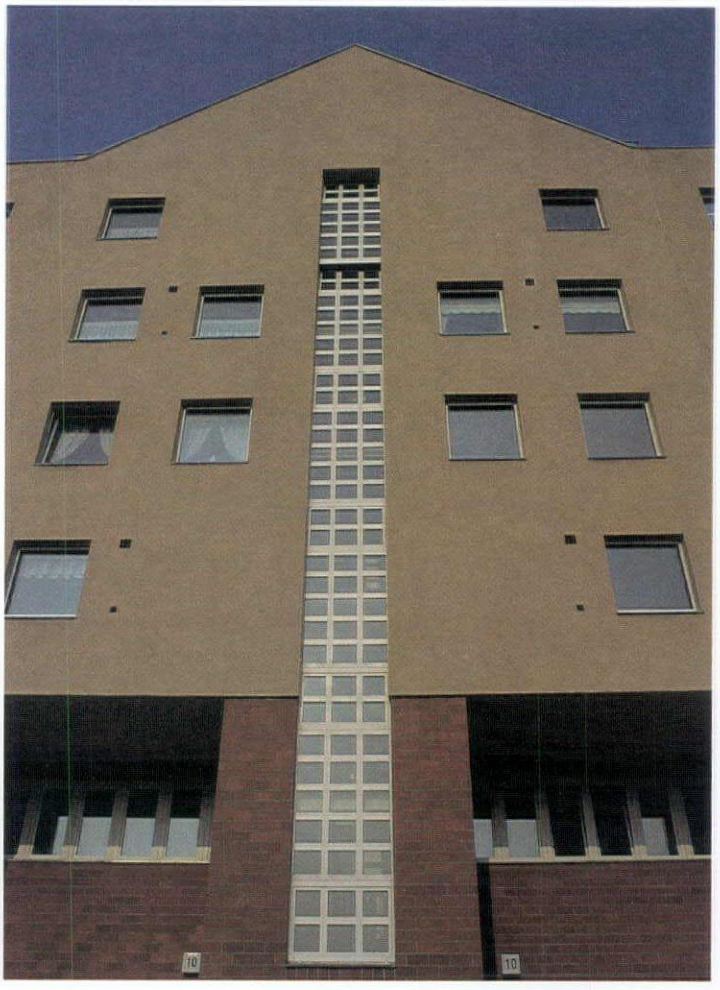


ベルリン国際建築展全体計画（①リュツォウ広場の集合住宅：O.M.ウンガース，②リッテル通りの集合住宅：R.クリエ）

Lützowplatz housing :
Oswald M.Ungers

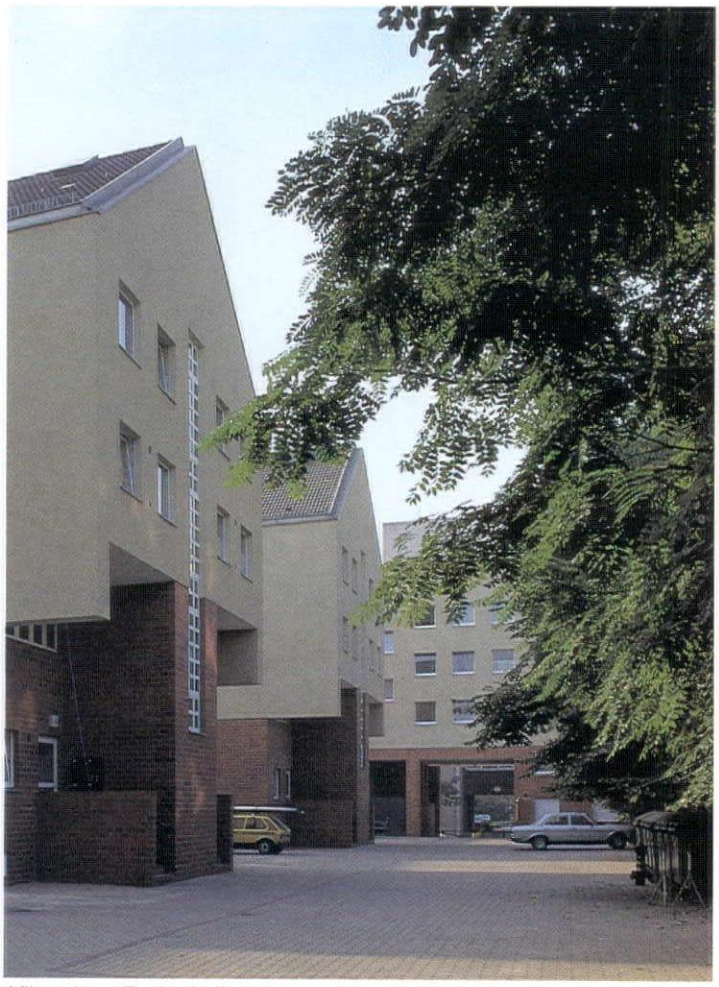
リュツォウ広場の集合住宅　設計：O.M.ウンガース



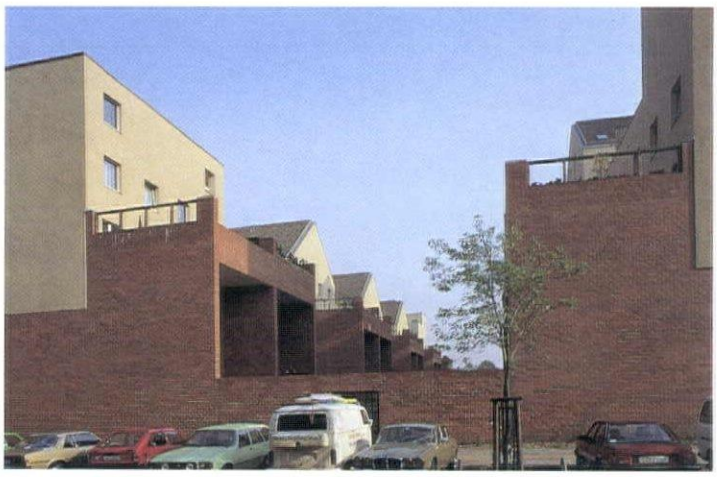




広場（及び幹線通路）に面するファサード．　基壇，主階，屋根（三角破風）という三段構成が守られている．



裏側のアプローチ路．車の進入路でもある．　三角破風の独立棟が建ち並ぶ．

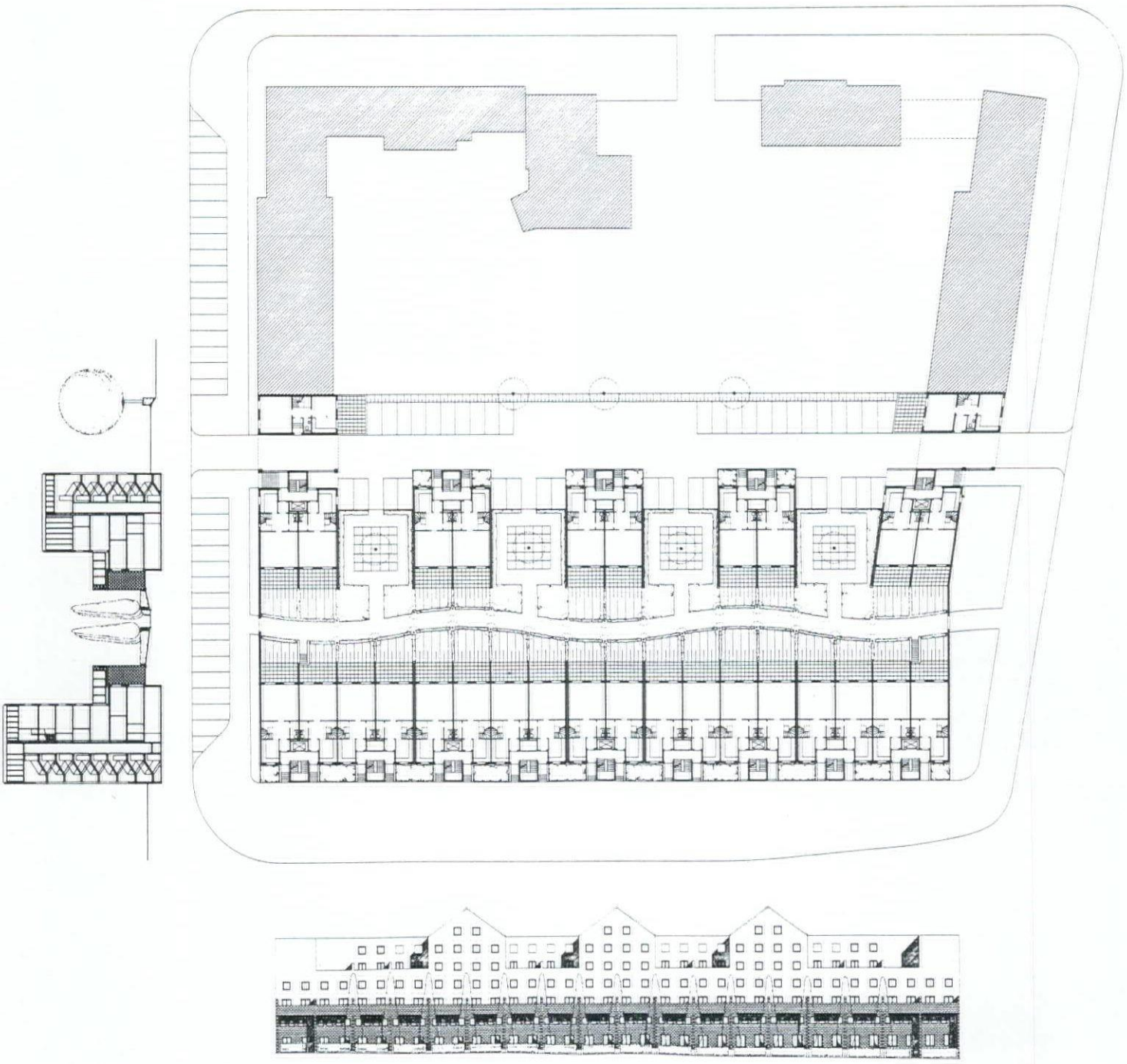




独立棟の間のスペースにはベンチが置かれている．



中央のうねる小道．　すべての居間はこのスペースに面して設けられている．



first floor plan, elevation and section 1階平面図，小道側のファサード及び断面図

リュツォウ広場は第2次大戦前までは矩形平面の素晴らしい広場だった。　しかし，戦後の復興計画の下で，道幅の広い幹線道路がこの広場を突っ切るかたちで計画されてしまい，広場としての体裁は全く失われてしまった。

O.M.ウンガースの設計した集合住宅の敷地は，その広場に面し，そしてまた幹線道路（ランドグラーフェン通り）に直接に接してもいる。　そうした条件をかんがみて，彼は次のような設計意図を提示した。
①失われてしまった広場としての体裁を，再び取り戻す。　②前面の幹線道路の騒音の影響を最小限にする。③同一区画内の他の既存の建物との調和を図る。　④静穏な居住環境を都市の中心部において実現する。

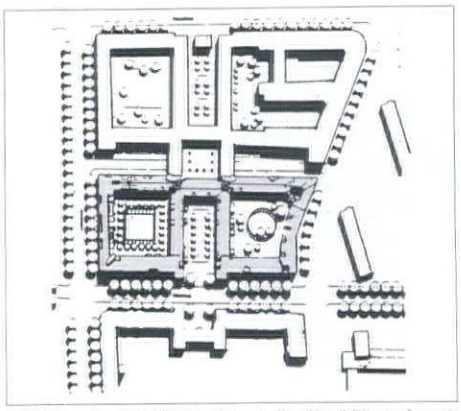
これらをすべて満足することは至難のように思われたが，ウンガースのデザインは見事にその至難の技を達成しているように思われる。

住棟のタイプは大きく3つに分けられている。　即ち，ひとつは幹線道路及び広場に直接面する，長いファサードを持つもので，それはこの住区全体のメイン・ファサードであり，広場に対応しうる適度なモニュメンタリティを有する必要上，3つの三角破風を対称に配した連続住戸となっている。　ふたつめは，敷地の内部に建つ3棟の独立型住戸で，同様の三角破風をいただいて前述の連続住戸との形態的な一貫性を保持しながらも，まったく異なった住戸形式を獲得している。3つめは，敷地の他の2面の道路に接する住戸で，これは直接に隣接する既存の建物との調和を考えて，軒高をそろえ，三角破風を用いずにフラット・ルーフとしている。　以上のように，この集合住宅全体を形態的に見た場合，非常に自己充足的な統一感があるようにも，そしてまた個々の部分の微妙な立地条件の相違を反映して非常に分散的にも見える。　そうした両義性がこの計画の真髄なのだろう。

プラニング上，ひとつ異例でもありまた画期的とも思われる点を挙げよう。　ベルリンに限らずヨーロッパ都市内の集合住戸は，住区を囲う道路に沿って住戸を巡らし，それらの内側の空地を中庭とするのが普通であり常識的な作法とされている。　しかしウンガースは，ここではそうした常套手段を使わずに，幹線道路に面する連続住戸とその内側の独立型住戸群との間に緩やかにうねる小道を設け，敷地の端から端まで貫通させてしまっている。　そうすることで，住戸はすべてこの小道の空間に面し，北向きの住戸はなくなり，とかく生じがちな〈隅の住戸〉の不利な条件も解消されている。　この小道は当然ながら両端では閉鎖されてしまっているので，実際に通行できる訳ではないが，ここでのウンガースの試みは見かけ以上に画期的なものであり，今後の住棟・住区計画にどんな影響をもたらすか興味深い。

Ritterstrasse housing: *Rob Krier*

リッテル通りの集合住宅　設計：R.クリエ　他



全体計画．第一期は南側の2ブロック，第二期は北側の2ブロック

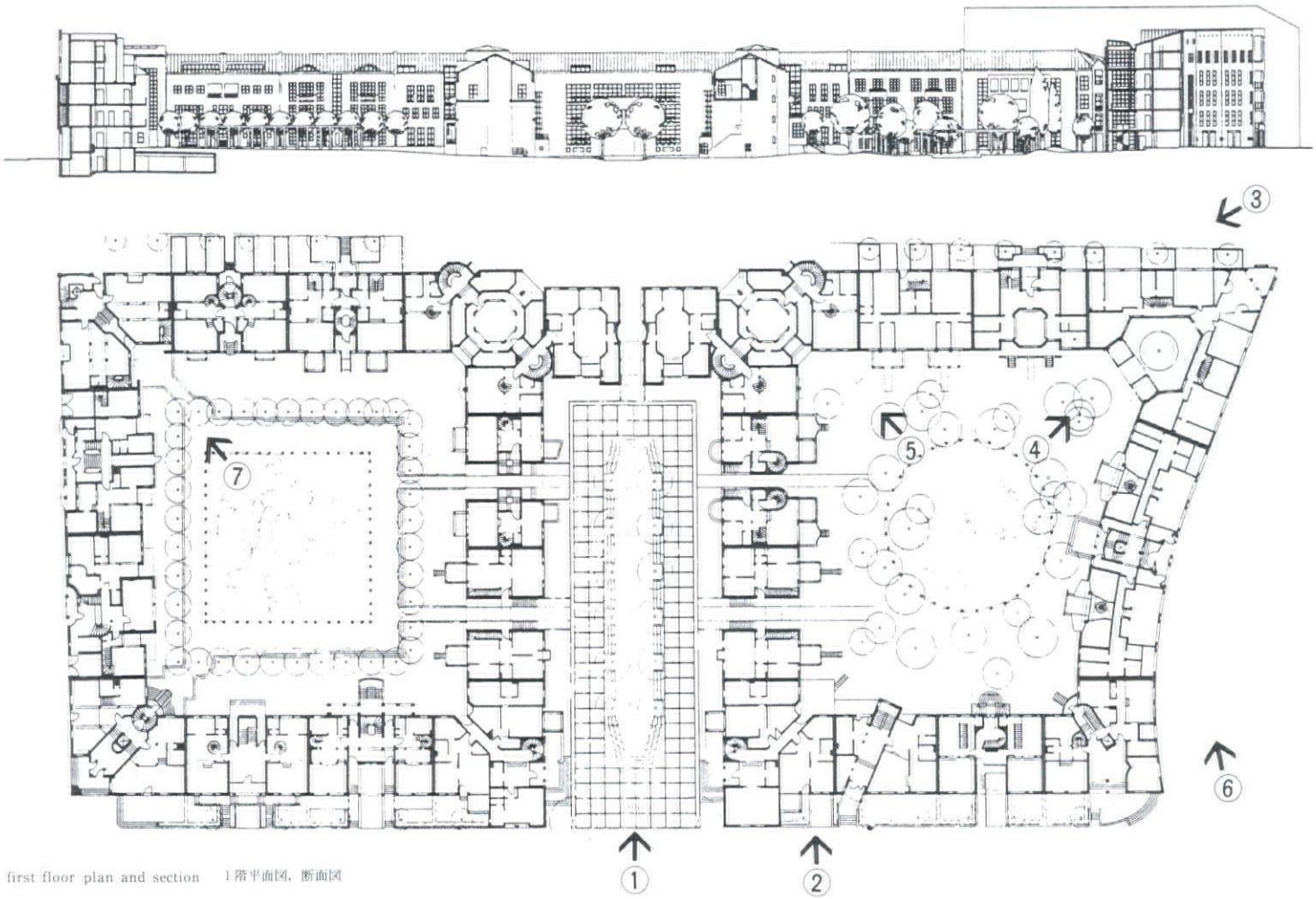
ロブ・クリエが実現させた初めての大規模な集合住宅〈リッテル通りの集合住宅〉の北側に，同名のさらに大規模でさらに興味ある集合住宅が完成した．同じくロブ・クリエが全体計画をなし，実施設計はクリエ自身のグループを含めて全部で7つのグループによってなされている．この計画は，敷地のさらに北側に同規模の第二期工事が予定されており，最終的な評価はその後になされるべきであろうが，現時点においてもクリエのかねて提唱するタイポロジーの実践としてすこぶる興味深く，また成功しているように思われるのである．

住棟計画は，矩形の広い中庭の四周を囲む4～5階建ての連続住戸がひとつの単位となり，現時点ではそれが2単位，最終的には4単位が完成され，それらが細長い広場で連結されるという構成である．

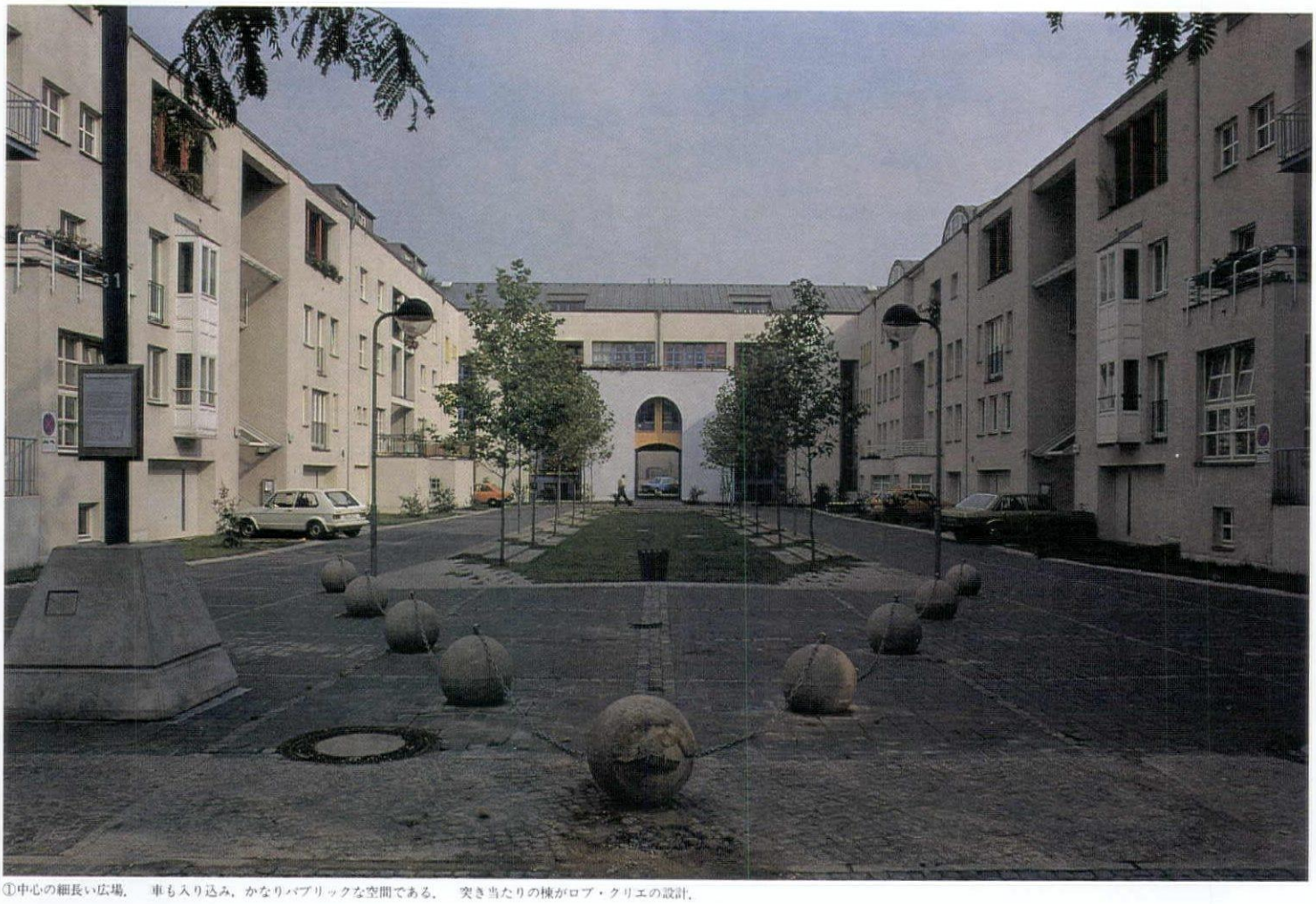
連続する住棟の各住戸は7つの設計グループが，殆んどアトランダムに設計を担当している．そこでは，共通のデザイン言語を設定するのではなく，同一のテーマに対する個々の解釈と解法とが結局のところ全体の統一性に寄与するのではないかという期待の下に，デザインが進められているようだ．従って，ファサードを見た時，そこに使われている言語は，ベルリン市内のあらゆる時代，あらゆる種類の建物からの引用が認められる．ロブ・クリエ自身はもちろんシンケルを直接の参照の対象としているが，その他にも，あるものは合理主義風，あるものは表現主義風，あるものはポスト・モダン風という具合だ．なおかつ大通りに面するファサードはレンガ，その他は白ペンキ塗りを主体にしつつも，各所で異なった色，材料を用いるということで，形態，材料，様式，色，etc，すべてに渡って多様なヴァリエーションが見られる．

それでいて，全体が過剰なデザインの表出によって乱痴気騒ぎに陥ることなく，混然一体となった集合住宅地となり得ているのは，不思議であり，見事という他にない．クリエ自身の担当した部分も含めて，個々の住戸のデザインを見ると，それほど傑出しているものは見当らず，また卓越したものを作り得るほどの自由度が与えられてはいないと見受けられるだけに，なおさら全体の見事さに感心させられるのだ．

その秘密は，ひとつには極めて慎重に練られた住戸平面の豊富な展開と，さらにはタイポロジー理論にもとづいた個々のシチュエーションの相異に対する敏感な対応にあるように思う．前者については幾つかの住戸平面を見れば感得されよう．後者については，写真ではほんの一部しか紹介しえていないのであるが，外隅，内隅，中央，端，入口，通路，等々，あらゆる状況の微細な差異がひとつ残らず取り上げられ，解釈され，そしてデザイン上の差異として表現にまでもっていかれている．



first floor plan and section　1階平面図，断面図



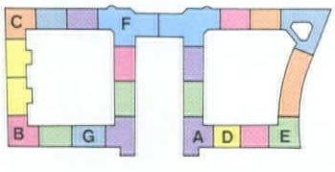
①中心の細長い広場。　車も入り込み，かなりパブリックな空間である。　突き当たりの棟がロブ・クリエの設計。



②リッテル通り側ファサード。　中心広場のゲート的な役目を果たす部分。



③北側ファサード。　変化に富んだ材料，形態，色彩の使い分け。



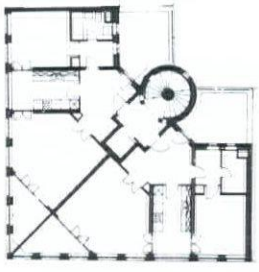
設計者リスト

- B.Benzmüller,W.Wörner
- B.Bangert,B.Jansen,S.Scholz,A.Schultes
- J.Ganz,W.Rolfest
- E.Feddersen,W.v.Herder und Partner
- A.Brandt,T.Heiss,A.Liepe,H.Steigelmann
- R.Krier
- U.Müller,T.Rhode

A



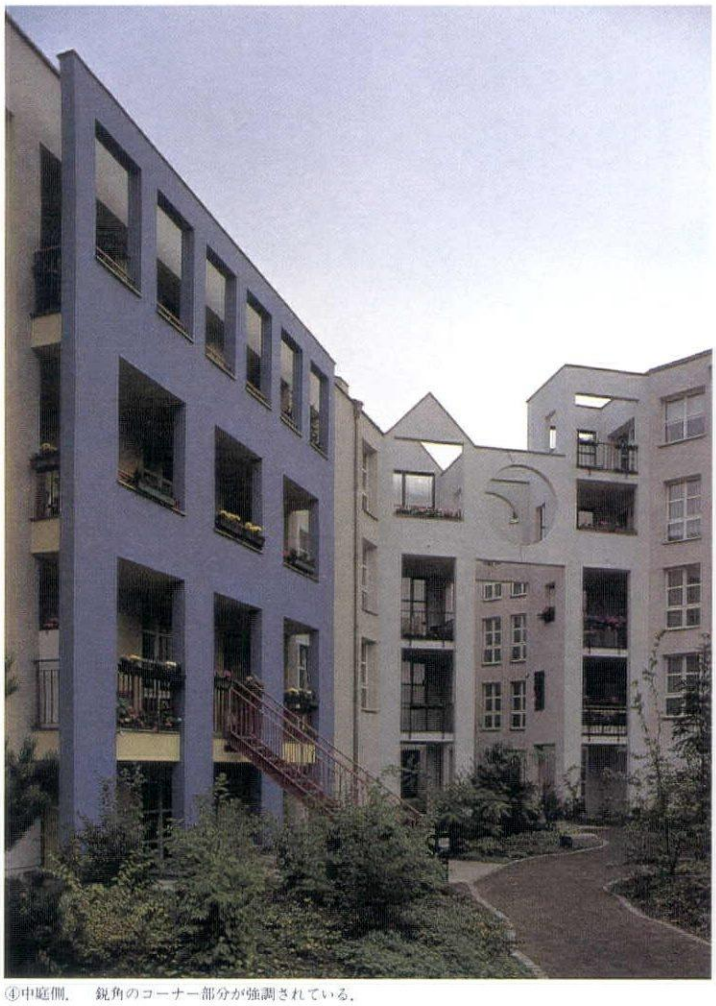
B



C



住戸平面と担当設計者



④中庭側。　鋭角のコーナー部分が強調されている。



⑤大胆な例外が各所に生起する。



⑥アルテ・ジャコブ通り側ファサード。　完全にパブリックな空間（道）に面する外壁はすべてレンガ。

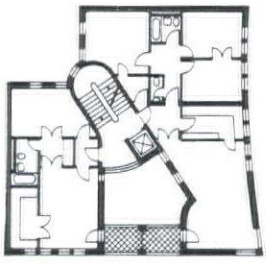


⑦中庭は子供の遊び場。　車は入ってこない。

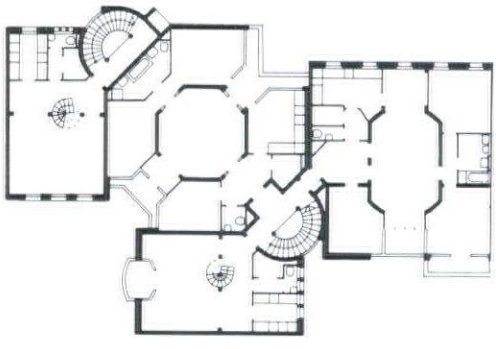
D



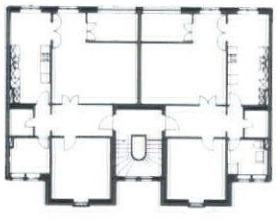
E

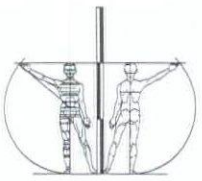


F



G





シンポジウム：〈発展しつつある都市における歴史的都心〉

足達富士夫

〈発展しつつある都市における歴史的都心〉をテーマにしたシンポジウムが，ICOMOS（国際遺跡記念物会議）とUIA（国際建築家協会）の共催で，1984年9月27，28日の2日間にわたって開かれた．場所は西ベルリンのICC（国際会議場）．内容は主催者の選定した世界の6都市――ベルン（スイス），チュニス（チュニジア），パリ（イタリア），プエブラ（メキシコ），プロヴディヴ（ブルガリア），函館――がそれぞれ歴史的都心の現状と課題を報告し討論するという趣向である．

主催者や都市の顔ぶれからこの問題についての最近のある傾向をうかがうことができる．第1にUIAの参加である．ICOMOSの方はもともと保存問題をテーマにしている組織だが，UIAの参加はこの問題が単に都市の中の一部地域の保存ないし修復の問題ではなく，居住環境をどう構想するかという都市全体の問題としてとらえられるほどに一般性をもってきたという背景を示している．現にドイツでは都心部の再開発は〈修復型〉が主流になり，街区の修復や古いアパートの再利用計画が一般建築家のレパトリーの大きな部分を占めるようになってきているし，フランスなどでも数年前からそういう兆候がみられる．

第2に参加した都市の顔ぶれは，パリ，京都，ザルツブルクといったきわめつきの歴史都市ではない．むしろあまり知られていないふつうの都市である．このあたりに歴史的環境のとらえ方の深まりをみることができよう．

さてシンポジウムであるが，ここでは各都市の報告の紹介はさしひかえ，いくつか興味をひいたことを記すにとどめたい．ベルンは主として土地利用と交通の面から現状を解説したが，その中で〈直接民主主義〉が都市計画を進めていく上でブレーキになることが多いという大胆な発言が注目をあつめた．この辺はむずかしい所であるが，現場の担当者のホンネという所であろう．

準備が行きとどいていたのは，プエブラである．会場にパネルを展示したのは函館とプエブラだけであるが，枚数，手間のかけ方において彼の方がまさっていた．その上にビデオをもちこみ，市が総力をあげて準備したという感じである．この町はスペインの植民都市から発しているが，歴史的都心が函館とは逆に文字どおり市のまん中にあり，商業中心として交通が集中し，一方居住環境もよくないままに人口が増えるというやっかいな事情があるらしい．もっぱら交通の悩みを述べていたが解決策はまだめどが立っていないようである．

プロヴディヴは，準備に手間をかけてはいないが町の紹介そのものがおもしろかった．この町はローマの植民都市から発展した町だが，円形劇場の遺跡が現在の市街地のまん中に残され，その一部にさしかかるような形で近代建築がそびえている．この保存はやっかいだろうし，また保存の仕方についても議論のある町であろうが，ともかくこのローマの遺跡と近代建築が直接にふれ合ってつくり出しているコントラストは，ポスト・モダンなどという生ぬるいしろものでなく，ほとんどウルトラ・モダンともいうべき効果をみせている．こういう効果はローマなどでもみられない．古代都市の遺跡といえば柱の穴ぼこかせいぜい石だたみしか知らぬわれわれには印象が強かった．

函館の歴史的街区といえばいうまでもなく函館山のふもとの港沿いにひろがる一帯の町並である．市はこの2年間〈伝統的建造物群保存地区〉のための調査を行っていたので（越野武氏と私が調査を担当）このシンポジウムはあつらえむきのタイミングだった．日本の町並がヨーロッパで細かく紹介されることはめずらしい．そこへ町並や住宅の空間構成の特色，住生活の実際，現在の住環境および将来の姿に対する居住者の意見，さらに将来の町のイメージまでスライドで紹介したので，具体的でわかりやすかったらしく好評だったように思う．ブルガリアの代表は，もちろん外交辞令を含めてにちがいないが，函館がいちばんおもしろかったといっていた．

古い建物の活用事例として教会をレストランに転用した例を紹介したところ，メキシコの代表から疑問が出された．宗教施設を金もうけの観光施設に転用するのはどうかというわけである．この辺は人口が減りつづけ，教会も別の町に移ってしまい，放っておけばとりこわされるのを転用で生かしたもので，人びとにも親しまれているという説明に，しかし質問者は納得したようにはみえなかった．カトリック諸国の中でもことに宗教性の強いスペイン系中米人が，どういう理由であれ納得するはずはないだろうが，このように異文化がぶつかる所が国際シンポジウムのおもしろさであろう．

司会のM.パラン氏（仏，ICOMOS会長）は締めくくりの中で，それぞれの都市はそれぞれ固有の事情があり，各自が独自の解決をみつけるしかないことを強調した．居住環境，交通，住民の合意形成，財政問題など報告の中でも共通する課題は出されているのだが，その解決には共通の方法はない．それはわが国での討論の際にもいつもいわれることである．にもかかわらず異なる文化をもつ都市のかかえる課題と解決への努力は大きな刺戟になると，さまざまのヒントを得ることができる．こういうシンポジウムが積み重ねられることが期待される．

●あだち・ふじお／北海道大学教授

有機建築の魔法（4）

大霊的建築

1

異形の巨人ともいうべき作家夢野久作は，大正12年，九州日報の特派記者として，福岡から上京する．

関東大震災により「五十七年間かかって出来た東京市の大部分は，十数分間で火煙に消え込んだ」(《焼跡細見記》)その姿をルポするためである．

丸の内へやってきた夢野久作は，〈オセッカイな国〉アメリカが教えてくれた鉄筋コンクリート建築の残骸を見て，日本産の地震鯰の怒りに共感する．　鯰も「嘸かし溜飲が下ったろうと思われる痛快さである」と，《街頭から見た新東京の裏面》の中で語っている．

壊滅したのは，「学理ばかりで実際を推し測った最新式の建築ばかりで」，残ったのは，「旧式の設計で出来た鉄筋や煉瓦なぞで，海上ビル，東京駅，帝国ホテル其他である」とし，とくに帝国ホテルをとりあげて，こう言っている．

「〈地震鯰〉に敬意を払い過ぎて，地面に四ツ這いに獅噛み付いた形をして居た丈けに，ヒビ一つ這入って居ない．　聞けば技師は米国でもかはり者で，〈おれの建築のねうちは今は分らない〉と云って居たそうであるが，成る程もうわかった．　日本の鯰と親類だったかも知れぬ」

夢野久作は，フランク・ロイド・ライトの名前をことさらに省いている．　〈変わり者〉の〈技師〉としてあしらい，建築家として奉っていない．

この時，夢野久作は，34才である．　右翼の大物杉山茂丸の長男として福岡に生れ，軍隊に志願したり，父に大学を中退させられたり，父の命で農園を経営したり，一転禅僧となったり，喜多流の能楽教授にもなる．杉山萠円の名で地方紙を舞台に，物を書きだしたのが，29才のころからで，この《街頭から見た新東京の裏面》はまだ探偵小説家として夢野久作を名乗っていないころの仕事である．

大正大震災のルポのため上京するまで，福岡ばかりにいたわけでない．小学校の一時期は，東京の父の家からだし，退学した慶応大学には2年いたし，剃髪して僧となったのは本郷の喜福寺である．　だからこそ，福岡から大東京全滅のルポのため，はるばる上京した久作の目は，異様なまでにはずむのである．

《街頭から見た新東京の裏面》《東京人の堕落時代》《焼跡細見記》は，大正12年から14年にかけて書かれたものだが，これらは震災後のおそましき活気のありさままで描いていて，日本の近代を問う稀有な〈都市論〉〈東京論〉になっている．　壊滅と復興のシンボルは，新建築である．　彼のルポの目は，結局，建築を語ることになる．　久作は，ライトの名前なんか知らないよといった書きかたをしているが，のちにエロ・グロ・ナンセンスの昭和初期の流行作家となったくらいだから，最新式の建築にもかなりの造詣をもっていた．

「震災前までの東京の空は，次から次に建った大建築の為に高く高く押し上げられる一方であったが，それから又こうして急に落ちて来た．　之を又押し上げるか押しあげぬかは，日本の建築界の将来に於ける興味ある研究問題ではあるまいか」

とも久作は洩しているが，もちろん1年後には，当然，ふたたび空を押しあげる〈東京バラック〉が出現する．

「中にはコリント式やイオニヤ式，ドリヤ式など云ふ恐ろしく気取ったのもあるが，しかし其生地がセメント塗りで恰好丈け作ってあるので，却ってつまらなく見える」「それよりもルネッサン式の変化したもの，ゴシック式を今一層シツッコクしたものなぞが光って居る．　其の中でも又一番活躍して眼を惑くのは，セセッション式以後の新様式を用ゐたものである」

という風に，なかなかいうのだし，これら「世界各国の建築様式の掃き集め」を「誠にハヤハヤ恐れ入った光景」とみ，「其処に流る」一種の悲哀は，直ちに日本人のアタマの悲哀を裏書きするもの」としている．

夢野久作は，〈近代〉なるものと，その武器である〈科学〉の暴力と戦った作家だということもできる．　「生物界に於ける霊意識作用の玄怪不可思議にして現代の科学知識の克く追随補捉し得べきものに非ざる」(《押絵の奇蹟》)の態度に立って，妖怪な幻想を紡いでいくのだが，科学の世界を否定して見ないのではなく，見すぎるまでに見た作家であった．　久作の幻想は，霊意識の不可思議と現代科学とのアマルガム的格闘から生まれる．

私は，夢野久作とフランク・ロイド・ライトの出会いをなかなか味なものだと思っている．　もちろん，本物のライトに逢ったわけでないが，帝国ホテル＝ライトのかたちで逢っているのである．　しかし，久作は，〈技師〉あつかいした．　それは，〈建築家〉なる名称を知らなかったからでなく，わざと〈技師〉あつかいしたのである．　むしろ〈技師〉でよいのだと敬意を表しているといってよい．

それにもまして，「地面に四ツ這ひに獅噛み付いた形」と見た久作の目は，面白い．　「日本の鯰と親類だった」と見たのは，倒壊しなかったからだが，その親類のあかしは，地盤のヘドロとの共振性までは見抜かぬとも「地面に四ツ這ひに獅噛み付いた形」にあるとにらんだのである．

この章では，〈帝国ホテル〉論をするつもりはない．　夢野久作の直観が，かわり者の技師の作った〈旧式〉の建築に，からかい口調ながら，なんらかの〈敬意〉をいだいたにちがいないということである．

鯰は，〈自然〉とみてよい．　西洋の建築が目にはいってくるまでの日本建築は，大地の底にひそむ地霊が一暴れする時，ひとたまりもなかった．　日本人が地震を〈鯰〉の一暴れと見立てたのは，人間が抗うことのできぬ自然の牙に対して，お手やわらかにと敬意を表するしぐさである．

この自然の牙に歯向うものとして，西洋建築が明治になって，どっと



レーバン邸　1938　グレート・ネック，ニューヨーク

はいってくる．　大正年間には，地震に強いという宣伝文句で，鉄筋コンクリートの新式がなだれを打ってはいってくる．　夢野久作が，その倒壊に〈痛快〉を感じたのは，「生物界に於ける霊意識作用の玄怪不可思議」が勝ったからである．

しかしその〈痛快〉も，すぐ〈悲哀〉にかわるのは，たちまち「世界各国の建築様式の掃き集め」が活気をもって復活するからである．　久作は，〈大東京〉を1個の悪魔と見ていた．　その悪魔は，焼け跡からまもなく不死身のようにせせら笑って立ちあがってくるのである．　西洋流にいえば，〈悪魔〉とは，分別知性の権化のことである．

それにしても，ライトの〈帝国ホテル〉は，久作にとって〈鯰〉の親類であった．　「おれの建築のねうちは今は分らない」の豪語に対し，「成る程もうわかった」としているが，どうわかったかといえば，〈鯰〉の親類，自然の親類という認識のもとにわかったのである．

久作は，建築家でも建築評論家でもないから深入りしないが，このアメリカの〈かわり者〉が，人間のさかしらの及ばぬ地霊のシンボル〈鯰〉を，自分の建築のうちにとりこんでいるな，ということを直感したのだろう．「成る程もうわかった」とうるさげなのは，廃墟になお「ヒビ一つ」なく地面に獅噛みついている帝国ホテルに，泥棒を追っ払って手柄顔で吠える犬の愛敬をみたというより，自然をとりこんだ傲慢の魔法を見とっていたともいえる．

久作が，この〈かわり者〉のそばをすぐに棄てゼリフを残して去るのは，当面の敵は，地震でぶっ倒れても，すぐに立ちあがってくる近代文明の仕組みとそれにかかわる人心のほうこそだったからである．

2

アメリカで，ライトの建築を見てまわるなら，単純にだれでも感じたであろうことに，敷地の豊かさがある．

「有機的な建物の自然性とは，大地の中から光ある太陽の世界へと導く敷地から，おのずから成育してくるものである．　地上そのものは，たえず建物そのものを組成する基礎的な部分として開かれている．　それこそが，有機としての建築にかかわる新しいアイデアの根源をなしている．　建築は，かくて自然のど真ん中に立つ樹のごとく高貴な姿をあらわすのだ」

これは，《The Natural House》におけるライトの言葉である．　当り前だと，いつもながら，思う．

ただ，ライトの住宅建築は，水平志向であるから，すっくと地上に立ちあがる高貴さをただよわせているとは，いいがたい．　まさに建物だけをみると，ライトへの悪口の一つである「横に寝かせたゴチック」だともいえ，夢野久作流には，「地面に四つ這いに獅噛みついた形」であり，グロテスクだとさえいえる．

そのグロテスクが活性を帯びるのは，ライトの敷地の生かしかたである．　彼のしつこい有機建築論には，いつも当り前ではないかと退屈さえ感じながら，その当り前が，いかに実行されていないか，建築家は実行していないと思わせるなにかが，ライト建物の中にあるのである．

ライトは，あれだけ長い生涯にわたって，倦きもせず有機建築論をぶちつづけた．　そのくせ，有機的建築は人に教えることができないとさえ，《The Natural House》の中で言っている．　体系は，まさに彼のうちにあって，人にわからせることはできない．　おそらく，教えることができないということを教えるために，彼はタイプを叩きつづけ，フェローシップの若者たちと接してつづけたのだろうと思うしかない．

たしかに，敷地の豊かさは，広さとか背景の美しさのせいするわけにいくまい．　ライト流には，彼の建築こそが，豊かにしたのである．　カウフマン編の《An American Architecture》の中に，1938年に語ったものとして，敷地論がある．

〈よき敷地〉を選べという．　当り前である．　だが彼のよき敷地とは，もっとも建築上，困難なスポットにこそあるというのである．　ここで当り前が一逆転する．　人のほしがらない土地．　特異な性格をもった土地．　その土地に立つ樹々や土地の性質によって，不動産屋が欠点ありと見なしている土地，それらこそをあえて選べという．　さらに都市から離れている土地を挙げている．

そういう敷地こそ，かえって自分が建てたいという家の姿をはっきり示してくれるというのだ．　事実，そこに家がたった時，前に心で思っていた以上のものがそこに誕生しているのを見るだろうというのだ．　ここには，心理の魔術がある．　クライアントをびっくりさせ，建築家を激励する魔術である．

「その土地に建築物が仲間として加わることによって，かえって景色のキャラクターが強調される．　もし，その建築が，正しく作られていたとしての話だが」

ともいう．

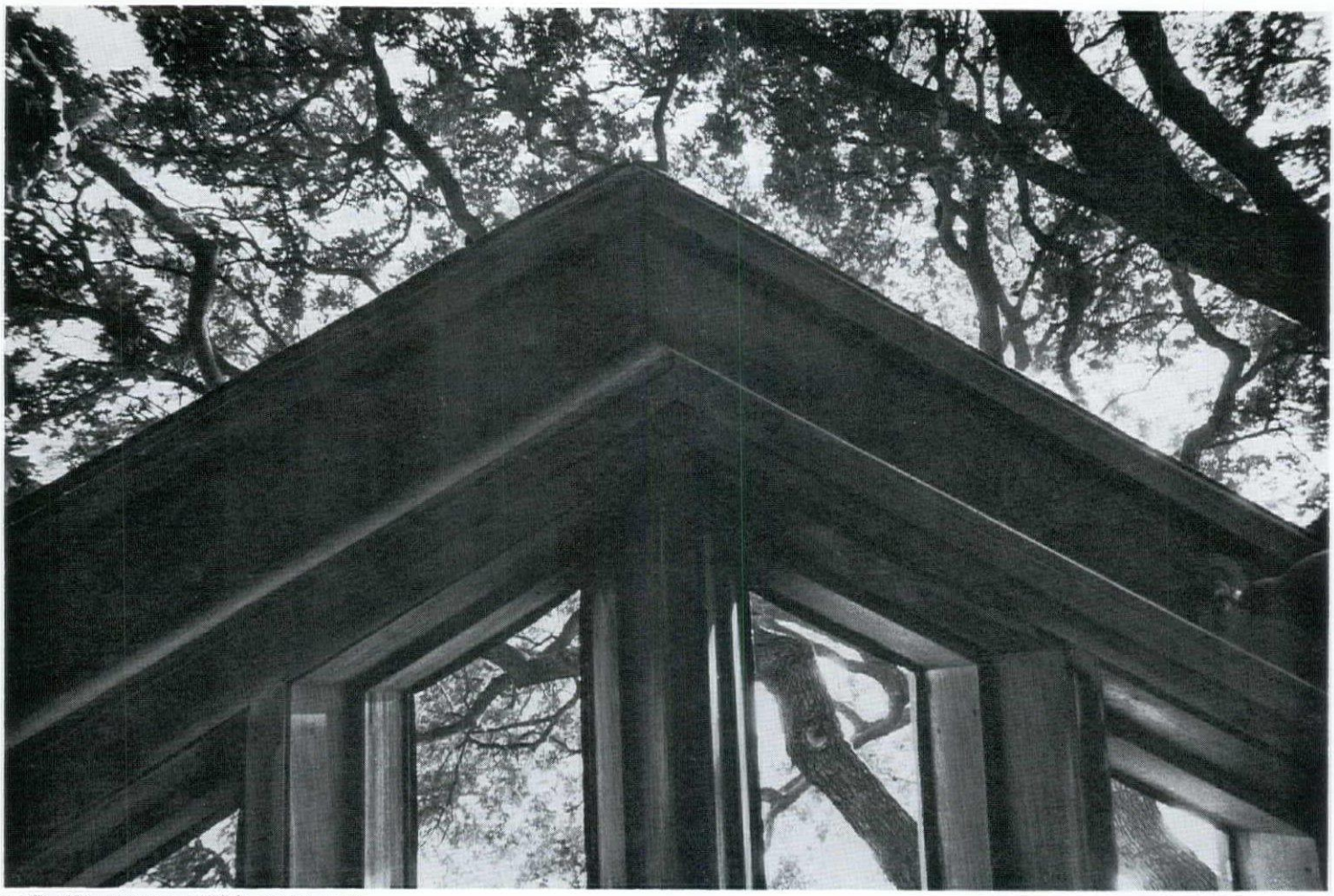
このライト流のアホリズムは逆説的であって，一般的でない．　しかし，ライトの建物は，すべてそのような生成をしているというべきである．マゾヒスティックだともいえ，禅的であるとさえいえる．　これは，ライトが自然との観照の中でつかんだ魔法である．　宝は，人の嫌うところにこそ隠れているという発想である．　ライト自身も，いつも一般にいわれる悪場所にこそ叱咤鞭励され活気づいたところがある．　一般的に欠点ありと思われている敷地も，そういう性格の土地として有機的に生かせるなら，周囲の景色もその建築によって暴行されることなく，かえって発現され，いきづいてくると彼はいう．

私の記憶をたぐると，外部にあっては，敷地や背景の印象が強い．大地にへばりつく異形の草原住宅の影が薄くなるほどである．　写真で見ると，ファサードばかりが撮影されているが，それは正しい撮影のしかたではあるまい．

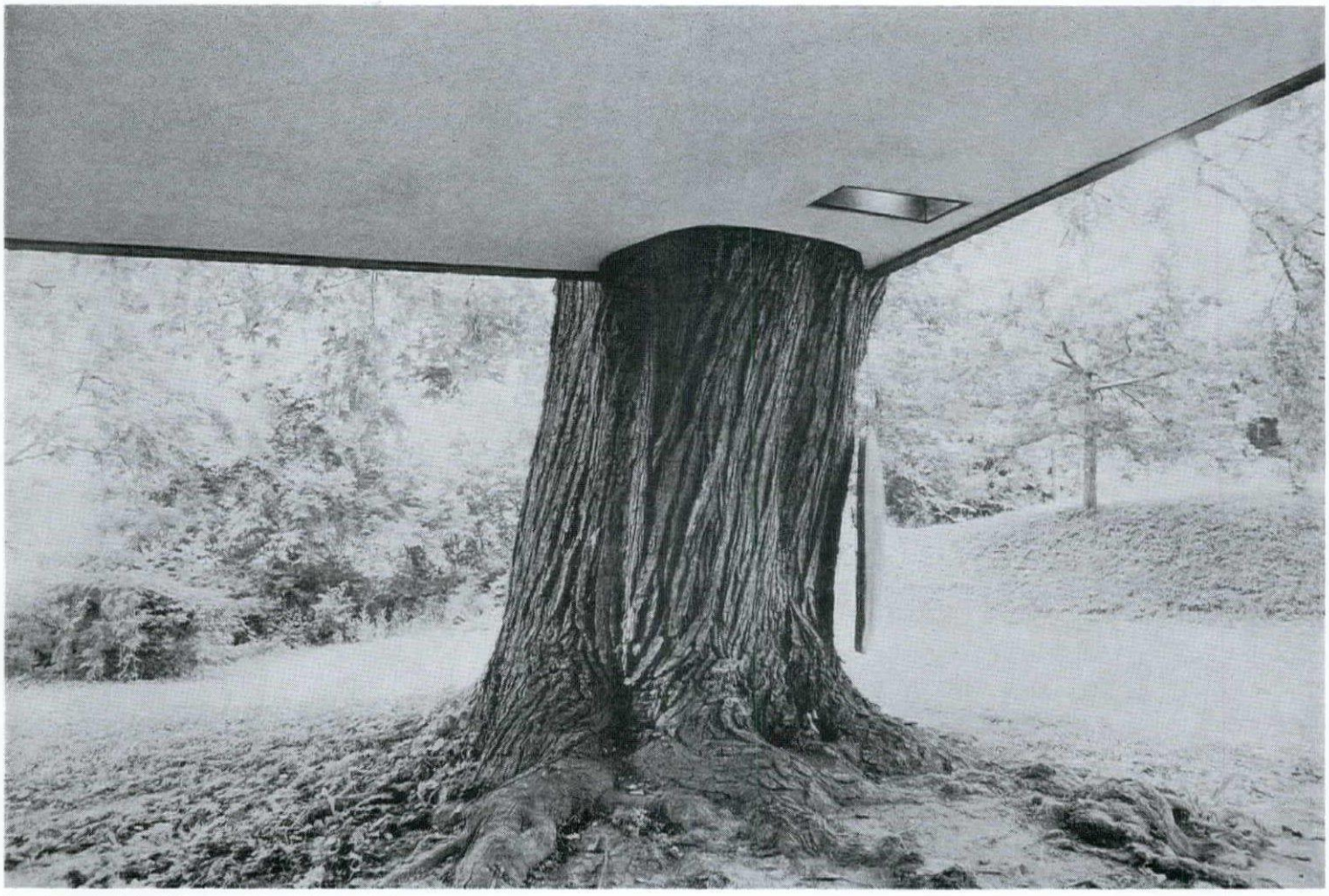
「私のセオリからすれば，建築家と相談なしに家のまわりにいかなる樹も植えられるべきでなかった．　しかし，もちろん，それは無視された．
また彫刻や絵画も，建築家と相談なしに用いられるべきではなかった．
絵は，しばしば勝手にかけられ，私との間にトラブルがおこった」

この《The Natural House》の嘆きを読むと，同情しないわけにいかないが，それは無理という思いにもかられる．　それらの彫刻や絵画の趣味は，いかにも悪趣味でライトの意に反していたとしても，家ができてしまえば，あくまでもそれはクライアントのものだからである．

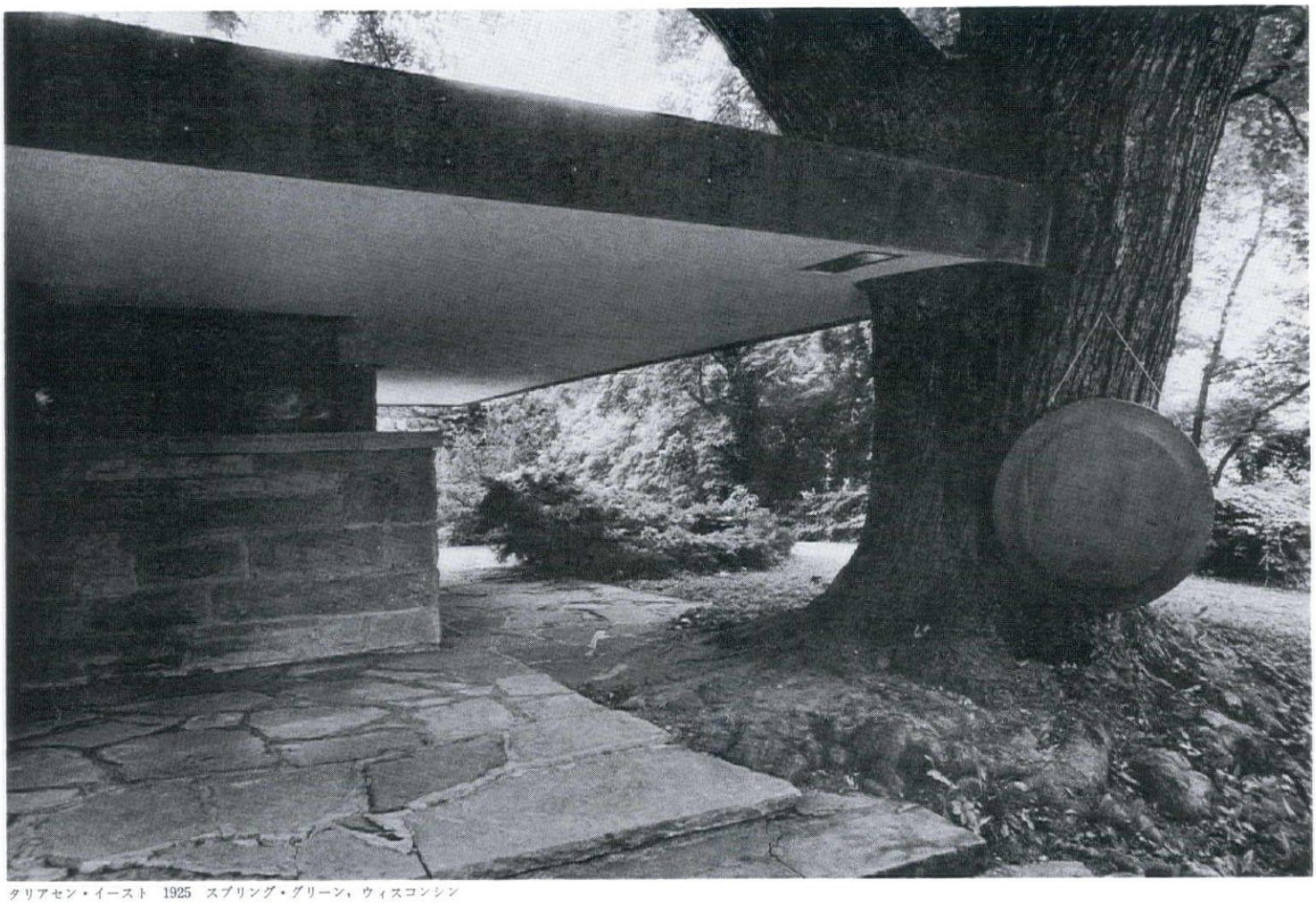
問題なのは，ライトの教育によって，つまり魔法によって，どこまでクライアントを呪縛できるかである．　彼の側からすれば，このクライアトの裏切りは，彼の有機建築の魔法に限界があったことを示している．絵画ひとつで，ぶちこわしになるガラスのように繊細な建築だったことになる．　1913年，シカゴに作ったミッドウェイ・ガーデンで，これまでの



ハナ邸　1937　スタンフォード大学内，カルフォルニア



タリアセン・イースト　1925　スプリング・グリーン，ウィスコンシン



タリアセン・イースト　1925　スプリング・グリーン，ウィスコンシン



ロバート.L.ライト邸　1955　ベセスダ，メリーランド

うさを晴らしたらしいが，このような不満は，永遠に解消されえないものと覚悟すべきである．

ライトが盗みとった自然の魔法，つまり有機の王たる自然は，清濁呑んでその生命を運転している．　強健にしてずぶとい許容の王である．不満をもつかぎり，ライトの有機建築は，しょせんライト個人の有機でしかなく，他人の有機になりえる包容性がなかったことになる．

しかし，不満は，ライトの完璧を期す意識の限界であって建物の限界ではないだろう．　私のみたライトの住宅では，総じて持主が彼の〈作品〉を気にして窮屈そうにしていたという印象があり，彼の呪縛的魔法は，死後もなお十分すぎるほど持続していた．　私は，これこそがライトの有機性の限界だと思えたのである．

ライトの膨大な文書を読んでも，敷地論はあっても，植樹論や作庭論というのは，ほとんどない．

彼は，装飾専門家の存在を有機の発想から追放してしまったように，庭師も追いだしたであろう．　ましてや，クライアントが勝手に植樹することに神経をとがらした．

クライアントが，彼の思うがままにならなかったことは，あきらかだが，彼が考えるほどには，ぶちこわしになっていると思えなかった．　ライトの有機建築は，なかなかにしぶといものであって，彼の意識を超えておそるべき黒い支配力を失わずにいるのである．

「庭は，どこで終り，家はどこからはじまるのか」．

これは，《The Natural House》のユーソニアハウスを語った章で自らに発した言葉である．　庭にはじまりなく，家に終りなく，両者は一体になっているといいたいのである．

ドイツで1910年に出版された《Ausgefuhrte Bauten und Entwurfe》の序文で，ライトは，イタリアの建築を絶賛している．　まるで魔法にかかったみたいに岩や樹や庭が建物と一つになっているのに感心している．この正直さは，例によって，俺だってそうしているという反語がふくまれている．

このイタリアの作庭術は，18世紀ヨーロッパのロマンチシズムの勃興と無縁でない．　それまでの整形造園の反動として，庭が自然の一部であるように野性的な庭が好まれたからである．

そもそも，ライトの有機建築の根は，18世紀のロマンチシズムにある．自然を有機的霊性として捉える発想は，ここに萌芽していたからである．ライトの自然観は，アメリカ中西部のウィスコンシンの草原で素朴に育くまれただけでなく，ヨーロッパのロマンチシズムも彼の中にあって影と響きになっていたはずである．　それが，さらにエマーソン，ソーローの自然観とつながり，フロンティア・スピリットと西部の荒野と楽園思想とが尾を引いてからまり，それらが全体化し血脈化されている．　ライトのわかりにくさは，彼の弁じる有機思想そのものよりも，コンパスを駆使する腕や指の中に，文学的というか，つまり割りきれぬもののうごめきがつまっていて，それが設計図や建築物の上できわめて霊的な動きをするからである．

ヨーロッパの整形造園の反動として生れた自然風庭園は，ゴシックと結びついて，洞窟や廃墟までとりこむだけでなく，人工的に作りあげるまでになる．　一種の擬似自然・自然もどきだが，ライトは，このようにならない．

庭がそのまま建物の内部にもはいりこみ，そのまま外にも出ていくというのがライトの発想である．　建物の装飾や背景として自然や庭を利用しているわけでない．　曲折と起伏に富んだ庭の作りには，敷地条件の逆用とレンガや敷石による変化の魔法がほどこされている．　それはそのまま，建物内部の作法ともなって連続している．

だから平地にはいつくばった建物は，時にはその地味なグロテスクの影をひそめたりするため，外に立っている時は，目は，敷地の光景，庭の風景に奪われやすくなっている．

樹木は，植樹と自然樹の混合である．　自然樹は，そのまま残されるというかたちをとることが多いので，かえってライトの触覚が残り，人工的で，しかしなまぐさい．　それに反し，人工的な植樹のほうは，逆に自然めかされ，野性化するように演出されているところがある．

これが，ライトならではの有機的秘術であり，東洋的な陰陽術といってもよいが，森の中で，精霊の息づかいを感じるのとはちがった不気味さの源泉になっている．

先号で，ハナ邸の自然樹の呪術的な用いかたを述べたが，道路側からの全景写真を見るとレンガで積みあげた低い外壁の上には，私などの知らない灌木的なかたまりがその中央部へ箱状に５つの形のばらばらなブロックをつくって，たれさがり気味に置かれている．　灌木の頭部はわざと刈りこんでいないので，もうもうと煙るように這っていて迫力がある．　これは，ハナ邸にふさわしい植樹になっているが，人工的にもかかわらず，どう猛な自然性を回復していて，装飾性をのりこえている．

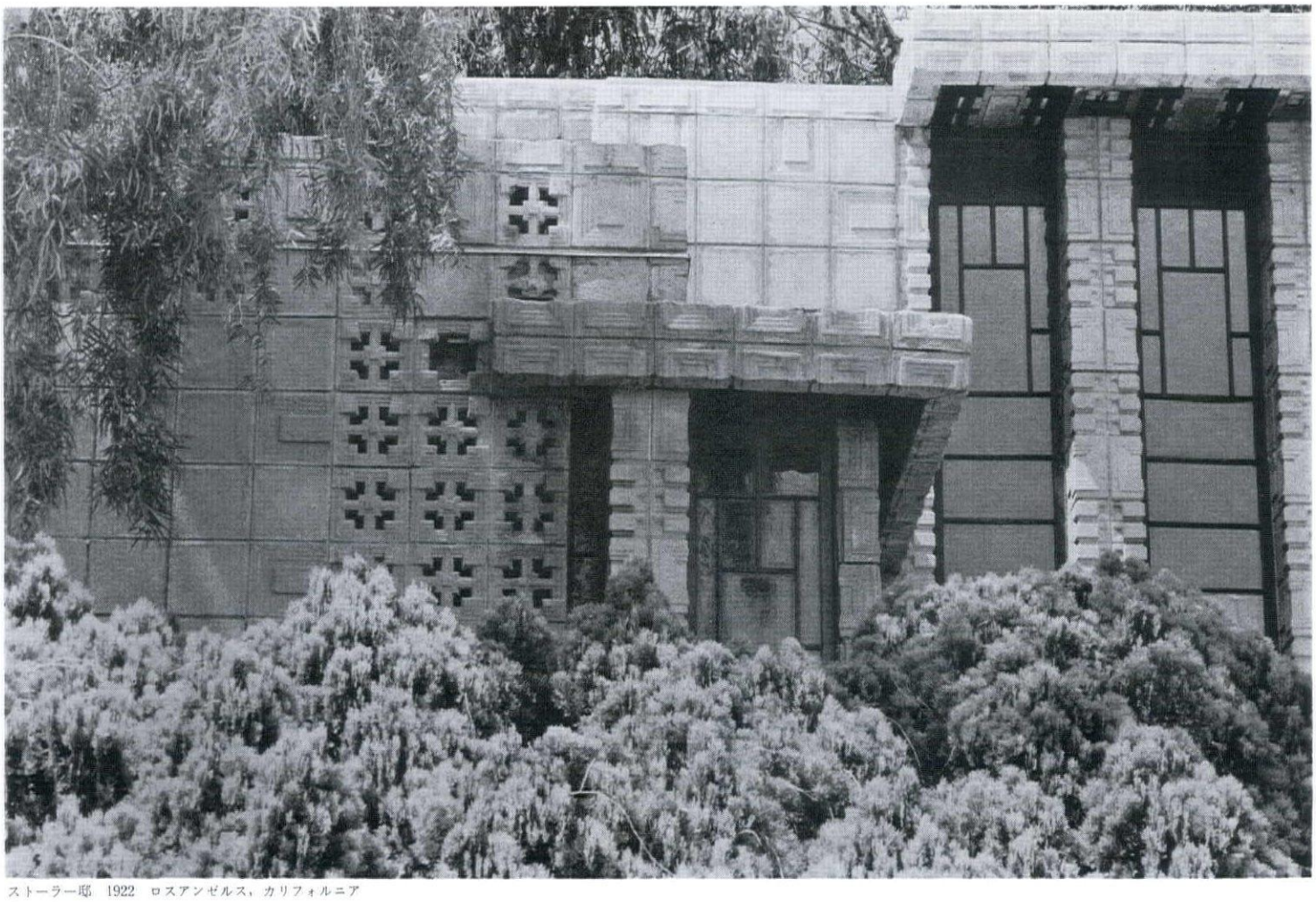
これは，ライトの指示だったのか，ハナ教授のアイデアなのか知らない．　しかし，クライアントの勝手な植樹だったとしても，ライトのもくろんだ有機性は，死んでいない．　彼の傷つきやすい完璧主義をのりこえて，彼の有機建築は，彼のいう連続性を備え，なにものの侵入をこわがらずにかえって栄養としてしまうような怪物に成長していたはずだ．

急斜面をあえて選んだロバート・L．ライト邸は，舟型のプランだが，これをエロティクに見せるのは，その舟型の性的連想にもまして林ごしに透し見る時である．　しかし不気味にしているのは，ブロックに這わせた人工的な蔦の類である．　立地条件の林を生かしたように見えて，つきだした舟形のバルコニー近くのブロックの頂きあたりまで，覗きこむようにしのびよる背の高い蕗のような植物などは，あきらかに植えこまれたものである．

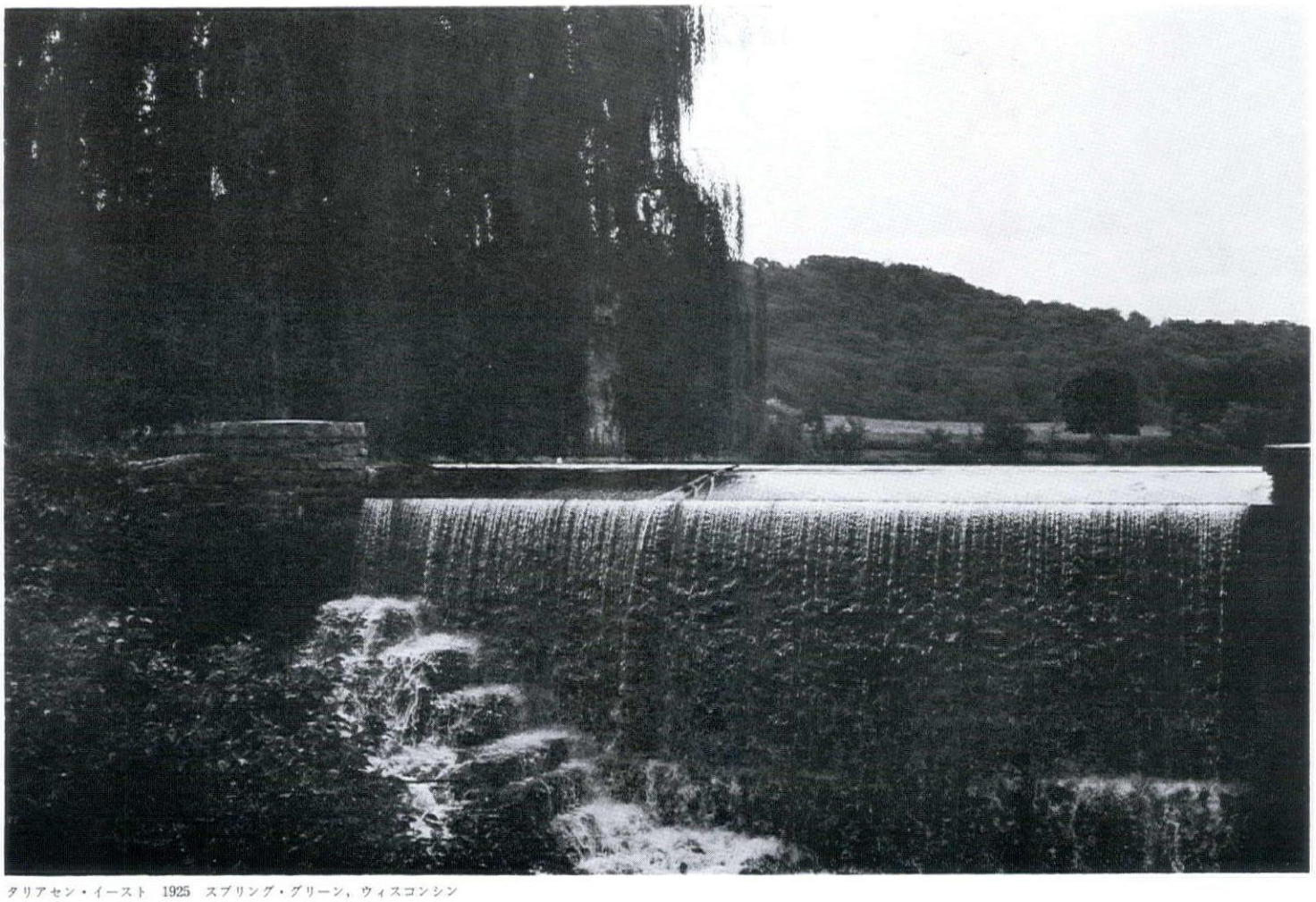
これまた斜面利用のハリウッドにあるストーラー邸（1922）も，妖術的である．　正面は，うしろの樹木から建物ごしに上から垂れさがる野生樹と，それを下から迎えうつごとく群化した人工的な樹木がマッス化して，半ばふさがれている．　野生の人工化と人工の野生化は，似ていて非なるもので，その対照的なるものを一体化させるのは，ライトの得意技である．

ライトは，自らの手のしわざを，けっして人工と考えなかった．　植樹も彼にとって人工樹ではない．　ライトが有機であるなら，その手になるものはすべて有機のしわざであり，生命化する．　生命化しすぎるといえるほどだ．　タリアセン・イーストを訪れて，私が一等気味の悪かったのは，人工の池と滝である．　波立たぬ水平の池の水は，美しいというより，グロテスクである．　人造湖は，こうならない．

ガラスという素材は，庭の樹木にとって魔法鏡のようなものである．ミネソタ州のミネアポリスにあるウィリー邸（1933）の南面外観の中央部



ストーラー邸　1922　ロスアンゼルス，カリフォルニア



タリアセン・イースト　1925　スプリング・グリーン，ウィスコンシン

は，8分割のガラスばりである．　そこには，庭の立木が亡霊のように，たゆたって映じている．　それは，立っている木をのりこえて，影そのものが精霊化している．　つきだしたカンティレバーの庇の先端部分も映っている．　この建物の背後にも立木があり，上半部をのぞかせているが，ガラスの鏡に映った木と家をはさんで対面している．　そのため鏡に映った木と背後の木とが，1本になっているような錯覚をあたえる．　この遊びは，エッシャーの絵のように，魔法的な不気味さであり，けっしてユーモラスではない．

当然，樹々は，部屋の中からも見える．　ハナ邸の居間のガラス戸を通し，ライトの念をのせた妖木がくねっているのを見た記憶はいまなおなまなましい．　高さが天井と等しい高さなので，戸をあけずに庭をまるごと見とれる仕組みになっている．　戸をあけずにというところが，日本的でない．　ガラスの使用によって，室内空間が自然そのものとなり，建物は庭の一部，庭は建物の一部となったとライトは自賛していう．　ガラスによって互換性の魔法が可能になったのである．

しかし，ライトと樹木の関係は，敷地，つまり地霊感覚から根を発している．　風景の中に人を住まわせるような魔的な感覚も，そこからきている．　地霊の力，大地の力をもっとも受けているのが樹である．　さらに泉や川もある．　そして岩と山がある．　洞窟がある．　悪場所をあえてえらぶのは，そこが，もっともインスピレーションのエネルギーが充電しているところという直覚が働いているからかもしれない．　〈落水荘〉は，これらの地霊の家来たちが勢揃いしている場所だった．　ライトは，穴を嫌ったが，建物は彼にとって聖なる洞窟（グロッタ）だったかもしれない．　なによりも，ライトこそが，地霊の人だった．　夢野久作のいう通り，「鯰と親類だった」のかもしれぬのである．

3

ライトは，機械文明のありかたをののしっても，機械そのものを口と舌で蹴りあげることはなかった．　機械の登場を〈時代の自然〉とみていたから，機械そのものを否定する理由もなかった．　わが手になれば，機械も生命化すると信じていたから，その意味では，きわめて現実的だったのである．

S．ギーディオンの《機械化の文化史》を読むと，19世紀末から20世紀初にかけて，アメリカでは〈職人運動〉がおこった．「開拓者であった父祖の生活様式へ回帰することを目指していた」（栄久庵祥二訳）とギーディオンは言う．「田舎家が住宅の模範」となり，「自給自足を擁護」した．家具は「単純で塗装も装飾もしていない木製品を良しとした」．「特に細い木製の部材を使った椅子などは，フランク・ロイド・ライトがデザインした室内に置かれてもおかしくないくらいであった」ともいう．

たしか，どこかで，ライトは，手工芸に対し，否定的な言葉を述べていたが，この機械への反乱である〈職人運動〉に対してだったかもしれない．

〈田舎家〉も，有機建築にはちがいない．　ソーローは，どうか真似をしないでくれといって手製の森の家をあとにして都会へ戻った．　ライトは，自ら〈田舎家〉を作るほど幼くない．

発想はロマンチックであっても，彼の有機建築は，機械時代に即した新しい建築であったから，機械に反対したりはしなかった．　彼のいう自然は，天然の材料だけでなく人工の合成材料にも，それならではの生命力，つまり霊質を等分にみて，そこから建築のインスピレーションをひきだそうとしたのである．　その傑作が〈落水荘〉なのだろうが，ライトの理解を厄介にしているのは，おそらくその〈ロマンチック〉であり，それを支えているのが〈有機〉の発想である．

スピリットとかソウルとか，目に見えぬ精神の奥にある霊妙な働きをとりこもうとしているから厄介である．　口宣伝だけでないのは，ライトの建物がもつ不可解さとどうやらそのことがからんでいるらしいとだれでも感じられるから，短気な理性の持主はお手あげになって背を向けるか，良心的なものは判断停止するか，あとは一挙に崇拝するしかない．　つまり〈ライト教〉である．

スピリットやソウルには霊の意味があるが，仏教哲学者の鈴木大拙は，それらの奥に潜在している働きが霊だとみている．　心とか魂とか物の中核に精神を置き，その奥に〈霊〉を見るのである．　《日本的霊性》の中で，大拙はこう言っている．

「今日よく言われる宇宙線とかいうものがあって，それがどこから出てくるかわからぬが，人間がこしらえた機械装置の上にその働きが出るというようなそんな働きかけでなくて，我らの生活そのものを何か意味づけて考えて見ようとすると，どうも霊性というようなものを想定すると話がわかるのである」

こういう厄介なものをライトは，〈機械装置〉を否定することなく抱えこんでいたわけである．　たまたま倒壊しなかった帝国ホテルを作った技師である〈フランク・ロイド・ライト〉がこのような厄介なものを抱えこんで真面目に作っていたとは，夢野久作は，夢にも思わなかったであろう．

ライトは，「生物界に於ける霊意識作用の玄怪不可思議」の世界に加担する久作の精神を抱えたまま，久作の否定する〈科学知識〉の生みだした物の中にも，不可思議を見ようとしていた純情傲慢なる怪物であった．

「魂のなかに連なる部屋や倉庫を探索し終えてはいない．　さまざまに試みてはきたものの，所詮，哲学には解けぬ剰余がいつも残った．　人間は水源が隠れて見えない流れだ」

「万人のなかに生来そなわっている予言の霊にわが身をゆだねることによってわれわれは，その天宮図が何を語っているかを知ることができる．」

これらは，エマーソンの《大霊》（酒本雅之訳）の中の言葉である．　ソーローの師エマーソンの切札は，〈自然〉であり〈大霊〉である．　魂（ソウル）の奥にあるものが，エマーソンにとって〈大霊〉（Over Soul）である．　この超越論者は，《詩人》の中で，ピタゴラス，スエーデンボルグ，ケプラ，カルダーノらの魔術師の名をあげ，こうまで言っている．

「たとえば天使，悪魔，魔術，占星術，手相術，催眠術などというような疑わしき事実を，自分の宇宙論のなかにとりいれるひとが評価されることこそ，惰性的な日常から離脱するということの生ける証にほかならず……．それはまた，もっとも成功した生き方であり，解放されていて初めて可能な魔法であっておかげで世界がボールのようにわれわれの手の中にすっぽりはいってしまう」

ライトの言説には，エマーソンの影がある．　エマーソンは思想家としての限界にとどまり，現実をこえすぎたところがある．　しかしライトは，〈大霊〉の魔法を抱いたまま，現実にぶつかっていった．

●くさもり・しんいち



野性の鋭い直感が理想の道を選ぶ。
ロンフォームの快適な歩行感と安全性が、人間のためのよりよい生活空間をつくりだす。

ロンシールの床、ロンフォームは、
実績の足跡を未来につなぐ。
ロンシールのソフト&セーフティ
塩ビシート床材です。

住みやすい空間づくりが私たちの仕事です
ロンシール工業株式会社

東京営業所／〒101東京都千代田区神田松永町13川口ビル☎03(253)4941㈹　大阪支店／〒532大阪市淀川区西中島3-9-13下北ビル☎06(304)2700㈹　出張所／札幌☎011(531)2602・青森☎0177(77)1155・仙台☎0222(88)8501・新潟☎0252(43)3791・大宮☎0486(45)1511・横浜☎045(662)7370・金沢☎0762(44)5871・名古屋☎052(935)7063・岡山☎0869(26)4321・広島☎082(249)3600・高松☎0878(31)4177・福岡☎092(472)5857　事務所／静岡☎0542(51)3712・鹿児島☎0992(58)6571

＊詳しくは上記宛ご連絡下さい。

永年の信用ときたえぬかれた
技術を駆使する!



●一般電気設備工事＝設計施工
●防爆電気設備工事＝設計施工
●計　装　工　事＝設計施工
●電気加熱保温工事＝設計施工
●パイプライニング工事＝設計施工
●静電気接地用リール＝＝販売

昭和電機工業株式会社

取締役社長　浦　道　雄

●本社／東京都港区東新橋２丁目７番３号　電話03(437)3851(代表)
●営業所＝大阪・中部・広島・福岡
●出張所＝苫小牧・京浜関北・新潟・鹿島・千葉・四日市・堺・水島・岩国・徳山・坂出・松山・新居浜・大分
●駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・シンガポール

■〈クロス・ペガス園〉コンペ当選案

マイケル・グレイヴス
ナパ・ヴァレーの
美術館計画



M. グレイヴス（左），E. シュミット（右）

コンペの常勝者マイケル・グレイヴスがまたまた勝利をおさめた〈クロス・ペガス園〉コンペの経過と結果を報告しよう．

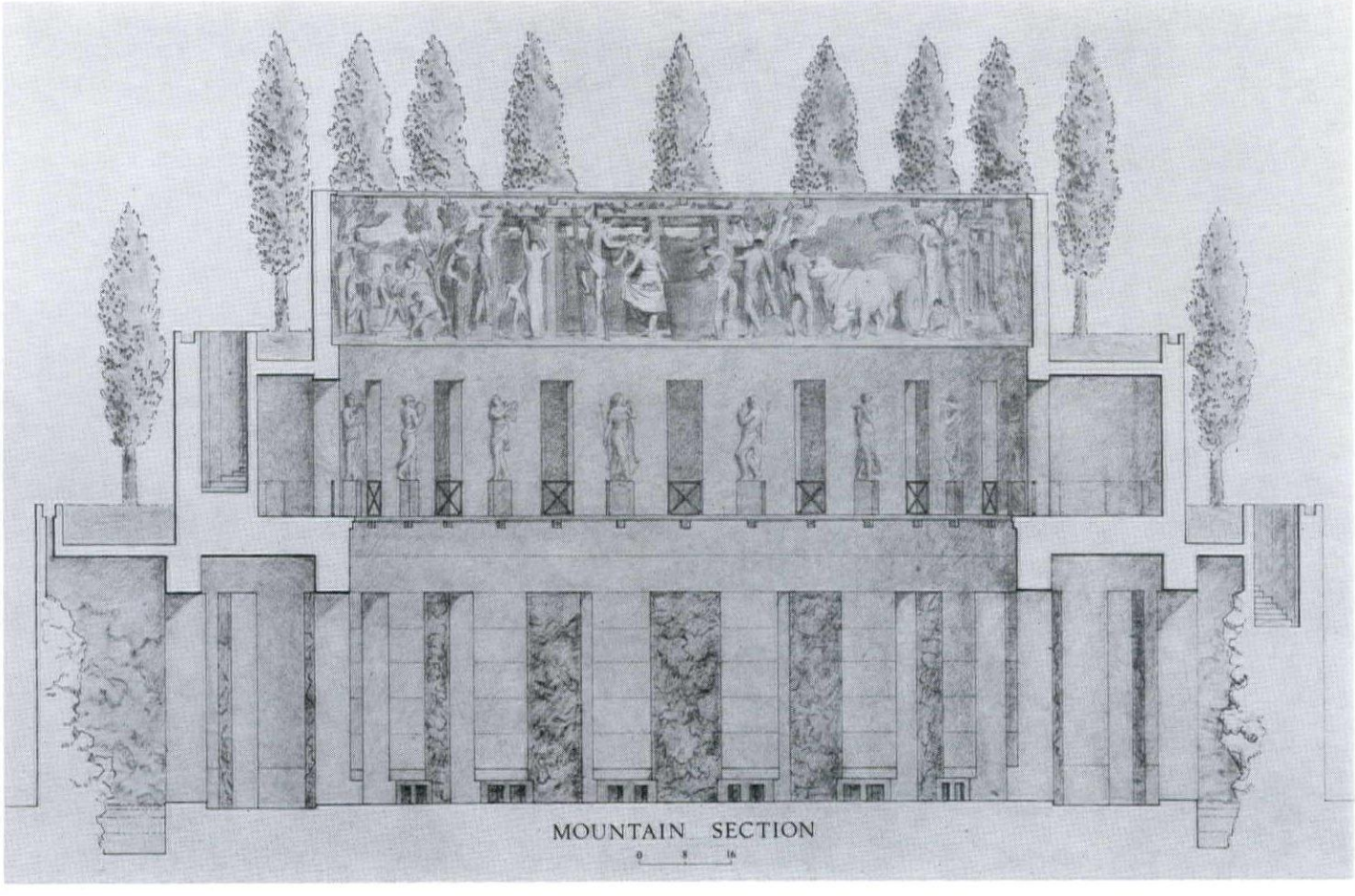
敷地は，カリフォルニア・ワインでつとに名高いナパ・ヴァレーの小高い丘の上である．素晴らしいぶどう園に隣接するこの小高い丘の所有者はシュレム夫妻であり，彼らはシュールレアリストの絵画や彫刻のコレクターとして著名な存在である．　クロス・ペガス園という名も彼らの所有物であるオディロン・ルドンの油絵《ペガサス》にちなんでつけられたのだ．
これらの美術品を保管・展示するための美術館（邸館），現代彫刻の展示庭園，そしてワイン醸造所の計画が，サンフランシスコ近代美術館の主催でコンペにふされたのである．

このコンペの特色は，建築家と美術家（アーキスト）が2人組となってチームを形成するというものである．　90チームの面接を経て，5チームが選択され，それらのチームは具体的な案の提出を求められた．　その5チームとは以下のとおり．（前者が建築家，後者が美術家）．

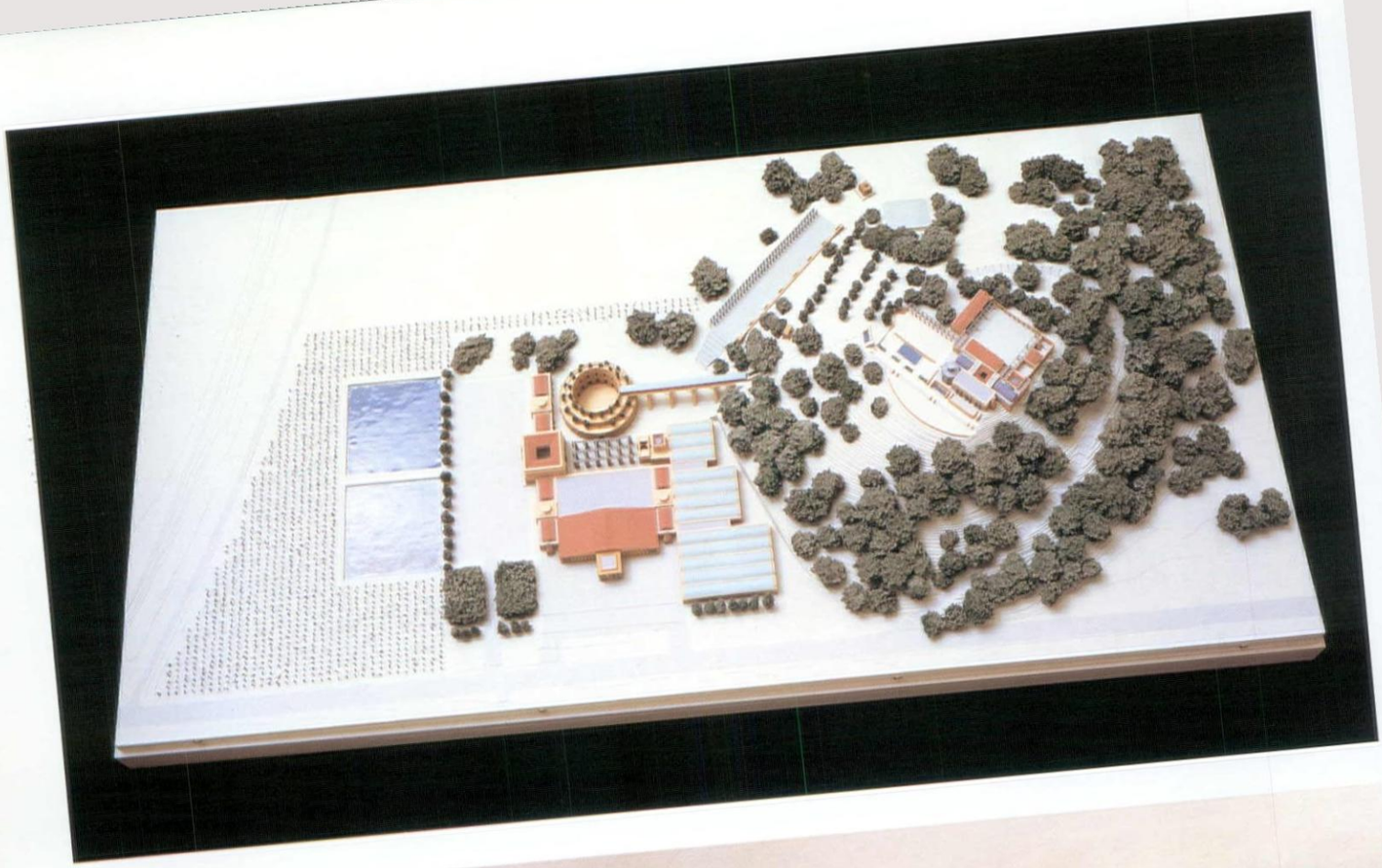
① Michael Graves＋Edward Schmidt
② Saitowitz, Levy and O'Brien＋Elyn Zimmerman
③ Robert Mangurian＋James Turrell
④ Solomon, Bofill and Dillon＋Ed Carpenter
⑤ Batey and Mack＋Peter Saari

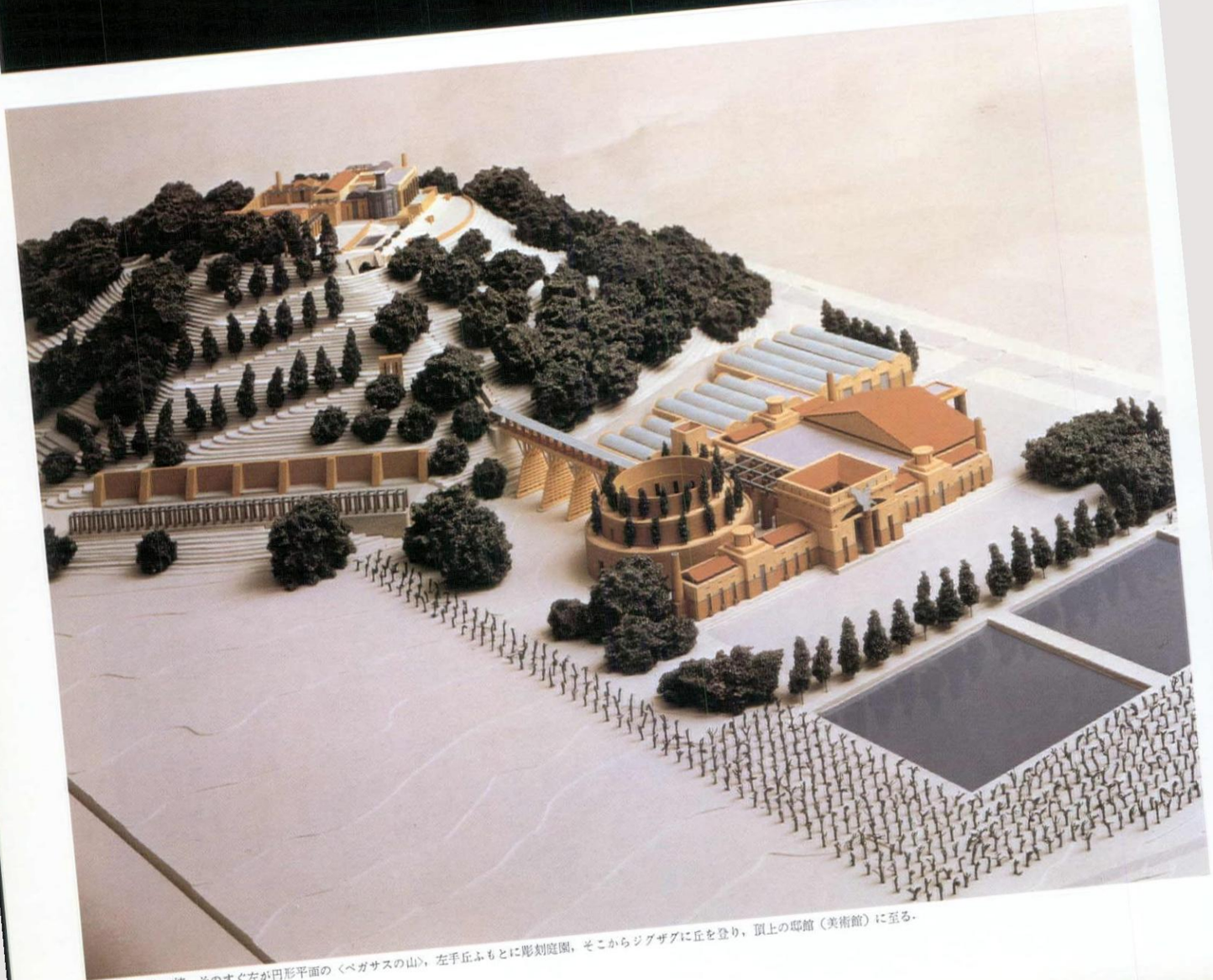
審査員はランドスケープ・デザイナーのヒデオ・ササキ氏や，工業・舞台美術デザイナーのクレイグ・ホジェッツ氏を含む5名で，審査の結査，グレイヴス＋シュミットの案が選ばれた．

①当選案，グレイヴス＋シュミット案
ヨーロッパ文化，そしてカリフォルニアのワイン醸造の文化，この両者から引き出された形態や連想（をひき起すもの）がひとつの敷地の中で見事に混合されている．　敷地内のいろいろな構築物は，複雑に込み入ったパターンの下に互いに結び合わされている．　設計者によると「私たちはこのデザインの基礎をワイン醸造所や納屋に見られる田舎風の原型に，そしてナパ・ヴァレーに固有の建築に置いた」．　→p.78

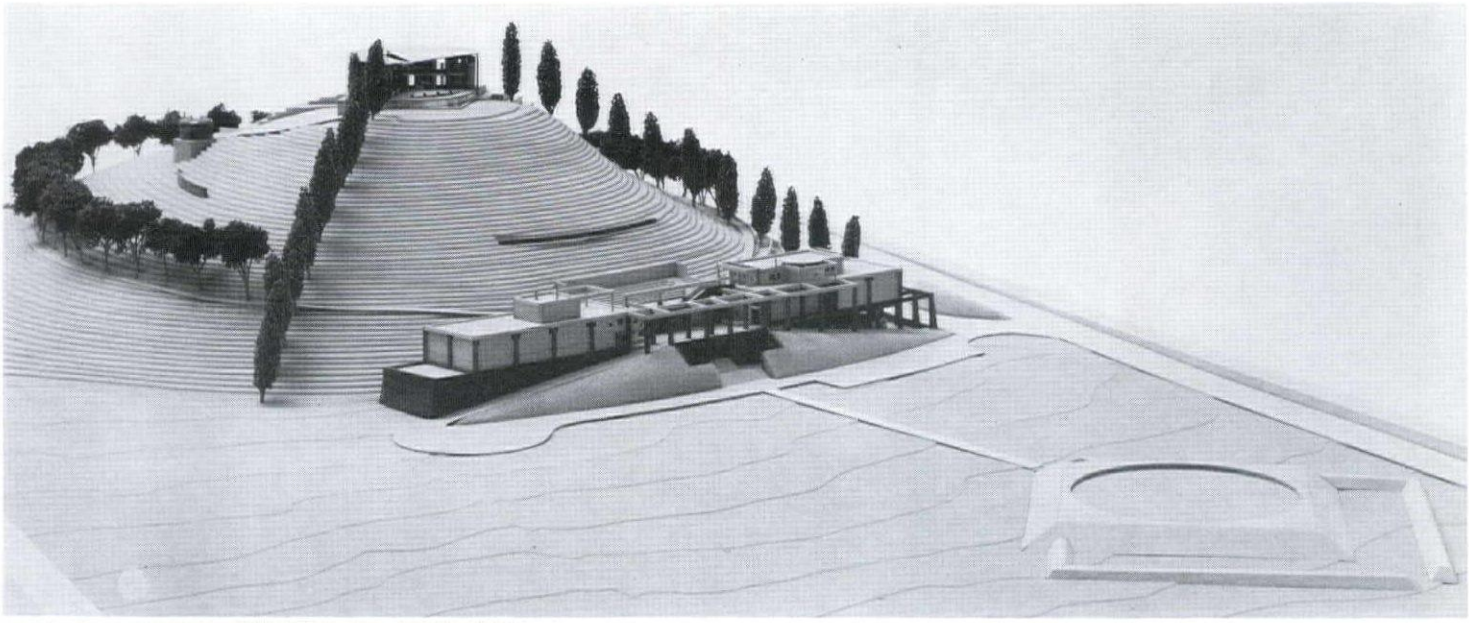


グレイヴス＋シュミット案ドローイング

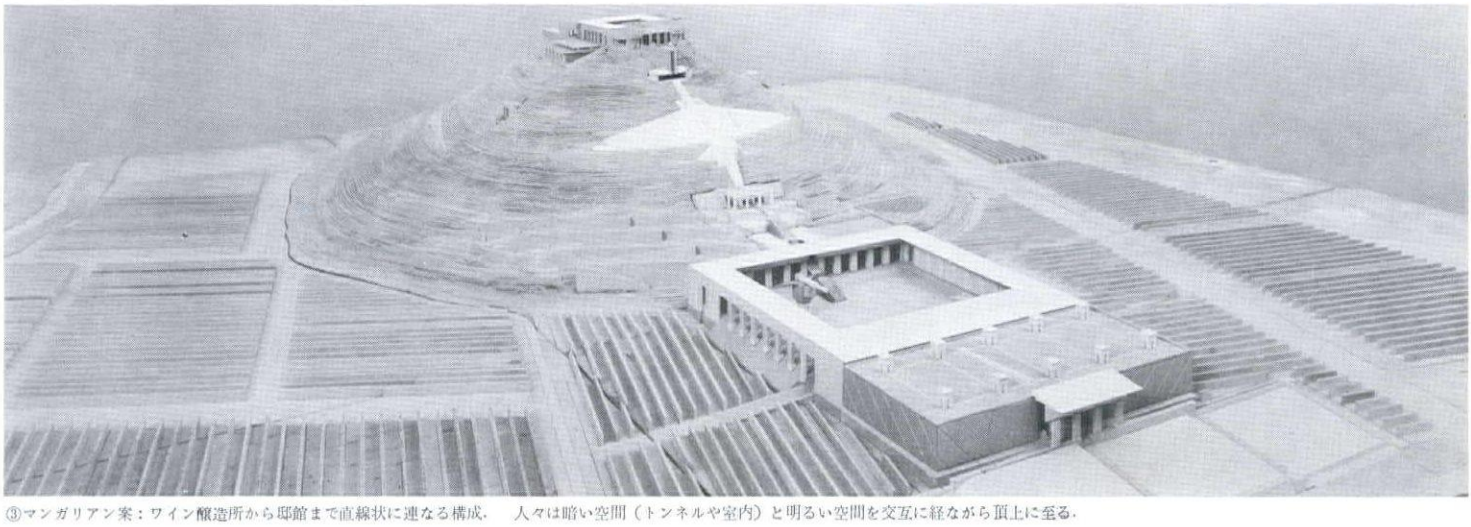




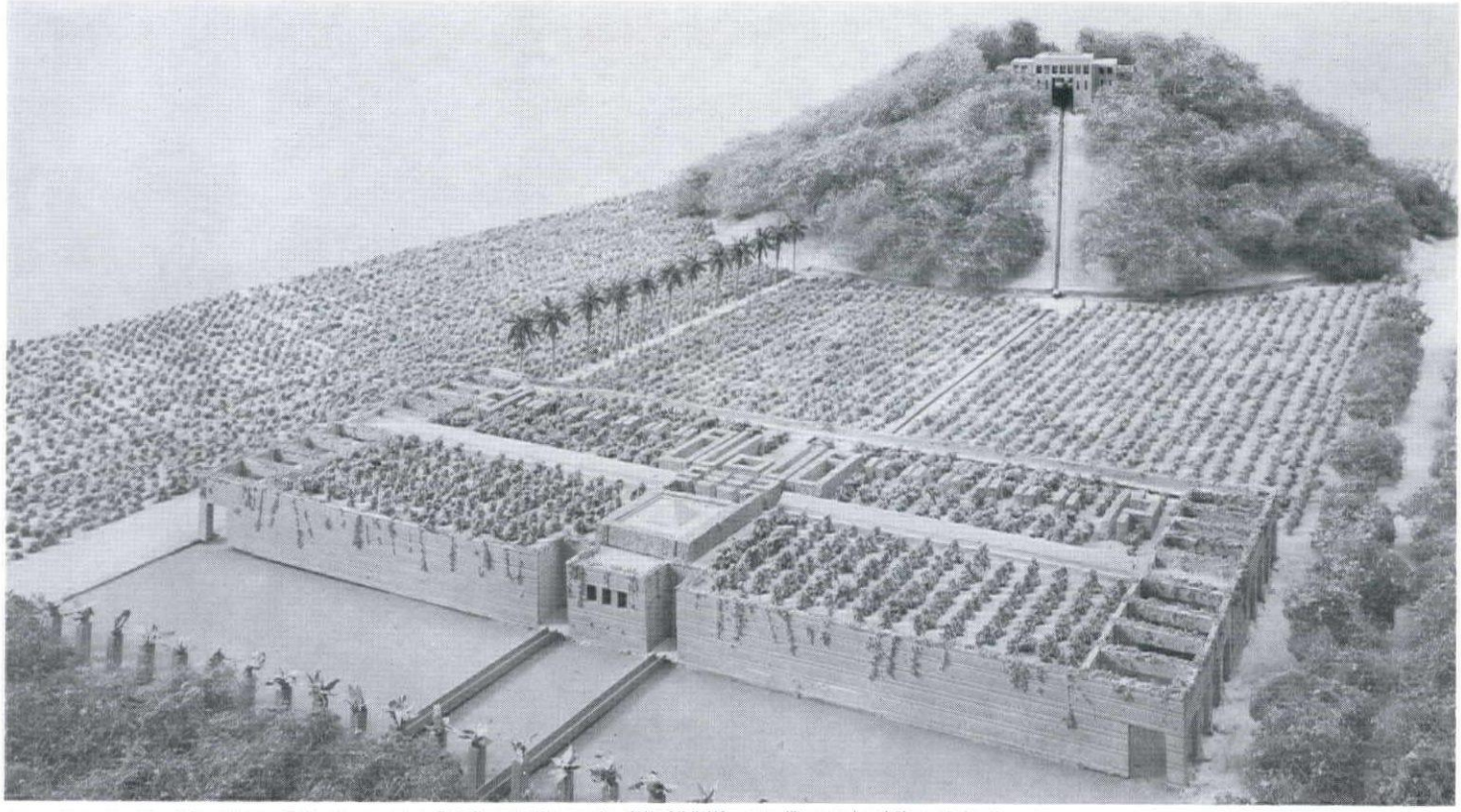
①右手前が入口棟，そのすぐ左が円形平面の〈ペガサスの山〉，左手丘ふもとに彫刻庭園，そこからジグザグに丘を登り，頂上の邸館（美術館）に至る．



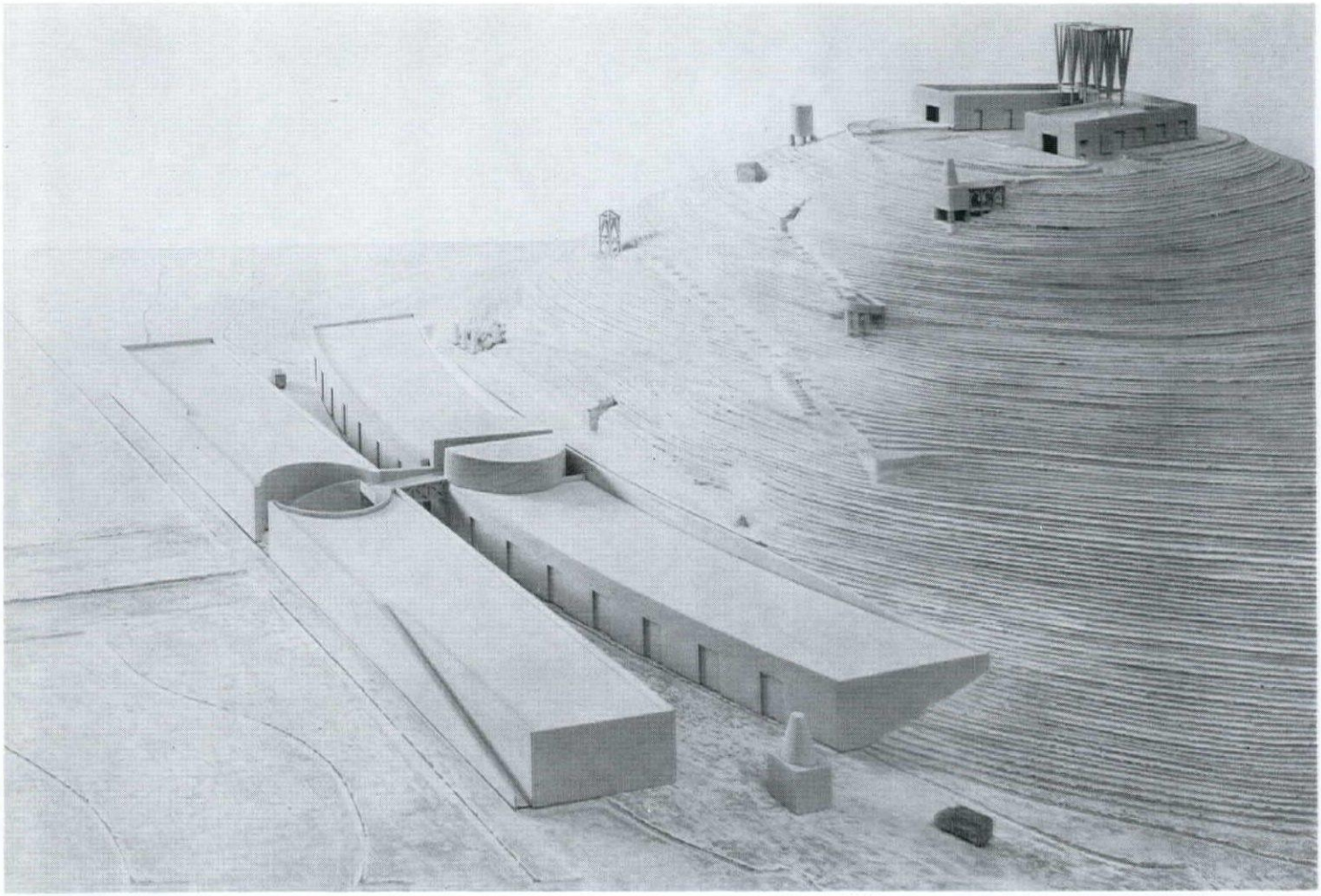
②サイトウィッツ，レヴィ案：楕円形平面の丘がすべての構成を支配している．



③マンガリアン案：ワイン醸造所から邸館まで直線状に連なる構成．　人々は暗い空間（トンネルや室内）と明るい空間を交互に経ながら頂上に至る．



④ソロモン，ボッフィル案：ぶどう園に埋め込まれたような長方形の醸造所と丘の上の邸館（美術館）とは，僅かに1本の水路がつなぐのみ．



⑤バティ・アンド・マック案：基壇のような2棟の建物の屋上を通り越して，ジグザグに丘を登る．　その折り返しには様々なあずまやの仕掛け．

彼らの模型は，ピンク，緑灰色，そうげ色に塗り分けられており，ドローイングは鉛筆，色鉛筆，さらに水彩とグァッシュで仕上げられたものである．

訪問者は，ペガサスの彫刻の付いた玄関入口をくぐって先ず試飲室とワイン醸造所が並んで建っている前庭に入る．　その奥には棚のある中庭があって，そのすぐ左手にロトンダ型式の段状テラスを有するシンボリックな〈ペガサスの山〉が位置している．　そのテラスにはポプラの植栽が施され，内壁にはペガサスの神話とワイン醸造の過程の浮き彫りが刻まれている．

〈ペガサスの山〉を出て丘の方に向かうと，擁壁とパビリオンとにはさまれた細長い彫刻庭園に出る．　そこを抜けると彫刻が点々と置かれる草原に入り，草原の丘側の斜面には屋外の円形劇場が設けられる．　周囲のぶどう園を見下ろしながら丘をジグザグに登っていくと，水が噴出する〈ペガサスのグロット〉に到達する．ここから流れ出た水は丘を駆け下り，空中高く持ち上げられた水路を通って〈ペガサスの山〉に至る．　丘の上に登った人々は，帰りには，この水の流れに沿って下って行くこともできる．

丘の上の邸宅は，大小とりまぜた中庭を取り込んだ複雑な平面を持ち，陶器製作室，日本風の浴室，八角形の温室などがある．

②サイトウィッツ，レヴィ＋チンマーマン他案

この案では丘の形と位置とがすべてを支配している．　即ち丘の頂上に円形の邸館があり，その南側は切れ込み状に開いていて，丘の下の醸造所を見下ろすような格好になっている．　彫刻の展示場は丘の頂上から中腹にかけて設けられている．

③マンガリアン＋ターレル案

この案は，下の醸造所から丘の上の邸宅に至る軸線が非常に際立っている．　いずれの建物も中庭を真中に対称な平面を持つのも特徴的である．　醸造所は，敷地に産出する火山岩の赤，緑，黄色の顔料を用いた派手な色彩で塗られている．　敷地全体の中において，自然と地形と太陽の光とが，形而上的体験の源として十分に活用されている．　設計者によれば，この丘には〈七不思議の庭〉の謎を解く7つのカギが痕跡として残されているという．

④ソロモン，ボッフィル＋カーペンター他案

この案は秩序と単純性が強調されている．　醸造所をぶどう園の中にもってきて，丘の上の邸館と大きく離してしまうという点でも，5つの案の中で異色であった．　ふたつの建物は流れ出る1本の水路によってのみ連結を保っていると言える．　低層の長方形の醸造所の屋上は周囲の景観に溶け込むように計画されており，彫刻の展示場として使われる．

⑤バティ・アンド・マック＋サーリ案

醸造所は丘のふもとにあり，2棟の低くて長い建物として表現されている．　ふたつの棟は屋根なしのブリッジでつながれているだけである．丘をジグザグに登って行く小道はこの案のハイライトであろう．　各々の折り返しのところには，彫刻パビリオン，グロット，テント付きのワイン試飲所のような様々なあずまやが配されている．　登りつめたところにある邸館の屋上には，立体幾何的な塔がそびえている．

協力：San Francisco Museum of Modern Art



美しく ガードして。

建築の安全性を高め、風雨にも強い。
理想的な建築材料・月星印ステンレスパイプ。

公団やマンション等の住宅建築で、まず重要なのが安全性。子供を含めた様々な家族が生活する上で、安全で快適な建築が求められているわけです。更に環境としての美観も、これからは大事。年月を経ても新築時の美しさを失わない、そんな建築が理想的です。安全性を高める強度と、いつまでも美しさを失わない優れた耐蝕性。月星印ステンレスパイプは、まさに理想的な建築材料です。更に、素材から最終製品までの一貫生産によって、品質・価格も安定しており、多様なニーズへの対応が可能。優れた内外装材として、あらゆる建築物にご利用いただけます。

若葉台住宅(横浜)
鹿島建設/日東金属工業

日新製鋼

装飾・構造用 月星印ステンレスパイプ。

■お問合せは ●本社〒100東京都千代田区丸の内3丁目4番1号(新国際ビル)☎03(216)5511●大阪支社〒541大阪市東区大川町1番地(日土地淀屋橋ビル)☎06(202)1331●名古屋支社〒450名古屋市中村区名駅3丁目25番9号(堀内ビル)☎052(582)6061●札幌営業所☎011(241)7524●仙台営業所☎0222(22)5835●新潟営業所☎0252(43)3491●富山営業所☎0764(33)8011●岡山営業所☎0862(31)4355●広島営業所☎082(248)4611●高松営業所☎0878(51)9756●福岡営業所☎092(781)1251

資料請求券 ステンレスパイプ SD 12

ロッテルダム
JAPAN AIR

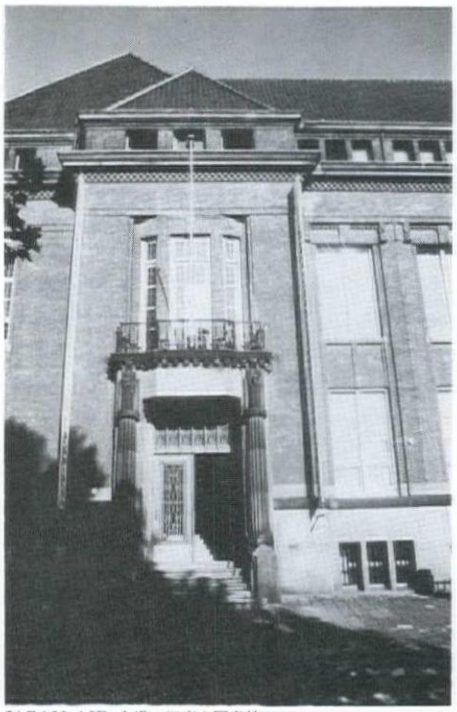
現代日本建築家展＋デザイン・セミナー報告

ロッテルダム市芸術委員会の積極的な活動

この初秋に，オランダのロッテルダムにおいて，市の芸術委員会(Rotterdamse Kunststichiting)主催の JAPAN AIR が開催された．　その内容は，9月6日より同月末まで，旧市立図書館において〈現代日本建築家展〉を開き，同時に17～22日の5日間にわたってデザイン・セミナーを催すというものだった．　展示会に出品の依頼を受けたのは，安藤忠雄，磯崎新，伊東豊雄，黒川哲郎，篠原一男，竹山実，長谷川逸子，早川邦彦，原広司，槇文彦，葉祥栄，六角鬼丈の各氏であり，展示会の解説文としては私が日本の過去100余年の建築界の歩みを概観する拙稿を寄せた．　デザイン・セミナーは，伊東，黒川，竹山，長谷川，早川，葉，六角の各氏が講師として招かれ，参加者の指導にあたった他，夜の部で各氏および伊藤 SD 編集長が2度ずつ講演を行なった．

この催しは，市の芸術委員会の建築部門によって企画され，経費は総て主催者側，すなわちロッテルダム市および文化省の援助によって賄われた．　JAPAN AIR の委員長には1970年大阪万国博覧会でオランダ館の設計を担当したC. Weeber（カール・ヴェーバー）教授が任命された．　芸術委員会とは，市の財政によって運営される独立の組織であり，オランダの各大都市にも見られる．　しかしロッテルダムの芸術委員会は特に先鋭的かつ多彩な活動で知られており，建築部門の他，音楽，文学，視覚芸術，映画，演劇など全部で9つの部門から成る．他に，展示会場，劇場，映画館を運営し独自のプログラムを構成している．　建築部門は全国から招いた批評家，建築家，教育者等7人の企画委員によってその方針が決定される．　活動の内容としては，展示会，講演会，見学旅行主催，出版業務など実に幅広く，因みに次の展示会は来年1月，イタリア国外では最大規模の〈A. ロッシ展〉の予定である．

芸術委員会の建築部門は1974年に設立され，'79年頃より本格的な活動に入り，'82年に初めて年間を通じての企画，Architecture International Rotterdam，通称 AIR が遂行された．これはA. ロッシ，R. マイヤー，O. M. ウンガース等5人の建築家を招いてのデザイン・プロジェクト，G. テラーニ，IBA の展示会他，盛り沢山な行事であった．



JAPAN AIR 会場，旧市立図書館

そこで今回は'82年の AIR の名を受け継ぎ，JAPAN AIR と命名されたのである．　JAPAN AIR の企画がはっきりと姿を見せ始めたのは昨年夏頃であり，私が挙げた36名の建築家を参考に，ヴェーバー教授と芸術委員会が，最終的に今回の12人に絞ったのである．　JAPAN AIR 自体，特に主題を定めず展示会，デザイン・セミナー共，表現方法，課題選びは各建築家に一任された．　展示会は各自約10m幅の壁面が与えられ，それぞれ最近の作品について，絵巻物風あるいは掛物風にまとめたもの，シルクスクリーンによる版画，スプレーを用いたドローイング，スライド，ヴィデオ，写真などその表現方法は多彩を極め主催者側を大いに喜ばせた．

デザインセミナーは成功したか

デザイン・セミナーは9月17日午前9時より開始され，現地での参加者は52人，うち17人は建築家，35人は学生であった．　各講師の課題の主題説明の後，各班7～8名に分かれて作業を開始した．　各講師の提示した主題は，伊東豊雄〈今日の始原の小屋（primitive hut）〉，黒川哲郎〈蘭日文化クラブ，日蘭文化のハイブリッド（hybrid）〉，竹山実〈ロッテルダムに点在する空地をアーバン・コンテクスト及び街並の連続性を考慮しながら埋める〉，長谷川逸子〈原風景を建築に封入する〉，早川邦彦〈オランダのアーティストを1人選んで，その人のためのアート・ギャラリー〉，葉祥栄〈先進技術を用い視覚的な美学を追求する光の建築（Light architecture）〉，六角鬼丈〈こだわりの空間〉であった．

各参加者は22日午後の講評会までに何らかの作品を仕上げることを期待された．　ただ初日に課題の主題説明に手間取ったのと，通訳がオランダ側から3人，私を含めても4人で通常は1～2人しかおらず，少々もたつきが見られた．　これに対し委員長ヴェーバー教授は「建築家同士多少言葉が通じなくても意志の疎通は何とか可能なものである」と述べる．　これは彼自身，大阪万博でオランダ館を担当した際の経験であり，当初日本の建築界は彼にとって極めて不可解な世界であったという．　つまり今回のセミナーでは周到なお膳立てをするのではなく，講師，参加者が不可測の事態に直面し，これを乗り越えようとするところから何らかの相互理解が生ずることを期待していた様である．すなわち参加者にとって不可解な壁を乗り越えようとすることが，日本の建築の有する不可思議な魅力の謎をとく第一歩であると考えていた様である．　最終日を終えたところでの講師の疲労困憊ぶりは，この主催者側の意図が十分に生かされたことと，参加者が皆大変熱心であったことを物語っている．

僅か5日間のセミナーであるから，最終日に提出された作品自体よりも，そこへ到るまでの過程に大きな成果が見られたようである．

竹山氏の課題は，ロッテルダム市が戦争で中心地区を失い，現在の極めて不連続な街並に，所々空地が点在するという状況をうまく捉えたものであり，最初の2日間参加者と共に街へ出てアーバン・コンテクストを如何に読むかという議論を展開した．　早川氏の班では，主に現代の抽象作家を対象に，敷地はロッテルダムの既存構造を高架鉄道が分断して生じた線状の地域が選ばれた．　参加者7人中4人が建築家で，かなり具体的で力のある作品が見られた．

黒川氏の班では，煉瓦の組積造と和風の軸組構造を交錯させる案が多かったが，軸組構造に対する捉え方が，我々とはかなり異なるものがあった．　葉氏の班では模型の製作が義務づけられたが，その1つ，透明なプラスティックと鏡を用いた作品〈無限の空虚〉は透けていながら中が見えないという矛盾を内包する箱であり，葉氏の高い評価を得た．　伊東，長谷川，六角の各氏の課題は，根元的に非常によく似ていたようである．　今日の建築家が，始原的とは何かを再考する，原風景を意図的に建築に移入しようとする，自分の拘泥するところから建築へむかおうとする，これらの行為は，日本の文明社会における象徴的な模索行為とは言えないだろうか．　六角氏の班の1人は「私はかつて建築の設計に際してこのようなことは考えたこともなかった」と新しい発見を歓迎していたし，ある女性は自己の持つイメージの断片を独自の構成軸の上に展開してみせた．　長谷川氏は，原風景によせるオランダ人の心情が如何なるものか，そして如何に彼等の生活に浸透しているかを見たと述べる．　伊東氏は，主題に関する議論が，殆ど3日間に及び，参加者にとって日本とオランダまたはヨーロッパとの距離の大きさが明瞭となったのではないだろうか．

とまれ課題というものは，一端参加者の手に渡ると講師の思いもかけぬ方向に展開することがあり，興味の尽きぬところである．

オランダ国立建築博物館設立の動き

それにしても彼我の差を感じさせられたのはオランダの人達の有形，無形の文化財に対する深い理解と愛着の念である．　文化財とは人間の精神の活動の所産であり単に保護の対象となるばかりでなく，日々私達が生み育むべきものであるということを痛感させられる．　ロッテルダム市の場合，市の予算の10%以上を文化事業にあてており，芸術委員会の運営もその一部である．　この10%という値は，国内の諸都市の中でも最高であり，かつ芸術委員会の幅広い活動を凌ぐものである．

さて今回の JAPAN AIR の会場として旧図書館が充てられたことについては少し事情がある．　実はオランダ文化省は国立建築博物館の設立を計画しており，それに対しロッテルダム市は旧市立図書館の博物館への改装を提唱しており，一方アムステルダム市は，H. P. ベルラーヘ設計による旧株式取引所（1903年）を推しているのである．　つまり JAPAN AIR は，このロッテルダム市の提案を文化省及び一般に訴えるための示威運動の役目も負うていたのであり，この点においても大変成功したと言えるだろう．　もし旧図書館の博物館への改装が実現すると，ロッテルダム・ブラーク駅周辺は昨年完成したばかりの市立図書館，視覚芸術アカデミー，'85年に移転が予定される建築アカデミー，'86年に開かれる歴史博物館（17世紀のパレスを改装），港の博物館（新築），そして国立博物館と，市の一大文化圏を形成することになり，ラインバーン商店街をはさんでロッテルダム中央駅と向い合う格好で市の中心地区がより充実することになる．

しかしながら何故これ程までにロッテルダム市が市の中心地区の開発に熱心であるかを考えるときこの都市が〈魂を失った都市〉と呼ばれる事実を想い出す．　ロッテルダムは，国内で第2次大戦によって，その旧市街の殆どを失った唯一の都市なのである．　都市にとって旧市街を失うとは一体どういうことか，それは中世の骨格を残す旧市街（すなわちかつての城壁の内側）を以然として保持する欧州の他の都市と比較するとき，〈魂を失った都市〉という形容がいかにロッテルダムにあてはまるかが知れるのである．

ロッテルダム市は最早取り戻すことのできない文化遺産――それは単に建物のみならず，19世紀以降拡張された地域では得ることのできない都市に住む喜びを享受できること，という無形の文化財も含めて――の代わりに，今新たに文化を育み続けるための施設を造りつつあるのである．

デザイン・セミナーを終えて，参加した人達から今度はオランダの建築家諸氏を迎えて日本でデザイン・セミナーを，という声があがっている．　私達はロッテルダムの芸術委員会の様な立派な組織を持たないが，皆で声を掛け合って是非実現させたいものである．

最後にロッテルダム芸術委員会の R. v. d. ルフト氏，JAPAN AIR 委員長のヴェーバー教授および私達がお世話になった総ての方々，そして在日オランダ大使館文化部のデ・フリース氏，これらの方々の熱意に心から賞賛の言葉を送りたい．

●堀川幹夫／明治大学大学院


伊東豊雄氏


黒川哲郎氏


竹山実氏


長谷川逸子氏


早川邦彦氏

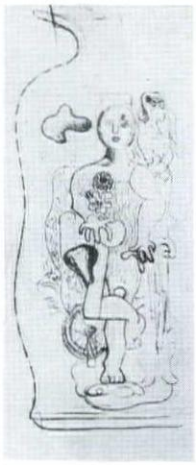

葉祥栄氏

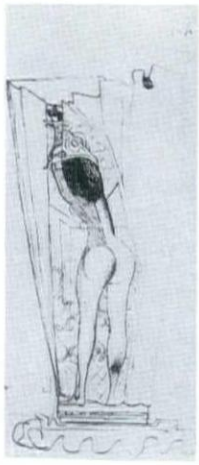

六角鬼丈氏

■展覧会レポート

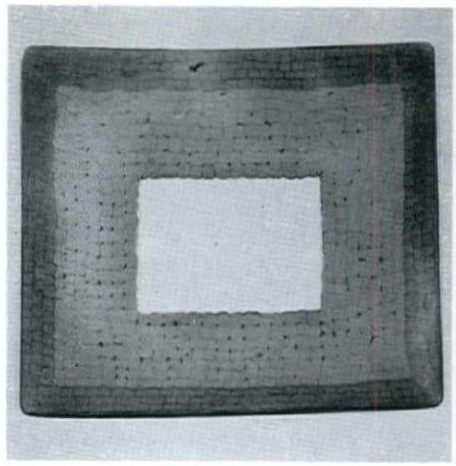
カルロ・スカルパ回顧展

野口昌夫





①ガラス器のためのスケッチ



②ガラス器

ヴェネツィア市芸術文化委員会が主催する，カルロ・スカルパの大規模な回顧展[*1]が開かれている．　6年前の晩秋，仙台にて急逝し，今は自らの作品ブリオンの墓地に眠る今世紀最大のイタリアの巨匠は，漸くその作品の全貌をあらわすことになる．

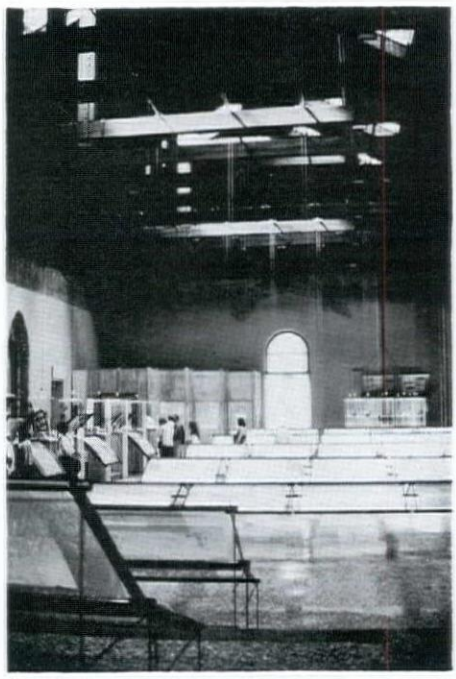
これまで，様々なアルキヴィオ（古文書館）に散在していた膨大な量にのぼるスケッチ・図面等が，初めて一堂に集められ，作品別，年代順に整然と展示されている．　この困難な収集・識別の作業はトビア・スカルパによってすすめられ，展示空間の構成はマリオ・ボッタが担当している．　初夏から始まったこの回顧展は，その開催の前からイタリア内外で大きな注目を集めており，今年に入ってからスカルパに関する出版物が急増したことは，それを裏付ける．　これまで，小規模な展示，断片的に数作品を扱った論文，エスキース集などの出版はかなりの数にのぼるものの，これほど徹底した収集作業に基づく全作品の集大成がなされたことはなかった．　開催と同時に，展示委員会の中心人物，フランチェスコ・ダル・コーらの編集による《カルロ・スカルパ――全作品[*2]》が出版されている．　この回顧展と作品集の出版は，スカルパに関する今後の批評・研究を総合的に展開させていく上で重要かつ基本的なパースペクティヴを与えるものとなろう．

カナル・グランデ（大運河）を南に下り，アカデミア橋の手前でバポレットを降りる．　この橋の再建プロジェクトのコンペに26歳のスカルパは参加しているが，当時の1等案は実現されず，そのままの姿を残している．　アカデミア美術館に入って2階左手を抜けると，スカルパ展が行われているカリタ教会の内部に通じる．このゴシック教会全体がまるごと展示空間にあてられている．　見上げると10mほどの高さにあるトラス梁の上にパイプを桁方向に数本わたし，そこから50枚の展示パネルを人間の眼の高さまでピアノ線で吊っている．　壮観である．側面は壁体として閉じる一方，屋根の一部にスカイライトを開け，そこからはるか10m下の斜めに傾いた展示パネルに光が舞い降りる．　間仕切りを一切使わず，垂直性の強いゴシックの空間全体を生かし切った見事なアレンジメントである．

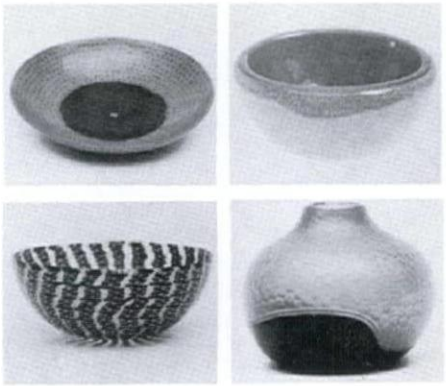
入ってすぐ左手には，スカルパが展示構成を行った彫刻家 Arturo Martini 展（第23回ヴェネツィア・ビエンナーレ　1942[*3]）に出品された彼の肖像が置かれる．　その背後に絵画の習作デッサン類，さらに進むと風景画等の油絵4点，エッチング2点，色鉛筆による静物画の小品が数点，そしてガラス器製作のためのエスキス[①]と続く．　彼の若い頃の多彩な活動ぶりが伝わっ



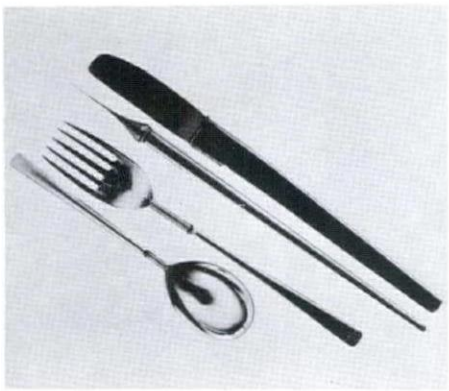
展覧会場，アカデミア美術館



会場風景，梁から吊り下げられた展示パネル



②ガラス器



③クレート・ムナーリのための銀食器



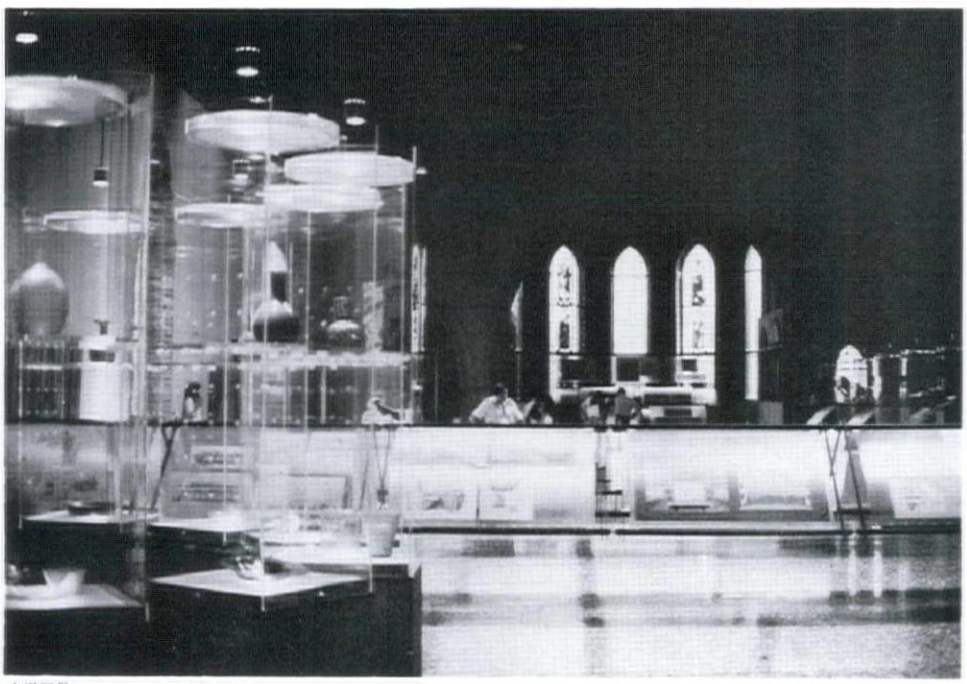
④ブリオン＝ヴェガ墓地のマッパ

てくる．　ガラス器は円環状に並べられた12のガラスケース（上下２段）に計40点あまりが展示されている．　これだけの量が一堂に会したのも初めてのことである．　スカルパがムラノのガラス器の師匠ジャコモ・カッペリンのもとで初めてその製作に着手したのは1927年(21歳)である．　３年の修業の後，1933から47年までパオロ・ヴェニーニと共同でムラノのヴェニーニ社にて，珠玉のような一連の作品を産み出す．とりわけ1940年以後②の作品は，彼の感性が確かな手にささえられ，ひときわその成熟度が高い．

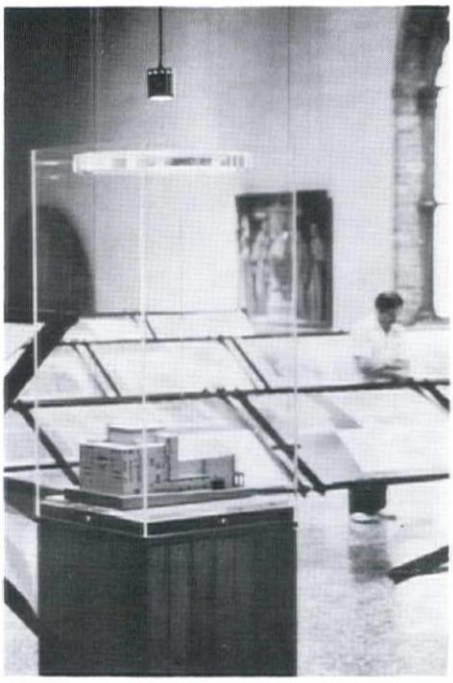
この教会の後陣右手には，銀食器，平皿等(1978)が収めてある．　スカルパのデザイン活動は，1959年のリード&バートン社(ボストン)主催の銀食器デザイン招待コンペ(２等)*4に端を発するが，それが20年足らずの年月を経て洗練された形態に昇華されたのが，ここに展示されたクレート・ムナーリのための銀食器③*5である．

これをプロモートしたロッシ&アルカンディ社は，同じデザインで40%の金を混入したものを新たに企画していたが，その矢先スカルパは突如他界してしまったという．　後陣左手には，ブリオン＝ヴェガ墓地のテンピエット内の聖水盤，その背後にはやはりブリオン墓地に使用されたマッパ④（鑓先端部）などの部品類が配される．　これは，オノリア・ブリオン氏のコレクションであり，初公開である．　この細かな部品類にまで，彼のデザイン言語が明確に刻まれているわけだが，それはひとつの作品に対する何か異常なまでの執着というよりはむしろ，この広大な墓地の空間もこの微細な部品も彼にとっては同一の次元に在ったと考えた方が良さそうだ．

さて建築作品に移ろう．　ここには建築写真というものが見あたらない．　実現した作品を他人の肉眼を通して撮影されたものは皆無であり，すべてはスカルパ自身が創作したものばかりである．　このあたりにもこの展示の質の高さを感じる．　先ほど触れた，天井梁から吊り下げられた凸面パネル(各列10枚，５列)には，スカルパが1926年ヴェネツィアのアカデミア・デル・アルテを卒業して以来1978年までの，綿綿として途切れることのない精力的活動が年代順に並べられる．　これらオリジナルの図面・スケッチは，建設の意志伝達手段としての図面とは全くかけ離れたところに存在する建築の詩集であり，それ自体が，柔かい描線と繊細な色づかいをもって奏でられるもうひとつの独立した作品である．　わかりきってはいたものの，やはり生(なま)に触れるとあらためて彼の図面のもつ底知れない力を感じる．　これとは別に，ステンドグラスを背にしたアプス部分は，ブリオン＝ヴェガ墓地の図面ばかり14枚のパネルで占められており，彼の快心の代表作にふさわしい扱いを受けている．

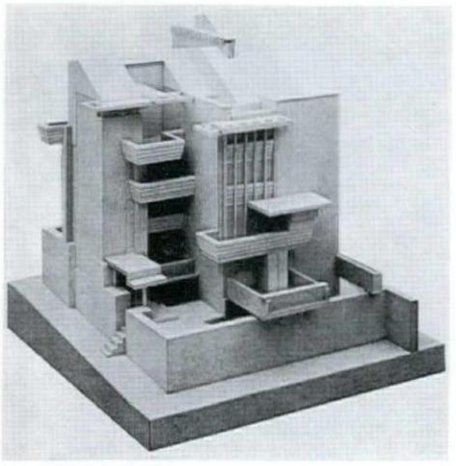


会場風景

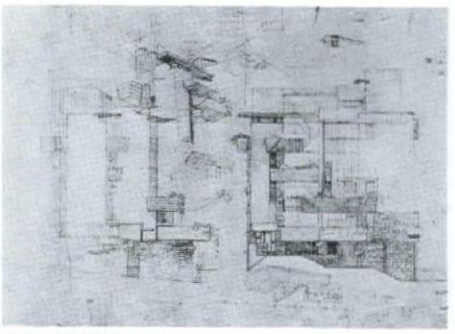


会場風景

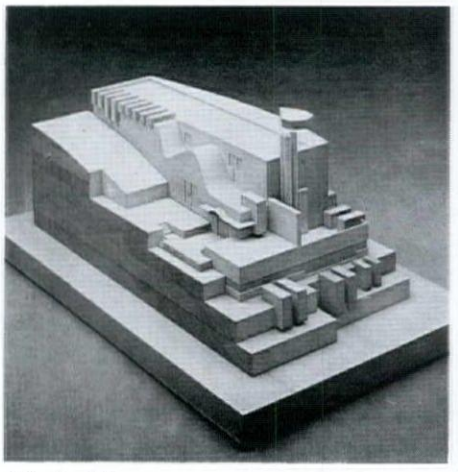
photos : M. Noguchi



⑤フェルトレのアパート



⑤フェルトレのアパート



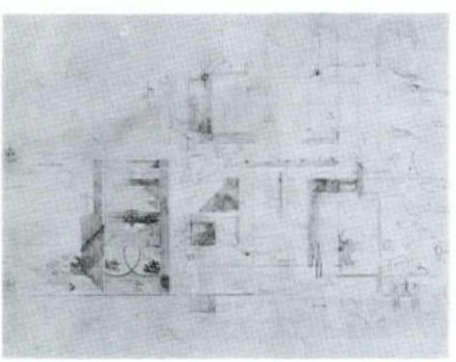
⑥カッシーナ邸

右側廊には，この展示のためにヴェネツィアの建築家たちが新たに製作した10点の模型が並ぶ．　私自身が最も興味を持ったのは，実にこれらの模型であった．　彼の作品を扱ったこれまでの出版物は，エスキス・図面類を中心にすえ，実作品の写真を加えるというのが常道であった．　しかも全体よりも部分の図面・写真が大きな位置を占める．　確かにスカルパの建築の創り方，すなわち空間を現象させる際に部分とディテールにその決定的な役割を与える彼独特の作法を考えれば，それは当然のことであろう．　とはいえ，実際，私が見た実作品は別として，とりわけ実現しなかった計画案の幾つかに関しては，既往の出版物からは空間の全体像がいまひとつつかみ切れなかったのが正直なところである．　今回この10作品の模型をじっくり見て感じたことは様々である．　漸く全体の構造が把握でき，部分との関係もはっきり理解できたものもあれば，一方では模型にしない方が良かったと思えるものもあった．　あらためて，模型という媒体がスカルパ自身の創作とは別の次元で，他人の手を通して製作されている事実を思い知らされる．　作品と表現メディアの相関というより，解釈という客観が造り上げたこれらの等質の模型群は，やはり彼の創作を離れて独り歩きをしてしまう．

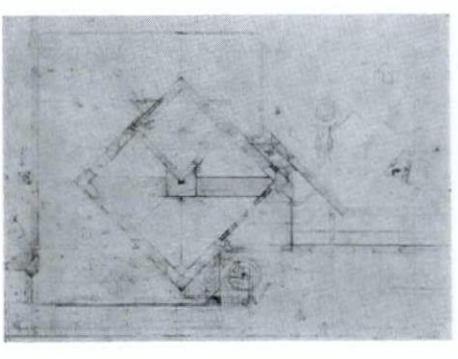
この10点を概観しておこう．　冒頭でふれた1932年のアカデミア橋の再建コンペ案[*6]．　これは，建設方法を示す3つの模型によって，当時いかに斬新な案であったかが漸く理解できる．カナル・グランデの両岸にRC造の橋脚を設け，プレハブの鋼鉄製桁梁を架け渡すのだが，水路によって工場から運搬し潮位の高低を利用して据付けるのである．　隣りの4世帯集合住宅の計画案（Feltre 1949）[⑤*7]は，同年のプロジェクト，サン・ドナ・ディ・ピアヴェの映画館[*8]と同様，ライトへの並々ならぬ傾倒が最もよくあらわれた作品である．　戦前までの合理主義の明白な影響から，戦後ライトへと大きく転換していった時期だが，それを模型から感じとることは難しい．　やはり素材・ディテールそして描写方法が読みとれる彼自身の立面図からは，それが一目瞭然である．　ヴェリッティ邸（1955—61）[⑥*9]とカッシーナ邸（1963—64）[*10]については，平面と外観との独立性が強く，ひとつの総体としてそれを把握することは容易でない．　M．ブルーサティンは，カッシーナ邸に対して「スカルパの作品の中で最も不明瞭な作品」と指摘する．それは住宅作品における有機的統一という慣習化した方法に対して，解体が進行している状態がこの住宅から看取できるからだという[*11]．　確かに分節化を回避した内部に対して，外観はその逆の構成を感じさせる．　彼の指摘したこの対比は，この模型によってある程度納得がいく．

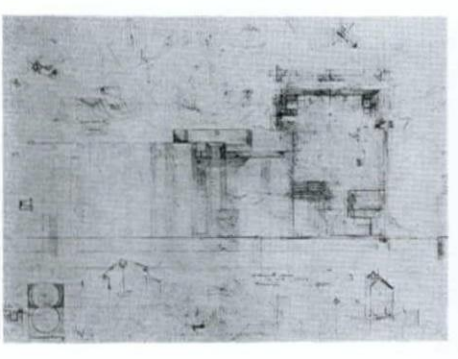
ツェントナー邸の改築（1964—68）[⑦*12]は，チューリッヒに1914年に建てられたネオ・ロココ風の邸宅を，基本構造を残して改築した実作品だが，縦方向断面で二つの模型部分に分け，新しく付加された庭に面する空間が全体との関係の中で明示される．　さらに進むと，中庭を含めた四つの展示空間から構成されたヴェネズエラ館（1954—56）[*13]，鋼鉄ワイヤーによる吊り構造と共に完全なシンメトリーを採用したヴィチェンツァ市立劇場コンペ案（1968—69）[⑧*14]，そして，ジェノヴァのカルロ・フェリーチェ劇場の再建案（1963—76）[*14]と続く．

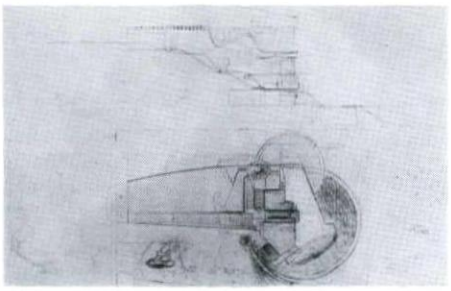
スカルパ自身が「自分の作品の中で快く眺められる唯一の作品」と語るブリオン＝ヴェガ墓地（1969—75）[⑨*14]．　これは模型にしてしまう



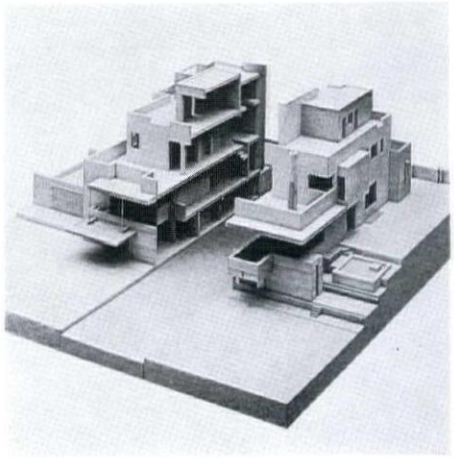
⑨ブリオン＝ヴェガ墓地



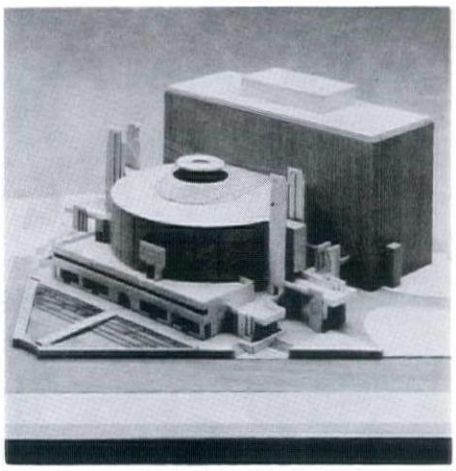




⑥カッシーナ邸



⑦ツェントナー邸



⑧ヴィチェンツァ市立劇場のコンペ案

と無味乾燥な均質なオブジェの配置となり，それなりに不思議な効果をもつことに驚かされるが，前述のアプス部分のパネルにあらわれた強烈にして繊細な色とかたちが織りなす彼の建築とは全く別の作品のような気さえする．　最後はトレヴィゾの聖カテリーナ修道院の美術館への改修計画案（1974—75）[⑩*17]．　あらためて四方から模型を眺め，ヴィチェンツァのバシリカの屋根のモチーフといわれる図書館部分の屋根など，ヴェネトの伝統的な形態言語を展開させ新しい意味を与えようとした彼の意図を捉えてみる．　しかしながらこの修復計画は，ヴェネツィアの文化財保護監督局によってその実現が中止されている．　その10年前にカステル・ヴェッキオ[*18]において優れた再生を成就した名匠スカルパにとってさえ，この国の歴史の簡には容易ならぬものがあるようだ．　今年の５月末からこのトレヴィゾの修道院にて，彼の修復計画案のみを扱かった展示が開かれ，併せてカタログも出版された[*19]．　計画案以来10年が経とうとしている現在，この再生に対するスカルパの意図が再検討されたことになる．

この回顧展は11月にミラノのブレラ絵画館に移され，そこではM. ボッタにかわってI. ガルデッラが展示空間の構成を担当する．　今後のイタリア建築の動向に少なからぬ影響を与えるであろうこの画期的な展示は，来年１月にその幕を閉じる．　これを機会に，スカルパに対する議論，評価が様々な観点からなされ，そのイタリア的巨匠の特質に新たな光があてられることになろう．

●のぐち・まさお/在フィレンツェ大学建築学部

■註

*1 'Carlo Scarpa 1906–1978' Comune di Venezia, Assessorato alla Cultura e Belle Arti

*2 Francesco Dal Co, G. Mazzariol: 'Carlo Scarpa—Opera completa' Electa 1984 Milano

*3 Allestimento della mostra 'Auturo Martini', XXIII Biennale di Venezia 1942

*4 Progetto di concorso per il disegno di posate d'argente su invito della Reed & Barton, Boston 1959

*5 Posate d'argento per Cleto Munari, Rossi & Arcandi 1978

*6 Progetto di concorso per il ponte dell'Accademia, Venezia 1932

*7 Progetto di casa ad appartamenti, Feltre 1949

*8 Progetto per il cinema Astra, San Donà di Piave (Venezia) 1949

*9 Casa Veritti, Viale Duomo, Udine 1955–61

*10 Progetto di casa Cassina, Ronco di Carimate (Como) 1963–64

*11 Ada Francesca Marciano: 'Carlo Scarpa' pp. 132–133, Zanichelli 1984 Bologna

*12 Rinnovo di Casa Zentnor, Zurigo 1964–68

*13 Padiglione del Venezuela, Venezia 1954–56

*14 Progetto di concorso a inviti per il Teatro Comunale, Vicenza 1968–69

*15 Progetto di ricostruzione del teatro Carlo Felice, Genova 1963–76

*16 Tomba Brion, San Vito d'Altivole (Treviso) 1969–75

*17 Progetto di trasformazione in museo del convento di Santa Caterina, Treviso 1974–75

*18 Restauro e allestimento del museo di Castelvecchio, Verona 1956–64

*19 AA. VV.: 'Carlo Scarpa, Il progetto per Santa Caterina a Treviso' catalogo della mostra, Vianello 1984 Treviso

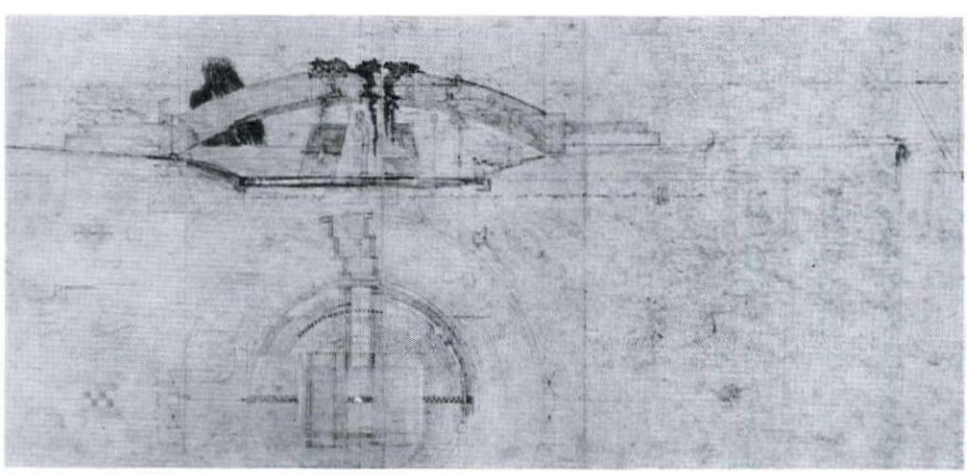
〈Carlo Scarpa 1906-1978展〉

会場：イタリア，ヴェネツィア，アカデミア美術館

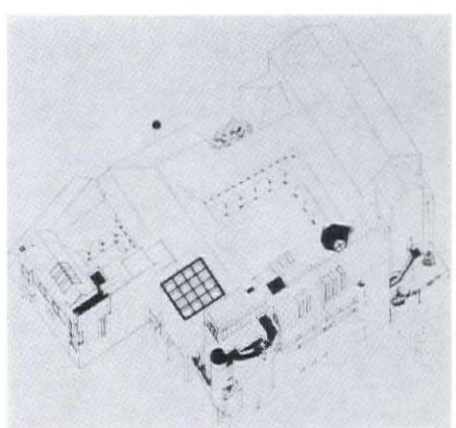
会期：1984年６月～10月

会場：イタリア，ミラノ，ブレラ絵画館

会期：1984年11月～1985年１月



⑨ブリオン＝ヴェガ墓地



⑩聖カテリーナ修道院の美術館への改修計画案

FUJI ELECTRIC

トータル技術で
ミクロの世界に挑む



生産環境、研究環境など多方面にわたり、空気のクリーン化は重要な役割を果たしています。富士電機は、クリーンルームシステムの製造をはじめ、基本計画から設計・施工・監理までの総合エンジニアリングを行なっています。豊富な実績をベースにした数々のノウハウを生かし、さまざまな用途に応じた最適なシステムで、幅広いニーズに応えています。

富士クリーンルームシステム

●サーマルキューブ●サーマルベンチ●クリーンベンチ●クリーンブース●クリーンユニット●バイオハザードセフティキャビネット●パスボックス●エアシャワ●メディクリーンユニットなど

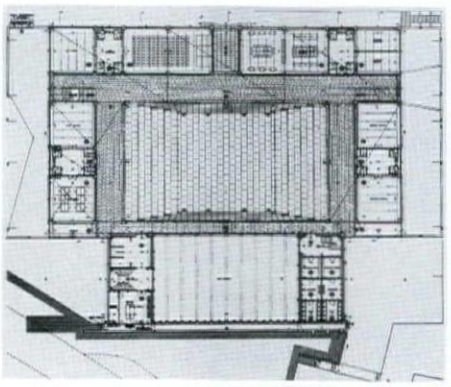
富士電機

富士電機株式会社
〒100 東京都千代田区有楽町1-12-1(新有楽町ビル)
TEL (03) 211-7111

〈永遠の建築〉への憧憬

ティチーノの建築家，リヴィオ・ヴァッキーニ

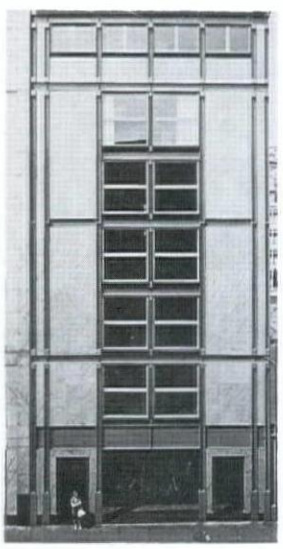
《Casabella》 1984年6月号
《Lotus International》 33号 1981年 IV
《Quaderns》 No. 160 より



モンタニョーラの小学校 1984 1階平面図

リヴィオ・ヴァッキーニ Livio Vacchini はスイス，ティチーノに在住し，マリオ・ボッタと並んで次代を担う若き建築家として注目されているひとりである． これまでにロカルノ，ロソーネ，ルガーノに小学校，高等学校そしてデパート等の作品があり，寡作ではあるが，ひとつひとつの作品を丹念につくってきている．

自らを「古典的（クラッシカル）な建築家と定義されたい」[*1]というように，リヴィオ・ヴァッキーニの建築に一貫して流れているのは the ideal of classicity クラシシティの理想への参照性，つまり建築の美を支配してきた〈普遍の言葉〉を再解釈しようとする創造的態度である． 今回，《Casabella》1984年6月号に発表された彼の最新作モンタニョーラの小学校とその広場も，いままでの彼の作品の流れから逸脱するものでは決してない． ここでは，建物とランドスケープの関係，オブジェとしての建築のあり方，プランとファサードの構成が大きなテーマとなっているが，彼はこれらのテーマを実現するためのロジカルなオーダーを，近代の巨匠達を含めたクラシシティの理念を再解釈することから得ている．



チェントロ・マッキーニ，ルガーノ 1975
高度に知覚されたリズムがファサードの中に視覚化されている．貴族的相貌の中にもある種，〈磐石の構え〉といったものが存在している．

彼のいうクラシシティとは一連の古典のスタイルではなく，建築を構成していく上での秩序，これまでに建築の美を支配してきた〈普遍の言葉〉である． 彼の建築の作法はその〈言葉〉を正しく継承し，〈現代〉の中で再定義しようとするところにある．

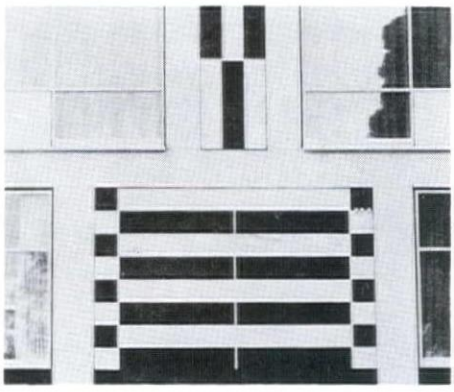
この彼の〈普遍の言葉〉を継承しようとする態度の背後には Timeless Architecture 〈永遠の建築〉，〈建築の詩的骨格〉への憧憬がある．

このモンタニョーラの小学校において，彼は4人の巨匠，パラディオ，ワーグナー，コルビュジエ，カーンを参照している． 彼は，パラディオの建築の布石を，ワーグナーの建築の正確で優雅な貴族的装いを，コルビュジエの合理を，そしてカーンの光と空間の詩学を彼自身の建築の中で統合しようと試みる． そこには，伝統という連続から逸脱したところに本来の美はありえないとする，保守的ともいえる強固な姿勢がある．

1975年作のロカルノの小学校では古代ギリシアの都市構成を参照し，1976年のロソーネの高等学校ではネオ・クラシカルな方法でプランメトリックなレイアウトを実現している． このモンタニョーラの小学校においては，彼は地形から二方向の軸線を（敷地の傾斜する方向と村から公道に沿う方向）に読み取り，それぞれを学校前広場の扇形中心軸エントランスを貫く中心軸の方向に対応させることによって建物の配置を決定している． 学校に近づくにつれて，徐々に強まる広場の方向性と空間の構造の秩序感覚，一つに限定されたアプローチの方法，これらによって人々は，広場を横切り，エントランスの階段を登るときに，あたかも古代の寺院



モンタニョーラの小学校　1984
ブラック・グレイズド・タイルを使ったワーグナーの Second Villa Wagnerの装飾に一脈通ずるものがある．右写真参照．



に向かうときのような儀式的な動きを想像するのである．　それに加えて，平滑で，整然とした表情をもつファサードと村の丘の上の支配的な建物の位置がこの儀式的な感覚を一層高めている．　小学校は公共空間の中枢の場にあたかも古代の寺院であるかのように鎮座しているのである．

彼は建築の構法の経済性に多大な関心を示している．　それははっきりとした形で彼のデザインのテーマへ反映するほどの重要性をもってくる．　構法の経済性はハイクオリティな仕上げを保証するからである．　そしてこのローコストな構法を実現するためにプランの簡潔性が大変重要な意味をもってくる．　モンタニョーラの小学校のプランをオーガナイズするにあたって彼は，コルビュジエのトラセ・レギュラトールを選択している．　つまり，このプランの素晴らしい単純性は，正方形と黄金比をもった長方形の基本幾何学形からもたらされている．ある意味で，この全体構成は無限のバリエーションを持つ黄金比の幾何学的特質を披瀝していると言えるが，ここではモデュロールが様々な部分と部分のハーモニックなプロポーションを操作するために用いられている．　彼にとってモデュロールは，あらゆるディメンショナルなスケールにおいてトラセ・レギュラトールの絶対的法則を再解釈する上で，必須のものなのである．

コルビュジエにとってトラセ・レギュラトールの選択は〈計画の根幹をなす幾何学〉を定義し〈インスピレーションを決定するモーメント，建築の基本的操作の一つ〉を意味した．しかし，ヴァッキーニにとってこのトラセ・レギュラトールの選択は，それに加えて次のふたつの意図を持っている．　ひとつは大理石のクラッディングや石貼りの床といったハイ・クオリティな仕上げを用いるためにローコストな構法を採用することと，ひとつはこの地域のアルチザンの技術をとり入れながらもハイテックなイメージを建築自体に付与することである．

次に彼は単純化された平面の機能をファサードのテーマへと転じた．　中庭を取り囲んで配された，1，2階の五つのティーチングユニット内のアトリウムの大きさの変化を柱の動きに転じ，ファサードの中に視覚している．　建物に内在する高度に知覚されたリズムをファサードの中に視覚化しようと試みている．　「モンタニョーラの小学校はカーンのポール・メロン・センターの延長線上にある作品」と《Casabella》誌が指摘するように，「人が街を歩き，建物を見た時その建物の背後にロジックを感じ，そのロジックの必然性の根源から発するものを知覚するように建物をデザインする[※2]」という，（ヴァッキーニが最も大きな関心をよせる）カーンの言葉が継承されている．

ヴァッキーニは古今の巨匠達のロジカル・オーダーを部位秩序として計画の随所で引用している．　「私達の追求すべきことは普遍性であり，不毛な折衷主義に代る国際主義ではない[※3]」という彼の言葉にも表われているように，彼はオーダーを整合していく過程を通じて建築の普遍性を追求しようとする．　現代のあらゆる文脈の中で古典（クラシシテイ）のロジカル・オーダーを再定義しようとする彼の建築の作法は，歴史，古典を現代の中で扱う問題の一つの解答といえよう．

●編＝上口泰位＋山下秀之

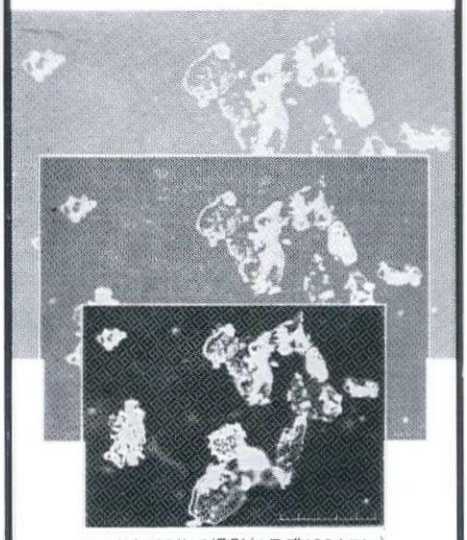
■註

※1　Lotus 34号

※2　Perspecta 20号　"Note from Volume Zero: Louis Kahn and the Language of God" p. 89

※3　a+u 1980年6月号

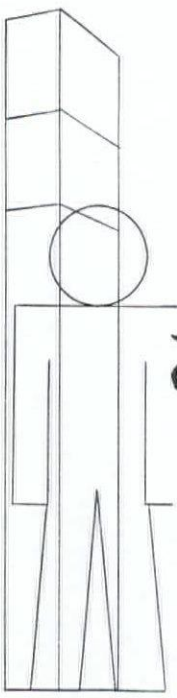
ミクロの世界へ。



●チリを400倍で撮影（1目盛10ミクロン）

「たったひとつの塵が命取りになることも…」
産業の高度化に伴い、クリーンルームへの期待が高まっています。新日空は独自の技術と豊富なノウハウを駆使し、ミクロの世界へチャレンジしています。エレクトロニクス、医療、薬品、生化学の最前線のニーズに新日空は高性能のクリーンルームでお応えします。

最先端技術に挑戦する
新日本空調
〒103 東京都中央区日本橋本石町4−2（三井第2別館）
☎(03)279-5671(代表)



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完べきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置

NESCA

川崎電気株式会社

本　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部　〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(454)5141大代表

お知らせ

第25回建築業協会賞

この度，第25回建築業協会賞が発表された．
受賞作品は以下の通り．
赤坂プリンスホテル新館，石川県林業試験場展示館，
大阪市立東洋陶磁美術館，大阪ターミナルビル，
京都東急ホテル，国立音楽大学講堂，建築会館，
ザ・シンフォニーホール，衆議院副議長公邸，
新宿NSビル，新高輪プリンスホテル，
つくばセンタービル，帝国ホテル・インペリアルタワー，
三鷹電電ビルディング，三輪そうめん山本本社．

第1回住宅設計競技応募要項

日本建築家協会東海支部および愛知建築設計監理協会では，第1回設計競技を実施することになり，このたび応募要項を発表した．
テーマ：ディスタンスのあるいえ
すまいを〈ヒト〉と〈ヒト〉，〈ヒト〉と〈ヒト群〉といった関係の中で考える〈住まいのソーシアル・プランニング〉を追求しようというもの．
応募作品：敷地，構法，設備また提案規模は自由．
ただし，実現可能なもの．
応募作品締切：60年1月31日(木)17時までに事務局に提出．　郵送の場合，同日消印，審査に間にあえば可．
応募資格：学生の部—静岡，愛知，岐阜，三重，福井，富山，石川県下の各大学（大学院を含む），短大，工専の学生およびこれに準ずるもの．
一般の部—制限なし．
審査員：茶谷正洋，佐久間達二，広瀬一良，五十嵐昇，中島一，柳沢忠，神谷義夫，牛山勉．
賞：入賞　学生の部—金賞1点　15万円，銀賞4点　5万円，一般の部—金賞1点　20万円，銀賞2点　10万円，佳作　各部共　若干点．
提出図面内容および詳細は下記に問い合わせのこと．
問い合わせ先：設計競技事務局
〒460　名古屋市中区栄4—3—26　昭和ビル5F
(社)日本建築家協会東海支部内　Tel.：052-263-4636

第12回洋書ジャンボフェア

美術，建築，グラフィック，写真など5万冊を販売．
日時：12月11日（火）～13日（木）　9：00～16：45
会場：東京都立産業貿易センター3F
東京都港区海岸1—7—8　Tel.：03-434-4241

PA誌国際家具コンペ作品募集

《PA》誌では第5回国際家具コンペを実施，作品を募集している．　詳細はp. 89～90を参照のこと．

日本建築家協会
創立70周年記念行事開催

日本建築家協会は，大正3年，辰野金吾，曽称達蔵，長野宇平治，中条精一郎他12名の発起人によって，その前身である全国建築士会が創設されて以来，70周年を迎え，去る11月1日，2日，70周年記念式典および大会が盛大に催された．
また，これを期に，未だに改善の余地が残された建築家の資格および業務のあり方の諸問題に関する要望を建設大臣あてに提出した．

アドルフ・ロース映画上映会

現在，日本で巡回中のアドルフ・ロース建築写真展の開催に伴い，19世紀末から20世紀に活躍した3人のウィーン建築家，アドルフ・ロース，オットー・ワグナー，ヨーゼフ・ホフマンおよびユーゲント・シュティールの映画が上映される．
日時：12月7日（金）　18：00～21：00
会場：建築会館ホール　東京都港区芝5—26—20
映画：アドルフ・ロース(20分)，オットー・ワグナー(30分)，ヨーゼフ・ホフマン(33分)，ユーゲント・シュティール(47分)
作品解説：川向正人
主催：日本建築学会建築PR事業委員会，日本建築学会建築歴史・意匠委員会
定員：350名（先着順）
入場料：300円

継手・仕口展

日本建築の隠された知恵
会期：11月5日(月)～1月25日(金)　10：00～18：00
毎月第1火曜，12月29日～1月4日は休館．
会場：伊奈製陶ショールーム2F
東京都中央区京橋3—6—18　Tel.：03-562-1998

建築ドローイング展

記憶の解体，そして再構築
現代の都市に対する批判をユニークに表現した展覧会．
会期：11月12日（月）～12月7日（金）
9：00～15：00（土曜日～12：00）
会場：日本債券信用銀行東京支店ロビー
東京都千代田区大手町2—6—2　日本ビル1階

武田則明建築展

空間・記憶・暗喩
住宅11戸の模型と写真を展示．
会期：12月1日（土）～5日（水）　10：00～19：00
会場：海文堂ギャラリー
兵庫県神戸市中央区元町通3-5-10　Tel.:078-331-6501

International Furniture Competition

WINNING PROJECTS TO BE DISPLAYED AT MAJOR INDUSTRY EVENTS

PROGRESSIVE ARCHITECTURE announces the fifth annual competition recognizing outstanding furniture and lighting design proposals, not yet being marketed by any manufacturer as of entry deadline, January 17, 1985. The competition is intended to give the design professions a forum to express ideas about the next generation of furniture design, at a time when architects and designers are increasingly custom-designing furniture for their projects and manufacturers are increasingly open to fresh ideas. The competition is specifically aimed at furniture intended for use, but the design need not be constrained by existing production or marketing practices. Entries may be based on either fabricated pieces or project drawings. Designers are encouraged to consider the aesthetic and ideological implications for furniture design implied by the current concerns within architecture and other design disciplines.

WINNING PROJECTS will be published in the May 1985 P/A and they will be displayed at major industry events during the year. Winners will be honored in New York City at an awards ceremony in early March attended by press, designers, and industry manufacturers.

In addition to the exposure afforded the submissions, the competition will encourage further discourse between the entrants and respected furniture producers. Any ongoing discussions will, of course, be up to the individual designers and manufacturers, but benefit to both is anticipated.

SUBMISSIONS are invited in all categories including chairs, seating systems sofas, tables, desks, work stations, storage systems, lighting, beds, and miscellaneous furniture pieces.

THE JURY FOR THIS COMPETITION

Gae Aulenti, architect, industrial and furniture designer, Milan, Italy.
Thomas H. Beeby, partner, Hammond Beeby and Babka Incorporated, Chicago, architect and furniture designer.
Ralph Caplan, writer, editor, and critic, New York.
Charles Gwathmey, partner, Gwathmey Siegel & Associates, New York, architect and furniture designer.
Richard Schultz, industrial and furniture designer, Barto, Pa.

JUDGING will take place in New York City during the month of February. Designations of *first award*, *award*, and *citation* may be made by the invited jury, based on overall excellence and advances in the art.

[Turn page for rules and entry forms]

DEADLINE FOR SUBMISSION
JANUARY 17, 1985

Entry form
International Furniture Competition

Please fill out all parts and submit, intact, with each entry (see paragraph 11 of instructions). Use typewriter, please. Copies of this form may be used.

ENTRANT:
ADDRESS:

ENTRANT PHONE NUMBER *(day):*
(evening):

CATEGORY:

ENTRANT:
ADDRESS:

DESIGNER(S) RESPONSIBLE FOR THIS SUBMISSION
(identify individual roles if appropriate):

I confirm that the attached entry meets eligibility requirements (paragraph 1-3) and that stipulations of publication agreement (paragraphs 4-6) will be met. I verify that the submission is entirely the work of those listed on this form (or an attached list as necessary).

SIGNATURE
NAME *(typed)*

FURNITURE COMPETITION
Progressive Architecture
P.O. Box 1361, 600 Summer Street, Stamford, CT 06904

(Receipt)
Your submission has been received and assigned number:

ENTRANT:
ADDRESS:

ENTRANT:
ADDRESS:

Eligibility

1 Architects, interior designers, industrial designers, and design students from all countries may enter one or more submissions.
2 Design must be original. If found to be substantially identical to any existing product design, entry will receive no recognition.
3 Designer may be under contract to or in negotiation with a manufacturer for this design, but design must not be available in the marketplace as of entry deadline.

Publication agreement

4 If the submission should win, the entrant agrees to make available further information, original drawings or model photographs as necessary, for publication in the May 1985 P/A and exhibition at major industry events.
5 P/A retains the rights to first publication of winning designs and exhibition of all entries. Designer retains rights to design.
6 P/A assumes no obligation for designer's rights. Concerned designers are advised to document their work (date and authorship) and seek counsel on pertinent copyright and patent protections.

Submission requirements

7 ***Submissions will not be returned under any circumstances.*** Do not use original drawings or transparencies unless they are sent with the understanding that they will not be returned. P/A will not accept submissions with outstanding custom duties or postal charges.
8 Drawing(s) and/or model photo(s) of the design should be mounted *on one side only* of one 20″x 30″ foamcore board presented horizontally. ***Any entry not following this format will be disqualified.***
9 There are no limits to the number of illustrations mounted on the board, but all must be visible at once (no overlays to fold back). No actual models will be accepted. Only one design per board.
10 Each submission must include a 5″x 7″ index card mounted on the front side of the board with the following information typed on it: intended dimensions of the piece of furniture, color(s), materials, components, brief description of important features, design assumptions, and intentions. This information is to be presented in English.
11 Each submission must be accompanied by an entry form, to be found on this page. Reproductions of this form are acceptable. All sections must be filled out (by typewriter, please). Insert entire form into unsealed envelope taped to the back of the submission board. P/A will seal stub of entry form in envelope before judging.
12 For purposes of jury procedures only, projects are to be assigned by the entrant to a category on the entry form. Please identify each entry as one of the following: Chair, Seating System, Sofa, Table, Desk, Work Station, Storage System, Lighting, Bed. If necessary, the category *"Miscellaneous"* may be designated.
13 Entry fee of $35 must accompany each submission, inserted into unsealed envelope containing entry form (see 11 above). Make check or money order (no cash) payable to *Progressive Architecture.*
14 To maintain anonymity, no identification of the entrant may appear on any part of the submission, except on entry form. Designer should attach list of collaborators to be credited if necessary.
15 Packages can contain more than one entry; total number of boards must be indicated on front of package.
16 Deadline for sending entries is January 17, 1985. First class mail or other prompt methods of delivery are acceptable. Entries must show postmark or other evidence of being en route by midnight, January 17. Hand-delivered entries must be received at street address shown here by 5 p.m., January 17.

Address entries to:
International Furniture Competition
Progressive Architecture
600 Summer Street
P.O. Box 1361
Stamford, CT 06904

新刊紹介

《こどものあそび環境》
仙田満＝著
B6判　336頁
筑摩書房　2200円

都市化が進むにつれて空地，神社，小川など，こどものあそび場であった自然環境が激減している現状にあって，あそび場のデザインを実際に手掛け，その設計活動の傍，10年前から〈こどものあそび環境の調査研究〉を進めてきた著者が，学会および関係雑誌に発表した論文をもとにまとめた書である．
あそび場の原点を考え，あそび環境の構造とその変化を調べ，現代のこどものあそび環境の再開発を提案，こどもからあそび場を奪った大人たちへ警告を行なっている．

《虫の居どころ――続・建築用語漫歩》
矢田洋＝著
B6判　228頁
文化出版局　1300円

建築用語の世界に潜む動物の名を集めた《建築用語漫歩》(文化出版局)の続篇．　今回は昆虫篇である．　前著と同じく，同名タイトルで工作舎のインテリア情報誌《室内》に連載した原稿をまとめたもので，数百の虫が次々に登場，建築用語のおもしろさに改めて気づかされる．
胡蝶棚，蝶ネジ，蝶都合(ちょうつがい)，蟻継ぎ，寄せ蟻，かぶと屋根，蛭石，蛭環……．

《明治・大正建築覚え書》
光藤俊夫＝著
B6判　256頁
学芸出版社　1500円

建築エッセーと銘をうった本書は，明治・大正建築によせる作者の恋心がいろいろな形で随所にちりばめられた楽しい本である．　ある時は文学と，そしてある時は作者の思い出と重なり，豊富な資料と数々のエピソードによって織りなされた作者自身の建築史ともいえよう．　また折々に触れられた海外の著名な建築は，この時代についての新たな発見を導くものかもしれない．　ユニークな入門書として紹介したい．

《新版・商業建築企画設計資料集成
――②設計基礎編》
(社)日本店舗設計家協会＝監修
商店建築社＝編
A4判　260頁
商店建築社　9800円

商業建築設計のための資料を網羅的に収集し，どんな業種，業態にも対応可能なものを目ざして構成された，全3巻からなるシリーズの第2巻目．　第1巻〈設計実例編〉に続く本書は，1. 設計基礎資料，2. 業種別設計資料，3. 複合商業施設，4. 設備計画の四章から構成され，商業建築を設計する上での基礎知識や基本的な計画手法から各部ディテール寸法に至るまでが，コンパクトなかたちで的確にまとめられている．

《MEMPHIS　メンフィス
――ミラノ・ニューデザインのすべて》
バルバラ・ラディーチェ＝著
A4判　208頁(カラー112頁)
商店建築増刊　商店建築社　3900円

1981年，エットレ・ソットサスを中心に誕生し，世界に旋風を巻き起こしたミラノのデザイン・グループ，メンフィス．
本書は，発足時からの協力者であるジャーナリスト，バルバラ・ラディーチェによって書かれ，その誕生から発展，ヴィジョンなど，未公開の作品，ドローイングを含めて紹介するメンフィスの実験的デザイン活動の総集篇である．　なお，この日本語版はイタリア・エレクタ社とのジョイントによる完訳版．　図版280点以上．


リング〈依屋〉(梅田正徳，1981年)上のメンフィス中心メンバー



《TOKYO　東京　ACCESS》
R. S. Wurman＝編
133ミリ×260ミリ　232頁
日英2ケ国語　5色刷り
ACCESS PRESS×C. Itoh Fashion System
講談社(日本・発売元)　1500円

今の東京のおもしろさを，外国から来た人に短時間で伝えようというのは，かなり難しいことだ．　その原因のひとつは，現在東京を訪れる外国人は，かつてのように名所旧蹟をひと巡りして異国情緒を楽しめば満足する手合いは少なく，「東京は世界最大のデパートだ」という言葉に示されるように，混沌とし躍動する巨大な渦巻きのような状況そのものに強い興味を持っているからであり，彼らの興味に適したシティ・ガイド・ブックが，少なくとも英語版では皆無だったことにある．
そうした要請に応じて刊行されたのが，TOKYO ACCESSである．　この本の編集責任者のR. S. ワーマンは，これまでにもニューヨーク，ハワイ，ニューオリンズ，ワシントンDC，ロスアンゼルス，サンフランシスコのアメリカの6都市のシティ・ガイド・ブックをACCESS(アクセス)シリーズとして出版しており，TOKYO ACCESSはシリーズとしては初めての海外都市版なのである．
日英2ヶ国語の完全併記で，東京を9つの地区に分け，街並みをなぞるようなかたちで紹介している．　項目は5つに分別され，それぞれが異なる色で印刷されている．　即ち，美術館・劇場・建築物が青，ホテル等が黒，ショップが赤，レストランがピンク，公園・公共施設が緑，という具合．　こうした配慮は視覚的にも楽しく，また使い勝手も極めて良い．
何よりも全ページを通じて，「東京を丸ごと楽しむ」という姿勢が貫かれているのが好ましく，まだ未完成の建築までもが載っている情報の新鮮度には驚かされる．　外国からの来客用ばかりではなく，東京の住人にとっても十分に魅力あるガイド・ブックというに値する．



防災のプロ「ノーミ」。
その技術を結集した
ビル管理システムの決定版。



●防災、空調、電力などを集中監視制御。スケジュール運転、日報作成も自動化し、省力化。
●外気取入量制御、熱源機器の台数運転、最適運転制御などにより省エネを実現。
●火災報知、空調、電力などの制御信号を共通の伝送装置で処理でき設備費を低減。
●システム化で、より安全なビル管理を実現。

ノーミのビル管理システム
MIDEX

能美防災
本社 〒102 東京都千代田区九段南4-7-3
☎(03)265-0211(大代表)

書評

《田原桂一写真集
——TAHARA KEIICHI 1973–1983》
田原桂一＝著
A3判 144頁
ゴローインターナショナルプレス 18000円

評者＝
飯島耕一

写真の焼き物師

早くまとめて見たいと思っていた田原桂一の〈窓〉と〈エクラ〉シリーズが，“TAHARA KEIICHI 1973—1983”としてようやく刊行され，建築写真以外の，彼本来の実験的仕事を一望のもとに眺めることができるようになった．

〈窓〉の第1ページ目を開くと，曇天下のトランシルヴァニアの山中の奇城かと見まごう，黒々とした建物が出て来るが，これもパリのごくありふれた建物の屋根と屋上部分らしい．この黒々とした光と影を見ていると，わたしなどはすぐにボードレールの詩の中のパリを連想するのである．

窓枠の内側がいかにもパリだと思わせる写真がある．しかし写真家はわれわれに，窓枠だという認識よりも，光と影，黒と白との微妙な対比を見させたいのだろう．それにしても〈窓〉シリーズにはまだまだ物の形が写し撮られているが，〈エクラ〉シリーズの写真となると，室内のカーテンとか煖房器具とか屋根裏のような空間を撮っているらしいが，形はわからないかもしくは曖昧で，光と闇，白と影のみがそこにある．エクラとは écrat のことで，破片，薄片のことであり，閃光，輝き，光りの意である．物に吸収されたエクラにのみ，忍耐づよく写真家は狙いを定める．ふつう写真家は，物の形を，形ある物を，また人を撮ろうとするのであるが．

われわれは物を見ているようで，実際には意外に見ていないものである．まして物が吸収しているエクラを，じっと集中して見ることなどはあまりない．カメラは肉眼のかわりに，そのエクラを写しとってわれわれに示す．物たちの表面は，こんなにもエクラで成立っているのだと．

〈窓〉シリーズでボードレールの詩の闇を連想するとすれば，〈エクラ〉で連想するのは，フランシス・ポンジュの詩であろうか．ポンジュという現代の詩人は「物の味方」であることにその詩的正義を賭けた．彼は人々の愛や行為をうたわず，物を（竹籠を，ミモザの花を，雨を）見つめ，それをやさしく繊細に，科学的に記述する．「都に雨の降るごとく」と抒情せず，雨の落下の姿を散文で記録する．彼は沈黙せる物の側に立ち，物の味方であろうと試みるのだ．われわれのふだん無視している物たちの，そのひそやかな存在の味方であろうとする．これは十分に詩的な行為なのではあるまいか．俳句の精神に通じるようでいてあくまで散文による記述なのだ．

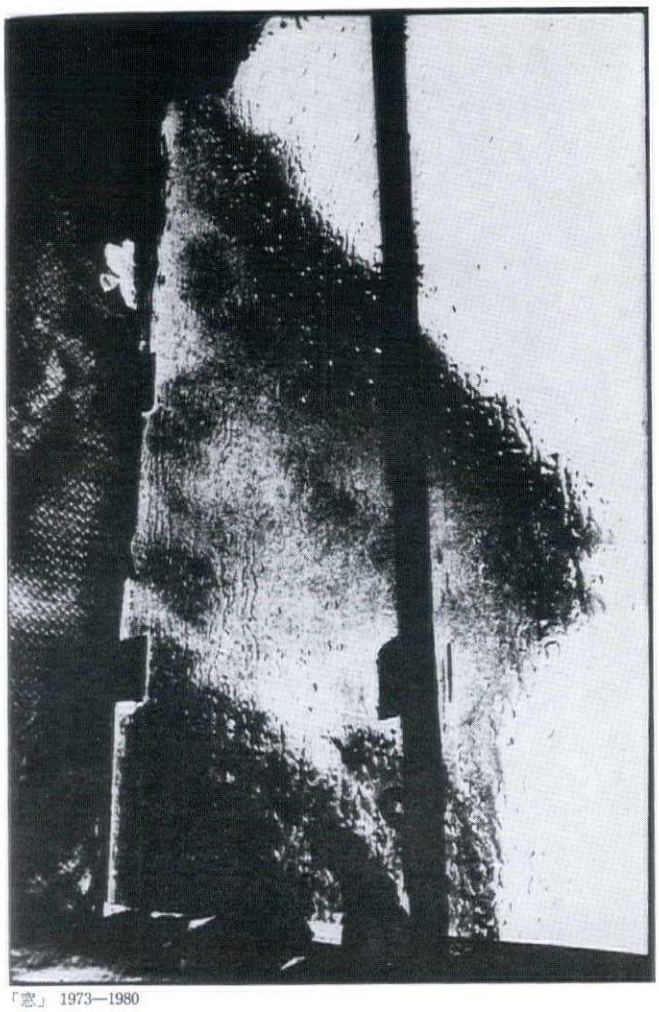
田原桂一は，これらの写真を焼いていてスリルがあっただろう．何が写っているかわからないからだ．ひょっとして細部に何かが宿っているかも知れないからだ．それはまるで陶芸家が出来てホヤホヤの焼き物をカマから取り出すようなものであろう．田原氏の黒白の写真の肌は，黒白の焼き物の肌のようである．

田原桂一もまた一人の焼き物師であると言おうか．彼もまたパリの工房で土をこね，火を使っているのである．

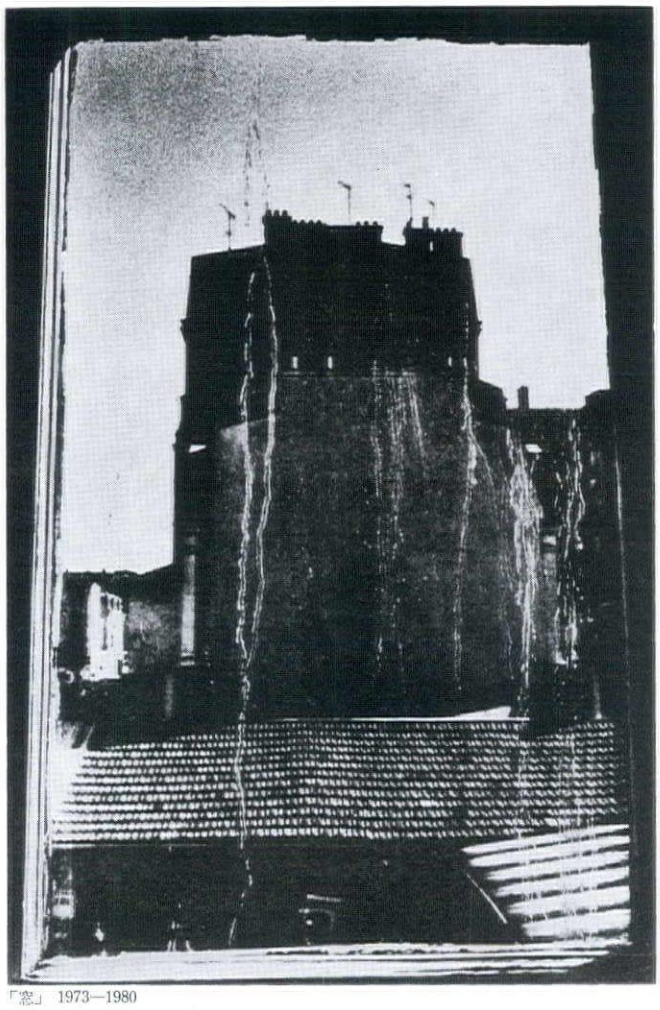
〈エクラ〉シリーズの何枚かを見ていると，実際，火で焼きあげた写真，火にあぶってもなおも残って，そこに在る物たちの現場写真といった感じがする．土をこね，と言ったが，現代を思わせる金属的な肌のものもある．その肌をかくれ家として，光と闇が静かにひそんでいるようだ．

巻末評論のベルナール・ラマルシュ＝ヴァデルは谷崎の〈陰翳礼讃〉から引用しているが，谷崎の「陰翳」はすでに失われたと言うべきだろう．別の日本の「陰翳」はどこにあるか．問題にされていいかも知れない．

●いいじま・こういち／詩人



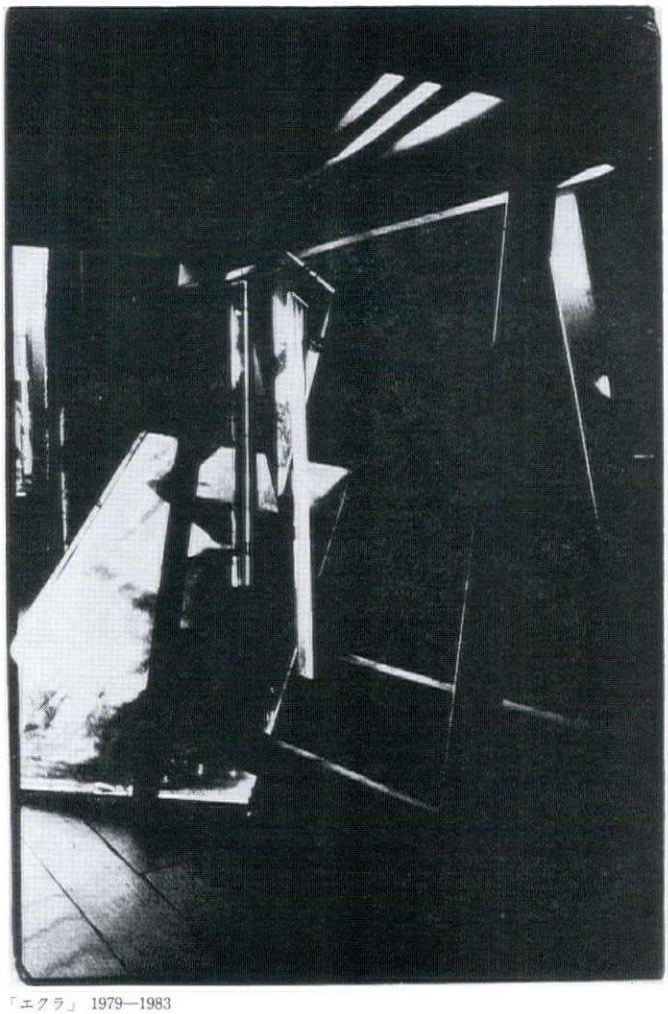
「窓」 1973—1980



「窓」 1973—1980

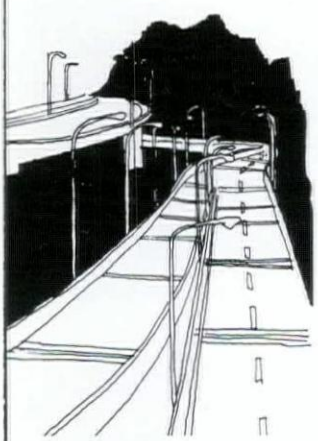


「エクラ」 1979—1983



「エクラ」 1979—1983

明日の環境づくりを
考える……



営業品目

ビル、工場、一般電気設備
防爆電気設備
受変電設備
外線工事及び計装工事
電気機器の販売

設計・施工

篠原電機工業株式会社

本社 〒210 川崎市川崎区藤崎4丁目4番4号
電話 川崎 044（244）1241(代表)
横浜営業所 〒231 横浜市中区真砂町4丁目43番地 木下ビル4階
電話 横浜 045（651）4268(代表)
大和営業所 〒242 大和市下鶴間字甲10号1614番地89
電話 大和 0462（76）3107(代表)
相模原営業所 〒228 相模原市相模大野6丁目29番
電話 町田 0427（44）3238(代表)
出張所 岩井、伊勢崎、藤枝

書評

《日本の集落》 全3巻
住宅建築別冊⑬⑭⑮
高須賀晋＝文 畑亮夫＝写真
A4判 208頁
建築資料研究社 各4000円

評者＝
宮脇檀

作業は終っていず，始まったばかりだということを……

〈住宅建築〉は平良さんという名伯楽によって一肌違った住宅誌としてスタートした．勿論，遅れて出て来るものとしての必然でもあったこのオリジナルな編集方針の中に，地方の再発掘という太い線があった．高須賀さんと畑さんの二人で始められた日本の集落の連載は，一部はその編集方針に従っているようでもあり，又別にそれを乗越えた何かの魅力を持っていた．

この手の民家や集落の写真による採集や記録の歴史は古く，数多い類書や作業を私達は知っているのだが，この二人による記録は〈住宅建築〉誌がそうであるように他の類例といささか違ってみえる．

一般的には民家の美しさを賛美し，記録に留めようという，どちらかというと情緒的なものが多い．それに対して二人の写真も文もいささかそっけないといってしまえるほど媒体としての家や集落を見つめているのに気がつくだろう．

美しいことへのおう歌，朽ち果てていくものへの哀悼の気持が無い訳ではないのだが，それは前面に絶叫的に出ている訳ではない．

そして又，従前の写真集と大きく変る部分は，高須賀さんが後書きで述べているように集落や，家そのものより，地形などといった風土的なものの描写の方が前面に出ていることである．

もとデザイン・サーベイ屋としてはその辺りかなり気に入って眺めていたものだ．民家はきのこの様なものといったのは篠原一男だが，私も又風土から滲み出して来たような建築の在り方を学んだ者として，その部分の発掘と評価がされているのは嬉しいこと．風土が荒れて行き，それで民家が一緒に滅びてしまうのは運命として仕方ないではないか．

この纏められた写真集の中から，そんな声も一緒に聞えてくるようだ．

二川さんの一連の日本の民家の写真集，なかんずくあの美しくも新鮮であった航空写真，ノーマン，カーバーの日本人をハッとさせた伝統の空間の美しさの表現，そこにあったような美の意識はこの本にはない．その真っ黒い紙焼の墨の中から生じてくるのは，あくまでも強い風土と歴史の影の重さであり，その中に在ってやがて消えていくべき庶民の家のはかなさである．

それが悲しくも迫って来るのが良い．

私達がデザイン・サーベイの中で見出したものは正にそれだった．建物を実測し，記録する事によってそこで得たものを自らの身体化させ，それが何時か私達の作品の中に現れ，受け継がれていくだろうという作業がデザイン・サーベイだったからだ．

高須賀さん，畑さん，御苦労様でした．大変な作業であったことは私達には良く解る．そして同時にその後も言わねばならない．これから得た成果を次の作品に最も生々しく発揮出来るのは，作業をした貴方方が一番だということも．だからおめでとうとも言わねばならない．

これからの仕事は，多分この仕事がどう消化され，花や実として成果となって行くかというプロセスに過ぎないからでもある．

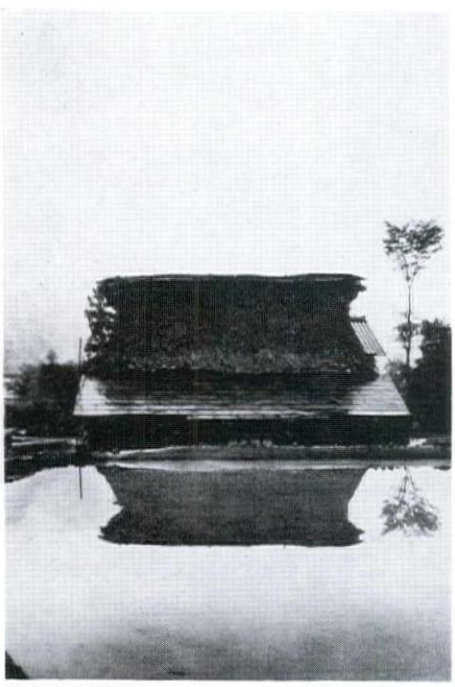
●みやわき・まゆみ／建築家



滋賀県近江八幡町沖島



香川県香川郡塩江町細井



富山県魚津市黒谷

明日の豊かな環境をつくる。

大成温調
工業株式会社

本　社　東京都品川区大井1丁目47番1号
〒140 ☎03(774)1111(大代表)
支　店　東北・関東・大阪
営業所・出張所
名古屋・静岡・千葉・新潟・横浜・栃木・茨城
秋田・兵庫・青森・盛岡・長岡・甲府・沖縄

主要業務内容

- 冷暖房空調設備工事／冷凍冷蔵設備工事の設計・施工請負
- 設備／機器に関するコンサルタント業務
- 設備装置の修理/整備/運転調整/保守点検
- 日立冷凍空調機器の販売

避雷設備
／設計・施工
避雷針器材
／製作・販売



東京避雷針工業株式会社
本社　東京都中野区弥生町1丁目55—11
電話（03）372-5261（大代表）〒164
支店　横浜市神奈川区星野町1—12
電話（045）453-1991（代表）〒221

新刊紹介

建築の七つの力

鈴木博之＝著
四六判　184頁
鹿島出版会　1800円

これまでの建築論は，いくつかの類型に分類することができる．　そのひとつは，建築を成立させる技術的側面，それが工学技術的であれ，芸術的色彩の強いものであれ，さまざまな側面から，建築を創るという一点に接近してゆくものである．　それに対して，建築の本質を外側から規定してゆこうとする態度も存在する．この場合，建築は創られるものとしてではなく，現に存在して，社会や歴史のなかで何らかの意味を体現しているものとして，考察の対象となるのである．

無論，建築論はこの両者にはっきりと区分されてしまうものではない．　この両極の間をゆらめきながら，両極に架橋しようとしているのが建築論の実際の姿なのかもしれない．　じしん，もっとも魅力を感じるのも，この両極の間でゆらめく建築論である．

このように感ずる著者は本書で，建築を成立させているさまざまな側面が建築に対してもつ力として，七つの力をとり上げ，古来の建築論はもとより，国木田独歩，永井荷風，谷崎潤一郎の作品までも引きながら，自らの建築論を展開する．

初めの「連想の力」は，建築を創り出すうえでも，建築を読み解くうえでも，ともに重要な要素を考え，次の「数の力」と「ゴシックの力」は，建築様式の二大潮流ともいうべき古典主義様式，ゴシック様式の考え方とその解釈の歴史を，それに対し「細部の力」「模倣の力」は，建築のなかに意味を込め，意味を伝達する要素を，そして「地霊の力」と「過去の力」は，建築のおかれる空間的，時間的ひろがり，いわば場所性，歴史性といったものをとり上げている．

近代建築ガイドブック［西日本編］

松葉一清＋宮本雅明＋片野博＋大森久司＋土田充義＋宮本達夫＋桑原三郎＋山口光臣＋村田明久＋阿久井喜孝＋川上秀人＋木島安史＋福原昌明＋伊藤行＋中力昭＋杉本俊多＋中川幸治＋小野木重勝＋山本忠司＋松村正恒＋四宮照義＋山本長水＝共著
四六判　280頁
鹿島出版会　2800円

一昨年の『関東編』，本年春の『関西編』に続いての刊行．　前2編と同様，日本建築学会編《日本近代建築総覧——各地に残る明治大正昭和の建築——》（1980年技報堂出版刊）にリストアップされた中から選んだ現存する戦前の洋風建築を，見学コース別に分け，それぞれに，まずコースの特色の説明と案内図を掲げ，次いで各建造物ごとに写真，設計者・施工者名，建造年，構造，交通案内，また重要なものには個別の解説を配する．

おさめる建造物は約550件．　コースは25，「関門」に始まり，九州で「洞海湾」「博多天神」「九大」「筑豊炭鉱遺跡」「有田・唐津」「長崎市街地」「南山手・東山手」「軍艦島」「五島教会堂建築」「熊本」「日豊本線」「鹿児島」の12コース，中国地方で「岡山・牛窓・和気」「倉敷・児島・笠岡・高梁」「津山を中心とした美作」「広島」「呉・江田島」「岩国・柳井」「山口・宇部・萩」「山陰」の8コース，それに四国の4コースが「香川」「愛媛」「徳島」「強い風雨と高知の建築」と続く．

なお，巻頭に「日没する国より」（松葉一清）があり，西日本の戦前洋風建築を全般に展望する華麗な文章で旅心をそそっている．



三機

品質への限りない挑戦。
技術と技能。



日々刻々と進歩する先端技術、その成果を製品の中に反映させ実らせる技能。このふたつがあってこそ、確かな品質が保証されます。三機は、現代から未来へ向けて、高品質な人間環境づくりに取り組んでいます。そのために、さまざまな分野で時代をリードする、高度な技術と高水準の技能とを結合し、独自の総合エンジニアリングを推進しています。

建築設備

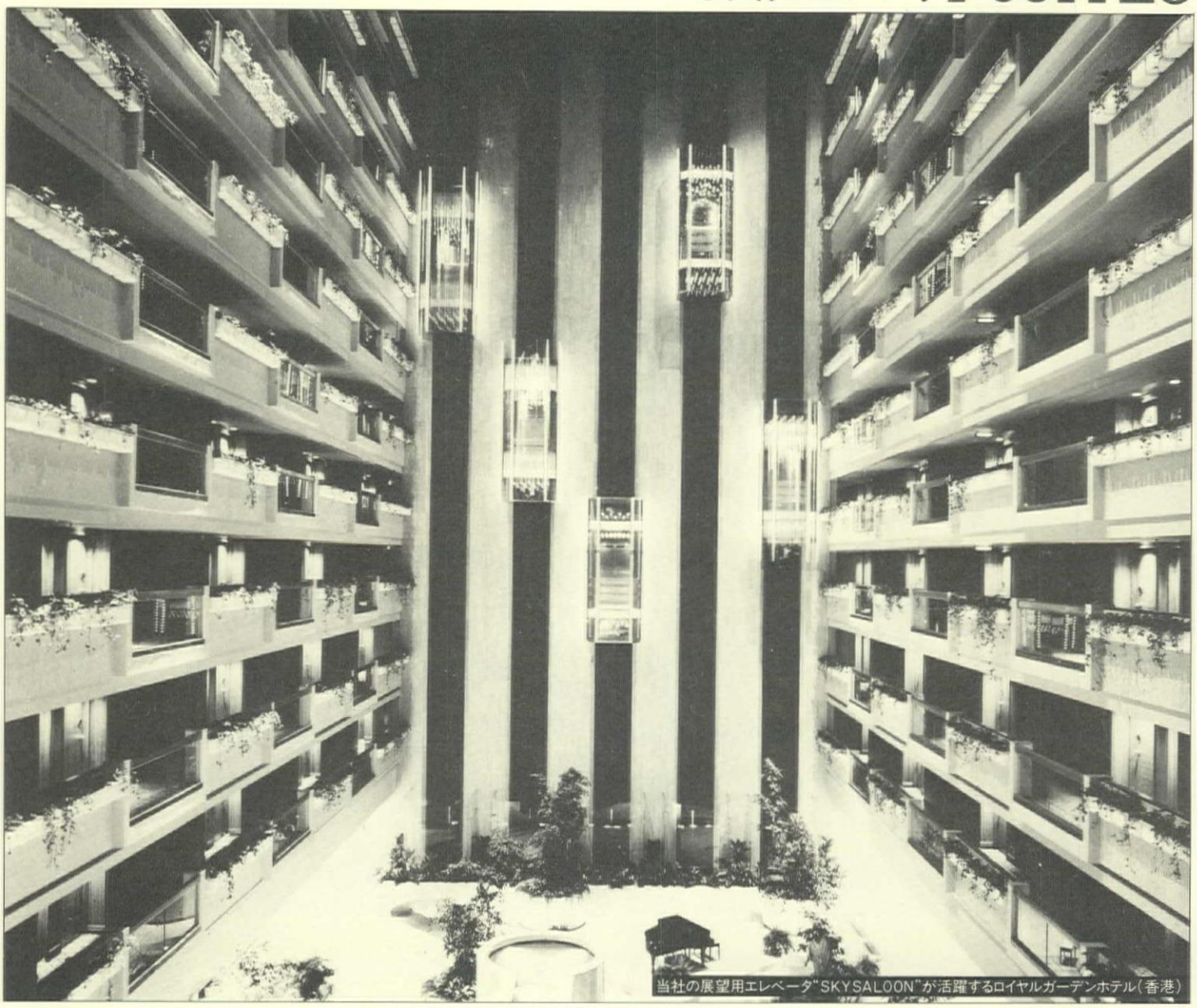
プラント設備

三機工業株式会社

本　店　東京・日比谷・三信ビル　TEL(502)6111

支　店　大阪・名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国

●世界のエレベータ **FUJITEC**



当社の展望用エレベータ"SKYSALOON"が活躍するロイヤルガーデンホテル(香港)

エレベータは人の流れを読む。

●ビル交通需要の変化を予測して、エレベータが動く。しかも、その動きはきわめて効率的。FLEX-11はまさに先進の群管理システムと呼ぶにふさわしい装置です。中枢部には学習機能をそなえた高性能マイクロコンピュータを搭載。時々刻々変化する交通需要を逐次、分析・整理します。結果、常に最新の交通データが確保されます。乗場呼びが発生すれば、その交通データからビル内の人の動きを予測、最適なエレベータを割当てます。この予測割当てには高度なゲーム理論"ベイズ戦略"を応用。その精度の高さは驚嘆に値します。しかも待ち時間の短縮だけでなく、消費電力の節減、予報はずれの防止などからも総合評価し、割当てます。FLEX-11はサービス性でも、経済性でも一歩進んだ群管理システムです。

エレベータの動き、あざやか。FLEX-11

■エレベータは乗場呼びに素早く応答します。長待ち発生率は大幅に減少、平均待ち時間は約20%(当社比)短縮。

■高精度な即時案内。

■省エネ運転。乗場呼びには停止回数の少ない、走行距離の短いエレベータを割当て、消費電力を節減します。

■テナントの入れ替わりなどによる大幅な交通需要の変動にも自動的に対応できます。プログラムを変更する必要はありません。

●群管理システム

FLEX-11

フジテック株式会社

●本社　大阪府茨木市庄1-28-10 ☎0726-22-8151

●東京 03-443-5231　●札幌 011-742-2241　●仙台 0222-22-0271　●横浜 045-201-0869　●名古屋 052-261-6851

●大阪 06-441-8521　●金沢 0762-61-5108　●京都 075-231-7144　●神戸 078-391-4795　●広　島 082-231-6760

●高松 0878-31-0015　●福岡 092-472-1591　●鹿児島 0992-26-9555

海外建築情報
8412

編＝DUCTSPACE
植野糾＋小菅克己＋田名網雅人＋田辺正義＋
宮崎長志＋若松久雄

時には賞を楽しむ余裕——P／A賞この10年

秋深し。　高校大学の文化祭が終了し，ＳＤの方でもＳＤレヴューなる祭のフィナーレを今号に迎えている。　あとは師走に向けてこたつに足を突っこみながらの紅白歌合戦の観戦を待つのみか。　世の中，総決算の季節ということで，海外建築情報としても〈P／A賞この10年〉と題してアメリカを中心におさらいを試みた。

まず頭に入れておきたいことは，P／A賞の場合，対象作品が実現の見通しを持つこと，計画のコンセプトが現実社会のコンテクストを映し出していることが求められているのである。　そして指名される審査員も，年により応募側でもある実践の建築家たちによっている。　毎年編成を変えられる彼らに，成文化された審査基準は与えられず，自身のイデーに信頼を置かれて，要するに現実社会のコンテクストを彼らがいかに把握しているかの自由裁量にまかされて数点を受賞作として選定することが要請される。　ともすれば独断と偏見に満ちているわけなのだが，その分正直に時代の相を露呈する仕組みになっている。

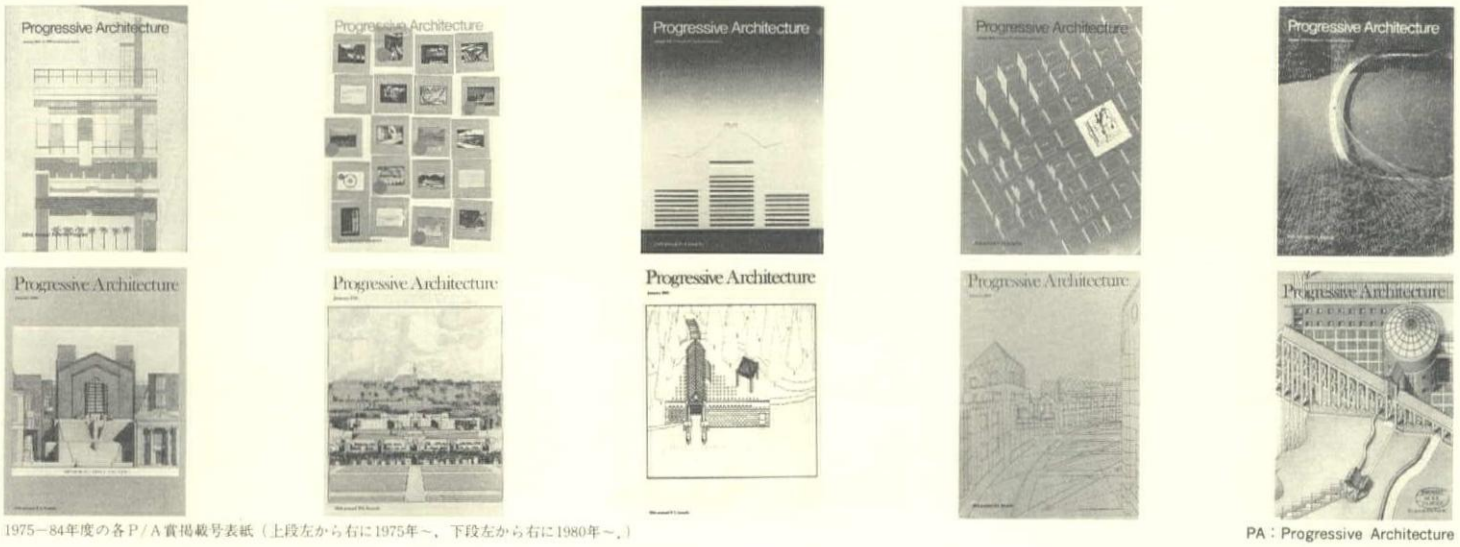
ここでは過去10年間の受賞作品を通覧してみて推測しうる審査員の意識の変化の方から，建築の昨日・今日を眺めてみたい。

実際，建築について本気で話をしようとすると，ましてや審査員として公平に判定を下そうとするものなら，もどかしさを禁じえないものである。　たとえば，古来からの建築（architecture）と建物（building）の区別は，直観的にはわかっているつもりでも，これを言葉でいいあらわそうとすると，なかなかうまく行かない。　すなわち，肉眼でみて美しいシェルター，あるいは設計者の心眼に美への熱がこめられているシェルターを建築といい，そうでないものを建物であるとためらわずに判定することはできる。しかしそうしたら双方を区別する美を言葉にしてみろというと，それが困難なのである。よくいわれているところによると，かつて，恐らくはピタゴラスvsアリストテレスあたりから，美学は機械論（比例，形は機能の従僕）vs目的論（神学，時代精神）の説明方式が拮抗してきた。　いわゆるこのデュアリズムが姿を変え形を変えて二千年の西洋的知において繰り返し叫ばれてきたが，そうはいっても，少なくとも現象としての建築においては，ある線までデュアリズムが共存しうるという暗黙の了解のようなものがあった。

ところが1960年代，デュアリズムの様相はもうひとつ深いところまで進行した。　世界的に見ても普遍化していた状況のなかでとりわけアメリカでは，ロッ派コンテクスチュアリストがゲシュタルト理論を駆使しつつ目的概念を排除したデザイン手段で空間を解釈し，一方でポップ・ヴェンチューリは冷めたポーズで大衆消費社会をイコン化することによりハードボイルドな目的論に徹した。　60年代の建築的知の先端は，デュアリズムのさらなる分極化を推進して，理論武装という点からすれば建築の歴史においてこのうえもなくコンセプチュアルな10年を疾走した。

このように60年代を二千年の流れが加速化されついにフル・スロットルにさしかかった時代とすると，70年代は速度変更を迫られて生じたいらだちの時代，美学を見失ってしまった時代と表現できる。

〈P／A賞この10年〉として今回は75年から84年までをリニアーに扱ってみた。　いらだちの10年前からなだらかな減速を得て法定スピードぎりぎりのところで明るくツーリングを楽しむ審査員と設計者の今日まで，こちらも余裕ある見識をたずさえて鑑賞を楽しもう。ところで賞での最高の楽しみは，受賞式後のパーティ。　醍醐味は式に参加した本人にしか分からないのだが。　（田辺正義）



1975－84年度の各P／A賞掲載号表紙（上段左から右に1975年～，下段左から右に1980年～。）

PA：Progressive Architecture

P／A賞　1975・76年

モダニズムへの反発

1975年
審査員：P.Chermayeff,P.Eisenman,P.Rudolph,E.H.Zeidler,
L.Copeland,J.Whitley,M.Brill,C.C.Marcus
A House——①
設計：Remment Koolhaas & Laurinda Spear
Refugee Road／Noe-Bixby Road Elementary School——②
設計：Don M.Hisaka & Associates
〈PA　1975年1月号〉

1976年
審査員：A.C.Moore,C.Pelli,S.Tigerman,W.Turnbull,
D.S.Appleyard,R.Ramati,W.R.Ellis,G.A.Hack
A Beaux-Arts Courthouse ——③
設計：Emilio Ambasz
The Fountain House——④
設計：Rodolfo Machado & Jorge Silvetti
〈PA　1976年1月号〉

75年の審査員はシャマイエフ，アイゼンマン，ルドルフ，サイドラー他であった．　1位にR.クールハースとL.シュペアーが入っている．　彼らの作品はリニアーな極めて理論的な構成のなされた作品である．　しかし，彼らの姿勢はこの合理的なプランの中に表現されているポエティックな部分に秘められているのである．　また，D.M.ヒサカ&アソシエーツの作品である小学校はクールでシステマティックな建築であり，それはモダニズムの規範にのっとったこの年の極めて特徴的な傾向である．

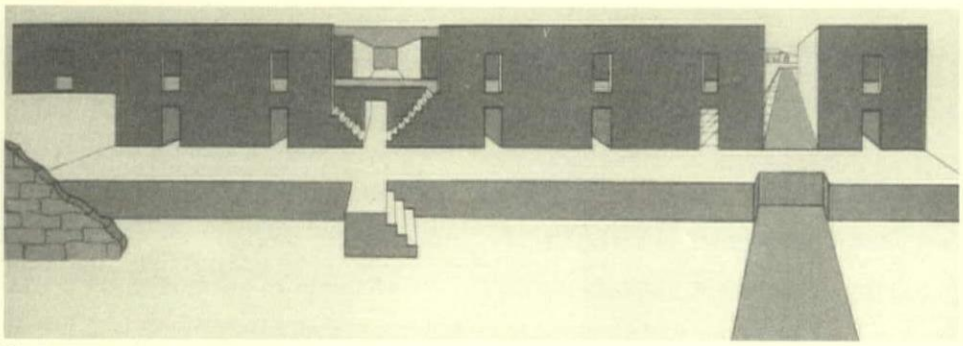
76年の審査員はタイガーマンとペリ，ターンブル他の面々である．　ここでは，1位にE.アンバーツが選ばれた．　この作品も極めてポエティックである．　アンバーツ独特のブリコラージュの手法を用い，空をうつす大きなガラスの屋根は2つの古い建物に挟まれ巧妙に表現される．　他には，スタジオ・ワークスのシステマティックな作品が入っている．　J.シルベッティの作品は他に例をみないきわめて興味深い作品で，ポエティックな表現を用い，巧みにドローイングされている．

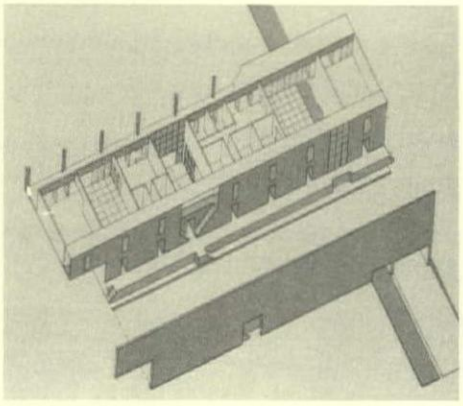
この2年を見ると，やはりモダニズムの影響が強く残っている．　しかし，そこには次世代のムーブメントがその片鱗をみせはじめている．　クールハースやアンバーツの作品に見られるポエティックな表現はあきらかにモダニズムへの反発である．

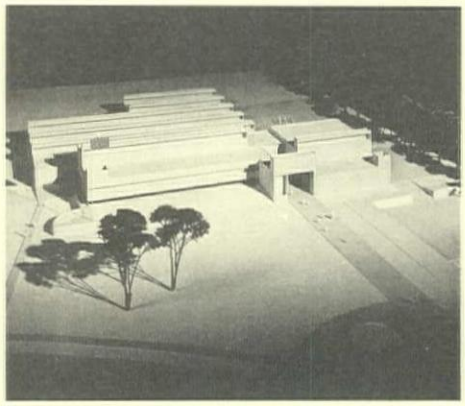
モダニズムの形骸化されたスタイルを打破するために，かれらが用いたポエティックな表現とは〈想像力・イメージ〉であり，それはさらなる想像力を惹き起こさせるソースである．　この想像力は，もののまるごとの姿を捉えることができ，全体を透視することが可能なものである．　それゆえモダニズムが科学的理性のもとに専門化し細分化していく過程の中で，失った全体性を回復する最も有効な手段である．

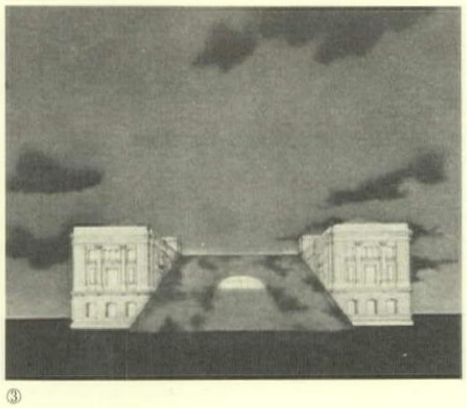
彼らが用いたこうした手段は，P／A賞の中でも認められ，事実彼らは次世代の旗手となっているのである．

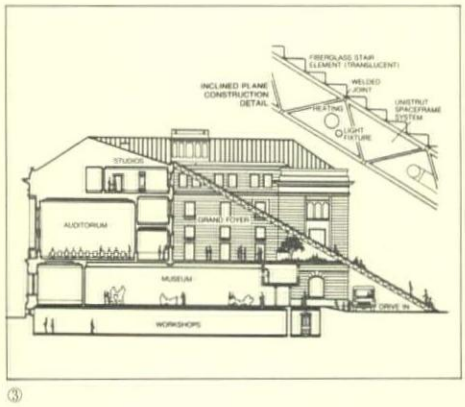
（人）


①


①


②

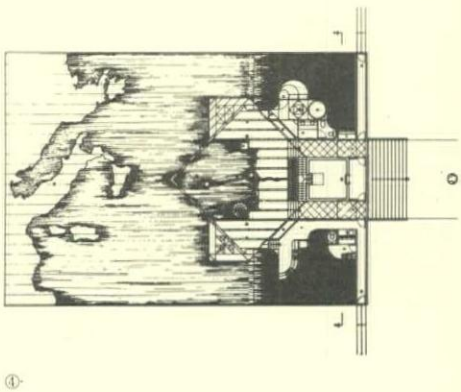

③



③


1975年第22回P／A賞審査風景


1976年第23回P／A賞審査風景


④

P／A賞　1977・78年

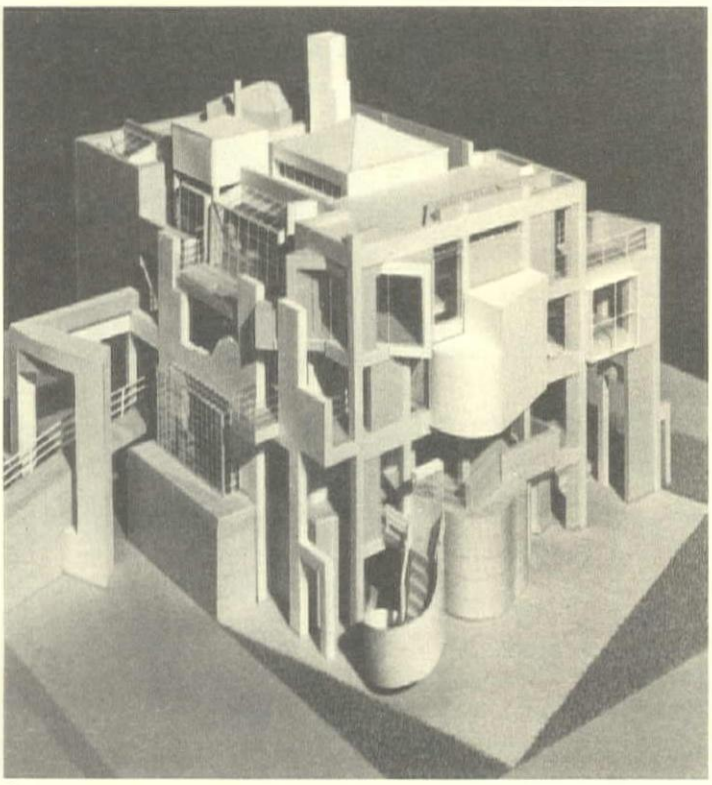
ホワイト&グレイの顛末

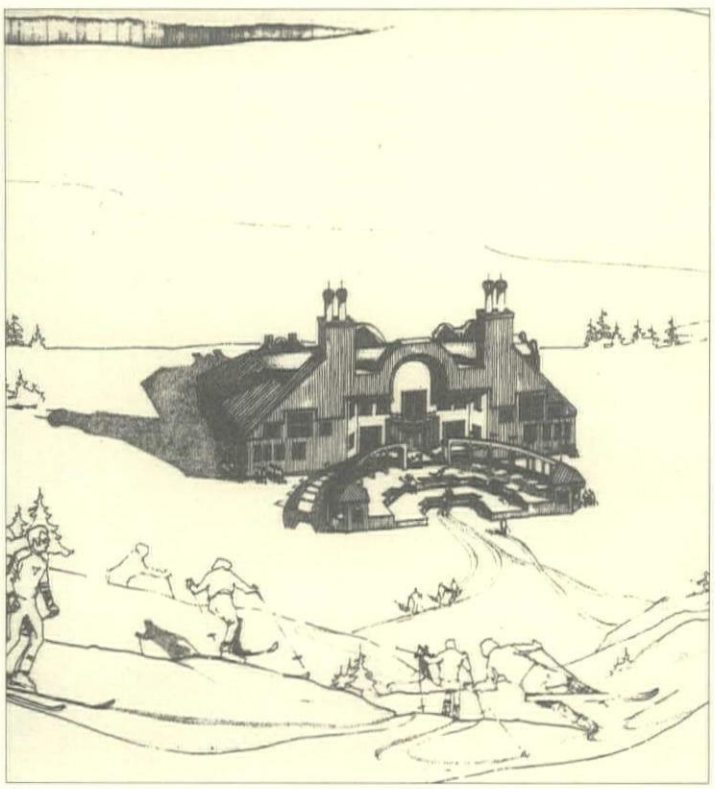
1977年
審査員：R.T.Affleck, E.R.Bonner, J.Dinkeloo, A.C.Green, C.Gwathmey, S.P.Harkness, C.Hodgetts, E.R.Ostrandar
A House——①
設計：Michael Graves
A Conference Center——②
設計：C.F.Murphy Associates
〈PA　1977年1月号〉

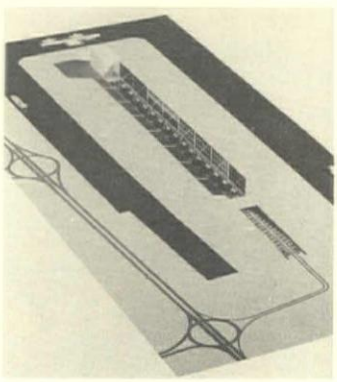
1978年
審査員：W.Bain,Jr., N.de Blois, R.Meier, C.Moore, C.Hamilton, D.Lewis, R.Gutman, R.G.Shibley
The Pink House——③
設計：Edward Mills
Pavillon Soixante-Dix——④
設計：Peter D.Rose with P.Lanken & J.V.Righter
〈PA　1978年1月号〉

70年代後半とは，建築表現において過渡的な時期であった．　〈建築の解体〉が完了し〈近代の呪縛〉から解き放たれようとしていたこの頃，建築家の意識にあったこととは，建築表現の自律性ではなかったか．守るべき戒律が総て相対化され，各々が個人的に仮構した方法論をもとに，表現し始めたというわけだ．そうした状況の典型をアメリカの〈ホワイト&グレイ〉に見てとることができる．　あたかも対立する概念であるかのように提出され，建築界に久々に議論を巻き起こすべく企てた〈ホワイト〉と〈グレイ〉であったが，時代認識と方法論において実は同一の感覚を有していたと言える．　どちらも専ら個人的に構築した，ある操作方法によって，何らの外部規範にもよらない建築表現の自律性を獲得しようとしていたのである．両者とも当時の作品のほとんどが住宅であったのは，偶然ではなく，個人的方法を現実社会に適用し得るのが，あくまで個人をクライアントにした場合だけだったのだ．

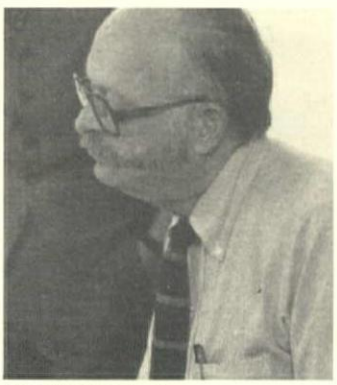
78年のP／A賞はR.マイヤー，C.ムーアという正にホワイトとグレイを代表する審査員により，1席にはE.ミルズのアイゼンマン・マイヤーもどきの住宅が選ばれ，2席にはP.ローズのムーアもどきのスキーロッジが選ばれている．　これから後の建築表現の動向として，抽象化し過ぎたアイゼンマン流の操作理論よりムーア流の大衆イコンの方が実社会受けしていったことを思えば，ホワイト派における方法への過度の思い入れによる近代のパラダイムの突破，という図式の限界を知ることができる．　特にアイゼンマン流の操作主義は，最後まで方法という概念に留まり，ものとしての新感覚や新様式を開示するに至らなかったと言える．　一方，ホワイトから〈転向〉することによって新しい造形感覚を表出し始めたグレイヴスの住宅と，同じく方法は早々に切り上げて即物的なもののあり方に表現の軸を移していったヤーンの作品が共に77年のP／A賞に入選しているが，全くこの時期の建築表現の過渡的性格を表象しているといえよう．(Q)

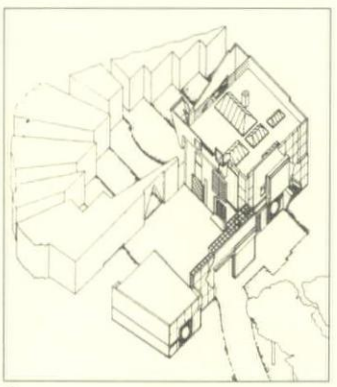

③


④


②


1978年度審査員R.マイヤー


1978年度審査員C.ムーア


①

P／A賞　1979・80年

時代の集積としての建築と都市

1979年
審査員：F.S.Dubin,B.Elbasani,A.J.Lumsden,W.Seligmann,J.Gregory,W.Lu,C.Perin,B.P.Spring
San Antonio Museum of Art——①
設計：Cambridge Seven Associates
〈PA　1979年1月号〉

1980年
審査員：F.O.Gehry,H.Jahn,C.F.Rogers II,R.A.M.Stern,J.L.Kriken,B.L.van Ginkel,W.F.E.Preiser,F.T.Ventre
The Steps of Providence——②
設計：Rodolfo Machado & Jorge Silvetti
〈PA　1980年1月号〉

賞ほど素敵なものはない。　受賞に纏わる悲喜交交のドラマもさることながら，社会状況や政治的背景や審査員の質や意志までも含めて否応なくその時代を語ってしまうところがおもしろい。　受賞した作品を1枚1枚重ね合わせてパラパラとめくっていくと，静止していた画像が動き出して我々の来し方行く末を此岸と彼岸を朧気に指し示してくれる。

マンネリ化したインターナショナル・スタイルをどのように突破するかに関心が向けられ，もっぱら様式の打破という建物単体の形態的な面に関心が注がれた50年代。

ジェイコブスの〈アメリカ大都市の生と死〉に指摘されたスラムクリアランスの失敗や巨大建築による都市環境の破壊を契機として環境や社会と建築の関わりが認識され始めた60年代。

コンセプチュアルなアプローチによって建築を再び根底から捉え直す作業を始めた70年代。

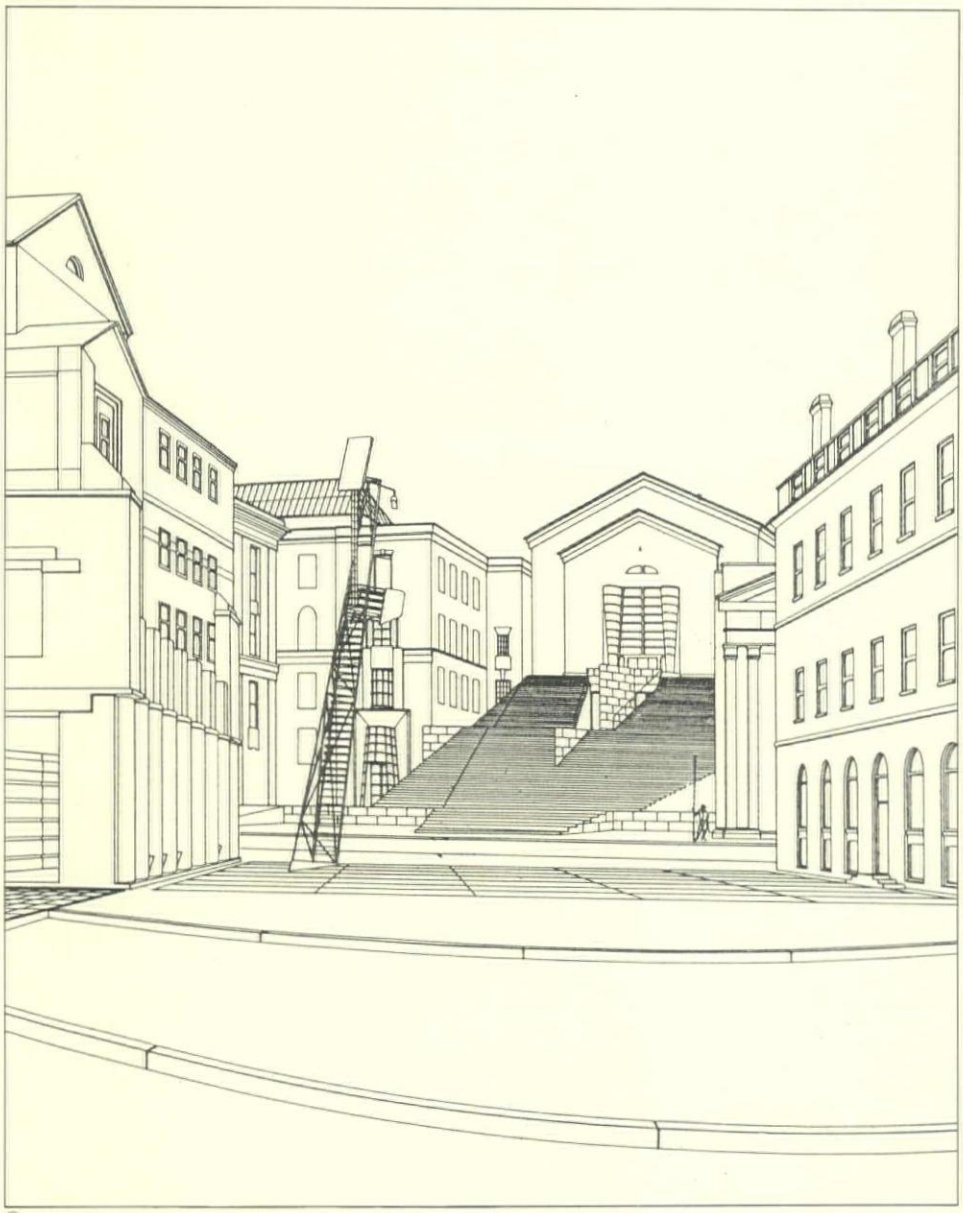
手法への傾斜，感覚の世界への回帰を見せる現在。　ロドルフォ・マカードとジョルジョ・シルヴェッティの80年P／A賞第1位の〈プロヴィデンスの階段〉。

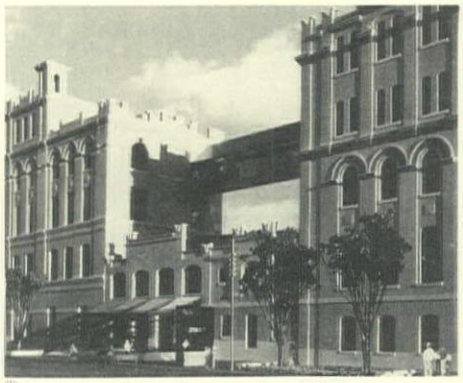
ロードアイランド・デザイン学校のキャンパス計画で，街の既存建物を利用してつくられる形で発展してきた文脈を踏襲し，建物と建物を結ぶ空間に階段・テラス・広場・庭園といった空間言語を配して建物を含んだ空間に秩序を与え，新しいパブリック・スペースの可能性を開示している。

前年のP／A賞には古いビール醸造所を街の中の開かれた美術館に再生したケンブリッジ・セブンの〈サンアントニオ美術館〉も選ばれている。

これらは建築を都市や環境総体にまで引き伸ばし，単純な機能やシステムを超えてヴォキャブラリーや文体や時間性や雰囲気という建築が本来持っていた美しき特質の回復を試みているとは言えまいか。

そして，アメリカ建築が時代の集積としての建築・都市空間を本格的に意識し始めた，あるいはせざる得なくなったことをこの時のこの賞は示唆している。（K₂）


②


①


1979年度審査員：F.S.ダビン（左上），A.J.ラムズデン（右上），B.エルバザーニ（下左），W.セリグマン（右下）


1980年度審査員：F.O.ゲーリー（左上），H.ヤーン（右上），C.F.ロジャースII（左下），R.A.M.スターン（右下）

P／A賞　1981・82年

パラダイムから
イリュージョンへ

1981年
審査員：R.G.Stein, R.Giurgola, R.J.Frasca, G.E.Hartman, E.N.Bacon, J.Brownson, G.Cranz, R.Knowles
〈PA　1981年1月号〉

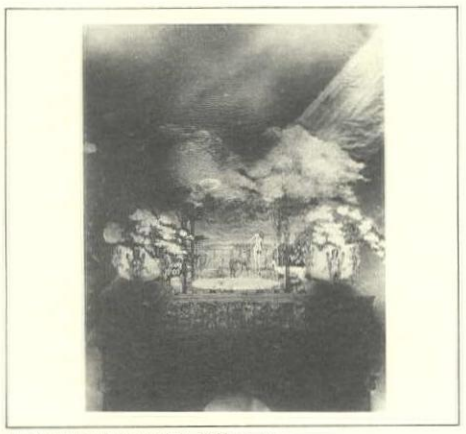
1982年
審査員：T.H.Beeby, J.R.Cook, J.I.Freed, M.Graves, D.M.Childs, D.Hayden, G.T.Moore, P.Drake
Residence——①
設計：Olcott & Schliemann
H Y L International Training Center——②
設計：Booth／Hansen & Associates
〈PA　1982年1月号〉

60年代における近代建築のパラダイムの解体の後に建築家達が新たに創り出したパラダイムは，context & energyであった．　これは70年代において，コンテクスチュアリズム，そしてソーラーシステムを中心とする省エネ建築として一時代を築くことになる．
この位相に対して，パラダイムを否定し，建築をアリュージョンとイリュージョンのハイブリッドとしてとらえていこうとする方向，いわゆるポスト・モダニズムと呼ばれる位相が70年代後期に顕在化してくるわけだが，ここでは2人の人物に注目してみたい．
歴史的なるものからのアリュージョン（引喩）を散乱させつつ，文章のごとく建築を構築するM.グレイヴス．そして，まさしくアメリカ的なアルカディア幻想を織りこんだドローイングで強烈な換起力を有するT.H.ビーヴィー．　彼らの共同作業，というよりグレイヴスはコンペに勝つことにより表面に立って人々を牽引し，ビーヴィーのドローイングは，パラダイム不在に対する補償としてのイリュージョンを与える，といった補完関係で両者は1つの潮流を創り出した……．　この2人が82年P／A賞の審査員をつとめていることは，きわめて象徴的である．　81年から82年へ，それはパラダイムからイリュージョンへの建築の転換を意味し，その演出者となったのは彼らであったのである．　82年の入賞作は，ビーヴィーのドローイングのもつ圧倒的なイメージに十分答えているとはいいがたい．　しかし近代のパラダイムを失ったわれわれにとって残された，その1つの大きな可能性を示すものであったことは間違いない．

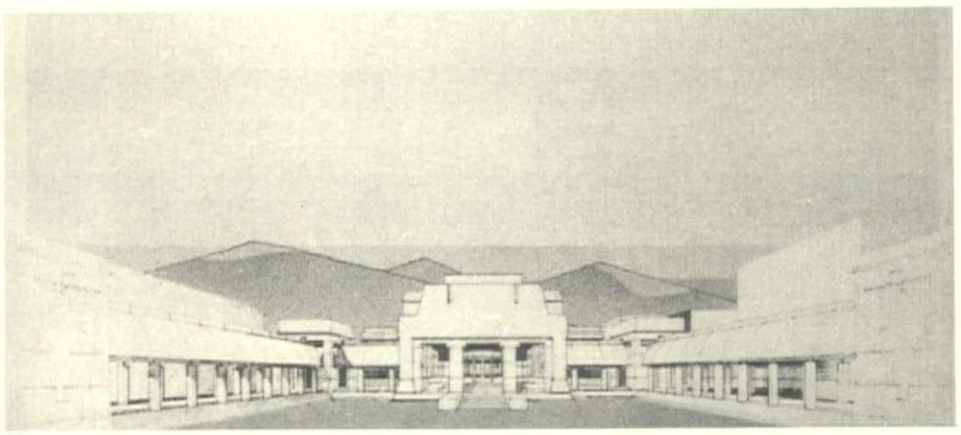
偉大なる歌はもはや戻らぬにせよ
われわれのもっているものには強烈な喜びがある
なぎさの小石のささめき
去りゆくさざ波の下で

——イエーツ〈19世紀とその後〉

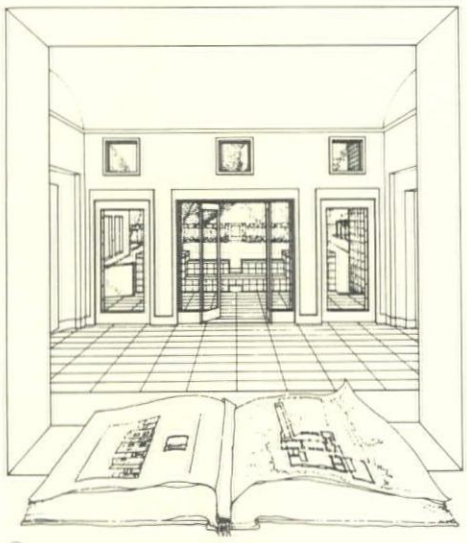
（M）



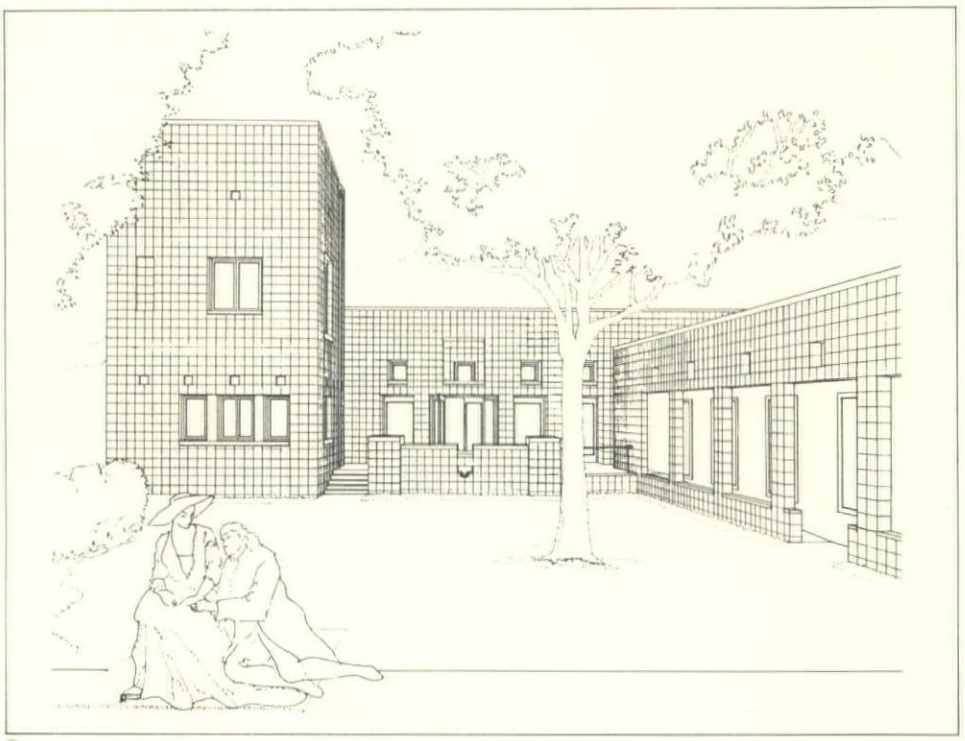
月の庭園〈願望的思考〉1979　T.H.ビーヴィー



②



①



①

P／A賞　1983・84年

ドラマチック・エージの産ぶ声

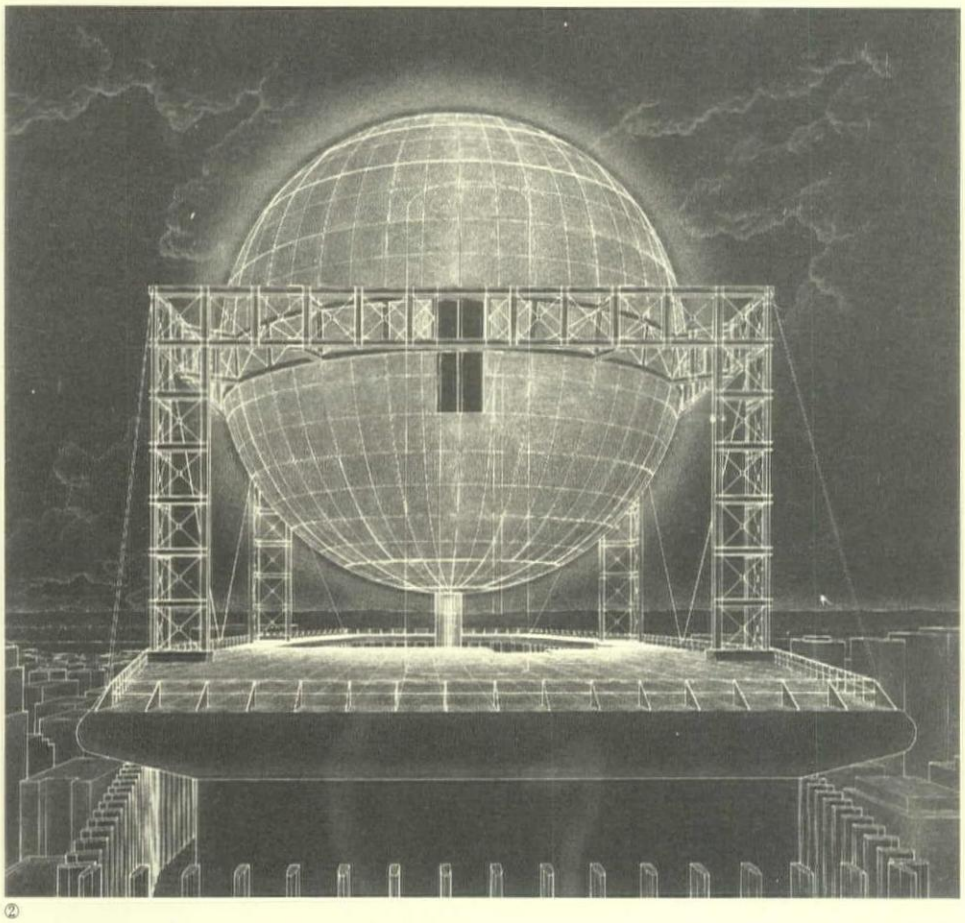
1983年
審査員：G,Baird,A.Chimacoff,M.Mack,J.Stirling,
S.Eckstut,J.M.Woodbridge,S.Howell,M.Millet
Venice Inter Arts Center——①
設計：Robert Mangurian & Craig Hodgetts Studio Works
Pan Am Building Rooftop Addition——②
設計：Simon Ungers & Laszlo Kiss
〈PA　1983年1月号〉

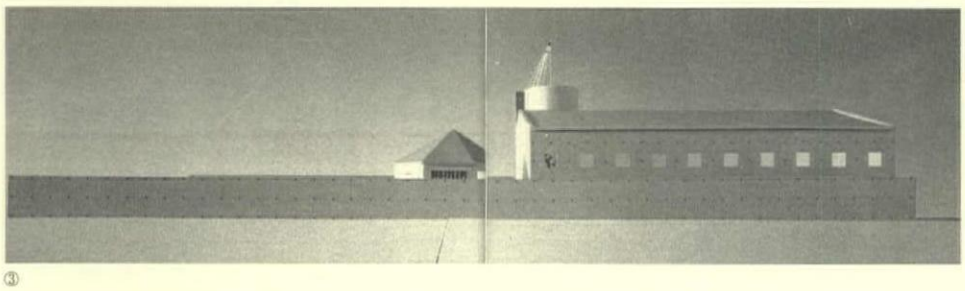
1984年
審査員：O.M.Ungers,J.Thomas,S.Davis,J.S.Polshek,
R.Schluntz,J.M.Kirkland,J.Cable,J.King
Light of the World Catholic Church——③
設計：Hoover Berg Desmond
Desert Highlands——④
設計：Antoine Predock Architect
〈PA　1984年1月号〉

毎年おもしろい作品が殖える中で最近のものは手法過剰の感もある。　しかし概していえることは，建築が再びドラマ（劇性）を求めはじめたということである。極度の長い回廊，列柱，壁，超大スケール化。　語りたがる背景と人物が描き出されているのだが，こせこせしていない。　小さな手法は消し去られ，複合錯綜する要素は1つになでまわされた。　常にシュールを描き出そうとする。　建築というドラマを見る観客を，ひきずりこむ強い感覚と法則が，明らかに表面化されてきているのである。　この志向はややもすると，手法に比較し，感覚だけでおぼれてしまう迷路に入りこむことになるのだが，ここ2～3年の作品の中にそれに入りこまない流れがあることに気付くのである。

まず背景を伴わない部類の作品としてドラマ（劇性）を創り出した例としてカソリック・チャーチがあげられる。　教会の必要なまでの長い壁。　光の尖塔。　感覚的強烈さが単純化したスケール感とシャープさに代わる。　総ての魅力がここにかかっている。　また疑似クラシックを背景にしてきた系列のものでも，あのクリエのドローイングより抜け出す兆しが見えてきている。　中でもマングリアン・ホジェッツのアートセンター・プロジェクトは，見事である。　18，19Cの背景，人物は筋書にあわなくなり，それらを一気に乗り超すドラマが出てきた。　デザート・ハイランドの背景は忘れていた映画のシーン。　SFタッチの派手な表現である。　これをみると建築もSFの世界へ入って行くのかという失望と期待の入り混じったものを感じざるを得ない。　というのも，その背景がなくなったなら，殆ど興味を引かないものになるだろうから。だが，更に強いものが登場してきた。　ウンガース，明快まるかじりのパンナム・ルーフ・トップ計画。　何をつくればミッド・マンハッタンの摩天楼を押えつけられるか？　この強烈感をもって計画されたのはスカイ・プロムナードを含むガラスの球であった。

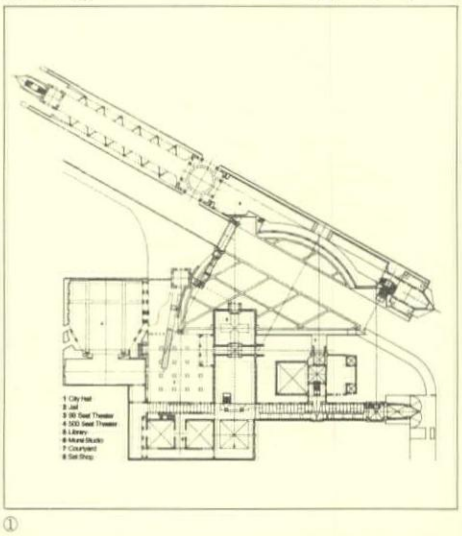
増々強烈に，鮮烈に。　建築はドラマを具現化しつつある。　80年代中盤。　更にドラマは続く。（H.W.）


②

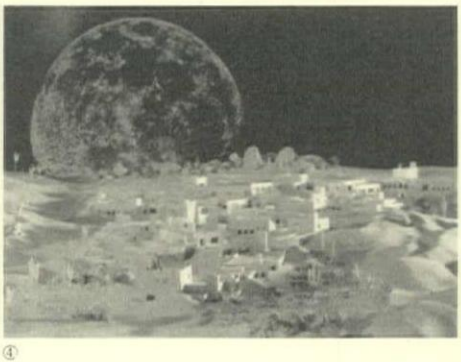

③


1983年度審査員A.チマコフ（左），M.マック（右）


1984年度審査員 O.M.ウンガース

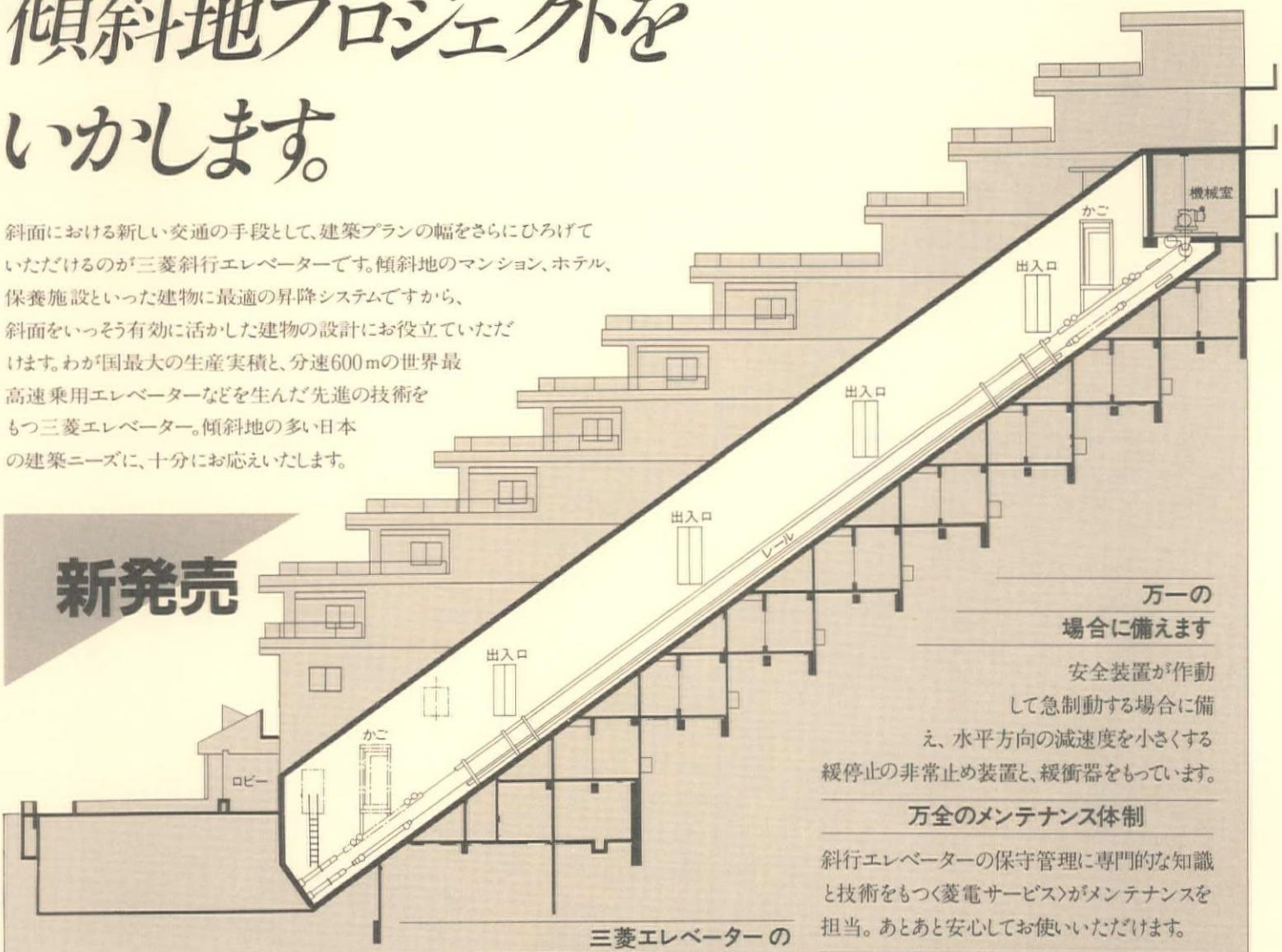


①


④

斜めに走って傾斜地プロジェクトをいかします。

斜面における新しい交通の手段として、建築プランの幅をさらにひろげていただけるのが三菱斜行エレベーターです。傾斜地のマンション、ホテル、保養施設といった建物に最適の昇降システムですから、斜面をいっそう有効に活かした建物の設計にお役立ていただけます。わが国最大の生産実積と、分速600mの世界最高速乗用エレベーターなどを生んだ先進の技術をもつ三菱エレベーター。傾斜地の多い日本の建築ニーズに、十分にお応えいたします。



新発売

万一の場合に備えます

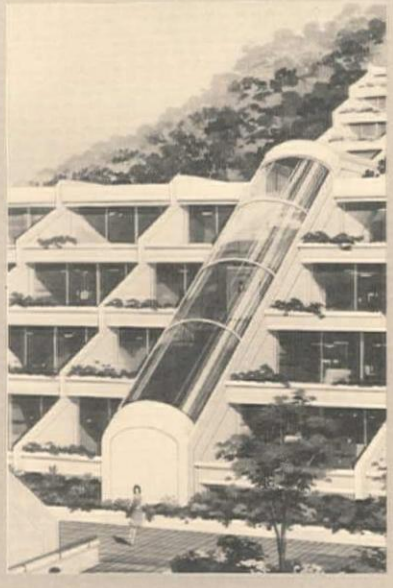
安全装置が作動して急制動する場合に備え、水平方向の減速度を小さくする緩停止の非常止め装置と、緩衝器をもっています。

万全のメンテナンス体制

斜行エレベーターの保守管理に専門的な知識と技術をもつ〈菱電サービス〉がメンテナンスを担当。あとあと安心してお使いいただけます。

三菱エレベーターの先進技術が生きています

乗用エレベーターとして高い評価をいただいている三菱エレペット〈アドバンス〉。その豊富なノウハウを基に、斜行エレベーターとして必要な機能を徹底的に解析して設計しました。安全性、信頼性、快適性、操作性など、〈アドバンス〉のすぐれた特長がそのまま生かされています。



スムーズ、快適、安全に走ります

マイコン制御で水平方向の加減速を低く押え、円滑に斜走します。またドアの窓から斜めに動くかごの動きを見ることができるなど、乗客が無意識に垂直の動きを想定してしまうことがないような、さまざまな安全面への配慮をしました。

豊富にそろった8タイプ

標準機種で8タイプ。用途に応じた最適の機種がお選びになれます。また昇降行程、停止数など、特別な仕様にも応じられます。オプションも豊富に用意しました。

▼標準機種一覧表

No.	形式	速度 (m/mn)	容量 定員(人)	容量 積載荷重 (kg)	傾斜角	昇降行程 (斜辺)	停止数
1	P9-CO-45	45	9	600	20°〜45°	最大60メートル	最大15カ所
2	P9-CO-60	60					
3	P11-CO-45	45	11	750			
4	P11-CO-60	60					
5	R9-2S-45	45	9	600			
6	R9-2S-60	60					
7	R9T-2S-45	45					
8	R9T-2S-60	60					

★No.5〜8は戸袋が谷側にくるものを標準とします。
★No.7、8はトランク付きです。

★本機種の設置については、(財)日本建築センター昇降機遊戯施設等性能評定委員会の評定が必要ですので、ご計画の際は、あらかじめ当社にご相談ください。

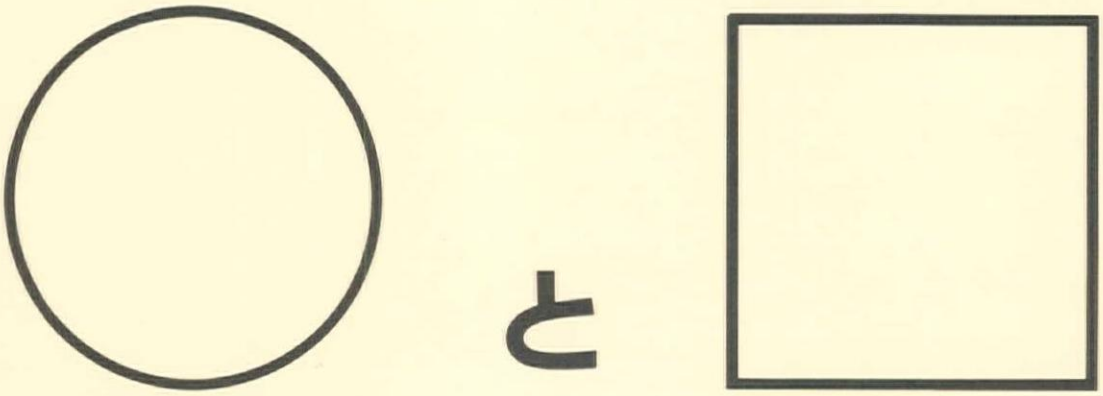
三菱斜行エレベーター

●詳しい資料をご希望の方は資料請求券をハガキに貼って〒100東京都千代田区丸の内2-2-3(三菱電機ビル)
三菱電機株式会社昇降機事業部へどうぞ。
●お電話でのお問合わせは、お近くの三菱電機営業所へどうぞ。
札幌(011)212-3726/仙台(0222)64-5633/新潟(0252)41-7221/富山(0764)42-2324/東京(03)218-2749/
名古屋(052)565-3160/大阪(06)347-2271/広島(082)248-5278/高松(0878)51-0001/福岡(092)721-2163

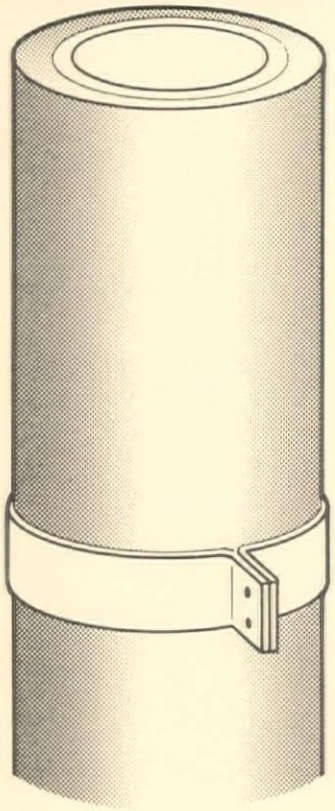
資料請求券
斜行エレベーター
SD
8412
あなたの電話番号をご記入ください。

未来を開発する
三菱電機

ニチアスの建築用煙突ライニング材は、



ニューカポスタック

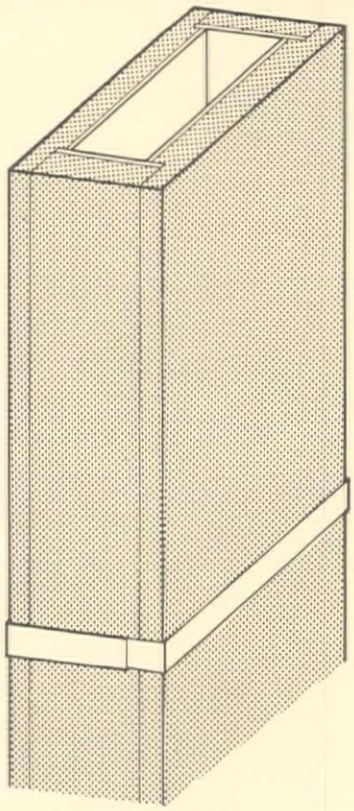


ニチアスは、煙突ライニング材「カポスタック」の発売(昭和39年)以来、長年の経験を生かし各種の建築用煙突ライニング材を開発し時代の要求に応えてまいりました。ビル・集合住宅をはじめ、学校関係のボイラ・自家発電機の煙道の煙突ライニング材として幅広く利用されています。

●**芯材不要**　ニューカポスタックの内側に特殊ライナー層を設け、コンクリート打込み時に芯材の不要な製品です。コンクリート煙突あるいは鋼製煙突のライニング材として使用されます。●**地震対策**　ニューカポスタック・は、カポ部のすぐれたコンクリート付着性・柔軟性・構造などから地震対策としてレンガ煙突の改修工事に使用されます。

●**ユニット煙突**　コンバインボードは外側をアングルで補強し、ユニット煙突として使用されます。●**角型用打込ユニット**　コンバインボードは角型筒状の打込ユニットとして、内部補強し、コンクリートを打込みます。

コンバインボード



(単位: mm)

		丸型用	角型用
商品名		ニューカポスタック	コンバインボード
構造		複合円筒	複合板
サイズ		212φ～914φ・1014φ～1300φ	1220×2440
厚さ		※50・75・100　※65・75・100	50・70※
施工方法	打込	○	○
	鋼製煙突	○	—
	組立ユニット	—	○
備考		特殊ライナー＋カポスタック	高シリカ層(10t)＋ケイカル層

※印は標準品

ニチアスの建築用煙突ライニング材

ニチアス
本社／東京都港区芝大門1-1-26 〒105
☎03(433)7241 大代表
東京支社 ☎ 03(438)9731(代)
名古屋支社 ☎052(931)9217(代)
大阪支社 ☎ 06(252)1371(代)
九州支社 ☎092(531)3031(代)

資料請求券 煙突ライニング材 SD

カタログ請求は本社広報課まで

グルッポ・スペッキオは反省する

編集者から今回執筆者への原稿依頼状を見て，グルッポ・スペッキオは少しばかりの危惧と異和感を覚えている．

まず危惧として，具体的に〈東大原研究室・香山研究室〉と名指されている点．誤解のないように申し添えるなら，原・香山両先生はこの欄と一切無関係である．執筆者の内数名がたまたま原研・香山研であったにすぎない．両先生には逆に御迷惑ですらあったかもしれないので，紙面を借りてこの旨明記させていただきます．

また〈若手大学院生を中心とし〉とはいうものの，中心と呼ぶほどの主義も主張も人物もいないのがグルッポ・スペッキオたる所似．執筆者も他研究室，他大学出身者にまたがり，年令も22才から，ときに4?才にまで及んだこともある．常連にしたところで8年前ならいざしらず，もはや〈若手大学院生〉などという初々しくもすがすがしい言葉とは，残念ながら縁もゆかりもなくなってしまった．

〈総勢30名〉というのもあきらかに実感とかけ離れ，たとえばこの8年間を通して常に4～6名の固定執筆者がいて，ときにゲスト的に1，2名が加わることもあった，というのが実態に近い．どうも〈総勢30名近くのメンバーが入れ代わり執筆を担当〉などというと，本当にいつもたくさんいるみたいだし，ひどく不特定多数的無責任的印象を与えてしまうじゃないか．

とはいえこの手紙に基づいて原稿を寄せていただいた方々には，こんな危惧も異和感もあずかり知らぬところに違いはなく，まずはフェアにいくために，手紙の全文を掲載させていただきます．

ただグルッポ・スペッキオとしては，せっかくのお言葉のいくつかには，まさしく我が身に降りおろされた感覚を抱けなかったことを残念に思う次第であります．

などと言ってみたものの，とりたてて危惧だの異和感だのと騒ぎたてること自体，グルッポ・スペッキオに，ある主体だの犯すべからざる尊厳だのを前提するがごとき僭越至極のふるまいに違いない．つまるところ何者も，他者からのレッテルにヒケメとヒガメを覚えつつもその役割を演じざるをえないのである．さやかな誤解を孕んだレッテルを頂戴し，実を言えばグルッポ・スペッキオは，読者からも編集者からもさメンバー相互間にあってすらレッテルの交歓が見られるのであって，はられたレッテルにはそれなりに忠実に生きてゆかざるをえないのである．匿名の重さも軽さも自覚しえず，もとより秘すべきなにものをも持たぬはずのグルッポ・スペッキオは，他者との関係(＝鏡)こそがその存在様態であったのだから．他者の眼に映し出される姿こそがすべてであったのだから．レッテルに危惧だの異和感だのを表明する資格も準備も体勢も，我々は持ちあわせていないのだから．

ともあれ，反省あるのみ，である．そして，これまで暖かく，時に厳しく見守って下さった方々，とりわけ今回原稿を寄せていただいた方々には，心より感謝いたします．(聖)

グルッポ・スペッキオを叱る

拝啓
日頃より小誌ＳＤを御愛読いただき，ありがとうございます．

当誌連載の国内建築ノート欄は，「グルッポ・スペッキオ」の名称で親しまれてまいりました．グルッポ・スペッキオの構成は，東大原研究室・香山研究室の若手大学院生を中心とし，この９年間に総勢３０名近くのメンバーが入れ代わり執筆を担当してきましたが，来年度から当欄は全面的に模様替えの予定であり，グルッポ・スペッキオは終わりとなります．そこで本年１２月号に，愛読者の方々の惜別の言葉を掲載いたしたく，原稿をお願い申し上げます．内容はおまかせしますが，言いたい放題だった若者たちへの先達からの「お叱りの言葉」をいただければ幸いです．

・テーマ　「グルッポ・スペッキオを叱る」
・枚　数　400字詰原稿用紙で１～４枚の範囲で自由にお書き下さい．

お忙しいところを恐縮ですが，よろしくお願い申し上げます．

敬具

１９８４年１０月　　ＳＤ編集部

伊藤ていじ

●

「叱る」というのは　私の好みじゃないし私の義務でもない．　それに「叱る」のは　「ほめる」より責任が重いしむつかしい　何よりも時間がかかる．　それよりも　ほめて伸びる方向に手助けしてやったと自分に思いこませ　徒党を組むなりして利用した方が　遙かにましである．　「若い人の勉強会の成果か，よくやったね　僕等にはもう叶わないよ」などと負けてやる美徳を発揮するのは　多分無難な言い方だろう．

しかし「若い人」と言うのは　曲者の表現の仕方だと思う．　統計学的にいえば　後から生まれた者は　いずれそれ以前に生まれた者を追いこしていくだろうし　なかには既に追いこしてしまった者もいるだろう．　ただひとつの救いは　年よりは若い連中より先に死ぬという保障はないという事だけである．

あの欄を誰が書きつづけてきたか　私は知らない．　総勢で30人近くいるそうだけれど，そのひとりも知らない．　つまり匿名性に終始していたわけである．　しかし匿名性がこの情報社会において何を意味するのか　意識されていなかったのではないかという疑いを　私は今でも持っている．　あれは　ＢＶＤのブリーフをつけて銭湯に入っていたようなもので，匿名性の無駄使いというものである．　また依頼状をみると　彼等は「言いたい放題」だったと書いてある．　しかし私はそんな感じをもったことはない．　だいたい「言いたい放題」というのは　それを読んで相手が怒った時に　相手側が使う言葉ではないかと思う．

でも今日の建築界には　当って砕けるほどの大者や大悪人がいなかったのか　さもなければこのグループの連中は彼等を避けて通ったか　話にスケールがなくてひっかからなかったのか　返り血も浴びないで優等生のまま消えていくとは淋しいかぎりである．

伊東豊雄

●

〈心優しき同時代人，グルッポ・スペッキオ様〉グルッポ・スペッキオがこのコラムを書き始めた70年代後半は，ちょうど僕らが建築をつくり始めた時期と重なっていて，僕自身も幾度となく俎上にのせられてきた．　ユーミンの軽い風俗的，都会的ニューミュージックにたとえられたり，果てはモーツァルトのシンフォニー，プラハまでが引き合いに出され，傷つきやすくナイーブな感性派などというレッテルを貼られたものだから，稀代の悪友ワタナベホーワ，イシヤマシューブ，イシイワコー氏などからは含み笑いとともに冷ややかな一瞥を浴びるはめとなり，この視線を外らすために大酒をあおり，マイク片手にツルタコージを唱い続ける習癖がすっかり定着してしまったこの頃である．　或いはまた篠原スクールの一員（もっとも異端の落第生としてであるが）という烙印を押されたために，今だに篠原研究室には何年おられたのですかなどという質問を受けるはめにも陥っている．

想うに彼らが批評すると，こちらの意地もこだわりも或いは敵意ですらもカンセイ，カンセイという言葉とともにヒラヒラと風にそよいでいる白い洗タクモノのような存在にさせられてしまったようである．《新建築》の月評が業界内部の暗くオゾマシキ構図の一端を垣間見せているのに対し，このヤング向け月評ともいうべきコラムはそうした暗さを持たない反面，建築家の内面的な営為の上澄みだけをすべてファッショナブルな言葉と結びつけてツルツル，サラサラと均質化し，漂白し続けてしまった．　そうした漂白作用が彼らの徹底した悪意からならばこちらもカッカともするのであるが，カンセイ豊かなユーミン風シティボーイ然としているのはむしろ彼らの方であったから，何を書かれてもこちらにはただ背中のむずがゆさだけが残されたような気がしているのである．

どうかこれからもカフェバーで可愛い女の子相手に飲むように，サラサラとスペッキオ風建築の設計にいそしんで下さい．〈心優しき同時代人〉というのは，彼らから僕に与えられたコピーであるが，この際はなむけとしてこのコピーを彼らにそっくり贈り返したい，心優しき同時代人，イトートヨオより．

植田実

●

赤川次郎の小説について思うように，うまい，軽い，早いと，感心しながら読み過ごしてきたので，今さら何か感想をいえといわれても何も憶えていない．　あまり居心地のよくない結婚式で無理矢理スピーチを強要されるような，落ちつかない感じがするのは，こういう締めくくりを納得していないからだろう．私が編集担当だったら，執筆者をひとりに絞って，その代わりにこれまでに書かれた全文を時間をかけてしっかり読んでもらい，長い長い原稿を書いてもらうだろう．　不真面目だといった批判があったりしたそうだが，不真面目ぶっているだけで，結構本気でいろいろな問題を展開してきたわけだから，その全体を改めて示す方がいいと思うのだ．

というのは，このコラムは，不真面目というのはおこがましく，むしろ中途半端であることが問題だったのだ．　匿名ならば尚更のこと，誰もキャッチしていない新しい情報を提供するか，建築家や建築作品に対する，いの一番の評価をするか，でなければ徹底して批判的態度に徹すべきだったと思うからだ．ここで，いろいろな雑誌からいかにもアンテナの感度良好といった風に写真をコピーして，いろいろな一般ジャーナリズムの語り口を真似つつ，建築家にラブ・コールを送ったりしているのが，けしからんのでも白けるのでもなく，とにかくコラムの表現として中途半端なのだ．

そして，決して建築作品といった表皮の部分だけを見ているのではなく，いわば建築界内部の現実的な構造を堀り下げようとしている努力は他にはあまり例がないくらいなのだが，そうした展開も，その語り口や，結局は問題提起をしていないために，かえって閉じた，例えば東大の大学院生あたりだけにしか関係のない話になってしまう．　とにかく中途半端なんだな．

という調子でいっていると，何でもマイナス評価になってしまいそうなので，もうやめます．　編集者としてはそんな不満があるが，個人としてはもう一度ちゃんと読みかえして，ひそかな収穫を得たいと考えているところ．　とりあえずは来年からの新しい試みを期待したいのだが〈聖吾評〉なんてダジャレ，大丈夫なのかな．　今朝どこかのテレビで「郷聖婚はいつ？」なんてやってましたけれど．

鈴木博之

●

グルッポ・スペッキオの皆さんが執筆されていた〈国内建築ノート〉が改変されて，グループは消えるのだそうですね．　世代交替というわけでしょうか．　まだリタイアする年でもありますまいが，ちょっとセンチメンタルな気分になる知らせです．

そこで，少し感傷的なひとことを述べたくなりました．　私も御誌のお隣りの雑誌（都市住宅）にずいぶん長々と時評なるものを書いていますので，ひとしお感慨がふかいのです．　何だか林昌二さんみたいな口調になってきましたが，私の方は優しくいきましょう．

グルッポ・スペッキオの皆さんの多くは，紅顔の美少年の頃から知っていて，その人たちが年令を感じるなどと口ばしるのを聞くと，何故かよく解る気がしてしまいます．　美少年のような少女，美少女のような少年が一番うつくしいと芳賀徹先生が言っておられて，確かにみやびな少年時代やりりしい少女時代を送れた人は，しあわせな青春をすごしたことになるのです．　皆さんは，そうした時代が自分のうちで終ったことを感じておられるのですね．

それまでは，あなた方は何にでもなれた．批評家にも建築家にも学者にも……．　何にでもなれる人の言葉は，鋭く正しいことが多いのです．　けれど，やがてあなた方は何者かにならなければならない．　何者かになる

ということは，しばしば日本では，それ以外の者になる可能性を放棄することです．　そこに苦い切なさが生まれます．

それでもなおかつ，皆さんが建築について語りつづけるとき，私はその言葉をライバルの言として聞くでしょう．　本当のことをいうと，グルッポ・スペッキオの書く言葉を，私は一種の練習航海の船乗りたちの声として楽しんでいた．　その才気ばしった口ぶり，明るい皮肉は小学校の校庭から響いてくる子どもたちのさんざめきにも似て，ふと頭を挙げて聞き入りたくなるものを含んでいました．

皆さんの言葉の輝きは，建築に対する夢を抱いた人の輝きでした．　そこで，昔流行ったThose were the days という歌を私が訳してみたのを贈りましょう．　この歌は〈悲しき天使〉という日本語の歌になっていたけれど，私は〈見果てぬ夢〉とでも訳したいのです．

昔，なじみのお店があって，
みんなで飲んだりしていたものよ．
何時間も笑いさざめき合いながら，
未来のすごいことを夢みていたわ．

＊ああ，みんなあの頃は，
その時代が終るなんて思わなかった．
うたっておどって日をすごし，
自分の選んだ暮らしをおくり，
敗けることなんかないと思っていた．
そんな時代，そんな時代だったわ．

でも忙しい年月がすぎて，
みんな勢いがなくなってしまった．
もし，たまにあの店で出会ったなら，
みんな顔を見合わせていうでしょう．

＊くりかえし

ある晩私はあの店の前に立ったけれど，
昔の雰囲気は何もなかった．
ガラスに不思議な影が映っていて，
その淋しげな姿が私だとはとても思えなかった．

＊くりかえし

そのとき扉ごしに昔の笑い声がして，
なかであなたが私の名を呼ぶのが見えた．
ああ，あなた，みんな年をとったけど，
悧巧(りこう)になったわけじゃないわね．
心のなかで，夢はいまも同じなのだもの．

＊くりかえし

富永譲

●

グルッポ・スペッキオ様

国内建築ノート欄ご卒業おめでとうございます．　あなたがたが，《ＳＤ》という格調高い雑誌のうえで，うわさ話のレベルへ建築を引き下げていた功績ははかり知れません．

最近少々低調だとは思っていたのですが，近頃国内の建築そのものが，ありもしないうわさ話に似て，饒舌で，面白，おかしくなってきましたからさぞかし難しかったのだろうと思います．　〈美は人を沈黙させる〉のだと思いますが，一度見たら，もうたくさん，喋る気さえもおこらないという訳です．

忙しい毎月の締切りから解放され，ゆっくりと町角の小ざっぱりした現場に出掛け，これまで蓄積された多大な情報量と長い学習の経験をいかして，こんどは，そこに町の人達のうわさ話が沸きあがるような建築をつくられることを祈っております．

富永譲＋フォルム・システム研究所一同

林昌二

●

〈グルッポ・スペッキオをほめる〉

長い間，楽しませて頂きました．　「グルッポ・スペッキオ」の皆様，どうもありがとう．つまらぬことを書いて（失礼，しかし私も同様です．）それでいて読者におもしろいと感じさせ，引きずりこむ（それが私にはできなくて．）なかなかの技と，感心して来ました．　時として，テキの魔手は私のすぐ身近まで延びているのに気付き，キモを冷やしたこともあり，時には妙に手ぬるくて，さてはライターは槇さんの身辺にいる人達かな（本当なら逆なのかも）と邪推したりしたものですが，あえて彼らの身元調べはじっと我慢しました．しかし，パーティでお酒を頂いた時など，若い人達を相手につい本音を吐いてしまい，あとで彼らの中にスペッキオが混入している可能性を思い，後悔したこともたびたびでした．

正正堂堂と署名でモノを言うべきだ，というのは正論です．　けれどもこの世の中には皆様先刻ご承知のように，孔子様の教えをはじめさまざまの有形無形のルールが存在しており，それが邪魔だというわりにはおたがい都合よく利用しているのも事実としますと，このルールにいっとき目をつむって頂くためには，匿名性も時には必要であり，それによってより真実に近づけるのだとすれば，孔子様もお許し下さるかも知れません．

それにまた，「グルッポ・スペッキオ」と名乗る以上は匿名とは少々違って，れっきとしたペンネームだとも言えます．　一体，建築家がペンならぬペンシルネームを使わないですべて戸籍上の本名（円堂さんのような類い稀な方は別）を使っているのは何故なのか，考えてみれば不思議なことで，それはことによると前時代の完結的世界像の反映なのかも知れず，今日のように，自分の事務所で設計している建築物への反対運動におかみさんが参加しているなどという事態が日常茶飯事ともなりますと，建築家といえども二重三重の人格を，それぞれの役割に使い分けるほうが道理にかなっているのかも知れません．　私にしてからが，ここで林昌二と署名すれば，本人は建築界の観察者たる自由な個人のつもりでも，読者は日建設計やその仕事やらを背景に思いうかべて読まれてしまうおそれがないとはいえないのですから．

「グルッポ・スペッキオ」という人格は，先輩・同輩をこき下ろし，心胆を寒からしめて発奮ないし反省を求め，エンターテイメントとしてのコラムに接する楽しみを読者にサ

ーヒスするためには，まことに適当な匿名性とペンネーム性とのミックスチュアでありました．　そのページは，他の，内容が貧困なわりには（あるいは貧困なために）小むつかしい日本語まがいの活字を並べたページとはひと味違って，きらきらと光っていました．難点を挙げれば，彼らがお行儀よい都会育ちである（多分）ために，元編集長女史の好まれるほどにはゴシップに満ちていなかったこと，建築は好きでも建築家には興味をもてないという，おそらくは少なからぬ数の読者にとっては，なんのことか判らないページであったことと思われます．

ともあれ，曲がりなりに雑誌である《SD》にとって，こうした愉快なページは欠かせないもの．　「グルッポ・スペッキオ」に代わる，メンバーないし企画の登場に期待いたします．

彦坂裕

●

グルッポ・スペッキオのレゾン・デートルとは何か？　こうした大袈裟な言い方がお気に召さぬのならこう言いかえてもいい．　グルッポ・スペッキオが僕らに残した鮮烈なメッセージがあるとしたら，それは一体何だったのか？

おそらく，僕の考えではそれは２つあるように思える．

ひとつは，もちろんいまさら言うまでもない，若さが可能にする何ものか，である．きわめて多くの建築やデザインを志す若者の中で，ジャーナリズムで自分の意見を公けにし得るということは，やはり稀な機会ではないだろうか．　とすれば，そこに期待されるものも少なからずあるように思われる．　一般的な――つまりこうあってほしいといったコモンセンス的な――期待やジャーナリズムのロジックが要請する期待ではない．　僕の言いたかったのはもっと別のこと，つまり，それは未熟であっていい，けれどもそこにはひとつの内的なモラルというか倫理があるべきだということなのだ．　無垢な君自身が君自身のためにつくるモラル，それが必然として誘う打算を排除したステートメントや権威への告発といったこと，もっと大人びた表現で言えば，大きな構えの中でのエスタブリッシュメントとの対立的な交流である．　そこから針の穴を通すような先鋭な批評が展開する．　君たちは，決して媚びてはいけないのだ．　それにもともとスペッキオのコメントを読んで一喜一憂する先輩建築家などたいしたタマではないと見放す方がいい．　だから批評のうまさは本当は問題ではなかった．そして建築界の湿った人間関係や利権の力学も関係なかったはずだ．　言うまでもなく，モラリスムのない若さの横行は，タレ流し以外の何ものでもない．　重要なのは，君自身の流儀による批評意識の瑞々しさ，対象への清冽なアプローチである．　それは党派を超えて，あらゆる人を勇気づけ，救済する．

もうひとつ，それは君たちの執筆継承方式である．　代々執筆を受け継いでいく，これは一人一人の個人を超えたシステムであり，一つのエヴォリューショナルな場を設定したということだ．　君は，この場に憧れ，その中で生き，育ち，そしてこの場を棄てる．そこは私物化されてはならぬ，誰のものでもない場所だ．　スペッキオのユニークな意味性は，本質的にここにあると僕は思っている．だから新陳代謝することが必然なのだ．　そうでなければ，自家中毒を起こす．　続けることも，半匿名的なポーズも，この文脈において意味をなすのだ．

自らを鏡（スペッキオ）と化して同時代を映す，おそらくこのグループの初心とはそうしたものであったはずである．　その情熱が何よりも勝っていたとき，実際，君たちは力になり得ていたし，ブリリアントであったと思う．　結果として言えば，だが，それはごく限られた一時期に過ぎなかったのではあるまいか．

それでも，９年間の労はたいへんなものだ．　より若い世代の読者の中に生き続けていくためにも，あとはセンセーショナルに幕を落とせばいい．　それが君たちに残された最後の仕事ではないだろうか．

宮脇檀

●

〈その青々とした感じを何時までも〉

《ＳＤ》と云うこの雑誌を定期購読している訳でもなく，モチロン定期寄贈者のリストに入っている筈も無いからグルッポ・スペッキオの例の文章を絶えずチェックしていた訳ではない．

勿論，情報の……と言っている以上そうのんきに構えている訳にはいかないから何やらの特集があればその号は購入しているし，スペッキオの矛先が私の方に向けられた時には情報収集及び整理上，読んだりゼロックスしたりしてはいる．

その程度の読者として一体どの程度のことが彼等に言えるだろうか．

一つあるとすれば，内外の情報の波の中をさまよい歩きながら，学生らしく妙にひねくれたりしないで，やみくもに咬みついてみせるその姿勢が，丁度僕達の大学院時代を想い出させて好感が持てるといった点であろうか．

彼等の先生である原と僕は一諸に東大の３階や地下室でコンペをしたりけんけんがくがくやっていた仲である．

学生を終えて社会で実際に建築を始めるようになってみて，あの青臭い時代を懐かしむという感じだけではなく，あの時代の行動，物の考え方が其後の私の生き方をかなり支配していることの実感や，いざ物創りを始めてみるとあの頃のようなストレートな発想が出来なくなってしまっている事を自分や他人の上で見てしまっているからでもある．

スペッキオの諸君よ，その青々しく生っぽい情感は一方ではごく幼いといわねばならないのだが，それだけに純粋培養された爽やかさがある．　その純粋さが高ければ高い程社会に出てからの挫折の痛みも多かろう．　痛みが大きければ君ィ，それだけ何くそと踏んばる力も強くなろうというものだ．　諸君の青さはそういった意味での強さであると僕は思っている．

SD Space Design

〈国内建築ノート〉欄変更のお知らせ

■グルッポ・スペッキオ解散

永らく親しまれ，人によってはＳＤの顔（あるいは恥部）とまでいわれたグルッポ・スペッキオではありましたが，今年一杯で惜しまれながらも姿を消すことになりました．　そして，来年度から国内建築ノート欄は広く読者に開放されることになりました．

■新機軸のしくみ

竹山聖，隈研吾の両人が，**聖吾評**を名乗って来年よりこの欄を担当します．　両名が，毎号読者に**宿題**（テーマ）を出します．　読者はその宿題にのっとって，どしどし投稿して下さい．

応募原稿は，両人の審査を経て，４点に厳選されたのち，掲載されます．

投稿は本名でするも可，筆名でも可．　職業を書くも可，書かざるも可，年齢を書くも可，書かざるも可．　投稿者の自主性と機転と売り込み精神にまかされています．

読者の原稿には，竹山，隈両名の講評も掲載されます．　願わくはその蛇足のページが霞むほどの，超々絶々たる原稿が，全国津々浦々より蝟集せんことを．

■新機軸のめざすもの

懸賞論文というものが，どの世界にもあって，建築の世界もその例にもれませんが，本欄は懸賞論文では決してありません．　むしろそれからできる限り遠く，その対極たるをめざしています．　また，いわゆる〈投稿欄〉というものとも全く違います．　懸賞論文，投稿欄の大げさで，振りかぶったような語り口は本欄には向きません．　それらの語り口を支配している上から下へとふりかざしていくベクトルにかわる，新たなるベクトルなりテンソルを求めます．　この欄はそういった下降する矢をたばねて陳列する場所ではなく，むしろ雑然ときらめく階梯のようなもので，その階梯こそが**現在**を突如としてわれわれにもたらしてくれたり，また**現在を超えたもの**をかいま見せてくれるのではないか，というわけです．

その際に今までのグルッポ・スペッキオの文章は全く参考にはなりません．（謙遜！）　悪しからず．（吾）

1985年３月号国内建築ノート・宿題

「大組織のつくる建築はなぜつまらないか」

宿題解説

世の中ではサラリーマンの生活はつまらないことになっていて，銀行員の生活とか生保，損保会社の社員の生活はその中でもとりわけつまらない事になっていて，こういうことの延長として大組織の設計する建築はつまらないということになっている．　そしてこの種の議論はサラリーマン以外のいわゆる自営の人（略して㋑）が，大組織の一員（略して㋕）の安定とかボーナスをひがんで言っているのかと思うとそうばかりではなくて，㋕自らが，〈いや僕なんかサラリーマンになっちゃったけど，あなたのように一人でやられてる方なんか見てると本当にうらやましくて．　もう遅いんですけどね〉という場合もある．　このように，様々なシチュエーションで登場する議論であるが，大別して次の４つのケースが考えられる．

1.㋑が純粋に㋕の建築作品の質を問題にしているケース．

2.㋑が㋕の安定収入，ボーナス等々をひがんでいるケース．

3.㋕が自分の〈安定・幸福〉を追求されるのを恐れて，自己防衛のためには人にいわれる前にいってしまえと思ったケース．

4.㋕が営業上のテクニックとして用いるケース．　例えばゼネコンの営業部員㋕が，設計事務所の先生㋑に向かって，〈いやあ先生のお仕事はさすがに心をうつものがありますなァ．　うちの設計部では決してこういうものはできません．〉

1.の純粋なケースから4.の不純なケースにいたるまで，様々な使われ方が可能なところに，この議論の奥深さがある．　単に〈大組織のつくる建築のつまらなさ〉を指摘する論でももちろんよいが，〈大組織のつくる建築はつまらない〉といわれる構造自体のつまらなさを指摘する論も歓迎される．（吾）

応募規定

■応募の資格　とくになし

■提出物　本文（1,000字以内），本文の内容に即した写真・図，そのコメント．本文は原稿用紙に清書のこと．写真・図は現物またはコピーとし最大Ａ４判程度．　また出典（掲載誌名，掲載年月）を明記のこと．

■締切　1985年１月10日（当日消印有効）

■送り先　〒107　東京都港区赤坂6-5-13　鹿島出版会ＳＤ編集部

■提出物の返却　提出物はいっさい返却いたしません．

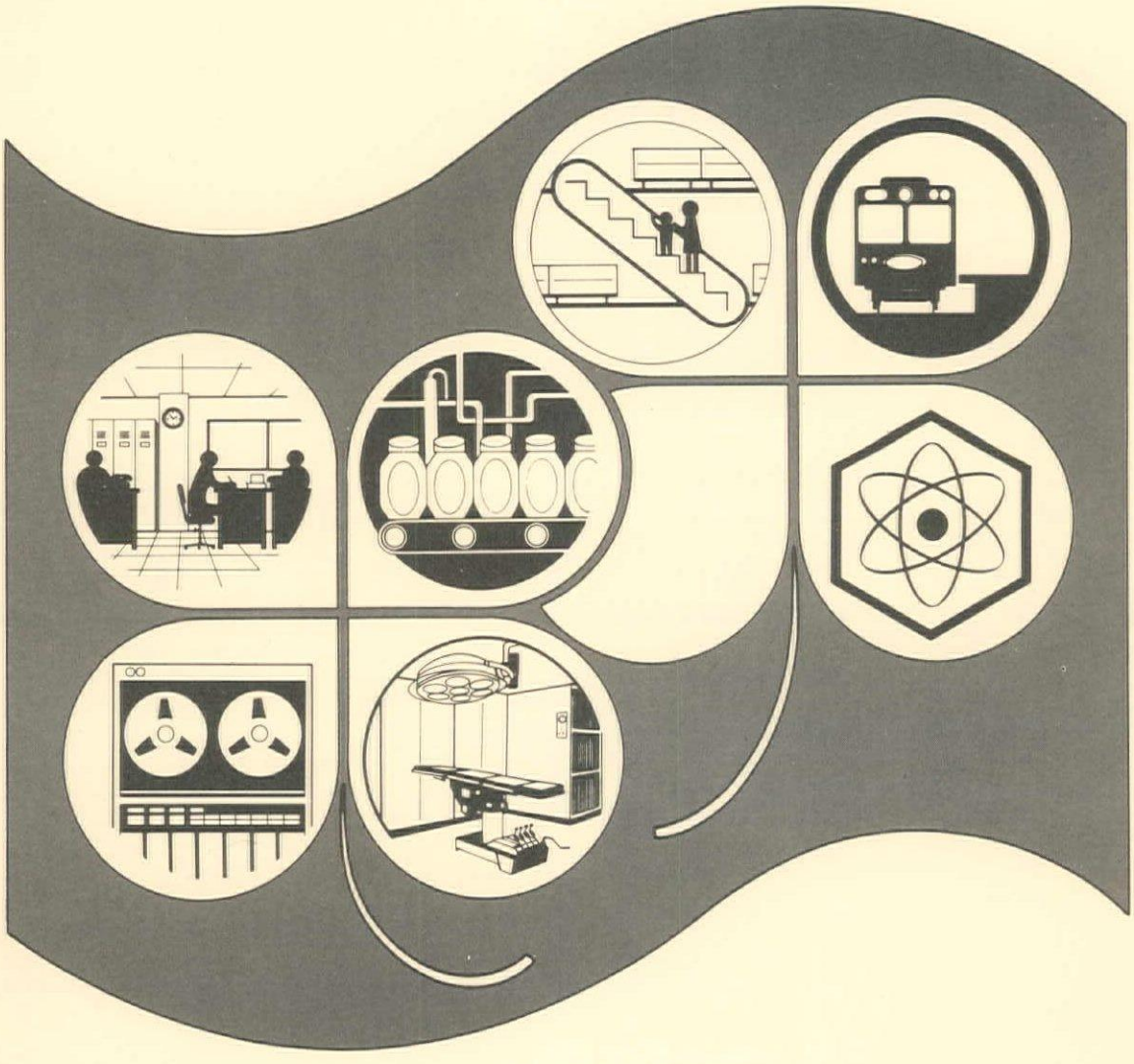
■掲載　ＳＤ誌1985年３月号〈国内建築ノート〉欄．

■問い合わせ　宿題（テーマ）に関する問い合わせは御遠慮下さい．

■御礼　採用された方には，ＳＤ半年分（採用号以降）を差し上げます．

MODAIR

あすの空気調和をになう



自然より清浄な環境づくり
それが東熱のねがいです

〔東熱〕がめざす「空気調和」とは、温湿度調整だけでなく、有毒ガスの除去、脱臭、除塵等、人間の生活環境、あるいは高度生産環境を作り出す総合技術です。

この開発された個々の技術を更に、総合的に発展させ、都市全体としての環境改善に寄与してゆくことに東熱としての使命感を持っております。

〔東熱〕によって開発された技術は●地域冷暖房●アイソレーター●サンシャイン計画●超高層ビル●病院●地下鉄等、あらゆる分野に生かされ都市環境の整備、浄化に貢献しております。

〔東熱〕は常に社会の要望に対応した、技術の開発をし、より清浄でより快適な生活環境を皆様に提供いたします。

東洋熱工業

本　社／〒104／東京都中央区京橋2－5－12
TEL 03（562）1351大代表
支　店／札幌・仙台・関東・新潟・横浜・名古屋・大阪・広島・九州
営業所／水戸・前橋・静岡・京都・神戸・岡山・高松

SD・1984・01→12　総目次

〈算用数字のうち，前者は月号数，後者は当該記事開始ページを表わす〉

特集

1—3　磯崎新　1976—1984　写真＝石元泰博，他
つくばセンタービル，西日本総合展示場，貝島邸，林邸，〈間〉展，
青木邸，大分市視聴覚センター，サウジアラビア外務省庁舎，伊良原邸，
神岡町役場，NEC大津工場厚生施設，テーゲル港地区計画，
衛藤クリニック，利賀山房・野外劇場，中上邸，
ハウザーマン・ショールーム，ロサンゼルス現代美術館，3枚の壁の庭，
エジプト展，I.B.A.集合住宅，岡之山美術館，
福岡相互銀行本店新館，草庵フォリィ
1—3　つくばセンタービル　コンサートホール　ホワイエのスケッチ　磯崎新
1—6　テクストの戦略とポスト・モダニズム　八束はじめ
1—100　主題のない物語：つくばセンタービル　鈴木博之
1—97　23作品への自註　磯崎新
1—172　磯崎新の道程　1976—1983

■

2—5　アーツ・アンド・クラフツと世紀末のイギリス建築
2—6　ヴィクトリア朝から20世紀へ　鈴木博之
2—10　序　片木篤
❶赤い家：モリスとウェップ
❷〈オールド・イングリッシュ〉と〈クィーン・アン〉：ノーマン・ショウ
❸様々なギルド：第二世代の展開
❹白いコテジ：ヴォイジーとベイリー・スコット
❺最後の伝統主義者：ラッチェンス
❻〈スコティッシュ・バロニアル〉と世紀末のグラスゴー
❼〈エドワーディアン・バロック〉と帝都ロンドン
❽田園郊外：ベッドフォード・パークとハムステッド
2—54　年表，註，参考文献

■

3—3　ドイツI.D.の双璧——D.ラムズとF.A.ポルシェ
D.ラムズ：シェーバー，コーヒーメーカー，ドライヤー，温風機，電卓，
ラジオ，卓上時計，壁掛時計，家具，他
F.A.ポルシェ：シェーバー，サングラス，ゴーグル，ヘッドホーン，
電話機，腕時計，ボールペン，ライター，家具，自転車，オートバイ，
自動車，飛行機，他
3—4　バウハウスの継承とそこからの発展——ウルム造形大学の教育　西沢健
3—6　ラムズの形とポルシェの形　黒川雅之
3—26　二人との出会い——ラムズとポルシェ　向井周太郎
3—38　NEC電話機のデザイン・プロセス　渡辺武雄
3—49　イタリアから見たドイツのデザイン　細江勲夫
3—28　ラムズとポルシェのデザイン哲学——16の質問

■

4—9　庭園：虚構仕掛のワンダーランド
4—10　美しき女庭師の誘惑——パラノイア庭園論のために　彦坂 裕
4—33　パラダイスと庭の神話学　関和明
4—38　ヴェルサイユの前後と上下　進士五十八
4—43　庭園と建築思潮　菊池誠
4—49　〈眼〉の庭園学——庭園劇場，舞台デザイン，メトロポリス　彦坂裕
4—97　〈自然〉と〈人工〉の相克——ジーキルとラッチェンスの庭園　片木篤
4—111　公共庭園とユルバニスムの系譜　倉田直道
4—57　庭園舞台装置百科　彦坂裕，松本篤，伊藤善康，他
4—117　アメリカのランドスケープ・デザインの展開　上山良子
4—118　アメリカのランドスケープ・デザイン私見　ローレンス・ハルプリン
4—122　ローレンス・ハルプリンの新作　上山良子
4—125　ランドスケープ・デザイン小史　マイケル・ローリー
4—128　人類，自然，デザイン　ガレット・エクボ
4—130　ポストモダン・ランドスケープにおける空間の凋落　レオナルド・バッカー
4—132　アメリカン・ランドスケープのアポリア　上山良子
4—103　ハンフリー・レプトンの風景式造園術について　彦坂裕
4—141　博覧会場　植田実
4—142　庭師　ル・コルビュジエ　荒井勝祥
4—143　点綴する庭　曽根幸一
4—144　広場とモニュメントについて　関根伸夫
4—145　遊び場としての庭園　櫻井淳
4—146　〈緑〉の計画学の両義性　八束はじめ
4—147　ボタニカ・ネクロフィリア　関和明
4—148　エデンの園の後日譚　四方田犬彦
4—149　廃墟・死・多言語　菊池誠
4—150　ドローイング展〈庭園〉　彦坂裕
4—157　ロンドン—パリ　公園史　関和明，中山道子
4—162　庭園双六　関和明，福田豊
4—166　造園家年表　伊藤善康
4—155　参考文献　伊藤善康

■

5—9　①ロスアンジェルス・モダニズム
5—10　ロスアンジェルス・モダーン——その移植と変容　八束はじめ
5—21　もうひとつのモダニズム　菊池誠
5—33　インタヴュー：エッサー・マッコイ　L.A.モダニズムの軌跡　渡辺真理
5—39　ソーントン・アーベルの住宅　ロナルド・ローズ
5—47　ケース・スタディ・ハウス——カリフォルニアの見果てぬ夢　渡辺真理
5—29　年表：L.A.モダニズムの半世紀
1910年代—ビショップ女学校，ホレーショ・ウエスト・コースト／I.ギル他
1920年代—キングズ・ロードの家(シンドラー自邸)，ロヴェル・ビーチ・
ハウス／R.M.シンドラー，ロヴェル邸／R.ノイトラ他
1930年代—ウォーカー邸／R.M.シンドラー，エンテンザ邸／H.H.ハリス，
ランドフェア・アパート／R.ノイトラ他
1940年代—イームズ邸／C.イームズ，ティッシュラー邸／R.M.シンドラー，
ケース・スタディ・ハウス1950／R.ソリアーノ，ハント邸／C.エルウッド，
ケース・スタディ・ハウス#21／P.コーニグ他
5—52　参考文献
5—59　②アレッサンドロ・メンディーニの描くデザインの未来像
5—59　2001年のスペース・デザイン　アレッサンドロ・メンディーニ
5—65　③ルシアン・クロール：手法と実践——地下鉄アルマ駅を通して
5—65　インタヴュー：ルシアン・クロール　不規則性にこそ豊かさがある　進来玄
5—71　自註：地下鉄アルマ駅　ルシアン・クロール
5—77　アジールの建築　進来玄

■

6—3　①画家ル・コルビュジエ——リトグラフとエッチングの作品から
モデュロール　1956，雄牛　1963，別世界　1963，手を挙げる女　1954
運動選手，彫刻　1965，雄牛　1965，3人の女，手そして石，
アルバム：小さな〈信頼〉より　1957——横たわる女，1920年最初の作品，他
アルバム：行列より　1960——表紙，目次，バルセロナの没落，賭け，他
アルバム：パニュルジュの連作　1962——表紙，扉，目次，エスプリ，他
6—16　プラトニスムの誘惑　松浦寿夫
6—18　作品データ
6—19　②コロンバス——現代アメリカ建築のミュージアム
ケヴィン・ローチ，SOM，CRS，シーザー・ペリ，HHPA，
ミッチェル／ジョゴラ，ジェイムス・ポルシェク，I.M.ペイ，
ロバート・ヴェンチューリ，グナー・バーカーツ，ハリー・ウィーズ，
エドワード・ララビー・バーンズ，ジョン・M.ヨハンセン，エリエル・サーリネン，エーロ・サーリネン
6—27　現代アメリカ建築を育む町　高瀬隼彦
6—20　コロンバス建築ツアーマップ

■

7—3　世紀末建築　写真＝田原桂一
PART　I　スペイン，フランス，ベルギー
アントニ・ガウディ・イ・コルネット，リュイス・ドメネク・イ・モンタネル，
ジュール・ラヴィロット，アナトール・ド・ボドー，エクトール・ギマール，
リュシアン・ヴェッサンビュルジェ，ポール・アメス，ヴィクトール・オルタ，
ジョセップ・プーチ・イ・カダファルク，ジャン＝カミーユ・フォルミジェ
PART　II　イタリア，トルコ，スロヴァキア，ハンガリー，ロシア，
ルーマニア
ジュゼッペ・ソマルーガ，ピエトロ・フェノーリオ，エデン・レヒナー，

ニコライ・И.ボズデイエフ，F.コルブ＋K.ギエルグル，ベーラ・ライタ，
ウィリアム・φ，ヴァルコット，フェドール・O.シェフテル，
G.ミケラッツィ，ジュリオ・ウリッセ・アラタ，A.カンパニーニ，他
PART III スイス，ドイツ，オーストリア，オランダ，チェコ，イギリス
R.ベッリ＋H.ロベール，アドルフ・ロース，ペーター・ベーレンス，
J.M.オルブリヒ，O.ヴァークナー，H.P.ベルラーヘ，ヨーゼフ・ファンタ，
パルシャーネク＋ボリーフカ，O.ノヴォトニー，C.R.マッキントッシュ
7—21 パヴェ街のシナゴーグなど 飯島耕一
7—36 発見という名の創造行為 伊東順二
7—53 新たな世紀末を迎えて フィリップ・スーポー
7—68 海の底の宝石箱 池内紀
7—85 蘇格蘭の夢の災 小池一子
7—101 アール・ヌーヴォーの光に イアナ・クラヴリ
7—102 インタヴュー：アラン・ロブ＝グリエ 建築＋写真＋映画 三宅理一
7—114 インタヴュー：田原桂一 アール・ヌーヴォーの魅力
7—106 解説：建築家＋作品 三宅理一
■
8—3 ①マリオ・ボッタ
スタビオの住宅，カデナッツォの住宅，リゴルネットの住宅，
カプッチーニ修道院の図書館，モルビオ・インフェリオーレの高等学校，
モルビオ・スーペリオーレの住宅，ヴィガネッロの住宅，カサ・ロトンダ，
プレガッソーナの住宅，フリブール国立銀行，他
8—7 インタヴュー：マリオ・ボッタ 建築の実相をめぐって 野口昌夫
8—20 マリオ・ボッタ講演レポート：場所と建築 野口昌夫
8—24 マリオ・ボッタの作品に見る3つの原理 東孝光
8—29 実体としての建築 北山恒
8—35 ドローイング
8—38 マリオ・ボッタの家具
8—40 マリオ・ボッタ主要作品地図
8—43 ②チェコスロヴァキア・キュビズム——1910年代の建築・家具・工芸
建築，家具，陶器・ガラス器・金属器，グラフィック・デザイン
8—44 作品解説 上口泰位
8—57 キュビズム跳んだ——チェコ・キュビズムの建築家たち
8—58 年表
■
9—5 香山壽夫の建築三書
奥村・日野水邸，林原邸，小湊の海浜荘，東京大学資料館，東京大学経済学部，
相模女子大学7号館，東京真珠ビル，千が滝の山荘，
中原邸，宇都木邸，安井邸，下地邸，旗の台ガーデン・タワー，
清里高原ホテル，古賀邸，吉本美術館計画案，下地医院，
東京大学工学部6号館屋上増築，地震研究所記念碑，古市先生記念碑
9—21 香山壽夫の建築三書 香山壽夫
9—21 第一書：正面
9—33 第二書：内部空間
9—45 第三書：開口
9—59 作品データ
■
10—5 ①ジェイムズ・スターリング：シュトゥットガルト美術館新館
10—16 格式ばった気軽さ ジェイムズ・スターリング
10—29 Dualist Jimの分別と気まぐれ 巴辰一
10—33 ミッキー・マウスの聖杯城，または…… 本村佳久
10—34 スターリングにおける手法の変遷 ジョゼフ・ライクワート
10—37 具象的都市空間をめぐって 杉本俊多
10—41 ②ロバート・ヴェンチューリ：ノル・ヴェンチューリ・コレクション
クィーン・アン・チェア，チッペンデール・チェア，シェラトン・チェア
エンパイア・チェア，アール・デコ・チェア，ヘップルホワイト・チェア
ビーダーマイヤー・チェア，ゴシック・リヴァイヴァル・チェア，
アール・ヌーヴォー・チェア，ソファ，ロー・テーブル，
キャブリオール・テーブル，アーン・テーブル
10—42 古典と近代の共存 ロバート・ヴェンチューリ
10—54 共感と距離感 大橋晃朗
10—56 インタヴュー：石井和紘 建築・椅子・カードボード
10—60 セカンド・グランス・チェア 小川守之
10—52 ヴェンチューリ・コレクション 作品リスト
■
11—3 ①アキッレ・カスティリオーニ：イタリアン・デザインの巨匠
アキッレ・カスティリオーニ・デザイン展，プリマヴィジョーネ展，
展示会ディスプレイ，プロダクト・デザイン
11—6 ウィーンのカスティリオーニ展 パオロ・フェッラーリ
11—11 アキッレ・カスティリオーニ・イン・ウィーン ペーター・ノオヴェー
11—14 美しい形は機能 パオロ・フェッラーリ
11—17 透明で泰然とした流れ 川上元美
11—21 カスティリオーニとイタリア・デザイン 松風正幸
11—28 アキッレ・カスティリオーニ 自在な遊戯精神 長尾重武
11—30 経歴・作品リスト
11—31 ②表層の魔術——コーン，ペダーソン，フォックスの最新プロジェクト
第三ナショナル銀行，ヒューストン・オフィス・タワー，
75フェデラル・ストリート・ビル，パーク・センター，
ヒューストン・サウスウエスト銀行，プロクター＆ギャンブル本社ビル，他
11—32 K.P.F.読解のためのフット・ノート 堀池秀人
11—48 表層の中のクラシシズム 團紀彦
11—50 紙一重でイノヴェーター 六鹿正治
■
12—3 SD Review，1984
石田敏明，井上揺子，海老塚耕一＋菱沼利行，片岡山訓，
木村丈夫＋野田俊太郎，黒川哲郎，小林克彦，小宮山昭，鈴木了二，
小屋雅義＋大内栄，高松伸，竹ノ内一雄，中澤王久東，中野佳子，
能勢修治＋永井久美，早川邦彦，若林広幸，渡辺武信，
槇文彦（特別出展）
12—6 《SD Review，1984》経過報告
12—7 座談会＝《SD Review，1984》入選作をめぐって
槇文彦＋竹山実＋山本理顕＋八束はじめ
12—48 実作と展示作品の関係 吉田研介
12—49 《SD Review，1983》出展作品のその後

作品その他

1—196 筑波新繁盛記——〈磯崎新展〉ほか展評 デビッド・スチュワート
1—198 パネル・ディスカッション：モダニズムからの脱出
槇文彦＋磯崎新 司会＝原広司
■
3—53 メンフィス MEMPHIS 1983 椅子，テーブル，照明器具，花瓶，他
3—53 イタリアン・パラドクス 渡辺妃佐子
3—59 〈ティー＆コーヒー・ピアッツァ〉——アレッシの最新プロジェクトから
3—60 ベアーテとトルーデになったコーヒーポット 押野見邦英
3—64 〈プログラム 6〉に参加して 山下和正
■
6—49 エミリオ・アンバーツの最新プロジェクト ニューオーリンズ美術館
6—55 パドヴァの建築家ジュセッペ・ヤペッリ 1783—1852 リオネッロ・プッピ
■
8—71 二つの家 今井裕夫＋林章
■
9—63 フランク・ロイド・ライトの実験住宅：テキスタイル・ブロック・ハウス
ロバート・スウィーニー＋チャールズ・カルボ
■
10—67 リンゴットの未来への展望：20のプロジェクト
J.スターリング案，L.ハルプリン案，P.サルトーゴ案，G.ペッシュ案，他
10—68 2001年のトリノに向けて 鵜沢隆
10—68 提起する建築：類似，相違，目的 ジョヴァンニ・クラウス・ケーニッグ
10—102 情念の建築家ユージン・ツイのプロジェクト ユージン・ツイ
■
11—65 マイアミ施風——アルキテクトニカの作品
ジ・アトランティス，ザ・パレス，ジ・インペリアル，ザ・バビロン，他
11—76 アルキテクトニカの〈ロマンチック・モダニズム〉 竹山実
11—78 ウォーレン・プラットナーの衛生陶器
■
12—57 ベルリン国際建築展 1984年報告
12—64 シンポジウム：発展しつつある都市における歴史的都心 足達富士夫
12—75 マイケル・グレイヴス：ナパ・ヴァレーの美術館計画
12—80 ロッテルダム JAPAN AIR 堀川幹夫

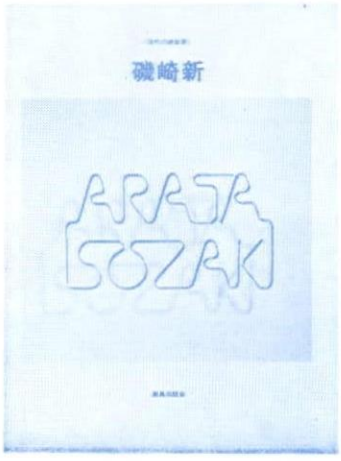
■Serial Essay 〔色〕
1—193 色々なことなど 粟津潔
2—57 静かな朝の国の色 白い色(オフ・ホワイト) 金壽根
3—51 居色雑感 村上静男
4—167 蜘蛛の巣状の，そして玉虫色の 宇佐美圭司
5—53 色彩のある風景 早川邦彦
6—43 白か黒か，それが問題 川本恵子
7—117 装いと彩りの空間のことなど 粟辻博
8—59 カメラにつめるフィルムは…… 村井修
9—61 「グリーン」の季節 武井邦彦
10—61 日本人の色彩感覚 黒木靖夫
11—51 色のポリシー 三輪正弘
12—51 色彩コンプレックス 中村誠
■NICE SPACE
2—59 マラパルテ邸／イタリア
2—59 碧くまぶしい海へ 北山恒
2—61 停止した様式 鵜沢隆
3—65 サマラの螺旋状ミナレット／イラク
3—65 螺旋の魔力 関邦弘
3—67 サマラのふたつの螺施状ミナレット 中村光男
5—55 カイザー・ヴィルヘルム記念教会堂／西ドイツ
5—55 二つの意味 山崎泰孝
5—57 ウルトラ・マリンの世界 谷口義久
6—45 ウィリアムズバーグ／アメリカ
6—45 アメリカの精神を象徴する場所 内井昭蔵
9—101 タージ・マハル／インド
9—101 日本建築と対極に位置するもの 木村徳国
9—103 死の形 内藤廣
10—63 香港
10—63 熱気がハレーションを起こす街 榎本弘之
10—65 廣告雲集——ダウンタウンの風景 森島清太
11—53 ノートル・ダム・ド・トラヴァイユ教会＋サン・トーギュスタン教会／フランス
11—53 君は鉄を見たか 下村純一
11—55 異父兄弟の二軒の教会 小宮山昭
12—53 ケルンの大聖堂／西ドイツ
12—53 19世紀の象徴として 堀内正昭
12—55 駅前大聖堂——ケルナー・ドーム 岩村和夫
■（連載）ヴィジョン・イン・モーション
L.モホイ＝ナジ：著 阿部公正：訳
2—63 ㉕
3—71 ㉖最終回
■（連載）フランク・ロイド・ライトの呪術の空間
草森紳一：著 大倉舜二：写真
8—61 序 有機の魔法
9—79 ❷ 有機建築の魔法(1) 岡倉天心とライトと老子と
10—83 ❸ 有機建築の魔法(2) もう一度，天心とライトと老子と
11—57 ❹ 有機建築の魔法(3) ソーローの森，ライトの森
12—65 ❺ 有機建築の魔法(4) 大霊的建築
■海外建築情報
DUCTSPACE編
1—215 機械の詩学 植野紘
1—216 レンゾ・ピアノ——ピアノ・マシーン
1—217 リチャード・ロジャース——機械美学の継承
1—218 フォスター・アソシエイツ——驚は舞いおりた
1—219 ヘルムート・ヤーン——マシーン・アール・デコ
1—220 フランク・ゲーリー——部品の告白
2—87 アンノウン・マシーン 若松久雄
2—88 アラブ研究所——イスラムと半導体
2—89 Zugspitzeの無線中継塔——Heavy Duty & High Quote
2—90 イーグルロック・ハウス——翔べない鳥
2—91 奥地の飛行場——ヴァナキュラー・テック
2—92 ジャン・プルーヴェ——メカニック・アーキテクト
3—101 Light is the Theme 面出薫
3—102 照明器具——ポスト・モダン・ライティング
3—103 光オブジェとしての建築——電飾のベル・エポック
3—104 インテリア照明 1——虚々実々の演出家達
3—105 インテリア照明 2——美術観の光
3—106 環境照明——環境の照明あるいは廃墟の美学
4—183 ピーターパン・シンドローム 江幡修
4—184 ドールズ・ハウス・コンペ——建築家の密かな楽しみ
4—185 ザ・ピーク（香港クラブハウス）——帰ってきたシュプレマティズム
4—186 ゴードン・ウォ・ホール——ヴェンチューリの装飾
4—187 ペンサコラ・プレイスのアパート——不肖の息子
4—188 ホックニー自邸——装飾のアルカディア
5—91 ファースト・スケッチ21C. 小嶋一浩
5—92 マイク・ゴールド——逆行するドローイング
5—93 ハーディドのインテリア・プロジェクト——建築が炸烈してしまった
5—94 OMA——メトロポリタン・シュミレーションの行方
5—95 レム・クールハース——逃走するヴィジオネール
5—96 ベルナール・チュミ——チュミの変貌
6—81 オフィス再考／ 野出木貴夫
6—82 ユニオン・カーバイド本社——ヴィラとしてのオフィス
6—83 ベネフィシャル・センター——オフィス・ヴィレッジ
6—84 ディジタル・エクィップメント社——Factory Style？
6—85 ブリュッセル・ランベール銀行ローザンヌ支店——ローザンヌの幻想
6—86 マリオン・コーポレーション——混構造の低層オフィス
7—133 博覧都市 宮崎長志
7—134 テット・デファンス——透きの構造
7—135 ルーヴル美術館改修計画——ガラスのピラミッド
7—136 パリ万博'89会場計画 クールハース／OMA案—Artificial Mirage
7—137 パリ万博'89会場計画 アトリエ・ピアノ案——パリに浮かぶ橋
7—138 パリ新オペラ座コンペ——幻想オペラ〈バスティーユ〉
8—89 国内発海外情報，またはクラインの壺からリゾームへ 森徹
8—90 TIME——文化・デザインを巡る〈日本〉の引き摺り方について
8—91 AA——ミニマリズムとしてのニッポン
8—92 ID (Industrial Design)——キモノとWALKMAN
8—93 domus——イタリアン・カレイドスコープ
8—94 JA＋SD＋GA＋……——なるほど・だ・ニッポン
9—107 イメージはXL（エクセル） 田名網雅人
9—108 Flying Pyramid——フラーを孕んだピラミッド
9—109 ピカソ・アリーナ——ルドゥー・オマージュ
9—110 カラブリア大学——建築とアートとの距離
9—111 レイクウッド・ヒルズ——大地への刻印
9—112 クリスト——Daydream Believer.
10—107 THE NETWORK OF ARCHITECTURE : a style for the future Nadim Karam
第3世界の現在 小嶋一浩
10—108 EGYPT ハッサン・ファトヒ——ナイルのフェスティバル・ヴィレッジ
10—109 INDIA チャールズ・コレア——ボンベイから地球へのパルス
10—110 ARGENTINA ミゲル・アンヘル・ロカ——複眼の手法
10—111 TURKEY アーメト・ギュルゴーネン——偏在と遍在
10—112 ALGERIA フェルナン・プヨン——200 Columns
11—93 眩学のすすめ 小倉克己
11—94 ニューオリンズ博——愉しみのエクリチュール
11—95 ファカルテ・ド・メドサン——モードとしてのハイテック
11—96 CAD——機械じかけの色鉛筆
11—97 ジョンソン・スタディー——セルフ・パヴィリオン
11—99 デイヴィッド・ホックニー——視差の集積
12—99 時には賞を楽しむ余裕——P／A賞この10年 田辺正義
12—100 P／A賞1975・76年——モダニズムへの反発
12—101 P／A賞1977・78年——ホワイト&グレイの顛末
12—102 P／A賞1979・80年——時代の集積としての建築と都市
12—103 P／A賞1981・82年——パラダイムからイリュージョンへ
12—104 P／A賞1983・84年——ドラマチック・エージの産ぶ声
■国内建築ノート
グルッポ・スペッキオ編
1—223 〈手法〉から〈様式〉へ
1—224 ARATAは空を飛ぶ
1—225 不老長寿の薬や何処
1—226 磯崎投手の大リーグボール
1—227 影の獄にて
1—228 磯崎流気くばりのすすめ
2—95 芸としての建築
2—96 職人の見せ場をつくる時代
2—97 スキゾーパラノ・コンプレックス
2—98 〈ネクラ〉のジョン・ル・カレ
2—99 大衆の笑い
2—100 Flying Artisan
3—109 新〈技術の時代〉
3—110 失業対策としてのハイテック
3—111 ハイテクノロジーをになうもの
3—112 気力と刺激への欲求
3—113 シンセサイザーの形
3—114 電話ということ
4—191 心の内なる庭園
4—192 にわか仕立ての悲歌(エレジー)
4—193 夢舞台
4—194 エデンの園としてのTDL
4—195 都市の庭〈東夫人の庭〉
4—196 冬の日ざしを浴びながら

5—99 新・構造表現主義　復活の兆(きざし)
5—100 忘却の構造
5—101 構造表現主義の座標軸
5—102 年代記的モノローグ
5—103 絶対善としての〈構造〉
5—104 自然の技術
6—89 最近の建築界のヘンな盛りあがり方について
6—90 群居賛江
6—91 夢の共演，フュージョン！フュージョン！
6—92 虚像(アイドル)の神話
6—93 精神病棟からの手紙
6—94 奥行きの深い話
7—141 質感，あるいは肌のぬくもりについて
7—142 抽象から具体へ
7—143 男が生活の肌ざわりにふれる時代
7—144 魯山人について
7—145 〈観念〉としてのmatière
7—146 パフォーマンスとしての建築
8—97 建築家と家具
8—98 VARIATION
8—99 局所化される中心
8—100 マッキントッシュ・ブラザース
8—101 画龍点晴，ワンポイント
8—102 時代の影
9—115 プロフェッサー・アーキテクト
9—116 パンと心がけ
9—117 プロフェッサー・アーキテクトになりたいな
9—118 コンドル先生とのチガイは大である
9—119 密やかな期待
9—120 アーキテクト・プロフェッサーの役割
10—115 ヒンシュクとカイカン
10—116 INTERMEZZO
10—117 瀬古選手と暴走族
10—118 非日常の日常性
10—119 グルッポ・スペッキオ・スタイル
11—101 グルッポ・スペッキオ——その罪と終幕
11—102 思いやり
11—103 サバイバル——奇妙な安定の時代の中で
11—104 変奏の季節
11—105 再びHamlet or Macbeth
12—107 最終回　グルッポ・スペッキオを叱る
12—107 伊藤ていじ，伊東豊雄，植田実，鈴木博之，富永譲，林昌二，彦坂裕，宮脇檀
■トピックス
上口泰位＋河田正＋辺見浩久＝編・訳
2—82 非都市(ネガティブ)の都市
3—96 マリオ・ボッタの純粋幾何学——マリオ・ボッタの自作解体書をめぐって
4—176 彫刻の黙示——空間，場所を再定義するリチャード・セラの彫刻
6—70 ポスト・モダンに出口があったりなんかして——C.ジェンクスのAbstract Representation
10—100 ダウン・トゥ・ルイン——ラファエル・モネオの古代ローマ美術館
12—86 〈永遠の建築〉への憧憬——ティチーノの建築家，リヴィオ・ヴァッキーニ
■書評
1—202 桂離宮——空間と形　石元泰博＝写真　磯崎新・熊倉功夫・佐藤理＝解説　石井和紘＝評
1—204 ル・コルビュジエ——20世紀思想家文庫⑩　八束はじめ＝著　富永譲＝評
2—74 曲線と直線の宇宙　亀倉雄策＝著　向秀男＝評
3—92 図説　都市の世界史　全4巻　レオナルド・ベネーヴォロ＝著　佐野敬彦・林寛治＝訳　田島学＝評
3—94 Il disegno del prodotto industriale Italia 1860-1980　Vittorio Gregotti＝編　鵜沢隆＝評
4—172 庭のたのしみ——西洋の庭園二千年　アンヌ・スコット＝ジェイムズ＝著　横山正・増田能子＝訳　片木篤＝評
4—174 風景から広場へ——環境装置としての美術　関根伸夫&環境美術研究所＝著　関和明＝評
5—84 劇空間のデザイン　舞台美術劇場技術国際組織日本センター＝編　清水裕之＝評
5—85 ル・コルビュジエの構想——都市デザインと機械の表徴　ノーマ・エヴァンソン＝著　酒井孝博＝訳　吉松秀樹＝評
6—75 吉阪隆正集8——ル・コルビュジエと私　吉阪隆正＝著　樋口裕康＝評
6—76 磯崎新＋篠山紀信　建築行脚12——ゆらめくアールデコ　クライスラービル　磯崎新＋篠山紀信＋松永安光＝著　小林克弘＝評
7—123 オットー・ワーグナー——ウィーン世紀末から近代へ　H.ケレーツェッガー，M.パイントナー＝著　伊藤哲夫，衛藤信一＝訳　川向正人＝評
8—80 構造とその形態——アーチから超高層まで　ローランド・J.メインストン＝著　山本学治・三上祐三＝訳　青山博之＝評
8—82 ラグナル・エストベリ　エリアス・コーネル＝著　宗幸彦＝訳　片木篤＝評
8—83 街並をつくる道路　ジム・マクラスキー＝著　六鹿正治＝訳　中村勉＝評
9—93 建築・都市論異見　宮内嘉久＝著　布野修司＝評
9—94 アール・デコの館——旧朝香宮邸　増田彰久＝写真　藤森照信＝文　杉浦康平＝造本・構成　松本哲夫＝評
10—97 ルイス・マンフォード　木原武一＝著　渡辺武信＝評
10—99 境界のかたち——その建築的な構造　保坂陽一郎＝著　宇野求＝評
11—81 都市の記憶　粉川哲夫＝著　植野糾＝評
12—92 田原桂一写真集　TAHARA KEIICHI　1973-1983　田原桂一＝著　飯島耕一＝評
12—94 日本の集落　全3巻　住宅建築別冊⑬⑭⑮　高須賀晋＝文　畑亮夫＝写真　宮脇檀＝評
■洋書紹介
1—206 Voorgeshiedenis Previous History Nederland　Documentaticentiecentrum Voor De Bowkunst, Delft University Press 1982
De Stijl
Haag Gemeentemuseum, Delft University Press 1983
Het Nieuwe Bouwen in Rotterdam 1920-1960
Museum Boymans-van Beuningen, Delft University Press 1982
Amsterdam 1920-1960
Stedelijk Museum, Delft University Press 1983
CIAM
Rijksmuseum Kröller-Müller, Delft University Press 1983
De Stijl：1917-1931
Visions of Utopia
Abbeville Press, New York 1982
上口泰位＝評
■展覧会レポート
2—81 〔½×2〕×6展——建築とインテリアデザイナーによる空間ゲーム　井出章＝評
4—179 イタリア・インテリア・デザイン展　長尾重武＝評
8—79 西川潔造形作品展
8—90 下村純一写真展——豊饒の近代建築・下村純一の眼
11—87 デザインニューウェーブ'84日本　青木淳＝評
11—88 日本のデザイン展——伝統と現代　三宅理一＝評
12—82 カルロ・スカルパ回顧展　野口昌夫＝評
■映画評
2—78 歌劇ドンジョヴァンニ全曲　山下昌彦＝評

SD (Space Design)
Back Issues and Price Lists
1979—1984
Price include seamail postage fee.

SD

●hardcover edition



Arata Isozaki ¥4500
28 great works of Arata Isozaki with notes by himself. Writings by Hans Hollein.



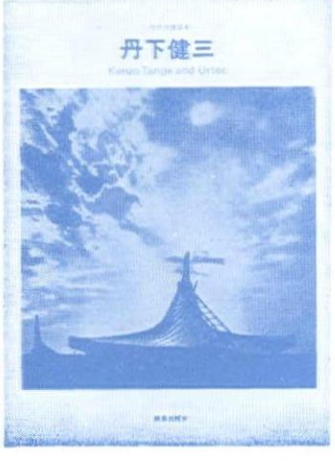
Kisho Kurokawa ¥4500
Extensive works of Japanese metabolist, with writings by C. Lévi-Strauss, etc. Full English texts.



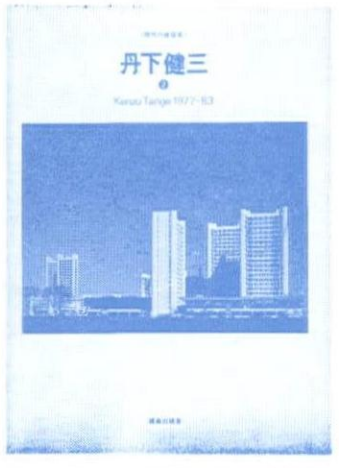
Fumihiko Maki ¥4500
Selected works—architecture and urban design—of Fumihiko Maki. Full English texts.



Tadao Ando ¥4500
Selected works and drawings of T. Ando. Writings by Y. Futagawa etc. Full English texts.



Kenzo Tange ¥5000
58 architecture and urban design of Tange, selected by himself. 202 pages. Full English texts



Kenzo Tange 1977–83 ¥5300
1980–83, 21 architecture and urban design of Tange. Chronological lists. Full English texts.

Overseas Subscription

Please enter my subscription to
Space Design (SD)
Starting in _____, 1984

Name .....
Profession .....
Address .....
.....
Signature .....

☐new subscription
☐12 issues ¥30000 (seamail postage included)
☐24 issues ¥50000 (seamail postage included)

The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Please register my order for the following back issues of **SD**

Name .....
Profession .....
Address .....
.....
Signature .....

The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Post Card

stamp

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

Post Card

stamp

Subscription Department

SD

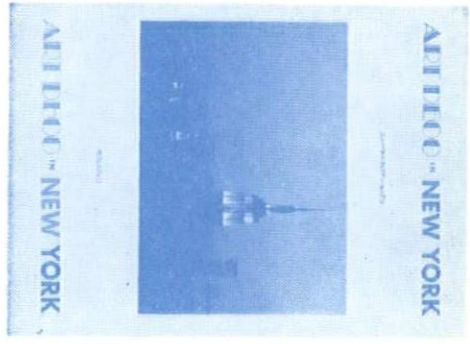
Space Design

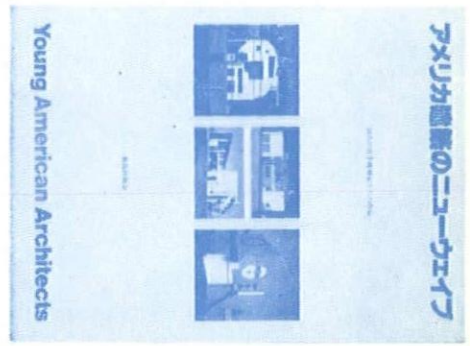
Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

Overseas Subscription





Art Deco in New York ¥5000
About 80 Art Deco architecture. The Art Deco architectural map and list of New York City.

●Selected back issues

7901 Kazuo Shinohara ¥4000
31 individual houses of Shinohara whose exhibition were held at Paris, New York, etc. 192 pages. Full English texts.

8304 Michael Graves ¥3000
Major works including The Republic Bldg. and The Fumana Bldg.

8401 Arata Isozaki 1976–1984 ¥5000
Twenty-three works including Tukuba Center Bldg. by Isozaki, with notes by the architect. Full English texts.

8402 The Arts and Crafts Movement and Late Nineteenth Century British Architecture ¥2500

8403 Two Pillars of German Industrial Design: D. Rams and F.A. Porsche ¥2500

8404 Gardens: Wonderland of Contrivance and Illusion ¥4300
All the major gardens in Europe and U.S.A. English texts.

8405 L.A. Modernism ¥2500
Including the interview with Esther McCoy. English text.

8406 The Artist Le Corbusier: Lithographs and Etchings ¥2500

Columbus, Indiana: Museum of Modern American Architecture

8407 Art Nouveau: Capturing the Magic of Dim Space ¥4000
All the major Art Nouveau architectures in Europe. Photographs by Keiichi Tahara, 116 pages including 48 color pages.

8408 Mario Botta ¥2500

8409 Hisao Kōyama: The Three Books of Architecture ¥2500
Hisao Kōyama's Composition Book introducing his works. English text.

8410 James Stirling: New State Gallery Stuttgart ¥2800
Robert Venturi: Venturi Collection of Knoll International
English texts by James Stirling and Robert Venturi.

8411 Achille Castiglioni: Great Master of the Italian Design World, Magic in the Exterior Skin: Recent Projects by Kohn Pederson Fox Associates. ¥2500

The Whirlpool: Post-Modernism-Young American Architects ¥4500
Works and projects of 50 young American architects.

<都市住宅> 1984年12月号　特別定価 1,500 円

特集｜鈴木恂——住居の構想

神話的発想による12のdwelling projects

論：<住居の構想　IMAGINATIVE DWELLINGS>——鈴木 恂

●

Note・1　Three Country Houses

PROJECT———1　2/3円弧の壁とガラスの円筒

PROJECT———2　繭型の出窓の中にある家

PROJECT———3　矛盾を内包する箱の重なり

Note・2　Three Town Houses

PROJECT———4　囲繞が生み出す外と内の関係

PROJECT———5　9枚の柔らかな壁の配置

PROJECT———6　自立する内部の風景

Note・3　Three Transfigured Houses

PROJECT———7　異形の家——1

PROJECT———8　異形の家——2

PROJECT———9　異形の家——3

Note・4　A Look at Houses in Three Rows

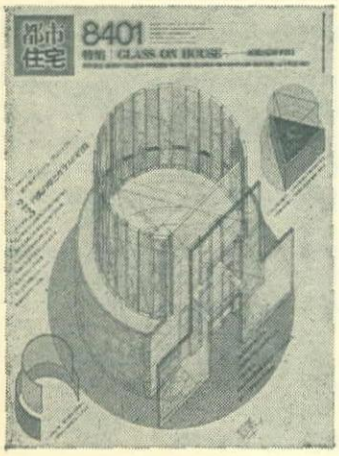
PROJECT———10　家並 1——回廊景——路をもつ家

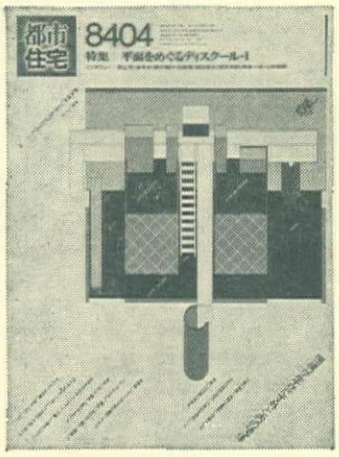
PROJECT———11　家並 2——緑被景——庭をもつ家

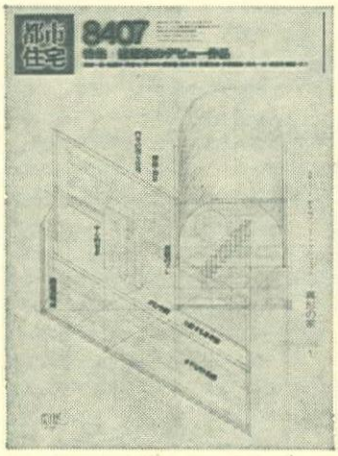
PROJECT———12　家並 3——風景——出窓をもつ家

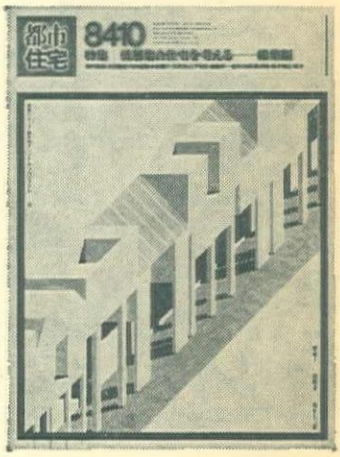
THREE EXTRA PROJECTS

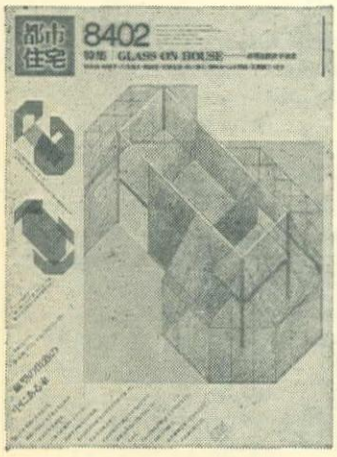
[手の家], [自邸]プロジェクト・GARANDO, [MY HOUSE]



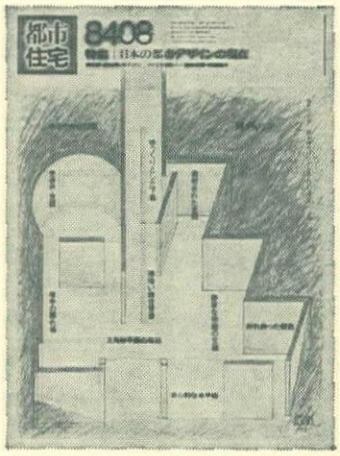




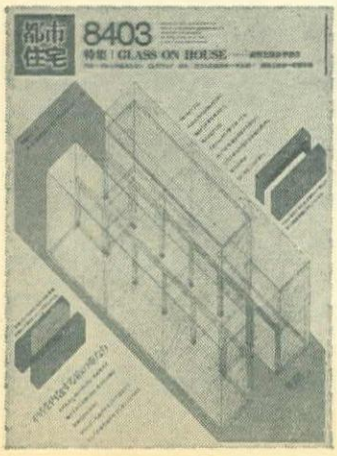




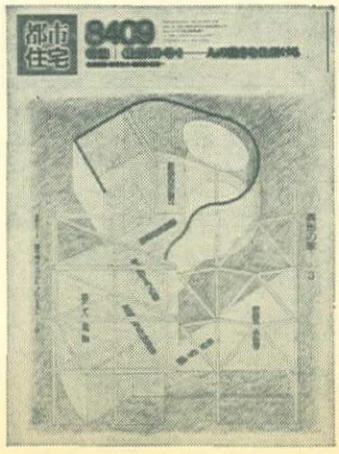


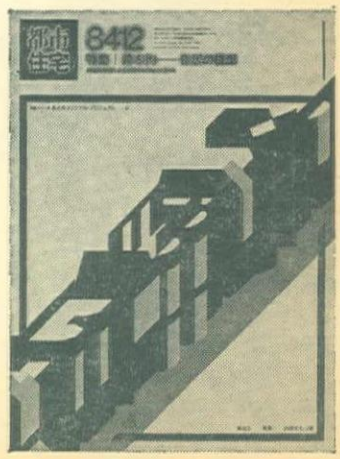












SD 1981→1984　●：特集　ONS：Nice Space　ON：ニッポン　OP：PARIS　OS：2001年のSPACE DESIGN　○椅：椅子　○色：いろ

1981

定価¥1100，＊＝特別定価

1＊ ●アンドレア・パラディオ／ラ・ロトンダ，サン・ジョルジオ・マッジョーレ教会，バシリカほか　対談＝磯崎新＋高階秀爾＋長尾重武　論文・資料　○P＝高階秀爾＋田原桂一　＊＝¥3000（ハードカバー装）

2＊ ●ハリー・サイドラー／バリのオーストラリア大使館，H.サイドラー自邸，文＝H.サイドラー，P.ドリュー　○ヴィジョン・イン・モーション❸　○P＝小宮山昭＋田原桂一　○NS　蘇州の庭園　＊＝¥1300

3 ●新古典主義／ポスト・モダニズムと新古典主義，〔Ⅰ〕考古学とイマジネーション，〔Ⅱ〕自然と形態〜〔Ⅲ〕　文＝八束・川向・菊池・彦坂・小林・青木　●W.ブラットナーの近作2題　○P＝遠山一行＋田原桂一

4 ●グナー・バーカーツの近作／コーニング・ガラス美術館ほか　●ジャン＝J.ルクーの幻想画集　●ディッシング＋ヴァイトリングの作品　○P＝大久保喬樹＋田原桂一　○NS　ホーフブルクの旧宮廷図書館

5＊ ●ジオ・ポンティ 1891-1979／ピレッリ・ビルほか　文＝G.ポンティ，L.ポンティ，A.メンディーニ，三輪正弘ほか　○P＝池米慶＋田原桂一　○NS グルムシュタット芸術家村　＊＝¥2300（ハードカバー装）

6＊ ●安藤忠雄／小篠邸，松本邸，福邸，STEP，上田邸，堀内邸，石原邸，住吉の長屋ほか　作品リスト　対談＝西沢文隆＋槻文彦　文＝二川幸夫　○P＝堂本尚郎＋田原桂一　＊＝¥3000（ハードカバー装）

7 ●シエナ——イタリア中世都市の生と死　田島学　文：①〜⑪　田島学　●北ヨーロッパのファクトリー・デザイン5題　○ヴィジョン・イン・モーション❹　○P＝田淵安一＋田原桂一　○NS　ハッサンのモスク

8＊ ●環境芸術としての建築——SITEの場合／BEST 社店舗シリーズほか　文＝J.ワインズ　●もうひとつの木の空間⑥／文＋写真＝須山義幸　○P＝森田一敏＋田原桂一　○NS　ピサの斜塔　＊＝¥1300

9＊ ●岡田新一：抽象と細密／岡山市立オリエント美術館，中近東文化センター，警視庁本部庁舎ほか　作品データ・年表・経歴　抽象と細密＝岡田新一　○P＝植田実＋田原桂一　＊＝¥3000（ハードカバー装）

10 ●デンマークのデザイン／家具，照明器具，テーブルウェア，ID，DSBほか　文＝渡辺力，光藤俊夫，梨谷祐夫，渡辺和子，藤本清春，今井一夫　○P＝野見山暁治＋田原桂一　○NS　ルイジアナ美術館

11＊ ●高浜和秀の建築と家具／建築：ウンブリアのヴィラ，家具：LEGO，MANTILLA，照明器具：SAORI，ほか　文＝清家清ほか　○P＝阿部良雄＋田原桂一　○NS　セビリアの大聖堂　＊＝¥1300

12＊ ●黒川雅之の仕事／VILLA-H，河野邸，銀座くのや，パンドラ，T-ジョイント，アクティング，メカビーンズほか作品データ・年表　対談＝黒川雅之＋押野見邦英　○P＝高田博厚＋田原桂一　＊＝¥1500

1982

定価¥1300，＊＝特別定価

1＊ ●堀口捨己——建築と庭園の空間構成／紫烟荘，岩波邸，八勝館ほか　文＝堀口捨己，山口廣，木村徳国，東孝光，西沢文隆，富永譲，早川正夫ほか　年表データ　○S＝泉真也　＊＝¥3000（ハードカバー装）

2＊ ●メンフィス：ニュー・インターナショナル・スタイル，あるいは，家具のポスト・モダニズム　●VISIC：〈詩と音楽と映像〉の新たな創造的融合ほか　○S＝竹山実　○NS　ダダ・ハリズ・ワブ　＊＝¥1500

3 ●フォスター・アソシエイツ——建築の近未来／香港上海銀行，ルノー配送センター，IBMテクニカルパーク，オルセン・センターほか　文＝N.フォスター，杉村恵司　○S＝尾島俊雄　○NS　サンアントニオ

4 ●V.グレゴッティ事務所——建築の地理学／新カラブリア大学，ジェッカ島造船所ほか　文＝V.グレゴッティ，松井宏方，松井淳ほか　●公共空間の彫刻　○S＝小嶋勲　○NS　サンタンブロージオ教会堂

5＊ ●イスタンブールの都市と建築：ビザンチンからバロックまで／ハギア・ソフィア，オルタキョイ・モスクほか　文＝三宅理一，日高健一郎ほか　写真＝田原桂一　●現代建築と陶芸　○S＝林昌二　＊＝¥1500

6＊ ●I.M.ペイ・アンド・パートナーズ／ナショナル・アートギャラリー東館，ダラス市庁舎ほか　文＝高瀬，林，神谷，高垣，渡辺　○S＝戸村浩　○NS　ストーンヘンジ　＊＝¥3000（ハードカバー装）

7 ●幻の日本建築：失われた建築，描かれた建築／古代・中世・近世：西和夫編　近代：森田一敏編　現代：湯澤正信編　●コロムビア大学学生寮／ガスミー&シーゲル　○S＝鈴木博之　○NS　ジャイプール

8＊ ●渦巻くポスト・モダニズム——Young American Architects／文＝松永，渡辺，彦坂，他　対談＝竹山実×石井和紘　●流政之の《北追岬》　文＝小川熙　○S＝早川和男　＊＝¥3000（ハードカバー装）

9 ●建築の中の都市の系譜：ウィーン／文＋写真構成＝ソクラティス・ディミトリオ，川向正人　ウィーン建築地図　○ヴィジョン・イン・モーション❺　○S＝佐賀亦男　○NS　ポール・ゲッティ・ミュージアム

10＊ ●エーリック・グンナール・アスプルンド／森の火葬場，森の礼拝堂，ストックホルム市立図書館他　文＝菊竹，武藤，下村，今井，宗ほか　作品所在地図・年表　○S＝月尾嘉男　＊＝¥3500（ハードカバー装）

11 ●《リエージュ大学》——新キャンパス計画：建築と自然との対話／熱源センター，応用化学センター他　●G.バイヒルの放送局　●井上武吉の作品，三木敏弘の作品　○S＝中村守保　○NS　ヘルシンキ中央駅

12 ●《SD レビュー，1982》／全19作品出展　座談会＝槻文彦＋鈴木恂＋元倉真琴＋布野修司　●マルヌ・ラ・ヴァレの集合住宅／設計＝R.ボッフィル　○S＝森政弘　○NS　チェルトーザ・ディ・パヴィア

1983

定価¥1300，＊＝特別定価

1＊ ●ニューヨークのアール・デコ／クライスラー・ビル，エンパイア・ステート・ビル，他　アール・デコ建築地図・リスト　文＝岡田，渡辺，高瀬，六鹿，小林　○椅＝藤枝晃雄　＊＝¥3500（ハードカバー装）

2＊ ●省エネルギーのスペース・デザイン——アメリカ編／ファカー・ケミカル・ビル，イリノイ州センターほか　文＝石福，高瀬，山岡，酒井，佐藤　○椅＝元永定正　○NS　シャンボール城　＊＝¥1500

3 ●イタリア——建築＋家具＋ID＋グラフィック／①メンフィス②マテリアルイデア展③イタル・デザインほか　文＝竹山実，荒知幾，細江敦夫　○椅＝松本哲夫　○NS　サンタ・マリア・ラ・ヌォーヴァ大聖堂

4＊ ●マイケル・グレイヴス／リバブリック・ビル，フマナ・ビル，ポートランド・ビル，プロセク邸他　文＝M.グレイヴス，片木篤ほか　●ウィンドー・ルーム・ファニチュアー展　○椅＝篠原一男　＊＝¥1800

5＊ ●永遠のモダーン：トーネット——曲木椅子のあゆみ／文・解説＝島崎信，加藤晃一，実測図・年表他　●アプタイベルク美術館　文＝磯崎新ほか　○椅＝安東早苗　○NS　ハンコックのシェーカー村　＊＝¥1600

6 ●イタリア合理主義／イタリア合理主義の周辺：八束はじめ，Ⅰ．合理主義前夜：鵜沢隆，Ⅱ．ミラノ・コモの合理主義：稲川直樹，Ⅲ．トリノの合理主義：大内昌弘ほか，参考文献リスト　○椅＝小原二郎

7 ●K.F.シンケル——生きつづける至上の建築の遺産　●パリ，ラ・ヴィレット公園国際コンペ　●アメリカのパブリック・スペース　●モデリスタ：G.サッキの仕事　○椅＝向井周太郎　○NS　ヴィースの教会

8＊ ●建築と照明／シカゴ・オーケストラ・ホール，新宿NSビル他　文＝西沢文隆，C.エンゲル，小西武志，小倉善明，面出薫，吉井澄雄ほか　○椅＝永井敬二　○NS　ウシュマル　＊＝¥1500円

9＊ ●丹下健三／サウジアラビア王国国家宮殿，キングファイサル財団本部，ボローニア・フィエラ地区センター，赤坂プリンスホテル，他　全21作品　論文＝丹下健三　○椅＝小池一子　＊＝¥3800円（ハードカバー装）

10＊ ●建築と都市空間の保存と再生／都市：アイビシュテット，ウルビノ，ボストン他，建築：アーケード，銀行，ホテル，大学他，文＝川向，野口，渡辺（泰），渡辺（純），高垣，芦原　○椅＝藤江和子　＊＝¥1800円

11 ●アメリカン・ボザール 1870——1940／アメリカン・ボザール再考　香山寿夫　序，❶—❻章，あとがき＝小林克弘　●バグダッドの国際会議場／ヘイッキ・シレン　○椅＝遠山孝之　○NS　ドブロヴニク

12 ●《SD Review, 1983》／全22作品出展（4招待作品含む）　座談会＝槻文彦＋鈴木恂＋山本理顕＋布野修司，文＝伊藤哲夫，岩村和夫　●P.A.キング&S.ミランダの近作　○椅＝大橋晃朗　○NS　ボロブドール

1984

定価¥1500，＊＝特別定価

1＊ ●磯崎新1976—1984／つくばセンタービル，岡之山美術館，福岡相互銀行本店新館，ロサンゼルス現代美術館他全23作品　磯崎新の道程　自註＝磯崎新　文＝八束はじめ，鈴木博之　○色＝粟津潔　＊＝¥3300

2 ●アーツ・アンド・クラフツと世紀末のイギリス建築／ヴィクトリア朝から20世紀へ＝鈴木博之　序，❶—❽章＝片木篤，年表　○ヴィジョン・イン・モーション❼　○NS　マラパルテ邸　○色＝金寿根

3 ●ドイツ I.D. の双璧——D.ラムズ F.A.ポルシェ／シェーバーコーヒーメーカー，電話機ほか　文＝西沢健，黒川雅之，向井周太郎，渡辺武雄，細江敦夫　○NS　サマラの螺旋状ミナレット　○色＝村上静男

4＊ ●庭園：虚構仕掛のワンダーランド　文＝彦坂裕，関和明，進土五十八，菊池誠，片木篤，倉田直道，上山良子，L.ハルプリン，G.エクボ，M.ローリー，ほか　庭園舞台装置百科　○色＝宇佐美圭司　＊＝¥2800

5 ●ロスアンジェルス・モダニズム／インタヴュー：E.マッコイ　文：八束はじめ，菊池誠，渡辺真理，R.ローズ　●ルシアン・クロール：手法と実践　○NS　カイザーウィルヘルム記念教会　○色＝早川邦彦

6 ●国家コルビュジエ／文：松浦寿夫　●コロンバス／文：高瀬隼彦　●ニューオーリンズ美術館　●パドヴァの建築家ジュゼッペ・ヤペッリ　文：L.プッピ，渡辺真弓　○NS　ウィリアムズバーグ　○色＝川本憲子

7＊ ●世紀末建築／写真：田原桂一　文：飯島耕一，伊東順二，F.スーボー，池内紀，小池一子，J.クラヴリ，三宅理一　インタヴュー：A.ロプ＝グリエ，田原桂一　○色＝粟辻博　＊＝¥2500

8 ●マリオ・ボッタ／インタヴュー：M.ボッタ　文：野口昌夫，東孝光，北山恒　●チェコスロヴァキア・キュビズム　●二つの家　○連載＝F.L.ライト　呪術の空間　序　草森紳一＋大倉舜二　○色＝村井修

9 ●香山壽夫の建築三書／奥村・日野水邸，林原邸，小湊の海浜荘，東京大学資料館，東京大学経済学部，他　論文＝香山壽夫　●フランク・ロイド・ライトの実験住宅　○NS＝タージ・マハル　○色＝武井邦彦

10＊ ●シュトゥットガルト美術館新館／文＝J.スターリング，J.ライクワート，他　●ノル・ヴェンチューリ・コレクション　文＝R.ヴェンチューリ，大橋晃朗，他　○NS＝香港　○色＝黒木靖夫　＊＝¥1700

11 ●A.カスティリオーニ：イタリアンデザインの巨匠／文：川上元美，他　●KPFの最新プロジェクト／文：堀池秀人，団紀彦，他　●アルキテクトニカ／文：竹山実　ONS＝パリの鉄骨構造教会　○色＝三輪正弘

12 ●《SD Review, 1984》／全19作品出展（特別出展含む）　座談会＝槻文彦＋竹山実＋山本理顕＋八束はじめ，文＝吉田研介　●ベルリン国際建築展　1984報告年　ONS＝ケルン大聖堂　○色＝中村誠

SDバックナンバー常備店

●東京
中央区　八重州ブックセンター　03（281）1811
千代田区　三省堂本店（神田）　03（233）3314
　書泉ブックマート　03（294）0011
新宿区　紀伊國屋本店　03（354）0131
渋谷区　大盛堂書店　03（463）0511
豊島区　西武百貨店ブックセンター03（981）0111

●札幌
旭屋書店　011（241）3007

●横浜
有隣堂本店　045（261）1231

●大阪
北区　旭屋書店本店　06（313）1191
西区　駸々堂　06（443）0167

●京都
駸々堂京宝店　075（223）1003
大龍堂書店　075（231）3036

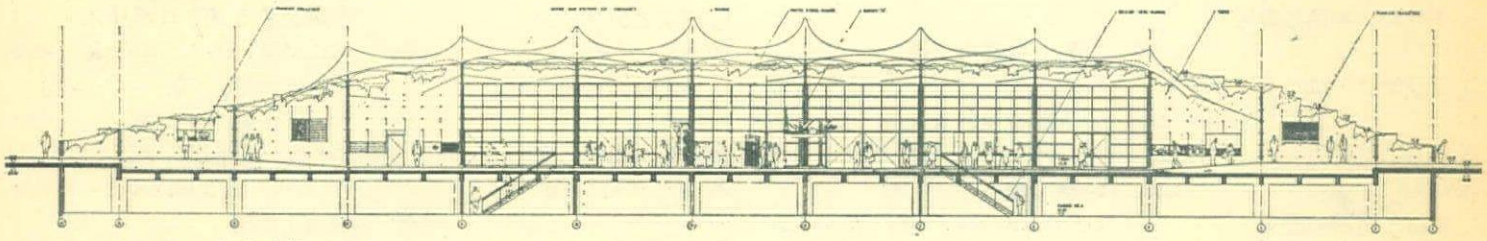
●大学生協内書店
東北工業大学
早稲田大学理工学部
法政大学理工学部
関東学院大学

SD Space Design
1985年1月特大号

特集＝ハイテック・スタイル

HIGH-TECH

〈技術の表現〉をテーマとした建築のハイテック・スタイル.
その歴史的な由来と現在の多様な現われを紹介する.



シュルンベルジエ・モンルージュ計画／R. ピアノ

作品紹介：

ノーマン・フォスター，レンゾ・ピアノ，ABK，FBHWS，ニコラス・グリムショウ，イアン・リッチー，
ジャン・ヌーヴェル，ヤン・ベンサム，ラルフ・アースキン，グレン・マーコット，フランク・ゲーリー，ヘルムート・ヤーン，他

人物研究：

ジャン・プルーヴェ，チャールズ・イームズ，バックミンスター・フラー，フライ・オットー，オヴ・アロプ＆パートナーズ，ピエール・シャロー，池辺陽

ハイテック論：

石山修武，伊東豊雄，押野見邦英，黒川哲郎，小西敏正，小宮山昭，高橋公子，中込清，野沢正光，松永安光，村田豊，葉祥栄

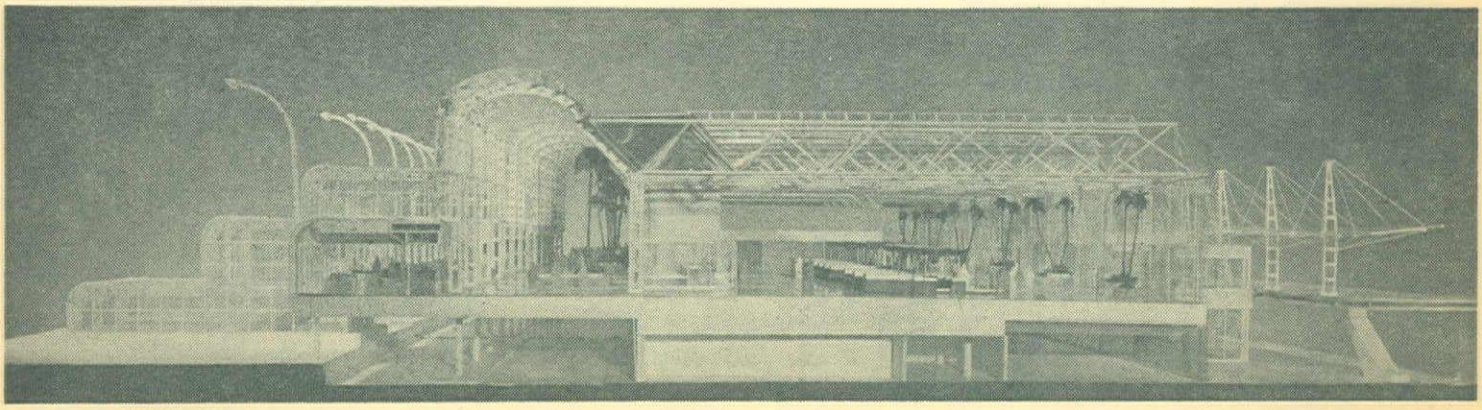
論文：

岡部憲明，杉村憲司，レイナー・バンハム，難波和彦

ハイテック辞典：

思想，理念，連想するもの（されるもの），素材，部材，構成，人物，作品，etc.

執筆＝三上祐三，黒川雅之，難波和彦，奥田宗幸，石上申八郎，彦坂裕，伊藤哲夫，他



シカゴ・オヘア国際空港／H. ヤーン

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

SD 選書

■今日の造形文化に関心のあるすべての人びとにおくる，新しいタイプの選書 ■現代文明のあらゆる課題をあつかい，新鮮でダイナミックな視点を提供する選書 ■高度に細分化し，専門化した現代文明の各領域をつなぐかけ橋となる選書 ■写真・図版を豊富に入れて，ヴィジュアルに編集し，感覚と知性に富む読者のよき伴侶となる選書．

①現代デザイン入門
勝見 勝著 ¥1,500

②現代建築12章
カーン，ルドルフ他著／山本学治訳編 ¥980

③都市とデザイン
栗田 勇著 ¥980

④江戸と江戸城
内藤 昌著 ¥1,200

⑤日本デザイン論
伊藤ていじ著 ¥1,500

⑥ギリシア神話と壺絵
澤柳大五郎著 品切

⑦フランク・ロイド・ライト
谷川正己著 ¥1,500

⑧きもの文化史
河鰭実英著 ¥1,500

⑨素材と造形の歴史
山本学治著 ¥1,500

⑩今日の装飾芸術
ル・コルビュジエ著／前川国男訳 ¥980

⑪コミュニティとプライバシイ
シャマイエフ，アレクザンダー共著
岡田新一訳 ¥1,500

⑫新桂離宮論
実藤 昌著 ¥1,200

⑬日本の工匠
伊藤ていじ著 ¥1,500

⑭現代絵画の解剖
木村重信著 品切

⑮ユルバニスム
ル・コルビュジエ著／樋口 清訳 ¥980

⑯デザインと心理学
穐山貞登著 ¥980

⑰私と日本建築
アントニン・レーモンド著 ¥1,500

⑱現代建築を創る人々
神代雄一郎編 ¥980

⑲芸術空間の系譜
高階秀爾著 ¥1,500

⑳日本美の特質
吉村貞司著 ¥1,500

㉑建築をめざして
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳 ¥1,500

㉒メガロポリス
J.ゴットマン著／木内・石水共訳 ¥1,500

㉓日本の庭園
田中正大著 ¥1,500

㉔明日の演劇空間
尾崎宏次著 品切

㉕都市形成の歴史
アーサー・コーン著／星野芳久訳 ¥1,500

㉖近代絵画
オザンファン，E.ジャンヌレ共著
吉川逸治訳 ¥980

㉗イタリアの美術
A.ブラント著／中森義宗訳 ¥980

㉘明日の田園都市
E.ハワード著／長 素連訳 ¥1,500

㉙移動空間論
川添 登著 品切

㉚日本の近世住宅
平井 聖著 品切

㉛新しい都市交通
B.リチャーズ著／曾根・森岡共訳 ¥980

㉜人間環境の未来像
W.イーウォルド編／磯村・星野共訳 ¥980

㉝輝く都市
ル・コルビュジエ著／坂倉準三訳 ¥1,500

㉞アルヴァ・アアルト
武藤 章著 ¥1,500

㉟幻想の建築
坂崎乙郎著 ¥1,500

㊱カテドラルを建てた人々
J.ジャンペル著／飯田喜四郎訳 ¥1,500

㊲日本建築の空間
井上充夫著 ¥1,500

㊳環境開発論
浅田 孝著 ¥980

㊴都市と娯楽
加藤秀俊著 ¥980

㊵郊外都市論
H.カーヴァー著／志水英樹訳 品切

㊶都市文明の源流と系譜
藤岡謙二郎著 品切

㊷道具考
栄久庵憲司著 ¥980

㊸ヨーロッパの造園
岡崎文彬著 ¥980

㊹未来の交通
ハル・ヘルマン著／岡 寿麿訳 品切

㊺古代技術
H.ディールス著／平田 寛訳 品切

㊻キュビスムへの道
D.H.カーンワイラー著／千足伸行訳 ¥1,500

㊼近代建築再考
藤井正一郎著 ¥980

㊽古代科学
J.L.ハイベルク著／平田 寛訳 ¥690

㊾住宅論
篠原一男著 ¥1,500

㊿ヨーロッパの住宅建築
S.カンタクシーノ著／山下和正訳 ¥980

(51)都市の魅力
清水馨八郎・服部銈二郎共著 ¥980

(52)東照宮
大河内直躬著 ¥690

(53)茶匠と建築
中村昌生著 ¥1,500

(54)住居空間の人類学
石毛直道著 ¥1,500

(55)空間の生命—人間と建築
坂崎乙郎著 ¥980

(56)環境とデザイン
ガレット・エクボ著／久保 貞訳 ¥980

(57)日本美の意匠
水尾比呂志著 ¥1,500

(58)新しい都市の人間像
イールズ，ワルトン共編
木内信蔵監訳 ¥780

(59)京の町家
島村 昇他著 ¥1,500

(60)都市問題とは何か
レイモンド・バーノン著／片桐達夫訳 ¥980

(61)住まいの原型(I)
泉 靖一編 ¥980

(62)コミュニティ計画の系譜
佐々木 宏著 ¥1,500

(63)近代建築
V.スカーリー著／長尾重武訳 ¥1,500

(64)SD海外建築情報(I)
岡田新一編 ¥980

(65)SD海外建築情報(II)
岡田新一編 ¥980

(66)天上の館
J.サマーソン著／鈴木博之訳 ¥780

(67)木の文化
小原二郎著 ¥1,500

(68)SD海外建築情報(III)
岡田新一編 ¥980

(69)地域・環境・計画
水谷穎介著 ¥980

(70)都市虚構論
池田亮二著 ¥780

(71)現代建築事典
ウォルフガング・ペーント編
浜口隆一・神代雄一郎監訳 ¥1,900

(72)ヴィラール・ド・オヌクールの画帖
藤木庸雄著 ¥780

(73)タウンスケープ
T.シャープ著／長 素連・もも子共訳 ¥780

(74)現代建築の源流と動向
L.ヒルベルザイマー著／渡辺明次訳 ¥980

(75)部落社会の芸術家
マリアン・W.スミス編／木村重信他訳 ¥780

(76)キモノ・マインド
B.ルドフスキー著／新庄哲夫訳 ¥1,500

(77)住まいの原型(II)
吉阪隆正・他共著 ¥980

(78)実存・空間・建築
シュルツ著／加藤邦男訳 ¥1,500

(79)SD海外建築情報(IV)
岡田新一編 ¥780

(80)都市の開発と保存
上田 篤・鳴海邦碩共編 ¥980

(81)爆発するメトロポリス
W.H.ホワイト・他著／小島将志訳 ¥980

(82)アメリカの建築とアーバニズム(上)
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(83)アメリカの建築とアーバニズム(下)
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(84)海上都市
菊竹清訓著 品切

(85)アーバン・ゲーム
M.ケンツレン著／北原理雄訳 ¥980

(86)建築二〇〇〇
C.ジェンクス著／工藤国雄訳 ¥980

(87)日本の公園
田中正大著 ¥1,500

(88)現代芸術の冒険
オト・ピハリ＝メリン著
坂崎乙郎・宝木範義共訳 ¥980

(89)江戸建築と本途帳
西 和夫著 ¥980

(90)大きな都市小さな部屋
渡辺武信著 ¥980

(91)イギリス建築の新傾向
R.ランダウ著／鈴木博之訳 ¥980

(92)SD海外建築情報(V)
岡田新一編 ¥980

(93)IDの世界
豊口 協著 ¥980

(94)交通圏の発見
有末武夫著 ¥980

(95)建築とは何か
B.タウト著／篠田英雄訳 ¥1,500

(96)続住宅論
篠原一男著 ¥1,200

(97)建築の現在
長谷川 堯著 ¥980

(98)都市の景観
G.カレン著／北原理雄訳 ¥1,500

(99)SD海外建築情報(VI)
岡田新一編 ¥980

(100)都市空間と建築
U.コンラーツ著／伊藤哲夫訳 ¥1,500

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

⑲①アルド・ロッシ自伝

アルド・ロッシ著／三宅理一訳
四六判 200頁 ¥1,500

ロッシのプロジェクト，建築作品を生み出す際の思索の過程をまとめた書。「類推的都市」以後，ロッシの発展させた建築の存在論的問題についても深く省察している。

---

⑰⑥西洋建築様式史(上)
H.バウムガルト著／杉本俊多訳 ¥1,500

⑰⑦西洋建築様式史(下)
H.バウムガルト著／杉本俊多訳 ¥1,500

⑰⑧木のこころ―木匠回想記―
J.ナカシマ著／神代・佐藤共訳 ¥1,500

⑰⑨風土に生きる建築
若山 滋著 ¥1,500

⑱⓪金沢の町家
島村 昇著 ¥1,500

⑱①ジュゼッペ・テッラーニ
ブルーノ・ゼーヴィ編／鵜沢 隆訳 ¥1,500

⑱②水のデザイン
D.ベーミングハウス著／鈴木信宏訳 ¥1,500

⑱③ゴシック建築の構造
R.マーク著／飯田喜四郎訳 ¥1,500

⑱④建築家なしの建築
B.ルドフスキー著／渡辺武信訳 ¥1,500

⑱⑤プレシジョン(上)
ル・コルビュジエ著／井田・芝共訳 ¥1,500

⑱⑥プレシジョン(下)
ル・コルビュジエ著／井田・芝共訳 ¥1,500

⑱⑦オットー・ワーグナー
〈ウィーン世紀末から近代へ〉
ゲレーツェッガー著／伊藤・衛藤訳 ¥1,500

⑱⑧環境照明のデザイン
石井幹子著 ¥1,500

⑱⑨ルイス・マンフォード
木原武一著 ¥1,500

⑲⓪「いえ」と「まち」―住居集合の論理
鈴木成文・他共著 ¥1,500

---

⑩①環境ゲーム
T.クロスビィ著／松平 誠訳 ¥980

⑩②アテネ憲章
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正編訳 ¥980

⑩③プライド・オブ・プレイス
シヴィック・トラスト著
井手久登・正子共訳 ¥980

⑩④構造と空間の感覚
F.ウィルソン著／山本・稲葉共訳 ¥1,500

⑩⑤現代民家と住環境体
大野勝彦著 ¥980

⑩⑥光の死
H.ゼーデルマイヤ著／森 洋子訳 ¥980

⑩⑦アメリカ建築の新方向
R.スターン著／鈴木 一訳 ¥980

⑩⑧近代都市計画の起源
L.ベネヴォロ著／横山 正訳 ¥980

⑩⑨中国の住宅
劉敦楨著／田中 淡・沢谷昭次共訳 ¥980

⑪⓪現代のコートハウス
D.マッキントッシュ著／北原理雄訳 ¥980

⑪①モデュロールⅠ
ル・コルビュジェ著／吉阪隆正訳 ¥1,500

⑪②モデュロールⅡ
ル・コルビュジエ著／吉阪隆生訳 ¥1,200

⑪③建築の史的原型を探る
B.ゼーヴィ著／鈴木義治訳 ¥980

⑪④西欧の芸術1 ロマネスク(上)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,500

⑪⑤西欧の芸術1 ロマネスク(下)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑥西欧の芸術2 ゴシック(上)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑦西欧の芸術2 ゴシック(下)
H.フォション著／神沢栄三・他訳 ¥1,200

⑪⑧アメリカ大都市の死と生
J.ジェコブス著／黒川紀章訳 ¥980

⑪⑨遊び場の計画
R.ダットナー著／神谷五男・他共訳 ¥1,200

⑫⓪人間の家
ル・コルビュジエ他著／西沢信秀訳 ¥1,200

⑫①街路の意味
竹山 実著 ¥1,500

⑫②パルテノンの建築家たち
R.カーペンター著／松島道也訳 ¥980

⑫③ライトと日本
谷川正己著 ¥980

⑫④空間としての建築(上)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田 勇訳 ¥1,500

⑫⑤空間としての建築(下)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田 勇訳 ¥980

⑫⑥かいわい〔日本の都心空間〕
村野博司著 ¥1,500

⑫⑦歩行者革命
ブライネス，ディーン共著
岡 並木監訳 ¥980

⑫⑧オレゴン大学の実験
C.アレグザンダー著／宮本雅明訳 ¥980

⑫⑨都市は「ふるさと」か
ローマイス著／武 基雄・他共訳 ¥980

⑬⓪建築空間「尺度について」
P.ブドン著／中村貴志訳 ¥980

⑬①アメリカ住宅論
V.スカーリーJr.著／長尾重武訳 ¥980

⑬②タリアセンへの道
谷川正己著 ¥680

⑬③建築 vs. ハウジング
M.ポーリー著／山下和正訳 ¥980

⑬④思想としての建築
栗田 勇著 ¥980

⑬⑤人間のための都市
P.ペータース著／河合正一訳 ¥980

⑬⑥都市憲章
磯村英一著 ¥980

⑬⑦巨匠たちの時代
R.P.バンハム著／山下 泉訳 ¥980

⑬⑧三つの人間機構
ル・コルビュジエ著／山口知之訳 ¥980

⑬⑨インターナショナル・スタイル
ヒッチコック・他著／武澤秀一訳 ¥980

⑭⓪北欧の建築
S.E.ラスムッセン著／吉田鉄郎訳 ¥980

⑭①続建築とは何か
ブルーノ・タウト著／篠田英雄訳 ¥980

⑭②四つの交通路
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳 ¥980

⑭③ラスベガス―忘れられたシンボリズム
ヴェンチューリ他著／石井・伊藤共訳 ¥1,500

⑭④ル・コルビュジエ
C.ジェンクス著／佐々木宏訳 ¥1,500

⑭⑤デザインの認識
R.ソマー著／加藤常雄訳 ¥980

⑭⑥鏡―虚構の空間―
由木常雄著 ¥980

⑭⑦イタリア都市再生の論理
陣内秀信著 ¥980

⑭⑧東方への旅
ル・コルビュジエ著／石井 勉・他共訳 ¥980

⑭⑨建築鑑賞入門
コーディル，ケノン共著／六鹿正治訳 ¥1,500

⑮⓪近代建築の失敗
P.ブレイク著／星野郁美訳 ¥1,500

⑮①文化財と建築史
関野 克著 ¥1,200

⑮②日本の近代建築(上)
その成立過程――稲垣栄三著 ¥1,200

⑮③日本の近代建築(下)
その成立過程――稲垣栄三著 ¥1,200

⑮④住宅と宮殿
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳 ¥1,200

⑮⑤イタリアの現代建築
V.グレゴッティ著／松井宏方訳 ¥1,200

⑮⑥バウハウス――その建築造形理念
杉本俊多著 ¥1,500

⑮⑦エスプリ・ヌーヴォー
〈近代建築名鑑〉
ル・コルビュジエ著／山口知之訳 ¥1,200

⑮⑧建築について(上)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

⑮⑨建築について(下)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

⑯⓪建築形態のダイナミクス(上)
R.ルドルフ著／乾 正雄訳 ¥1,200

⑯①建築形態のダイナミクス(下)
R.アルンハイム著／乾 正雄訳 ¥1,200

⑯②見えがくれする都市
槇 文彦・他共著 ¥1,500

⑯③街の景観
J.バーク著／長 素連・もも子共訳 ¥1,200

⑯④環境計画論
田村 明著 ¥1,500

⑯⑤アドルフ・ロース
伊藤哲夫著 ¥1,200

⑯⑥空間と情緒
箱崎総一著 ¥1,200

⑯⑦水空間の演出
鈴木信宏著 ¥1,500

⑯⑧モラリティと建築
D.ワトキン著／榎本弘之訳 ¥1,200

⑯⑨ペルシア建築
A.U.ポープ著／石井 昭訳 ¥1,500

⑰⓪ブルネッレスキ
G.C.アルガン著／浅井朋子訳 ¥1,500

⑰①装置としての都市
月尾嘉男著 ¥1,500

⑰②建築家の発想―私の師匠たち
石井和紘著 ¥1,500

⑰③日本の空間構造
吉村貞司著 ¥1,500

⑰④建築の多様性と対立性
R.ヴェンチューリ著／伊藤公文訳 ¥1,500

⑰⑤広場の造形
カミロ・ジッテ著／大石敏雄訳 ¥1,500

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

建築の七つの力

鈴木博之著　四六判　184頁　¥1,800

連想の力，数の力，ゴシックの力，細部の力，模倣の力，地霊の力，過去の力——建築を成立させている，あるいは建築を読解する上でのこれらの七つの契機，領域を論究した，気鋭の歴史家による建築論。

西洋館漫歩——建築スケッチの旅



田中　薫著　四六判　248頁　¥1,900

数年にわたってスケッチして歩いた北海道から台湾に至る西洋館を，印象記とともに紹介するもの．夫々の土地に息づく建物が長い年月を経て生きつづけている様を捉えた作品。

街並をつくる道路

ジム・マクラスキー著／六鹿正治訳　A 4変　132頁　¥3,800

都市のデザインや環境の質の問題を歩行者または運転者の側から捉えた場合，道路の形態と周りの物的環境との関係が最大のテーマとなる．基本書は，豊富な写真や図面に彩られた研究事例を通じてデザイン上の本事項が網羅的に展開されている。

近代建築ガイドブック〈西日本編〉

松葉一清・宮本雅明・土田充義・木島安史・伊藤行・杉本俊多・小野木重勝・山本忠司…他共著　四六判　276頁　¥2,800　●好評発売中！

洞海湾，関門，筑豊石炭遺跡，博多天神，九大，有田・唐津，熊本，日豊本線，鹿児島，南山手・東山手，長崎，市街地，軍艦島，五島教会堂，香川，愛媛，徳島，高知，岡山市，倉敷・児島，津山，広島市，呉・江田島，山陰，山口・宇部・萩，岩国・柳井…，計25コース，作品数約500。

近代建築ガイドブック〈北海道 東北編〉

越野　武・坂田　泉編著　四六判　¥2,800(予)

北海道——函館・元町・山ノ手，青柳公園，上磯，室蘭・いぶり日高，追分ソーラン，小樽・手宮・色内・運河，ウォール街，札幌・円山，琴似，旭川…他　東北——信夫・伊達路，安積，会津，岩手路，最上川，庄内…

近代建築ガイドブック〈関西編〉

福田晴虔・石田潤一郎・沢田清・柴田正巳・中川理・山形政昭共著

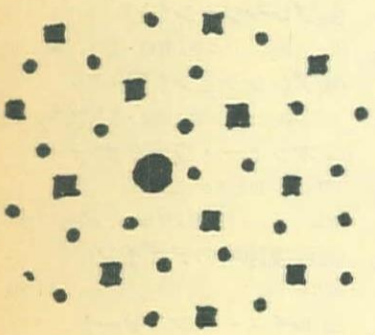
四六判　310頁　¥2,800　●好評発売中！

近代建築ガイドブック〈関東編〉

東京建築探偵団著・顧問：村松貞次郎著　四六判　276頁　¥2,300

●好評発売中！

パタン・ランゲージ——環境設計の手引



C・アレグザンダー他著／平田翰那訳
A5判六五六頁　九、八〇〇円

アレグザンダーの三部作のうち，最も重要な著書。都市計画と建築と建設についての新しい理論を示すものであり，有機的な環境づくりのプロセスを集大成した，いわばバイブル的な大著である。
本文二五三章と八〇〇余の挿絵を収めている。

■読む事典としても興味尽きない一冊本の建築百科！

世界建築事典

ニコラウス・ペヴスナー
ジョン・フレミング　共著
ヒュー・オナー
鈴木博之監訳
A5判　544頁　¥5,800（〒300）

●本書の項目は，建築の様式や部位に関する術語，各国建築史，人名からなっており，項目数は1,700余である。

●扱う範囲は先史・古代から現代に至り，西欧から東洋・中南米にまで及んでいる。一冊本の建築小百科事典と言える。

●掲載した写真図版は1,000点を越え，一冊で人名事典，術語事典，歴史事典，図解事典などの要素を満たす，要を得た事典である。

●本書の底本は*A Dictionary of Architecture*, 1975, Penguin Booksで，その原形は*The Penguin Dictionary of Architecture*, 1966である。

●1966年の出版物は，その後改訂されながら版を重ね，重宝な事典として世界的に普及している．その1972年版に，さらに署名項目，写真図版，参考文献等を大幅に増補したものが本書の底本である。

●本書の項目は，原著のアルファベット順の配列を，訳語の五十音順に編成しなおした。原綴による検索のためには，巻末に欧文索引（訳語対照）を加えた。

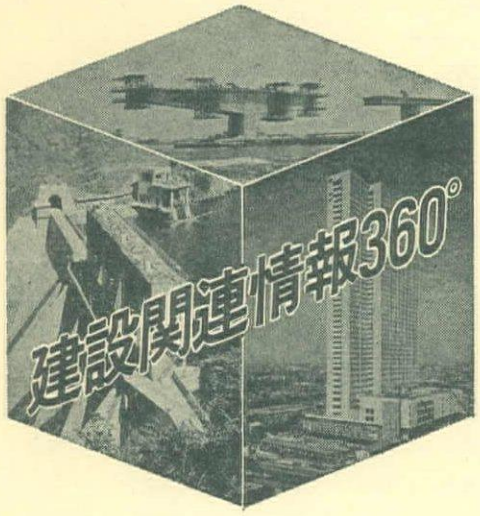
●翻訳は，東京大学の西洋建築史専攻者が訳稿を作り，監訳者が徹底的に推敲した。本書は，東大建築史研究室の総力を結集した訳書である。

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません



月刊 ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン

8411号 目次

スポット これからの都市の開発と保全

●シリーズ・ザ・建設業●現代木造建築事情とその将来

●スコープ●国際見本市などで拓く「地方の時代」

報告 モデル定住圏づくりにプロジェクト・メニュー方式を導入(下)

建設省60年度予算概算要求の焦点

ロボットは人間を超えられるか

●わいどあんぐる●建設情報総合センターの検討開始／「本四連絡長大橋」映画に最優秀賞
●霞が関ホットライン●首相、海外建設促進など4点を指示／良質の集合住宅造りでコンペ実施
●タウンパトロール●世界初！曲がるエスカレーター登場／サービス向上!?日航にブラジル娘
●情報るうむ●土木学会で討論会など新しい試み／建築強化へ即戦力の人材獲得
●ハウジング●手造り「桧の家」好調全国展開へ／住生活の調査研究会社を設立
●地域レーダー●伊豆テクノパーク基本計画固まる／瀬戸大橋のケーブルを近く架設
●ローカルスポット●地場中小企業の国際化に指針づくり

DALTON EYE／らんきんぐ／海外トピックス／サイエンス／GUIDE／GOODS & GOODS／語録／用語／他

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

●忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
●これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに！
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先
〒107 東京都港区赤坂6-5-13
㈱鹿島出版会 情報システム事業部
ダルトンレポート読者係 ☎03(583)6050

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,800円(1冊当り400円)
（送料共） 3年購読(36冊) 9,600円(1冊当り266円)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

DALTON REPORT 定期購読申込書

□新規購読申込 SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒 ☎
住所

お勤め先	該当のものに○印を	ご専門	建築 土木 機械 電気 事務 ほか
（職種）		ご担当	設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください) □1年 □3年

〈シルバーシリーズ〉 SS

■幅広い視野から建築，デザイン，都市，さらに文化全般にわたる諸問題を解明する新しいシリーズ．
■学生諸君におくるSD選書の姉妹シリーズ．

庭のたのしみ

＝西洋の庭園二千年＝

アンヌ・スコット=ジェイムズ著／オズバート・ランカスター絵

横山　正，増田能子共訳　四六判　180頁　¥1,600

イギリスを中心とするヨーロッパ庭園史の概説書．ローマ時代のブリタニアにはじまって，現代のパティオに至るまで，18章にわたって各時代の庭園の様式を要領よく説明している．

ガス灯からオーブンまで──ガスの文化史
中根君郎・江面嗣人・山口昌伴共著　356頁　¥2,500

これからの美術館
長谷川　栄著　220頁　¥1,800

シルクロードの夢と現実──正倉院随想
李家正文著　260頁　¥1,600

進化する都市
パドリック・ゲテス／西村一郎・他訳　360頁　¥2,800

建物はどのように働いているか
E.アレン著／安藤正雄・他共訳　280頁　¥2,500

多様化する人びとの欲求＝図でみる個人バタン
鵜山貞登著　176頁　¥1,500

半過去の建築から
木島安史著　192頁　¥1,500

建築美の世界＝鑑賞・分析・比較
井上充夫著　252頁　¥1,900

絵で見る住宅様式史
M.M.フォーレ著／八木幸二・他共訳　356頁　¥2,800

水道の文化史＝江戸の水道・東京の水道
堀越正雄著　320頁　¥2,200

盛り場＝人間欲望の原点
服部銈二郎著　196頁　¥1,500

口紅から機関車まで＝インダストリアル・デザイナーの個人的記録
レイモンド・ローウイ著／藤山愛一郎訳　432頁　¥2,800

創造するこころ
《山本学治建築論集・全3巻》第3巻　250頁　¥1,800

造型と構造と
《山本学治建築論集・全3巻》第2巻　220頁　¥1,600

歴史と風土の中で
《山本学治建築論集・全3巻》第1巻　230頁　¥1,600

鎮守の森

上田　篤編　四六判　250頁　¥1,800

鎮守の森は，生活環境，文化遺産として最近その価値が見直されている．本書は，阪大の鎮守の森保存修景研究会が主として滋賀県で行った現況調査をまとめたもの．内容，調査方法とも興味深い．

建築のことば

竹山　実著　四六判　244頁　¥1,800

現代建築をどのように捉えたらよいか？　ことばから建築へ，建築からことばへと視点を換えながら，160コマの絵で話を展開する．

建築とポップ・カルチュア

レイナー・バンハム著／岸　和郎訳　四六・320頁　¥2,300

建築デザイン史家バンハムは，ヒューマニズムに満ちた眼差しで多方面にわたる時評を行っている．本書は氏のエッセイ25編．

新しい街路のデザイン
デザイン委員会＋イギリス都市計画協会共編／中津原努・他共訳　224頁　¥1,800

建物はどうして建っているか〈構造─重力とのたたかい〉
M.サルバドリー著／望月重訳　180頁　¥1,600

建築を教えるものと学ぶもの
大江　宏・近江　栄・太田邦夫・他共著　224頁　¥1,600

建築の心理学
クリフォード・モーラー著／扇谷弘一訳　180頁　¥2,100

個性ある都市＝横浜の都市デザイン
岩崎駿介著　216頁　¥1,600

建築は兵士ではない
鈴木博之著　256頁　¥1,600

タウンハウス＝町家の再生
上田　篤編　220頁　¥1,800

実現されたユートピア
月尾嘉男・北原理雄共著　252頁　¥1,800

フランス建築事情　付・パリ建築案内図
三宅理一著220頁　¥1,800

絵で見る建築様式史
O.ランカスター著／白石和也訳　216頁　¥1,600

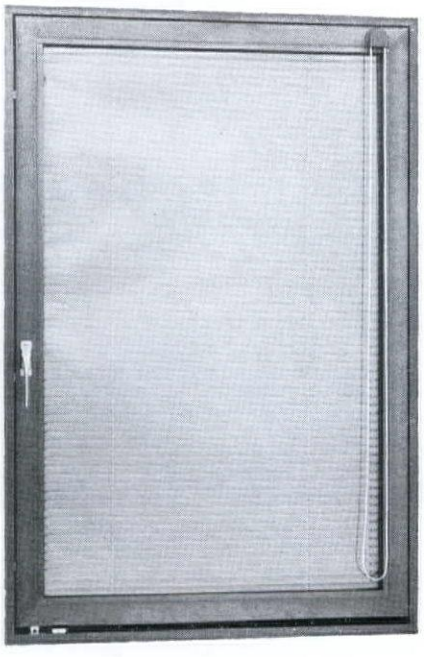
日本のすまい・内と外
E.S.モース著／上田　篤・加藤晃規・柳美代子訳　350頁　¥2,900

オフィス空間＝サラリーマンの場所と生理
草森紳一著　224頁　¥1,600

《アルミサッシ》

ユニットサッシ

日鉄サッシ販売株式会社



日鉄サッシ販売㈱では，今度アイデアあふれるファンシーウィンドーシリーズの新製品，ユニットサッシ5種（嵌殺し窓，内倒し窓，横辷り出し窓，竪辷り出し窓，コーナーサッシD）を新発売した．

竪辷り出し窓

単独でも，組合せても使える現代的なユニット感覚で，通風性にもすぐれた開閉スムーズな特殊窓である．

またファッショナブルな感覚を求める場合は，オプションとして，飾り格子も取付可能である．

コーナーサッシD型

リビングなど部屋のコーナ部の窓枠を取りさった一体設計なので，視界が広くなり，開放感あふれる新感覚のウインドーである．

仕様・価格

竪辷り出し窓　23,000円～59,000円
　　幅1.5～6.0尺，高さ3.0～6.0尺
コーナーD型　23,000円～57,000円
　　幅3.0～6.0尺，高さ3.5～4.5尺
嵌殺し窓　8,100円～17,600円
　　幅1.5～3.0尺，高さ1.5～6.0尺
内倒し窓　14,500円～22,800円
　　幅1.5～3.0尺，高さ1.5～6.0尺

日鉄サッシ販売株式会社　住宅建材企画部
東京都千代田区神田錦町1丁目8番地
〒101　Tel 03-295-4511（代）

《張床》

サーカンスフロア

東洋リノリユーム株式会社



東洋リノリユーム㈱では，今度弾性床材の製品構成の充実をさらにはかるべく店舗市場に，一つの大きな市場を築いているインレード分野へ新たに参入する商品として，高級インレードシート，サーカンスフロアを新発売した．

特長

①表面の色柄が下まで通ったスルーパターン構造なので，歩行量が多く摩耗の激しいフロアでも美しさをいつまでも保つ．

②特殊表面加工により，傷や汚れに強く，また耐摩耗性，耐薬品性に優れている．

③無地，柄物に関連色をもたせることにより，従来の柄物に出来なかった無地物と貼分けができる．

④シンプルなものとする事により，コーディネイトしやすく，貼分けによって様々なイメージ表現が出来る．

⑤自然なテクスチャーのエンボスに，やわらかな表面の光沢により落ち着きと質感が増した．

⑥カート使用時の音の問題や，メンテナンスの容易さを考えて，表面はエンボス仕上げになっている．

仕様

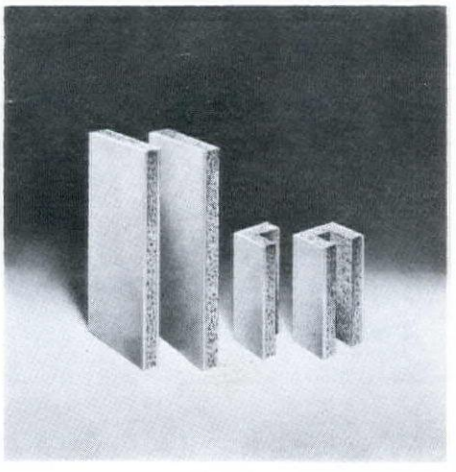
規格　厚さ2mm×幅182cm×長さ20m（巻）

東洋リノリユーム株式会社　営業推進部
兵庫県伊丹市東有岡5丁目125番地
〒664　Tel 06-492-1331（代）

《木毛セメント板》

セムクリートAK

日本板硝子株式会社



日本板硝子㈱では，今度優れた特性をもつGRC（耐アルカリ性ガラス繊維補強セメント）を表面材とし，木毛セメント板と一体成型し，外壁，防音壁，捨型枠に最適な複合板，セムクリートAKを新発売した．

特長

①外装材に使用できる十分な強度をもっており，特に耐衝撃性に優れている．

②遮音性，断熱性に優れており，また耐火，防火性能にも優れている．

③乾式工法なので，工期が短縮できる．

④GRC片面のシングルパネルと，GRC両面のダブルパネルの2種類がある．

⑤平パネルのほかコーナー用のパネルもある．

仕様

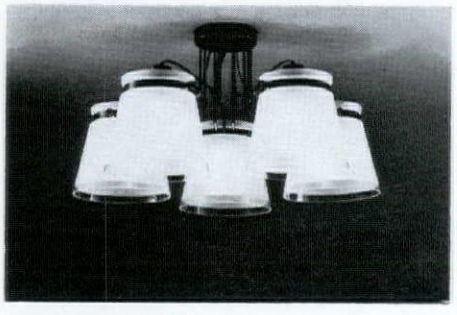
標準寸法　900×900 mm
　　900×1,800 mm
　　900×2,400 mm

日本板硝子株式会社　GRC部
東京都港区新橋1丁目8番3号
〒105　Tel 03-574-6786（代）

《照明器具》

住宅用照明器具 ニューシリーズ

岩崎電氣株式会社



岩崎電氣㈱では，最近の住宅照明の傾向であるトータルライティングにマッチしたシリーズを含む商品，機種88点を新発売した．　これは重厚でリッチな感覚，あるいはクラシック，エレガントといった感覚で演出するシャンデリアシリーズと，パステルカラーでゆとりと遊びの要素を演出するパステルカラー調のモダンなシリーズがある．

板ガラスシャンデリア

白熱ランプのロマンチックな光と板ガラスの輝きと豪華さが部屋全体に豊かさを演出し，ブロンズガラスとクリアガラスの両タイプが揃っているため，シンプルからクラシックなインテリアまでマッチし，住宅だけでなく店舗向けとしても対応できる．　シャンデリアからシーリングまでトータルな機種展開となっているため統一感のあるインテリアプランが容易に行える．

パステルカラーペンダント，シーリングシリーズ

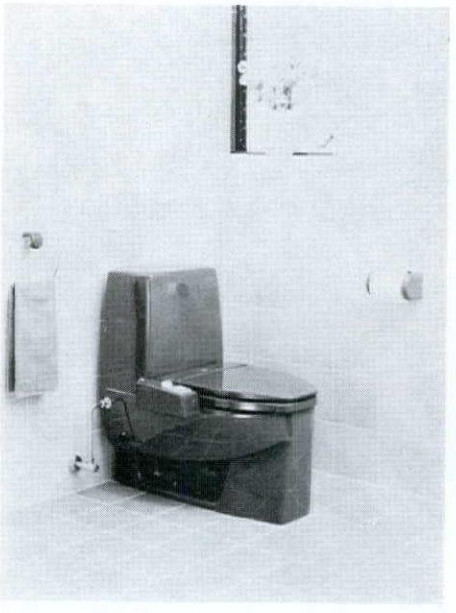
部屋全体に，ゆとりとやすらぎを与えるやわらかい色調のパステルトーンで仕上げた普及タイプのシリーズで，中でも下面開放シーリングシリーズは超薄型，高効率とチェーン取付可能で，最も求めやすい価格となっている．

岩崎電氣株式会社
東京都港区芝３丁目12番４号
〒105　Tel 03-452-5351（大代）

《衛生器具》

シャワートイレDI

伊奈製陶株式会社



伊奈製陶㈱では，今度シャワートイレの最高機種，シャワートイレDIを新発売した．　タイプは便器一体型のコンソールタイプで，ヨーロピアンスタイルのモダンなデザインにまとめられ，またカラーバリエーションは新カラー体系に基づいた16色で，タイルやアクセサリーと微妙なコーディネイトが楽しめる画期的な商品である．

特長

①従来の温水シャワー洗浄，チャーム機能，温風乾燥，暖房便座に加えて，トイレの臭いを芳香剤で消す消臭機能が付いた．

②便座から立ち上ると温風が自動的に止まり，スイッチの消し忘れがない．

③便器の洗浄用水洗もボタン操作できる．

④便器は節水・消音を配慮したサイホン式で，温水タンクは3.5lの大型を採用しているため，湯温が安定しているうえ，温水もたっぷり使える．

⑤洗浄ノズルは２段伸長オートスライド式で，使用後は自動的に洗浄される．

伊奈製陶株式会社
東京都中央区京橋３丁目６番18号
〒104　Tel 03-562-1710

《アルミサッシ》

エアーフローウィンドウ エアーフローシステム

日本建鐵株式会社



日本建鐵㈱では，今度断熱性能の良い二重ガラス窓で，日射熱を暖房時に回収し，冷房時に排出できるエアーフローウィンドウ・エアーフローシステムを新発売した．

特長

①暖房期に窓から透過する日射熱を回収して空調機にリターンさせることにより温熱源を軽減させることができる．

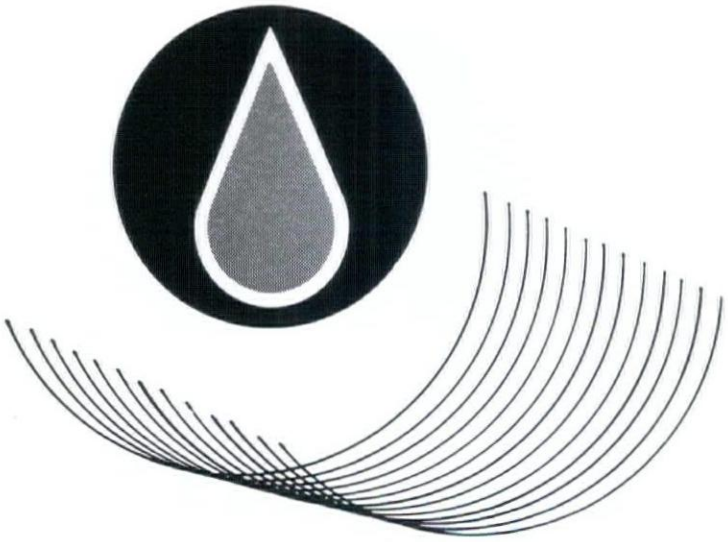
②空調時の余剰排気をエアーフローウィンドウを通して排出することにより，冷房負荷を軽減することができる．

③リターンエアーの一部をエアーフローウィンドウを通して行うことにより，窓際が室温に近づくため，コールドドラフト（下向冷気流）が防止できる．

④室温の温度分布が比較的に均一化されるので，窓際まで有効に使える．

⑤照明器具からの発熱量をラインコンビベントシステムにより，暖房温熱源への利用と，冷房時排出と，日射熱の回収制御とを同時に行うことができるので，空調負荷の軽減になる．

日本建鐵株式会社
東京都千代田区大手町２丁目６番２号
〒100　Tel 03-270-6521（代）



誠意と情熱

◎総合設備工事

ビル設備
空調・給排水衛生

工場設備
各種配管・公害防除

住宅設備
給排水衛生・給湯・暖冷房

ガス設備

◎環境整備工事

一般土木
上下水道・舗装・宅造

◎ガス機器関連販売

東横工業株式会社

取締役社長　根本　豊

横浜本店／横浜市西区平沼二丁目11番11号　TEL(045)323-2531

東京本社／東京都千代田区内幸町二丁目1番1号(飯野ビル)　TEL(03)593-0671

〈支　店〉　大阪・東北

〈営業所〉　北海道・岩手・福島・群馬・栃木・多摩・千葉
川崎・厚木・横須賀・湘南・静岡・福岡



東光電気工事株式会社

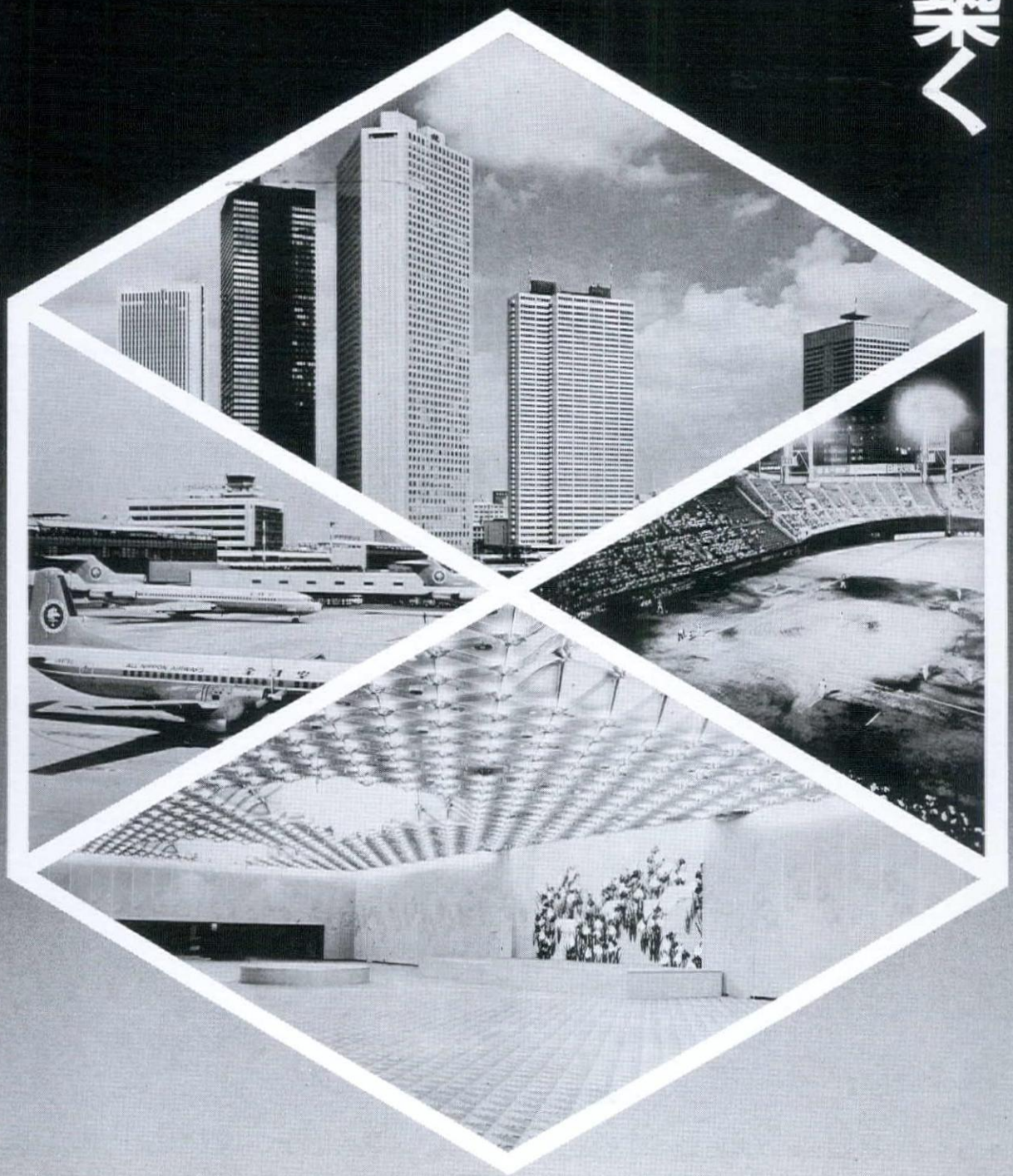
取締役会長　松本　福男　　取締役社長　菅　保之

東京都千代田区西神田1－4－5　〒101　電話292－2111　大代表

豊かな生活環境を築く

量から質的な豊かさへの転換がせまられている'80年代
人間がほんとうの人間らしさをとりもどすための環境づくりをめざして
私達は技術開発に新たな意欲をもやしております。
人間生活に真に価値ある革新をおしすすめてゆく企業
太陽工藤工事にご注文ください。

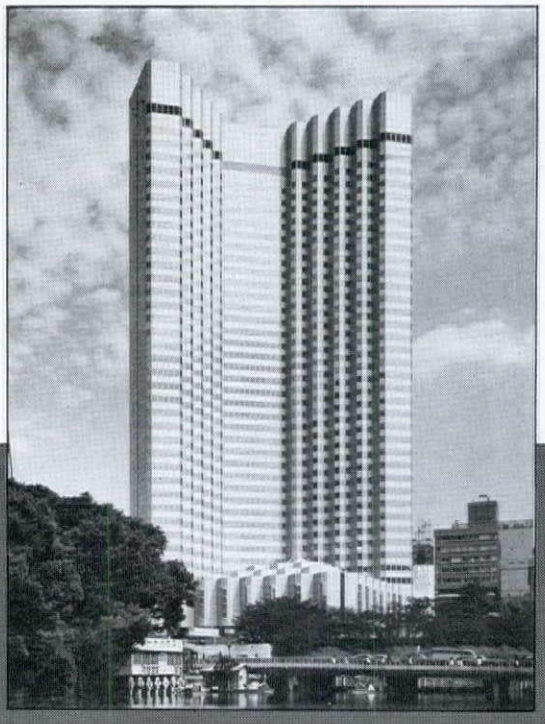
- 電気工事
  ビル電気設備／工場電気設備／防爆電気設備
  外線・発・変電設備／架空送配電線／通信線
  地中送配電線
  鉄塔工事
- アンテナ工事
- プラント工事
- 計装工事
- 空調工事
- 給排水・衛生・特殊配管工事
- 土木工事
- 損保代理店業務・右記に付帯する一切の事業



総合設備工事のパイオニア
太陽工藤工事株式会社
取締役社長　代谷正元
本社／〒553 大阪市福島区福島7丁目22番8号
☎06(452)1151(大代)
東京／〒105 東京都港区芝2～2～17
☎03(454)7311(大代)

建築と設備の調和

給排水衛生設備　消火設備　冷暖房設備



赤坂プリンスホテル

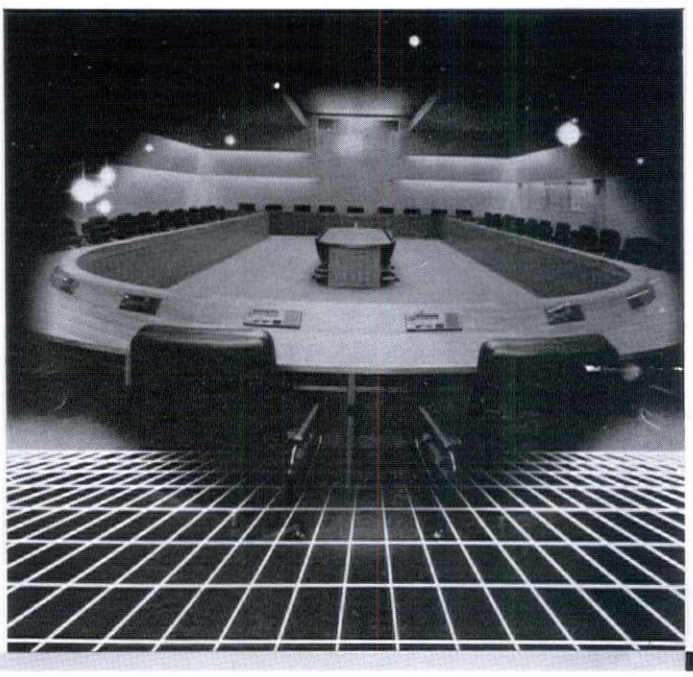
NEO 株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18　TEL 03-452-7441代表

名古屋・横浜・千葉・新潟・仙台・札幌
静岡・藤沢・大宮・長岡・盛岡・青森・函館・旭川・帯広

furniture & interior supply

空間——それは私たちホウトクマンにとって正面から挑む創造のテーマであり、限りない挑戦の対象です。合理性、機能性を追求し、人間のゆとりある空間づくりをめざして。ファニチャーおよび室内外装飾備品から内装工事の設計施工まで、私たちは人間工学の英知と技術を結集し、空間の心地よいハーモニーをおとどけしてまいります。



ホウトク販売株式会社

本社/東京都千代田区神田和泉町1番地277
(秋葉原協銀ビル) TEL〈03〉866-7291
〒101 FAX〈03〉851-5208

東京支社/TEL 〈03〉866-7291
中部支社/TEL 〈052〉201-3531
関西支社/TEL 〈06〉252-5771
東北支店/TEL 〈0222〉23-3690
中国支店/TEL 〈082〉293-1337
九州支店/TEL 〈092〉291-3601

HOUTOKU

新工法！プレノテクト吹付工法

陸屋根防水には
奥山式 特許 絶縁工法
カッパー防水帯
コーパータイト

OKUYAMA KAKOGYO WATER・PROOF OAM

✣オクロン防水帯

特許 奥山式熱工法・冷工法綜合防水層

奥山化工業株式會社

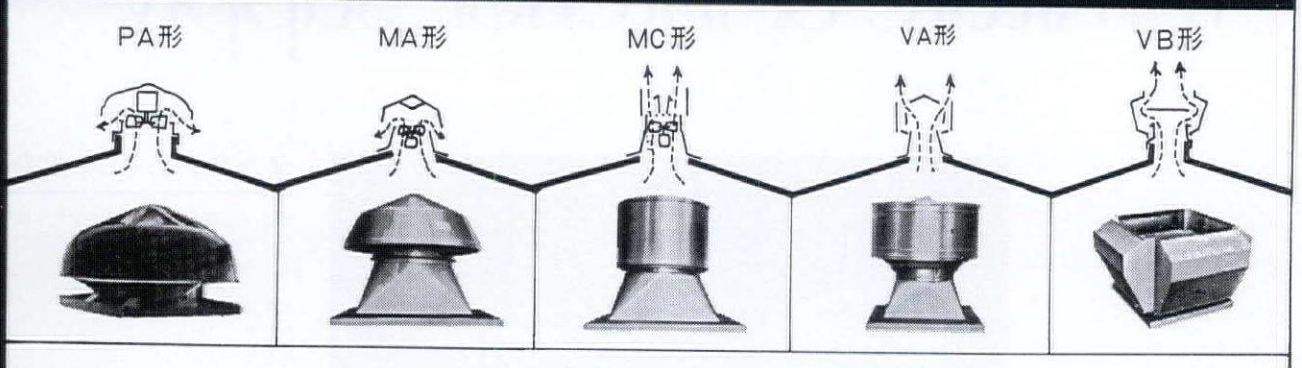
本社	東京都中央区銀座8－4－9	電話 03 (571)2703
厚木出張所	厚木市金田字宮畑2 5 9	電話 0462(21)6092
大阪出張所	大阪市都島区都島中通り2－3－1	電話 06 (921)2497
名古屋出張所	名古屋市南区若草町3-3	電話 052(811)3660
九州出張所	佐賀県諸富町	電話 0952(47)2945

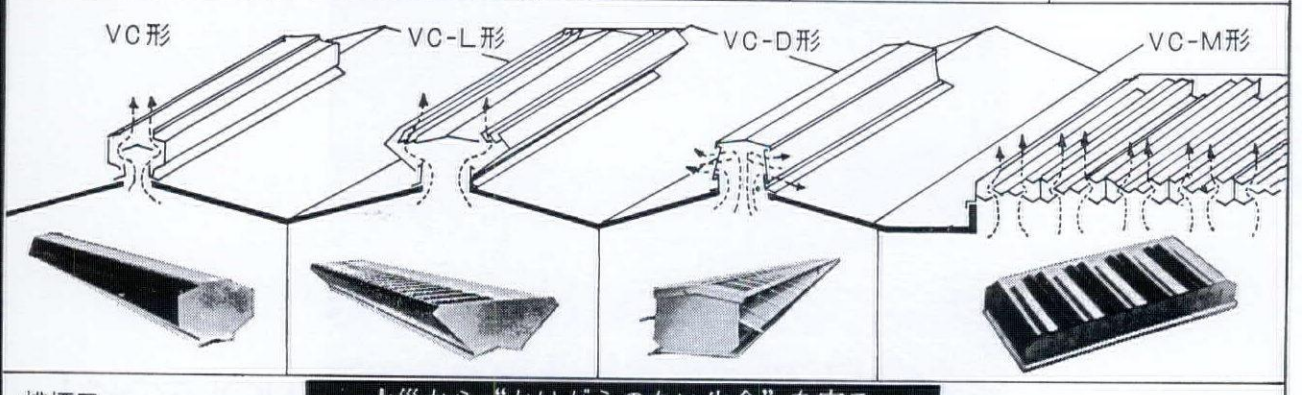
●お申込次第カタログ進呈

坂本商会は創業70余年換気・排煙・採光の専門メーカーです

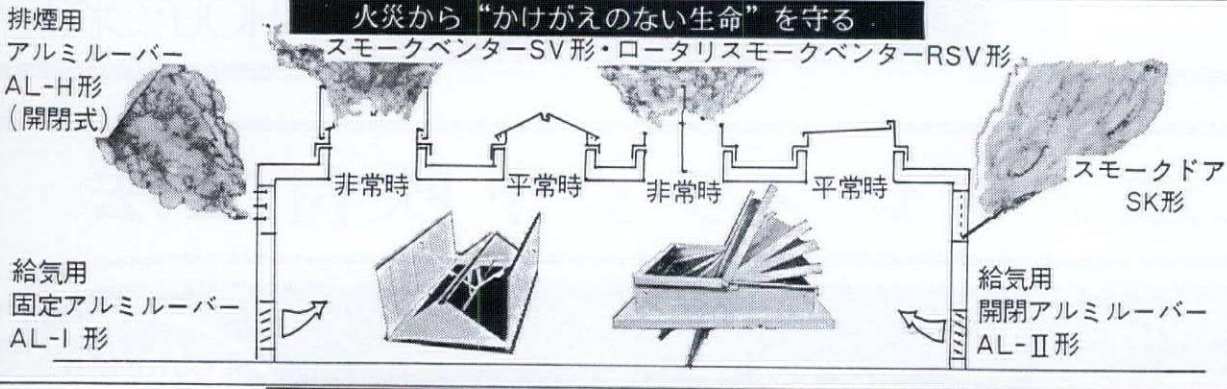
強制換気・自然換気装置　排煙・ルーバー装置　採光装置

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

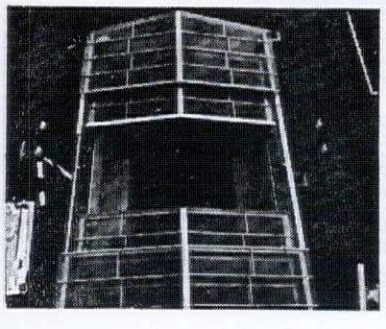


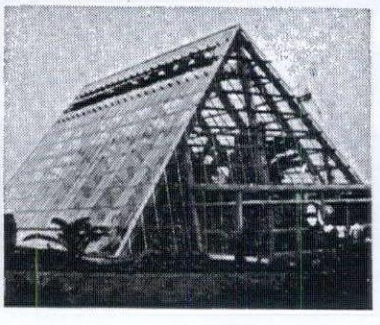


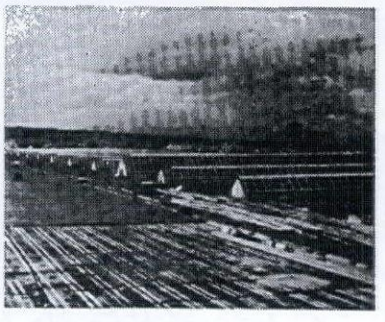
火災から“かけがえのない生命”を守る



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本　社　東京都中央区日本橋2－16－12（江戸ニビル）
〒103　電話 東京(03) 271－5591(代)
松戸工場　千葉県松戸市松飛台420番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－6595(代)
技術研究所　千葉県松戸市松飛台字御囲217番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－3148
施工部　東京都墨田区東向島2丁目15番11号
〒131　電話 東京(03) 619－2221(代)

カタログをご請求下さい

広告目次

SD誌に広告をお申し込みの際は

下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
ニッタビル（572）3381
FAX（572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル（362）6515
FAX（365）6052

●建報社

東京――東京都中央区銀座1-16-5
篠原ビル（563）2576

大阪――大阪市東区淡路町1-12
昭栄ビル（231）4548

●新建社

東京都中央区日本橋3-5-12
守尾ビル（271）3271

●中外広業社

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル（376）1791

東京――東京都千代田区内神田1-11-1
酒井ビル（293）0621

名古屋――名古屋市中区錦1-13-19
北辰名古屋ビル（221）7641（代）

イ　岩城造園㈱――007
オ　奥山化工業㈱――019
カ　軽井沢ホテル鹿島ノ森――008
　　鹿島建設㈱――006
　　川崎電気㈱――88
コ　五建工業㈱――010
サ　㈱坂本商会――020
　　三機工業㈱――97
シ　新日本空調㈱――87
　　篠原電機工業㈱――94
　　昭和電機工業㈱――74
ス　住友金属工業㈱――002
タ　ギャルリーためなが――表2
　　高砂熱学工業㈱――表3
　　大興物産㈱――009
　　大成温調工業㈱――95
　　太陽工藤工事㈱――017
ト　㈱東芝――022
　　東陶機器㈱――001
　　東邦アート㈱――表2
　　東横工業㈱――015
　　東光電気工事㈱――018
　　東洋熱工業㈱――112
　　東海電気工事㈱――010
　　東京避雷針工業㈱――96
ナ　中立電気㈱――011
ニ　日本楽器製造㈱――表4
　　㈱西原衛生工業所――018
　　日新製鋼㈱――79
　　ニチアス㈱――106
ノ　能美防災工業㈱――92
ヒ　㈱日立製作所――003
フ　フジテック㈱――98
　　富士電機㈱――86
ホ　ホウトク販売㈱――019
マ　松下電器産業㈱――005
ミ　三菱電機㈱――105
モ　モビリア㈱――004
ヤ　矢崎総業㈱――012
ロ　ロンシール工業㈱――73



あくなき技術の深求が、機能美を創造しました。

東芝エスカレーター"Lシリーズ"は、高効率の減速機構をはじめ、手摺ベルト直線駆動方式の採用により30%(当社比)の節電を実現、また設置スペースを10%(当社比)縮少して、貴重な屋内空間の有効利用を拡げました。さらに、ステンレス製の豪華で堅牢なデッキボードには安全性にも細心の配慮がゆきとどき、スリムな機能美が空間をひときわ鮮やかにひきたたせます。

東芝エスカレーター L SERIES

株式会社 東芝 昇降機事業部 〒105 東京都港区芝浦1-1-1 電話(03)457-4516・4619

先端技術をくらしの中に…E&E(エネルギーとエレクトロニクス)の東芝